松山市文化財調査報告書103

松山市道「小野３号線」関連遺跡

古市遺跡

－２次調査－

五楽遺跡

－１次・３次調査－

２００５

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

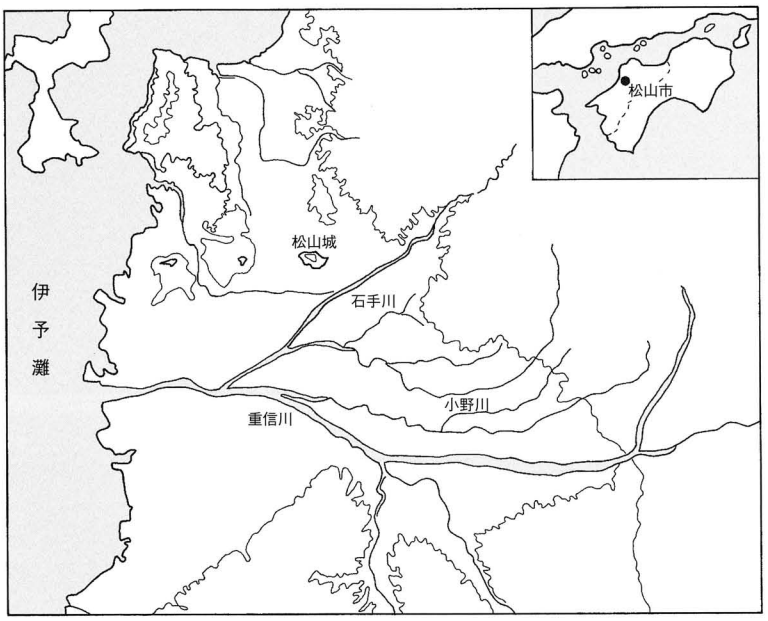
松山市道「小野３号線」関連遺跡

古　市　遺　跡

－２次調査－

五　楽　遺　跡

－１次・３次調査－



２００５

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

巻頭図版１　調査地全景（南より）

巻頭図版 2　古市遺跡 2 次調査地出土の紡錘車

序

本書は、平成８年度から12年度にかけて調査した松山市道小野３号線道路改良工事に伴う３遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。松山平野東部にある平井地区は丘陵部と扇状地とからなり、丘陵部には古墳時代後期の古墳が数多く築造されています。また、古墳時代から古代の窯址も同丘陵上には広く分布しています。さらに、扇状地上には弥生時代から古墳時代までの集落址が確認されています。

今回報告します古市遺跡２次調査地からは、縄文時代晩期や弥生時代前期の土坑のほか、古墳時代から古代の掘立柱建物址が多数見つかりました。特に、土坑内からは剣形石製品や大量のサヌキトイド剥片が出土するなど、石器製作に関する数多くの資料を得ることができました。また、五楽遺跡１次調査地では弥生時代から中世に至る遺構や遺物が検出され、同３次調査地からは、古代の流路や古墳を確認することができました。これらの調査結果は、平井地区における縄文時代から中世までの集落構造や変遷、また、古墳造営を解明する貴重な資料となるものです。

本書の刊行にあたり、発掘調査についてご指導・ご協力を頂きました関係各位ならびに関係機関に厚くお礼申し上げます。今後とも埋蔵文化財の発掘調査に関しまして、なお一層のご指導・ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

また、本書が埋蔵文化財研究の一助となり、さらには文化財保護、生涯教育の向上に寄与できますれば幸いです。

平成17年３月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団
理事長　中　村　時　広

例　　言

1．本書は、松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成８年度から平成12年度までに実施した松山市道小野３号線道路改良工事に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書報告の遺構は、呼称名を略号化して記述した。竪穴式住居址：ＳＢ、掘立柱建物址：掘立、溝：ＳＤ、自然流路：ＳＲ、土坑：ＳＫ、性格不明遺構：ＳＸ、ピット：ＳＰである。

3．本書で使用した標高数値は海抜標高を示し、方位はすべて国土座標を基準とした真北である。

4．遺構の実測は宮内慎一の責任のもと、山本健一、相原秀仁、山之内志郎が中心に行い、遺構の撮影は山本、山之内、相原、大西朋子が行った。遺物撮影と図版作成は、大西が行った。

5．本書報告の遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に注記した。

6．遺物の実測・製図、遺構の実測は、宮内、山本、山之内、相原、平岡華美、山之内聖子、吉岡智美、田﨑真理、中村紫、宮内真弓が行った。

7．本書の執筆は第２・３章を山本、第４章を相原が担当し、他は宮内が担当した。浄書は宮内の指導のもと、中村が担当した。

8．科学分析では、元興寺文化財研究所に耳環の分析・鑑定業務を委託した。国土座標軸測量は株式会社ハート設計と国際航業株式会社に業務を委託し、航空写真撮影は国際航業株式会社に業務を委託した。

9．調査及び報告書作成においては、愛媛大学下條信行、田﨑博之、村上恭通、独立行政法人奈良文化財研究所松井章、愛媛県立博物館 千葉茂の諸先生方にご指導、ご教示を頂いた。記して感謝申し上げます。

10．本書の編集は宮内が行い、山本、相原の協力を得た。

11．本書で報告した遺物・記録類は松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

本　文　目　次

第１章　はじめに ……〔宮内〕…… 1
１．調査に至る経緯
２．刊行組織
３．立地・環境

第２章　古市遺跡２次調査地 ……〔山本〕…… 9
１．調査に至る経緯
２．試掘調査
３．本格調査
（１）調査の経緯　（２）層　位　（３）遺構と遺物
４．小　結

第３章　五楽遺跡 ……〔山本〕…… 97
１．調査に至る経緯
２．試掘調査
３．本格調査
〔１〕五楽遺跡Ａ区の調査
（１）調査の経緯　（２）層　位　（３）遺構と遺物　（４）小　結
〔２〕五楽遺跡Ｂ区の調査
（１）調査の経緯　（２）層　位　（３）遺構と遺物　（４）小　結

第４章　五楽遺跡３次調査地 ……〔相原〕…… 173
１．調査に至る経緯
２．試掘調査
３．本格調査
〔１〕１区の調査
（１）調査の経緯　（２）層　位　（３）遺構と遺物
〔２〕２区の調査
（１）調査の経緯　（２）遺構と遺物
〔３〕３区の調査
（１）調査の経緯　（２）層　位　（３）遺構と遺物
４．小　結

第５章　自然科学分析 ……〔古環境研究所〕…… 225

第６章　調査の成果と課題 ……〔宮内〕…… 231

挿　図　目　次

第１章　はじめに

第１図　松山平野の主要遺跡分布図（縮尺1/125,000）…… 2
第２図　調査地周辺の主要遺跡分布図（縮尺1/25,000）…… 4

第２章　古市遺跡２次調査地

第３図　調査地位置図（縮尺1/5,000）…… 10
第４図　試掘調査用区割図（縮尺1/3,000）…… 11
第５図　古市地区トレンチ位置図・柱状土層図（縮尺1/800、1/40）…… 12
第６図　トレンチ測量図・土層図（縮尺1/80）…… 13
第７図　調査地測量図（縮尺1/1,000）…… 15
第８図　南壁土層図（縮尺1/40）…… 16
第９図　遺構配置図（縮尺1/200）…… 17
第10図　ＳＫ13測量図（縮尺1/20）…… 20
第11図　ＳＫ13出土遺物実測図（１）（縮尺1/4）…… 21
第12図　ＳＫ13出土遺物実測図（２）（縮尺1/3）…… 22
第13図　ＳＫ13出土遺物実測図（３）（縮尺2/3）…… 23
第14図　ＳＫ４測量図（縮尺1/30）…… 24
第15図　ＳＫ４出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 25
第16図　ＳＫ５測量図（縮尺1/30）…… 26
第17図　ＳＫ５出土遺物実測図（１）（縮尺1/4、2/3）…… 27
第18図　ＳＫ５出土遺物実測図（２）（縮尺1/1、1/4）…… 28
第19図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）
第20図　ＳＫ14測量図（縮尺1/30）…… 29
第21図　ＳＫ14出土遺物実測図（縮尺1/4、2/3）…… 30
第22図　ＳＫ12測量図（縮尺1/30）…… 31
第23図　ＳＫ３測量図（縮尺1/30）
第24図　ＳＫ３出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 32
第25図　ＳＫ６測量図（縮尺1/30）
第26図　ＳＫ６出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 33
第27図　ＳＫ７測量図（縮尺1/30）
第28図　ＳＫ８測量図（縮尺1/30）…… 34
第29図　ＳＫ８出土遺物実測図（縮尺1/4、2/3）…… 35
第30図　ＳＫ９測量図（縮尺1/30）
第31図　ＳＫ９出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 36
第32図　ＳＫ15測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 37
第33図　ＳＫ11測量図（縮尺1/30）…… 38

第34図　ＳＫ11出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 38
第35図　ＳＫ１測量図（縮尺1/30）…… 39
第36図　ＳＫ１出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 40
第37図　ＳＫ10測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、2/3）…… 41
第38図　ＳＤ１測量図（縮尺1/40）…… 42
第39図　ＳＤ１出土遺物実測図（縮尺1/4、2/3）…… 43
第40図　ＳＤ２・３測量図（縮尺1/20）…… 44
第41図　ＳＸ１測量図（縮尺1/30）…… 45
第42図　ＳＸ１出土遺物実測図（縮尺2/3、1/3）…… 46
第43図　ＳＸ２測量図（縮尺1/30）…… 47
第44図　ＳＸ２出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 48
第45図　ＳＸ３測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/2）…… 49
第46図　ＳＢ１測量図（縮尺1/30）…… 50
第47図　ＳＢ１出土遺物実測図（縮尺1/3、1/4）…… 51
第48図　掘立１測量図（縮尺1/50）…… 53
第49図　掘立１出土遺物実測図（縮尺1/3、1/4、2/3）…… 54
第50図　掘立２測量図（縮尺1/50）…… 55
第51図　掘立３測量図（縮尺1/50）…… 56
第52図　掘立３出土遺物実測図（１）（縮尺1/3、1/4）…… 57
第53図　掘立３出土遺物実測図（２）（縮尺1/3）…… 58
第54図　掘立４測量図（縮尺1/50）…… 59
第55図　掘立４出土遺物実測図（縮尺1/3）
第56図　掘立５（新）測量図（縮尺1/50）…… 60
第57図　掘立５（旧）測量図（縮尺1/50）…… 61
第58図　ＳＤ４・５測量図・ＳＤ５出土遺物実測図（縮尺1/60、1/40、1/4）…… 62
第59図　ＳＤ６・７測量図（縮尺1/20）…… 63
第60図　掘立６測量図（縮尺1/60）…… 65
第61図　掘立６出土遺物実測図（縮尺1/3、1/4）…… 66
第62図　柱穴出土遺物実測図（１）（縮尺1/4、1/3）…… 67
第63図　柱穴出土遺物実測図（２）（縮尺2/3、1/3）…… 68
第64図　第Ⅳ層出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 70
第65図　第Ⅲ層出土遺物実測図（１）（縮尺1/4、2/3、1/3）…… 72
第66図　第Ⅲ層出土遺物実測図（２）（縮尺1/3、2/3、1/2）…… 73
第67図　出土層位不明遺物実測図（縮尺1/4、1/3、1/1）…… 74

第３章　五楽遺跡

第68図　試掘調査用区割図（縮尺1/3,000）…… 98
第69図　五楽１地区トレンチ位置図・柱状土層図（縮尺1/800、1/40）…… 100

第70図　Ｔ８測量図・土層図（縮尺1/80）…… 101
第71図　五楽２地区トレンチ位置図・柱状土層図（縮尺1/800、1/40）…… 102
第72図　五楽３地区トレンチ位置図・柱状土層図（縮尺1/800、1/40）…… 103
第73図　五楽４地区トレンチ位置図・柱状土層図（縮尺1/800、1/40）…… 104
第74図　五楽５地区トレンチ位置図・柱状土層図（縮尺1/800、1/40）…… 105
第75図　Ｔ21測量図・土層図（縮尺1/100）…… 106
第76図　五楽６地区トレンチ位置図・柱状土層図（縮尺1/800、1/40）…… 108
第77図　調査地測量図（縮尺1/1,000）…… 110
第78図　南・西壁土層図（縮尺1/50）…… 111
第79図　遺構配置図（縮尺1/150）…… 112
第80図　ＳＫ２測量図（縮尺1/30）…… 113
第81図　ＳＫ２出土遺物実測図（縮尺1/4、2/3）…… 114
第82図　ＳＫ３測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 115
第83図　ＳＫ４測量図・出土遺物実測図（１）（縮尺1/30、1/4）…… 116
第84図　ＳＫ４出土遺物実測図（２）（縮尺2/3）…… 117
第85図　ＳＫ12測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 118
第86図　ＳＫ15測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、2/3）…… 119
第87図　ＳＫ16測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4、2/3）…… 120
第88図　ＳＫ５測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 121
第89図　ＳＫ10測量図（縮尺1/30）…… 122
第90図　ＳＫ17測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 123
第91図　ＳＫ18測量図（縮尺1/30）…… 124
第92図　ＳＫ18出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 125
第93図　ＳＫ７測量図（縮尺1/20）…… 126
第94図　ＳＫ７出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 127
第95図　ＳＤ１測量図（縮尺1/80、1/40）…… 128
第96図　ＳＸ１測量図（縮尺1/30）…… 129
第97図　ＳＸ１出土遺物実測図（縮尺1/4）
第98図　ＳＸ２測量図（縮尺1/30）…… 130
第99図　ＳＸ２出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 131
第100図　ＳＸ３測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、1/4）…… 132
第101図　ＳＫ６・11・13・14測量図（縮尺1/30）…… 133
第102図　ＳＫ13・14出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 134
第103図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（縮尺1/30、2/3）…… 135
第104図　ＳＫ９測量図（縮尺1/30）…… 136
第105図　柱穴出土遺物実測図（１）（縮尺1/4、1/2、2/3）…… 138
第106図　柱穴出土遺物実測図（２）（縮尺1/3）…… 139

第107図　第Ⅴ層出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 140
第108図　出土層位不明遺物実測図（縮尺1/4、1/3）
第109図　調査地測量図（縮尺1/1,000）…… 152
第110図　東・南壁土層図（縮尺1/50）…… 153
第111図　遺構配置図（縮尺1/100）…… 154
第112図　ＳＫ１～４測量図（縮尺1/20）…… 156
第113図　ＳＫ２・３出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 157
第114図　ＳＤ１測量図・出土遺物実測図（縮尺1/20、1/3）…… 158
第115図　ＳＸ１測量図（縮尺1/20）…… 159
第116図　ＳＸ２測量図（縮尺1/20）…… 160
第117図　柱穴出土遺物実測図（縮尺1/3）
第118図　ＳＲ１測量図・出土遺物実測図（１）（縮尺1/40、1/3）…… 161
第119図　ＳＲ１出土遺物実測図（２）（縮尺1/3、2/3）…… 162
第120図　第Ⅰ層出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 163
第121図　第Ⅱ層出土遺物実測図（縮尺1/3、1/4）…… 164
第122図　第Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3、1/1）…… 165
第123図　第Ⅳ層出土遺物実測図（縮尺2/3）…… 166

第４章　五楽遺跡３次調査地

第124図　調査地位置図(縮尺1/25,000)…… 174
第125図　調査地測量図・試掘トレンチ測量図（１）（縮尺1/2,000）…… 175
第126図　調査地測量図・試掘トレンチ測量図（２）（縮尺1/2,000）…… 176
第127図　調査地測量図・試掘トレンチ測量図（３）（縮尺1/2,000）…… 177
第128図　試掘トレンチ（Ｔ１～Ｔ６）土層柱状図（縮尺1/40）…… 178
第129図　試掘トレンチ（Ｔ７～Ｔ13）土層柱状図（縮尺1/40）…… 179
第130図　試掘トレンチ（Ｔ14～Ｔ20）土層柱状図（縮尺1/40）…… 180
第131図　試掘トレンチ（Ｔ21～Ｔ27）土層柱状図（縮尺1/40）…… 181
第132図　試掘トレンチ（Ｔ28～Ｔ34）土層柱状図（縮尺1/40）…… 182
第133図　試掘トレンチ（Ｔ35～Ｔ41）土層柱状図（縮尺1/40）…… 183
第134図　試掘トレンチ（Ｔ42～Ｔ48）土層柱状図（縮尺1/40）…… 184
第135図　試掘トレンチ（Ｔ49～Ｔ56）土層柱状図（縮尺1/40）…… 185
第136図　試掘トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 187
第137図　本格調査地（１・２区）測量図（縮尺1/2,000）…… 189
第138図　本格調査地（３区）測量図（縮尺1/2,000）…… 190
第139図　１区遺構配置図・土層図（１）（縮尺1/250、1/50）…… 191
第140図　１区遺構配置図・土層図（２）（縮尺1/250、1/50）…… 193
第141図　１区遺構配置図・土層図（３）（縮尺1/250、1/50）…… 195
第142図　ＳＲ断面図（縮尺1/100）…… 198

第143図　ＳＲ２出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 199
第144図　ＳＤ１～４測量図（縮尺1/100）…… 200
第145図　ＳＤ５・６測量図（縮尺1/100）…… 201
第146図　ＳＤ７～11測量図（縮尺1/100）…… 203
第147図　ＳＫ１測量図（縮尺1/40）…… 204
第148図　ＳＫ２測量図（縮尺1/40）
第149図　第Ⅴ層出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 206
第150図　第Ⅷ層出土遺物実測図（縮尺1/4）
第151図　地点不明出土遺物実測図（縮尺1/4、1/3）…… 207
第152図　２区調査前地形測量図（縮尺1/200）…… 209
第153図　２区遺構配置図・調査後地形測量図（縮尺1/200）…… 210
第154図　平井谷２号墳　土層図（縮尺1/80）…… 211
第155図　平井谷２号墳　石室平面図（縮尺1/40）…… 212
第156図　平井谷２号墳　石室展開図（縮尺1/40）…… 213
第157図　平井谷２号墳　石室測量図（縮尺1/40）…… 214
第158図　平井谷２号墳　石室出土遺物実測図（縮尺1/3、1/1）
第159図　ＳＫ３測量図（縮尺1/40）…… 215
第160図　３区調査前地形測量図（縮尺1/80）…… 216
第161図　３区遺構配置図・調査後地形測量図（縮尺1/80）…… 217
第162図　３区土層図（縮尺1/80）…… 218
第163図　ＳＫ４測量図（縮尺1/40）…… 219

第５章　自然科学分析

第164図　表面金色部分のＸＲＦスペクトル …… 226
第165図　銅芯部分のＸＲＦスペクトル …… 227
第166図　分析箇所 …… 228
第167図　マイクロスコープ鑑察画像
第168図　表面金色部分のＳＥＭ写真 …… 229
第169図　ＥＤＸによる各元素の分布状態 …… 230

表　目　次

第２章　古市遺跡２次調査地

表１　剥片計量表 …… 79
表２　紡錘車一覧表 …… 80
表３　土坑一覧 …… 81
表４　溝一覧
表５　性格不明遺構一覧 …… 82

表6　竪穴式住居址一覧 …… 82
表7　掘立柱建物址一覧
表8　ＳＫ13出土遺物観察表（土製品）
表9　ＳＫ13出土遺物観察表（石製品）…… 83
表10　ＳＫ４出土遺物観察表（土製品）
表11　ＳＫ４出土遺物観察表（石製品）
表12　ＳＫ５出土遺物観察表（土製品）
表13　ＳＫ５出土遺物観察表（石製品）…… 84
表14　ＳＫ５出土遺物観察表（装身具）
表15　ＳＫ２出土遺物観察表（土製品）
表16　ＳＫ14出土遺物観察表（土製品）…… 85
表17　ＳＫ14出土遺物観察表（石製品）
表18　ＳＫ３出土遺物観察表（土製品）
表19　ＳＫ６出土遺物観察表（土製品）
表20　ＳＫ８出土遺物観察表（土製品）
表21　ＳＫ８出土遺物観察表（石製品）
表22　ＳＫ９出土遺物観察表（土製品）…… 86
表23　ＳＫ９出土遺物観察表（石製品）
表24　ＳＫ15出土遺物観察表（土製品）
表25　ＳＫ11出土遺物観察表（土製品）
表26　ＳＫ11出土遺物観察表（石製品）
表27　ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）…… 87
表28　ＳＫ１出土遺物観察表（石製品）
表29　ＳＫ10出土遺物観察表（土製品）
表30　ＳＫ10出土遺物観察表（石製品）
表31　ＳＤ１出土遺物観察表（土製品）
表32　ＳＤ１出土遺物観察表（石製品）…… 88
表33　ＳＸ１出土遺物観察表（土製品）
表34　ＳＸ１出土遺物観察表（石製品）
表35　ＳＸ２出土遺物観察表（土製品）
表36　ＳＸ３出土遺物観察表（石製品）
表37　ＳＢ１出土遺物観察表（土製品）…… 89
表38　掘立１出土遺物観察表（土製品）
表39　掘立１出土遺物観察表（石製品）
表40　掘立３出土遺物観察表（土製品）
表41　掘立３出土遺物観察表（石製品）…… 90
表42　掘立４出土遺物観察表（土製品）

表43　ＳＤ５出土遺物観察表（土製品）…… 90
表44　掘立６出土遺物観察表（土製品）
表45　柱穴出土遺物観察表（土製品）
表46　柱穴出土遺物観察表（２）（土製品）…… 91
表47　柱穴出土遺物観察表（２）（石製品）
表48　第Ⅳ層出土遺物観察表（土製品）
表49　第Ⅲ層出土遺物観察表（土製品）…… 92
表50　第Ⅲ層出土遺物観察表（石製品）…… 93
表51　第Ⅲ層出土遺物観察表（金属製品）
表52　出土層位不明遺物観察表（土製品）
表53　出土層位不明遺物観察表（石製品）
表54　出土層位不明遺物観察表（装身具）…… 94
第３章　五楽遺跡
表55　試掘調査一覧 …… 99
表56　剥片計量表 …… 142
表57　土坑一覧 …… 144
表58　溝一覧
表59　性格不明遺構一覧
表60　ＳＫ２出土遺物観察表（土製品）…… 145
表61　ＳＫ２出土遺物観察表（石製品）
表62　ＳＫ３出土遺物観察表（土製品）
表63　ＳＫ４出土遺物観察表（土製品）
表64　ＳＫ４出土遺物観察表（石製品）
表65　ＳＫ12出土遺物観察表（土製品）…… 146
表66　ＳＫ15出土遺物観察表（土製品）
表67　ＳＫ15出土遺物観察表（石製品）
表68　ＳＫ16出土遺物観察表（土製品）
表69　ＳＫ16出土遺物観察表（石製品）
表70　ＳＫ５出土遺物観察表（土製品）
表71　ＳＫ17出土遺物観察表（土製品）…… 147
表72　ＳＫ18出土遺物観察表（土製品）
表73　ＳＫ７出土遺物観察表（土製品）
表74　ＳＸ１出土遺物観察表（土製品）
表75　ＳＸ２出土遺物観察表（石製品）…… 148
表76　ＳＸ３出土遺物観察表（土製品）
表77　ＳＸ13出土遺物観察表（土製品）
表78　ＳＫ14出土遺物観察表（土製品）

表79　ＳＫ１出土遺物観察表（金属製品）…… 148
表80　柱穴出土遺物観察表（土製品）
表81　柱穴出土遺物観察表（石製品）
表82　第Ⅴ層出土遺物観察表（土製品）…… 149
表83　出土層位不明遺物観察表（土製品）
表84　土坑一覧…… 167
表85　溝一覧
表86　性格不明遺構一覧
表87　自然流路一覧
表88　ＳＫ２出土遺物観察表（土製品）
表89　ＳＫ３出土遺物観察表（土製品）…… 168
表90　ＳＤ１出土遺物観察表（土製品）
表91　柱穴出土遺物観察表（土製品）
表92　ＳＲ１出土遺物観察表（土製品）
表93　ＳＲ１出土遺物観察表（石製品）
表94　第Ⅰ層出土遺物観察表（土製品）
表95　第Ⅱ層出土遺物観察表（土製品）…… 169
表96　第Ⅲ層出土遺物観察表（土製品）
表97　第Ⅲ層出土遺物観察表（銭貨）
表98　第Ⅳ層出土遺物観察表（石製品）…… 170
第４章　五楽遺跡３次調査地
表99　調査地一覧…… 186
表100　自然流路一覧…… 220
表101　溝一覧
表102　土坑一覧
表103　試掘トレンチ出土遺物観察表（土製品）…… 221
表104　試掘トレンチ出土遺物観察表（石製品）…… 222
表105　ＳＲ２出土遺物観察表（土製品）
表106　１区第Ⅴ層出土遺物観察表（土製品）
表107　１区第Ⅷ層出土遺物観察表（土製品）…… 223
表108　１区地点不明出土遺物観察表（土製品）
表109　１区地点不明出土遺物観察表（石製品）…… 224
表110　平井谷２号墳出土遺物観察表（土製品）
表111　平井谷２号墳出土遺物観察表（金属製品）

図　版　目　次

巻頭図版１　　調査地全景（南より）

巻頭図版２　　古市遺跡２次調査地出土の紡錘車

第２章　古市遺跡２次調査地

図版１　　１．調査前全景（北より）

　　２．作業風景（南より）

図版２　　１．南半部遺構遺存状況（南西より）

図版３　　１．南半部遺構検出状況（南より）

図版４　　１．北半部遺構遺存状況（北より）

図版５　　１．北半部遺構検出状況（南より）

図版６　　１．ＳＫ13遺存状況（西より）

　　２．ＳＫ13遺物出土状況（西より）

図版７　　１．ＳＫ４遺存状況（南より）

　　２．ＳＫ４検出状況（北より）

図版８　　１．ＳＫ４土層（南より）

　　２．ＳＫ４遺物出土状況①（東より）

　　３．ＳＫ４遺物出土状況②（北東より）

図版９　　１．ＳＫ５遺存状況（北東より）

　　２．ＳＫ５検出状況（南より）

図版10　　１．ＳＫ２検出状況（南西より）

　　２．ＳＫ14検出状況（西より）

　　３．ＳＫ14土層（南より）

図版11　　１．ＳＫ12検出状況（南より）

　　２．ＳＫ３検出状況（西より）

　　３．ＳＫ６検出状況（西より）

図版12　　１．ＳＫ７検出状況（南西より）

　　２．ＳＫ８検出状況（北東より）

　　３．ＳＫ11検出状況（北東より）

図版13　　１．ＳＫ11遺物出土状況（北より）

　　２．ＳＫ１検出状況（東より）

　　３．ＳＫ１遺物出土状況（西より）

図版14　　１．ＳＫ10検出状況（東より）

　　２．ＳＤ１検出状況（西より）

　　３．ＳＤ１遺物出土状況（西より）

図版15　１．ＳＢ１遺存状況（北東より）
２．ＳＢ１検出状況（北東より）
図版16　１．掘立１検出状況（北より）
２．掘立２検出状況（北より）
３．掘立３検出状況（北東より）
図版17　１．掘立４検出状況（東より）
２．掘立５検出状況（北東より）
３．ＳＤ４・５遺存状況（北東より）
図版18　１．掘立６遺存状況（南より）
２．掘立６柱穴遺存状況（東より）
図版19　１．ＳＫ13出土遺物（土製品）
図版20　１．ＳＫ13出土遺物（石製品）
図版21　１．ＳＫ４出土遺物（土製品）
２．ＳＫ４出土遺物（石製品）
３．ＳＫ５出土遺物
図版22　１．ＳＫ14・ＳＫ３・ＳＫ６・ＳＫ８・ＳＫ９出土遺物
図版23　１．ＳＫ11出土遺物
２．ＳＫ１出土遺物
図版24　１．ＳＫ10・ＳＤ１・ＳＸ１・ＳＸ２・ＳＢ１出土遺物
図版25　１．掘立１・掘立３・掘立６・ＳＰ58出土遺物
図版26　１．柱穴・第Ⅳ層・出土層位不明遺物

第３章　五楽遺跡

図版27　１．調査前全景①（南より）
２．調査前全景②（北より）
図版28　１．東半北部遺構遺存状況（南より）
２．東半南部遺構遺存状況（南より）
図版29　１．東半部検出状況（南より）
図版30　１．西半部遺構遺存状況（南西より）
図版31　１．東半部遺構検出状況（南西より）
図版32　１．南壁土層（北より）
２．西壁土層（北東より）
図版33　１．ＳＫ２検出状況（南より）
２．ＳＫ２焼土検出状況（南より）
３．ＳＫ２焼土断面（南より）
図版34　１．ＳＫ３検出状況（南より）
２．ＳＫ４検出状況（東より）
３．ＳＫ４遺物出土状況（南より）

図版35　1．ＳＫ12焼土撤去後の床面（南より）
2．ＳＫ12土層（西より）
3．ＳＫ12検出状況（南より）
図版36　1．ＳＫ15焼土出土状況（南より）
2．ＳＫ15土層（北より）
3．ＳＫ15焼土撤去後の床面（南東より）
図版37　1．ＳＫ15検出状況（南東より）
2．ＳＫ16土層（北東より）
3．ＳＫ16検出状況（南より）
図版38　1．ＳＫ５検出状況（南東より）
2．ＳＫ10検出状況（西より）
3．ＳＫ17遺存状況（南より）
図版39　1．ＳＫ17遺物出土状況（南より）
2．ＳＫ17焼土撤去後の床面（南より）
3．ＳＫ17検出状況（南より）
図版40　1．ＳＫ18遺物出土状況（西より）
2．ＳＫ18土層（西より）
3．ＳＫ７遺物出土状況（南より）
図版41　1．ＳＫ7土器埋納状況（南西より）
2．ＳＫ7検出状況（南より）
3．ＳＸ1検出状況（西より）
図版42　1．ＳＸ2検出状況（西より）
2．ＳＸ3検出状況（北より）
3．ＳＫ6検出状況（南西より）
図版43　1．ＳＫ11土層（西より）
2．ＳＫ13遺物出土状況（南より）
3．ＳＫ14土層（南東より）
図版44　1．ＳＫ１遺存状況（南より）
2．ＳＫ１落ち込み石出土状況（南より）
3．ＳＫ１検出状況（西より）
図版45　1．ＳＫ９検出状況（北東より）
2．作業風景（南東より）
図版46　1．ＳＫ２・ＳＫ４・ＳＫ12・ＳＫ15出土遺物
図版47　1．ＳＫ７・ＳＫ16～ＳＫ18・ＳＸ１出土遺物
図版48　1．ＳＫ１・ＳＫ13・ＳＫ14・ＳＫ２・ＳＸ３・ＳＰ143・ＳＰ82・ＳＰ113出土遺物
図版49　1．調査前全景（南西より）
2．作業風景（北東より）

図版50　遺構遺存状況（南より）
図版51　1．北部遺構検出状況（南西より）
2．南部遺構検出状況（西より）
図版52　1．南壁土層（北東より）
2．ＳＫ１検出状況（南東より）
3．ＳＫ２検出状況（南東より）
図版53　1．ＳＫ３検出状況（西より）
2．ＳＫ３遺物出土状況（南より）
3．ＳＫ４検出状況（北西より）
図版54　1．ＳＸ１検出状況（南西より）
2．ＳＸ２検出状況（南西より）
3．第Ⅳ層完掘状況（北より）
図版55　1．ＳＲ１遺存状況（南西より）
2．ＳＲ１検出状況（南西より）
図版56　1．ＳＫ２・ＳＫ３・ＳＲ１・第Ⅱ層・第Ⅳ層出土遺物
第４章　五楽遺跡３次調査
図版57　1．調査前全景（東より）
2．調査後全景（南より）
図版58　1．試掘調査①（南東より）
2．試掘調査②（東より）
図版59　1．試掘調査③（南より）
2．試掘調査④（東より）
図版60　1．１区遺構検出状況（南東より）
2．１区完掘状況①（南東より）
図版61　1．１区完掘状況②（北より）
2．１区西壁土層（東より）
図版62　1．２区調査前全景（北より）
2．２区遺構検出状況（北東より）
図版63　1．２区石室床面検出状況（北東より）
2．２区石室完掘状況①（南西より）
図版64　1．２区石室完掘状況②（南東より）
2．２区周溝検出状況（北東より）
図版65　1．３区調査前全景（北より）
2．３区完掘状況（北より）
図版66　1．試掘トレンチ出土遺物
2．ＳＲ２出土遺物
3．１区第Ⅴ層出土遺物

図版67　１．１区第Ⅷ層出土遺物
２．１区地点不明出土遺物
３．２区石室出土遺物

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

松山市は、松山市南東部の平井町、食場において松山市道の新設を計画した。計画路線の対象地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『No.90 権現山古墳群』及び『No.98 かいなご古墳群』に含まれる。

1996（平成８）年１月、松山市道路部道路建設第一課（以下、道路建設第一課）より当該地の埋蔵文化財確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。これにもとずき、1996（平成８）年５月、文化教育課は申請地南側の試掘調査を実施した。その結果、弥生時代から近世までの集落関連遺構や遺物が申請地の各所で確認され、これらの地点について本格調査が必要と判断された。

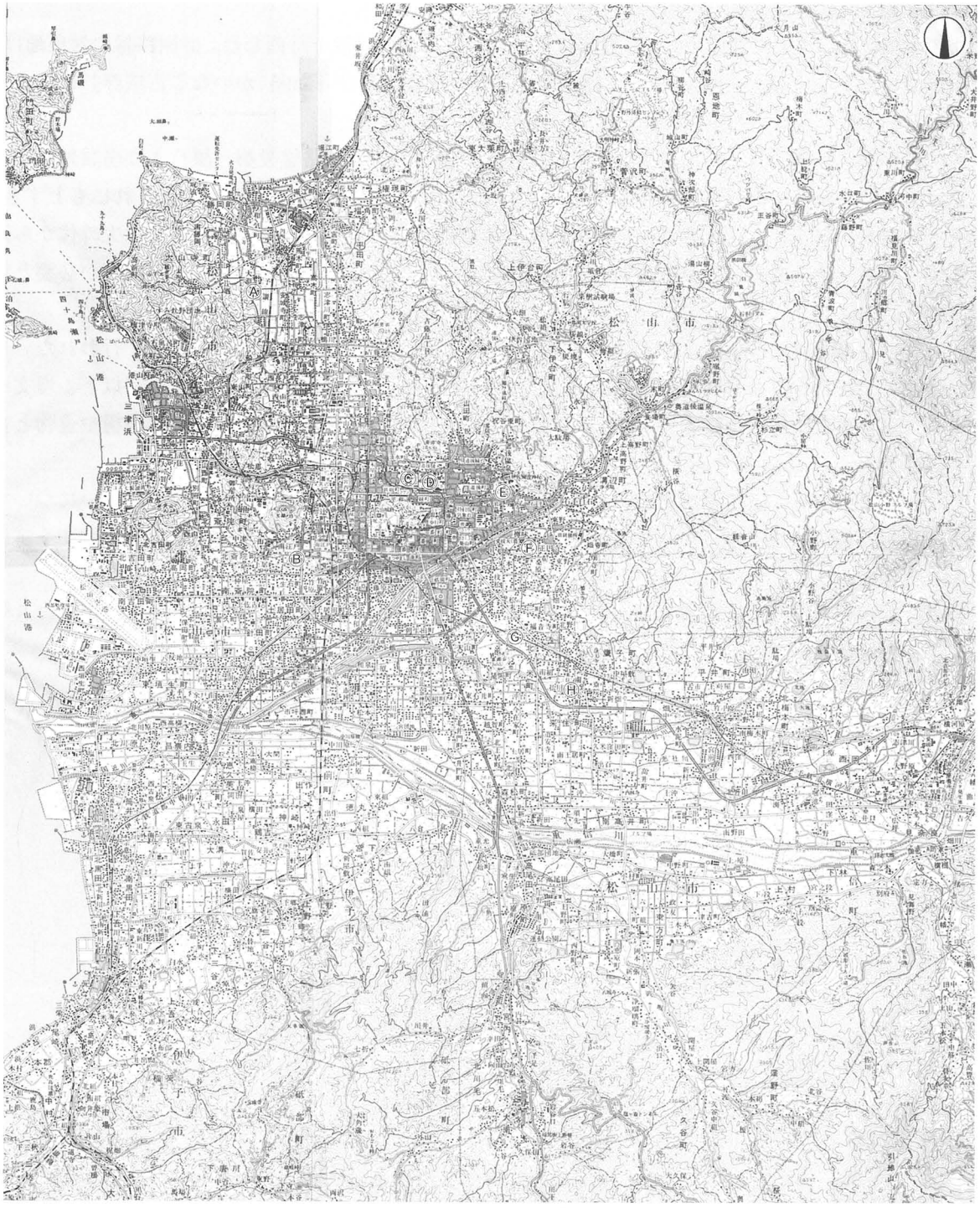
一方、申請地北側については、土地買収の関係上、試掘調査と本格調査とが並行して行われた。まず、1999（平成11）年９月より財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）が主体となり試掘調査を実施した。その結果、弥生時代から古代の集落関連遺構や遺物と古墳を確認した。

これらの結果から、道路建設第一課、文化教育課、埋文センターの三者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、道路建設工事によって失われる遺構や遺物について、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

調査は、現況農道や生活道路などの保全が前提となったうえ、用地買収等の関係で、継続的に５年次の工程で実施された。

2．刊行組織（平成17年３月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	土居　貴美
事務局	局長	久保　浩三
	企画官	丹生谷博一
	企画官	石丸　修
	企画官	仙波　和典
文化財課	課長	篠原　忠人
	主幹	家久　則雄
	副主幹	田城　武志
	主査	栗田　正芳
（財）松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	三宅　泰生
	事務局次長	石丸　允良
	事務局次長	池田　正勝
埋蔵文化財センター	所長	杉田　久憲
	専門監兼学芸係長	早瀬　忠幸
	次長兼調査係長	西尾　幸則
	管理係長	岸本　照修



Ⓐ大渕遺跡　Ⓑ古照遺跡　Ⓒ松山大学構内遺跡　Ⓓ文京遺跡
Ⓔ道後湯築城址　Ⓕ樽味遺跡　Ⓖ福音小学校構内遺跡　Ⓗ来住廃寺

第１図　松山平野の主要遺跡分布図（Ｓ＝１：125,000）

3．立地・環境

（1）立　地

松山平野は、東側を高縄山系に囲まれ、西側は伊予灘に向けて開けた沖積平野である。平野内には高縄山系に水源を発し、平野北東部から南西部に流れる石手川と、石鎚山系に水源を持ち、西流する重信川とがある。この二つの河川は、海岸線から約４kmの地点で合流し、伊予灘へと注いでいる。

調査地のある平井地区は、小野谷に水源を発する小野川と平井谷に水源をもつ堀越川とによって形成された扇状地と、堀越川水系の開析作用によって造られた丘陵地帯とで構成されている。調査地は、小野川によって形成された小規模な扇状地上の扇側部付近から丘陵斜面部に立地している。

（2）環　境

ここでは、平井地区を中心に来住・久米地区を含めた松山平野南東部の遺跡について、近年本格調査が実施された遺跡を中心に、時代別に概要を説明する。

旧石器時代

この地域での旧石器時代の遺構は確認されていない。遺物は、調査地西方の丘陵上にある五郎兵衛谷古墳の調査に伴ってサヌカイト製の角錐状石器が出土している。また、平井町の山田池ではナイフ形石器が表面採集されている。いずれも、後期旧石器時代のものと考えられている（重松 1989）。

縄文時代

平井地区では、調査地の南方にある下苅屋遺跡２次調査地（栗田 2000）より晩期の土器片が出土しているほか、五楽遺跡２次調査地（相原 2001）からは包含層中より該期の土器が出土している。一方、来住・久米地区では、久米窪田森元遺跡（栗田 1989）検出の土坑内より40点余りの土器片が出土しており、数少ない後期後葉の一括遺物として貴重な資料である。晩期では、久米高畑遺跡36次調査地（小笠原 1998）より円形竪穴式住居址が確認され、さらに同26次調査地（小玉 1997）、同35次調査地（河野 2004）からは同時期の土坑が確認されている。

弥生時代

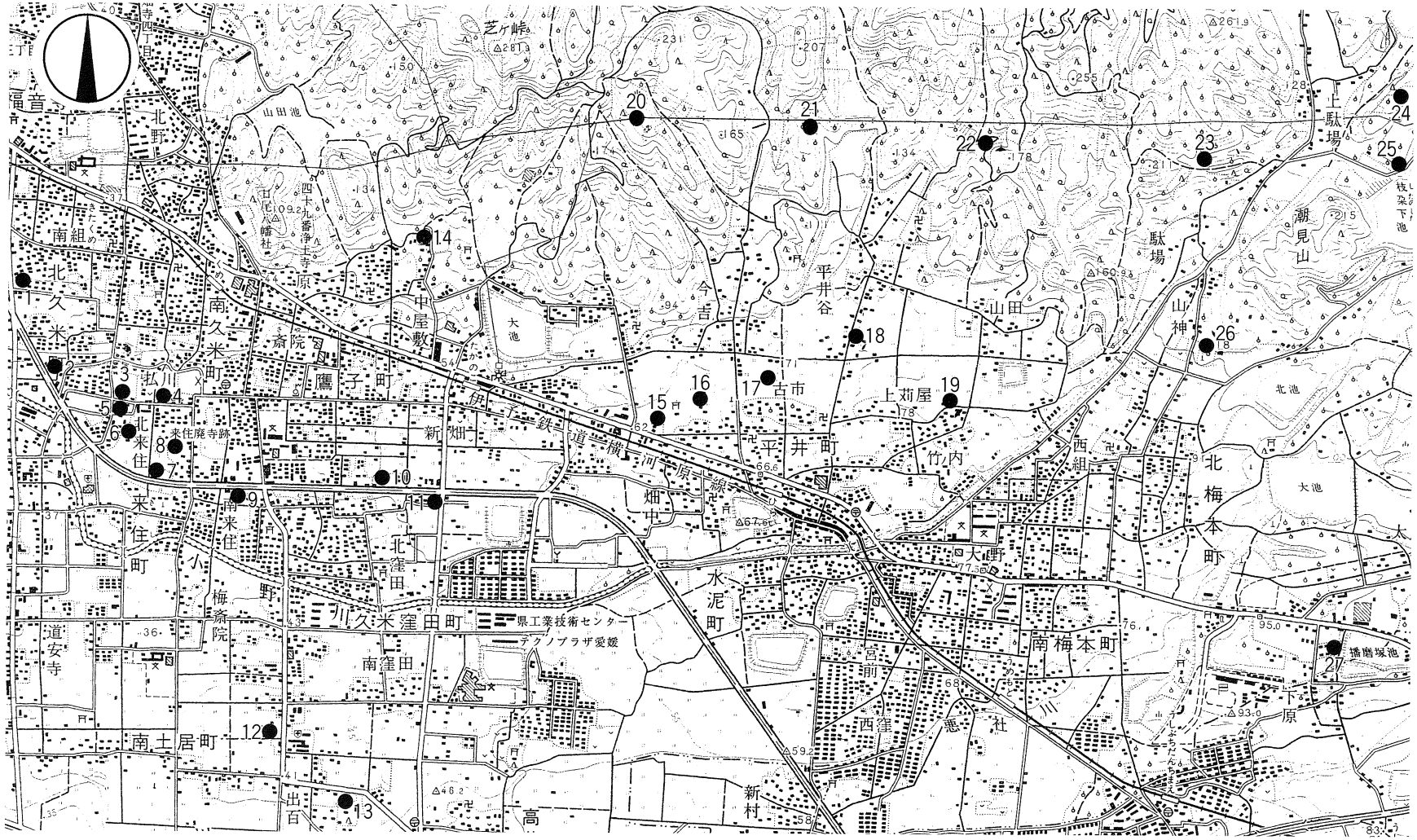
弥生時代の遺跡は前期から後期まで継続しているが、特に前期末から中期初頭の集落遺跡が注目される。平井地区では、前述の五楽遺跡２次調査地より該期の土坑が確認されている。また、古市遺跡（栗田 2000）の自然流路からは該期の土器が多数出土している。来住・久米地区では、竪穴式住居址と土坑が多数検出されているが、久米高畑遺跡23次調査地（橋本 1995）や同25次調査地（高尾 2000）では大型の溝が複数検出され、環濠集落の存在が明らかになりつつある。

中期では、下苅屋遺跡３次調査地（河野 2000）のＳＸ２より凹線文期の土器片が多数出土している。久米窪田古屋敷Ｃ遺跡（宮内 1992）ではＬ字状に折れ曲がる大型の溝内より該期の土器が出土しているほか、来住廃寺15次調査（西尾 1993）では同時期の資料が包含層中より多数出土している。

後期は検出例が少ないが、南久米片廻り遺跡（栗田 1997）や久米高畑遺跡27次調査地（宮内 2004）から竪穴式住居址が確認されている。また、国道11号松山東道路関係の発掘調査（吉本 1981）や来住寺域内でも該期の遺構や遺物が確認されている。

古墳時代

近年、平井地区及び、来住・久米地区における古墳時代集落の検出例が増加し、集落構造や変遷が明らかになりつつある。平井地区では、古市遺跡や下苅屋遺跡１～３次調査地において、竪穴式住居址や掘立柱建物址、土坑が多数確認されている。このうち、下苅屋遺跡３次調査地では焼け歪みや焼成不良の須恵器が一括投棄された土坑が検出されるなど、窯址から来住・久米地区への須恵器の中継点として当地がその役割を担っていた可能性があると指摘されている。このほか、上苅屋遺跡２次調



1 ニッ塚古墳
2 南久米片廻り遺跡
3 久米高畑遺跡（26次）
4 久米高畑遺跡（23次）
5 久米高畑遺跡（35次）
6 久米高畑遺跡（36次）
7 来住廃寺（15次）
8 来住廃寺
9 来住町遺跡（８次）
10 久米窪田森元遺跡
11 久米窪田古屋敷Ｃ遺跡
12 開遺跡
13 波賀部神社古墳
14 五郎兵衛谷古墳
15 下苅屋遺跡（３次　）
16 下苅屋遺跡（２次）
17 古市遺跡
18 五楽遺跡（２次）
19 上苅屋遺跡
20 かいなご古墳
21 平井谷１号墳
22 茨谷１号窯
23 駄馬姥ヶ懐窯
24 悪社谷窯
25 枝朶下池窯
26 葉佐池古墳
27 播磨塚古墳

第２図　調査地周辺の主要遺跡分布図（Ｓ＝１：25,000）

査地（水本 1996）からも掘立柱建物址や土坑が確認されている。

来住・久米地区では、来住町遺跡８次調査地（相原 1999）や開遺跡１・２次調査地（宮内 1996）では、竪穴式住居址や掘立柱建物址が確認され、６世紀初頭から６世紀後半までの住居形態の変遷や竪穴住居から掘立柱建物への移行が明らかになりつつある。

一方、古墳は丘陵部や平地部に存在する。丘陵部では、桧山峠古墳群、かいなご古墳群、久米大池古墳群などがあり、その大半は後期古墳と考えられる。平地部では、波賀部神社古墳、二ツ塚古墳（森 1986）、葉佐池古墳（栗田 2003）など、松山平野では数少ない後期の前方後円墳が分布している。

古　代

古代では、五楽遺跡２次調査地より７世紀の掘立柱建物址が多数確認されている。また、古市遺跡や下苅屋遺跡では、８世紀代に埋没したと考えられる自然流路や溝を検出している。

来住・久米地区では、久米官衛遺跡群の調査や来住廃寺の寺域調査が進み、全容が明らかになりつつある。寺院に隣接する「回廊状遺構」で囲まれた施設や、「久米評」線刻須恵器の出土による評庁院の存在、さらには濠で囲まれた正倉域の発見など、この地区が古代の松山平野における政治の中心地であったと考えられている。

このほか、丘陵部には松山平野東部古窯址群が分布している。主なものは、駄馬姥ケ懐、悪社谷、枝朶下地、茨谷窯址など10数基の須恵器窯であるが、発掘調査が実施されたものは駄馬姥ケ懐１号窯（平田 1996）のみである。出土須恵器より、これらの窯址は７世紀から８世紀の操業と推定されている。

中　世

中世では、古市遺跡や下苅屋遺跡２・３次調査地より鋤址や溝などの生産関連遺構と遺物包含層が確認されており、当地周辺が中世において生産域として土地利用された可能性が高いと考えられる。

【文　献】

重松　佳久　1992　「小野川水系における旧石器文化」『来住・久米地区の遺跡』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

栗田　茂敏　1989　「久米窪田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会

2000　「古市遺跡」「下苅屋遺跡」松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

相原　秀仁　2001　「五楽遺跡２次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報12』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

吉本　拡　1981　「来住Ⅴ遺跡、久米窪田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』愛媛県教育委員会・（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

小笠原善治　1998　「久米高畑遺跡36次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

小玉亜紀子　1997　「久米高畑遺跡26次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

河野　史知　2004　「久米高畑遺跡35次調査地」『来住・久米地区の遺跡Ⅴ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

橋本　雄一　1995　「久米高畑遺跡23次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

高尾　和長　2000　『久米高畑遺跡25次調査地』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

宮内　慎一　1992　「久米窪田古屋敷Ｃ遺跡」『来住・久米地区の遺跡』松山市教育委員会・(財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

2004　「久米高畑遺跡27次調査地」『来住・久米地区の遺跡Ⅴ』松山市教育委員会・(財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

西尾　幸則　1993　『来住廃寺遺跡15次調査』松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

水本　完児　1996　「上苅屋遺跡２次調査地」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・(財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

相原　秀仁　1999　「来住町遺跡７次調査地」『松山市文化財調査年報11』松山市教育委員会・(財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

宮内　慎一　1996　「開遺跡１次調査地」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・(財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

森　　光晴　1986　「波賀部神社古墳」「二ツ塚古墳」「播磨塚古墳群」『愛媛県史　資料編　考古』愛媛県史編纂委員会

栗田　茂敏　1996　「駄馬姥ケ懐窯跡」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・(財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

第2章

古　市　遺　跡

－2次調査－

第２章　古市遺跡２次調査地

１．調査に至る経緯

1996（平成８）年１月、松山市道路部道路建設第１課（以下、道路建設第１課）より松山市道「小野３号線」(松山市平井町～食場町）道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「№90 権現山古墳群」及び「№98 かいなご古墳群」に含まれる。周辺地域には６世紀後半に築造されたと推定される平井谷１号墳が所在するほか、７世紀初頭の茨谷１号窯をはじめとする須恵器窯跡群が分布する。また、調査地周辺ではこれまでに上苅屋遺跡１・２次調査、下苅屋遺跡の調査が行われ、古墳時代の小型石室、竪穴式住居址、掘立柱建物址、土坑、溝などが検出されている。今回の試掘調査対象地南端と交差する「市道平井・水泥線新設工事」にともなう発掘調査では、古市遺跡、下苅屋遺跡２・３次調査が行われており、古市遺跡では、弥生時代から古代にかけて機能していたと考えられる自然流路や室町時代の水路が、下苅屋遺跡２次調査では、古市遺跡から続く自然流路、古墳時代の集落関連遺構、中世の生産遺構を、下苅屋遺跡３次調査では、古市遺跡、下苅屋遺跡２次調査地を経て３次調査地に続く自然流路、古墳時代後期を主体とした集落、近世の墓が検出されている。このように申請地周辺には多くの遺跡が分布している。

これらのことから、道路建設第１課と文化教育課は協議のうえ、当該地における埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、試掘調査を実施することとなった。(財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）は、平成８年５月より試掘調査を開始した。

２．試掘調査

（１）調査の経緯（第３・４図）

試掘調査にあたり、調査対象地を便宜上、生活道・農道・河川などの現況地目と旧字名から、調査対象地南端より古市地区、五楽１地区～６地区（第２図）と区分を設けた。調査地の現況はそのほとんどが水田耕作地である。着手前に立会人のもとに申請地を確認後、調査対象（売収完了）地全面の除草作業を行い試掘トレンチの掘削作業に入った。試掘トレンチは各地区の地形などを考慮して設定した。掘削作業は埋め戻しも含めて、現況農道や用水路、取水パイプの保全を前提としているため、重機は使用せず、すべてのトレンチを手掘りにて行った。トレンチ番号は「Ｔ－１・Ｔ－２・・・・Ｔ－23」と表記している。古市地区の所在地・面積・調査期間は以下のとおりである。

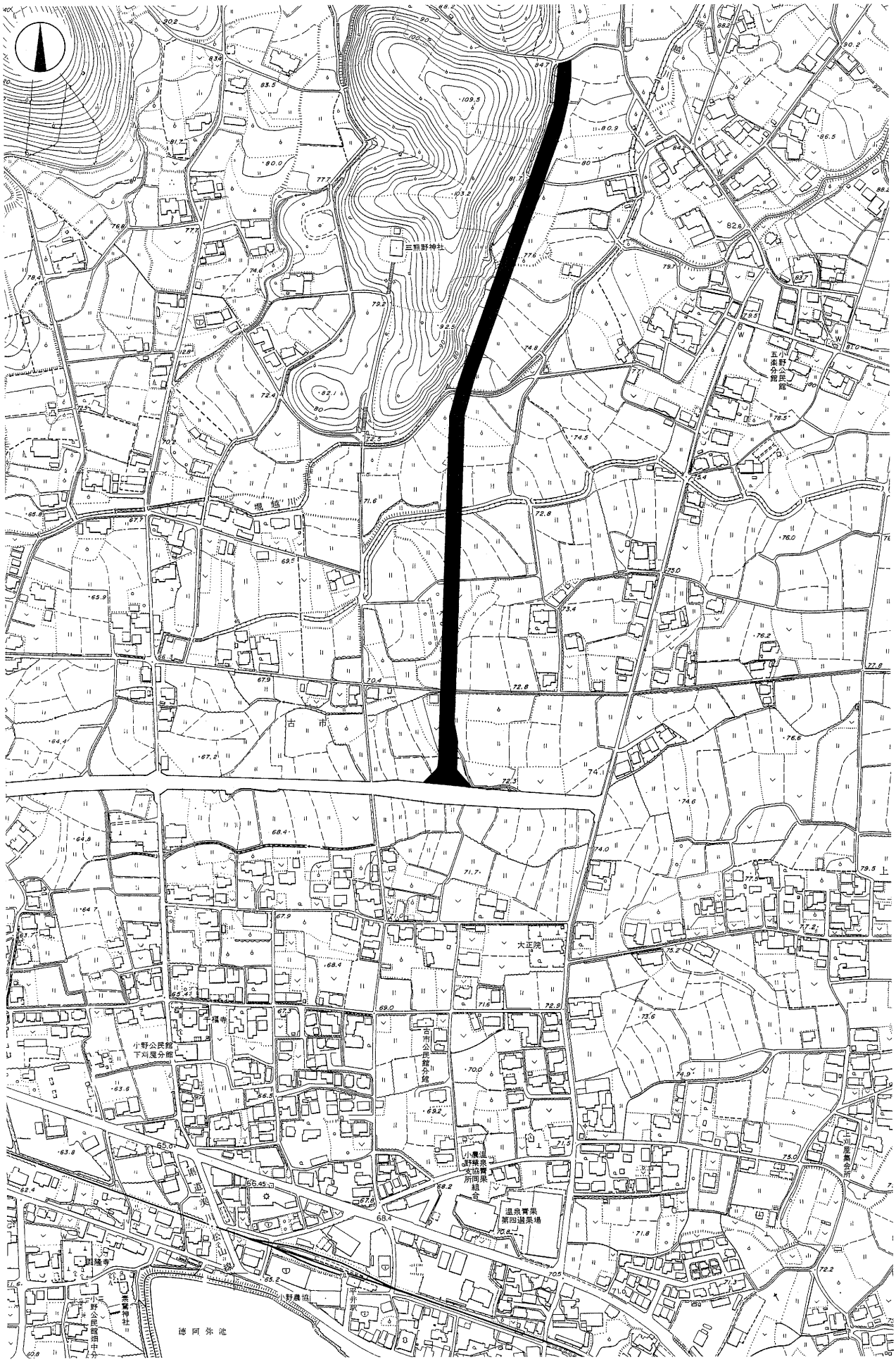
調査地	松山市平井町甲1726－１外４筆
調査対象面積	1,540㎡
調査期間	1996（平成８）年５月13日～同年８月22日
調査担当	山本健一・山之内志郎

（２）調査の概要（第５・６図）

調査地は、水田耕作地と水田耕作地を転用した畑地である。北から南へ段状に下がり、高低差は耕作土上面で最大0.7mを測る。トレンチは５本を設定し、測量と写真撮影後に埋め戻しを行った。

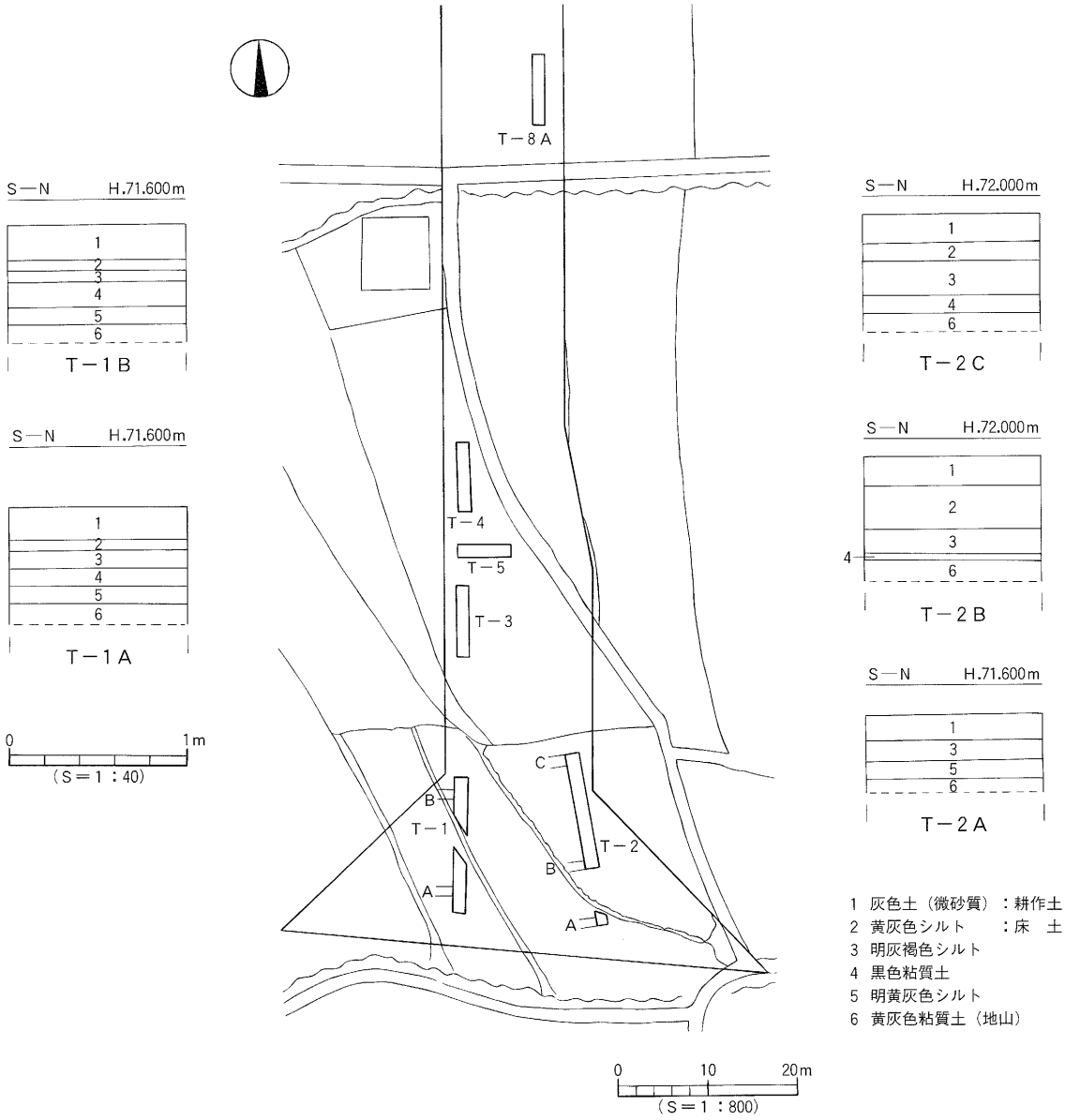
基本層位は第１層灰色土（微砂質・耕作土)、第２層黄灰色シルト（床土)、第３層明灰褐色シルト、第４層黒色粘質土、第５層明黄灰色シルト、第６層黄灰色粘質土（地山）である。

遺構は、土坑２基（Ｔ－３)、溝２状（Ｔ－４・５)、柱穴９基（Ｔ－３・４・５）を確認した。



第３図　調査地位置図（Ｓ＝１：5,000）

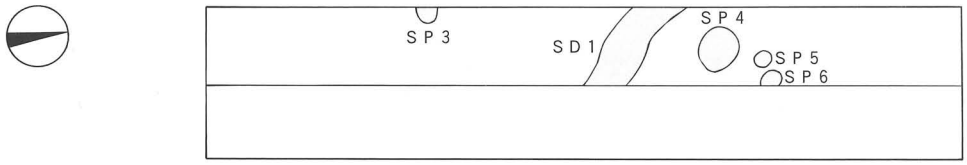
第 4 図　試掘調査用区割図（S＝1 ：3,000）



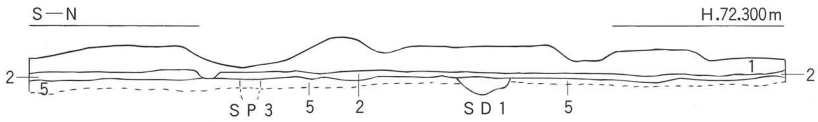
第５図　古市地区トレンチ位置図・柱状土層図

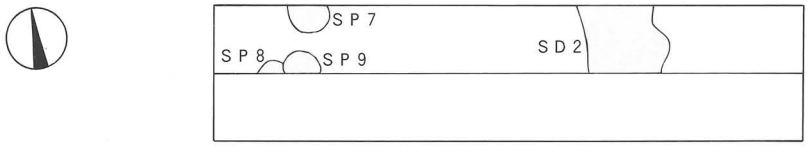
遺物は、弥生土器（Ｔ－１～５）、須恵器（Ｔ－１～５）、陶器（Ｔ－１・３・４・５）、石製品が出土した。Ｔ－１・２では第１・２・３層からの出土で、遺物はこれらの土層への混入品である。

以上のことから、本調査区内には弥生・古墳時代及び近世の集落関連遺構の存在が推定される。なお、調査地北半部は農作業の関係でトレンチ調査は行っていないが、五楽１地区の試掘調査の結果などから遺構の遺存が想定されたため、本格調査を実施することとなった。

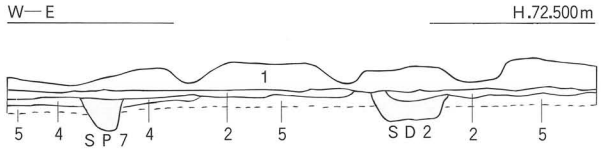


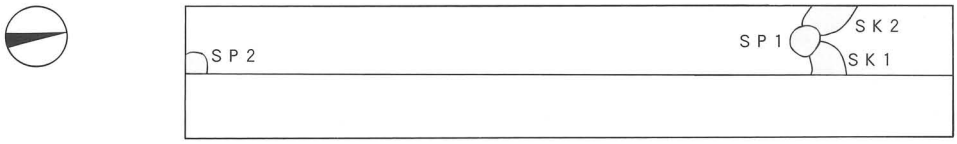
T－4



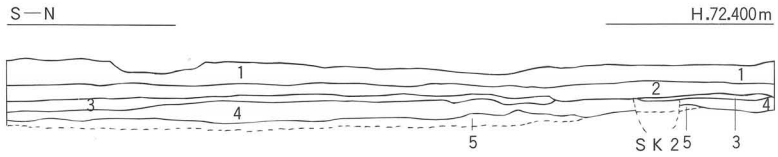


T－5

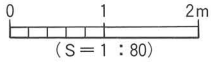




T－3



1 灰色土（微砂質・耕作土）
2 黄灰色土（床土）
3 明灰褐色シルト
4 黒色粘質土
5 黄灰色粘質土（地山）



第6図　トレンチ測量図・土層図

３．本格調査

（１）調査の経緯

１）経　過（第７図）

試掘調査の結果、文化教育課・埋蔵文化財センターと道路建設第１課は発掘調査について協議を行い、開発工事によって失われる遺構や遺物について、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。今回の調査では、弥生時代以降の古墳時代・近世における集落構造の解明を主目的とした。調査区の設定にあたっては、掘削土置き場、耕作土（肥土）の確保場所と現況農道の保全等の諸条件から、調査地全域の掘削は行えず、第５図に示す調査区の形状、配置となった。便宜上、調査地を斜め方向に横切る農道の未調査部分より北東側を北半部、南西側を南半部と呼称する。

調査は平成９年１月７日より南半部より着手、同年１月17日から北半部も調査を開始した。順次遺構の掘り下げ、測量、図面作成、写真撮影を行い同年３月29日に古市遺跡２区調査地、下苅屋遺跡２・３次調査地と合同現地説明会を行って、同３月31日に野外調査を終了した。

２）調査組織

調査地　　松山市平井町甲1726－１外４筆
遺跡名　　古市遺跡２次調査地
調査面積　503.8m²
調査担当　山本健一・山之内志郎

（２）層　位（第８図）

本調査地は、小野谷に水源を発する小野川と、平井谷に水源を発する堀越川によって形成された扇状地の扇央付近、標高72ｍに立地する。基本層位は第Ⅰ層灰色粘質土、第Ⅱ層黄白色粘質土～明灰褐色シルト、第Ⅲ層明褐色シルト、第Ⅳ層黒褐色粘質土、第Ⅴ層黒色粘性土、第Ⅵ層黒褐色土、第Ⅶ層明黄白色シルト～褐色シルトである。

第Ⅰ層：現耕作土で20cm前後の厚さを測る。

第Ⅱ層：旧耕作土で２層を確認した。Ⅱ－１層は調査地全域で見られ、10～20cmの厚さを測る。Ⅱ－２層は調査区南西隅で見られ、５～10cmの厚さを測る。

第Ⅲ層：造成土で、調査区のほぼ全域で見られるが調査区南西隅では上層の第Ⅱ－２層により欠除する。４～10cmの厚さを測る。縄文土器、弥生土器、須恵器、陶器などの遺物のほか、５～10cm大の礫石が混入していた。造成は近現代に行われたと思われる。

第Ⅳ層：Ａ～Ｃ４区より南部、Ａ～Ｃ12・13・14区に堆積し、５～10cmの厚さを測る。弥生時代から古代の遺物を包含する。

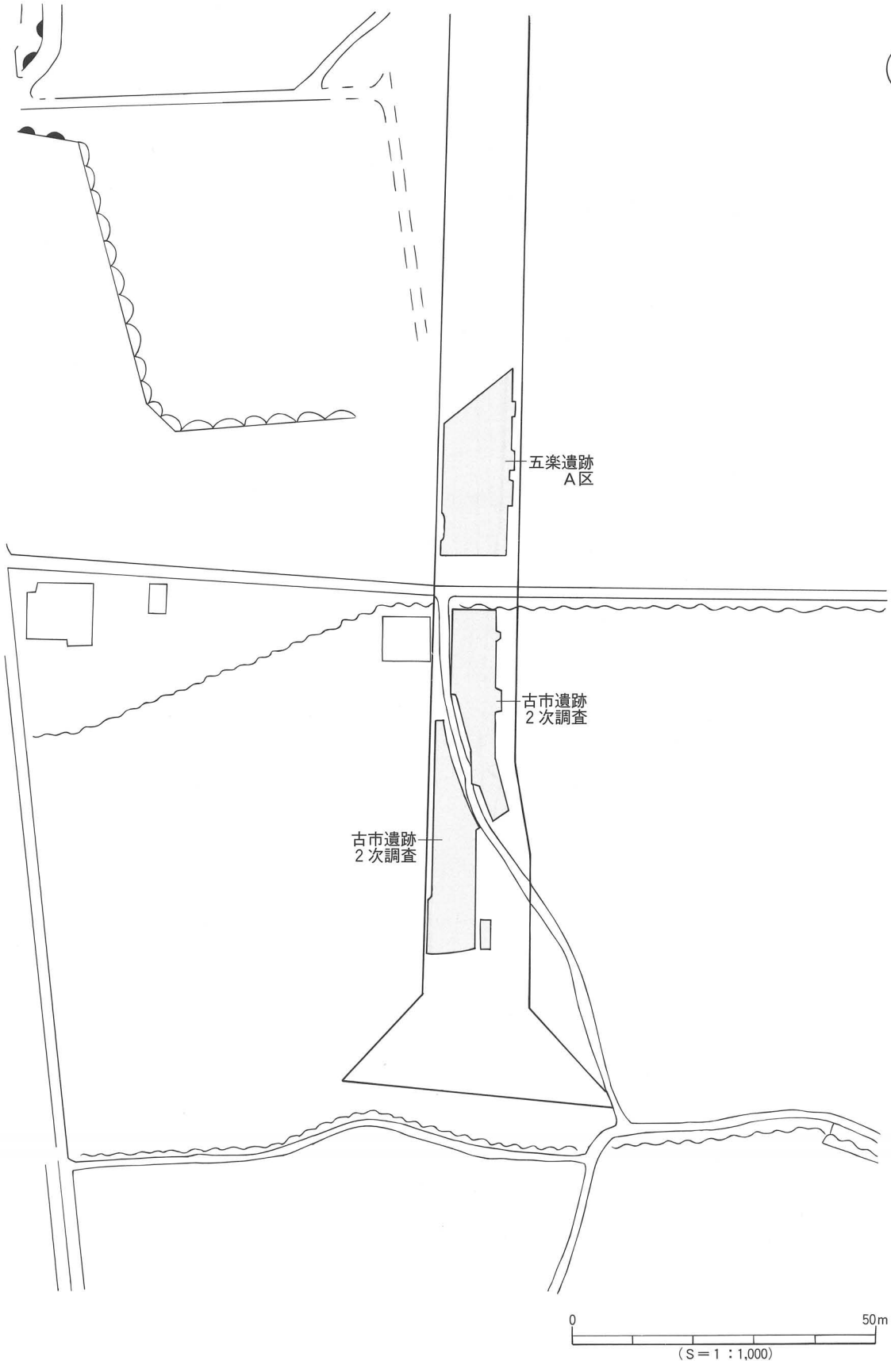
第Ⅴ層：Ａ～Ｃ４区より南部で堆積し、５～25cmの厚さを測る。遺物の出土はない。

第Ⅵ層：堆積、層厚とも第Ⅴ層と同じ状況である。遺物の出土はない。

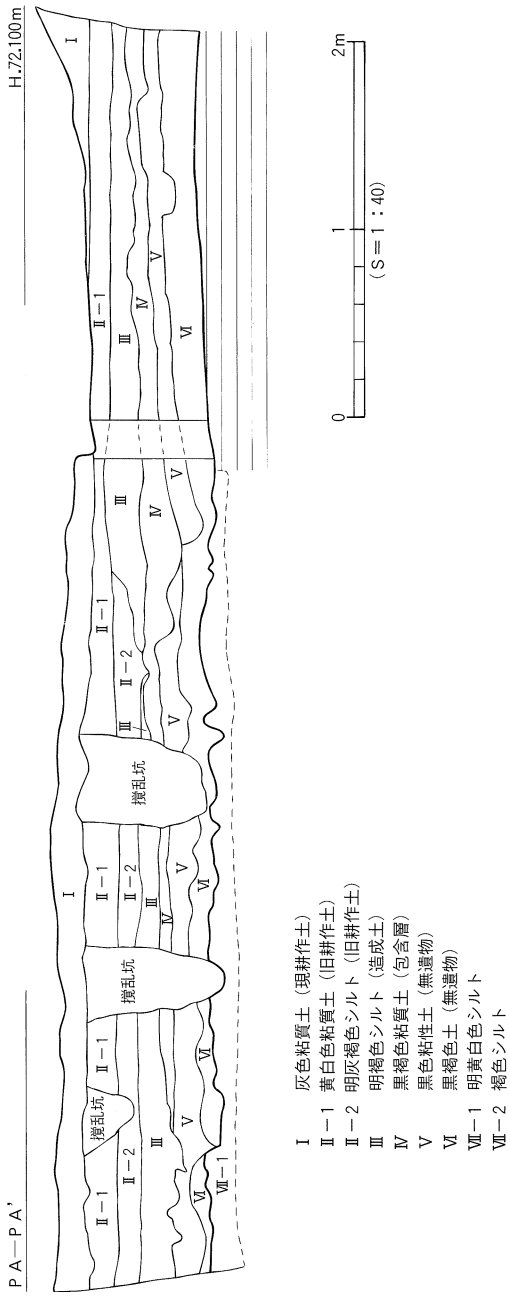
第Ⅶ層：地山と呼ばれるもので、Ⅶ－１層は明黄白色シルトで、南半部全域で見られる。Ⅶ－２層は褐色シルトで北半部でのみ見られる。

遺構の検出作業は第Ⅶ層上面にて行ったが、調査の結果、古代の掘立柱建物址は第Ⅳ層上面にて、縄文、弥生、古墳時代の遺構は第Ⅴ層上面の検出になる。なお、調査にあたり調査区内を４ｍ四方のグリットに分けた。グリットは西から東へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ、南から北へ１・２・３・・・・とした。

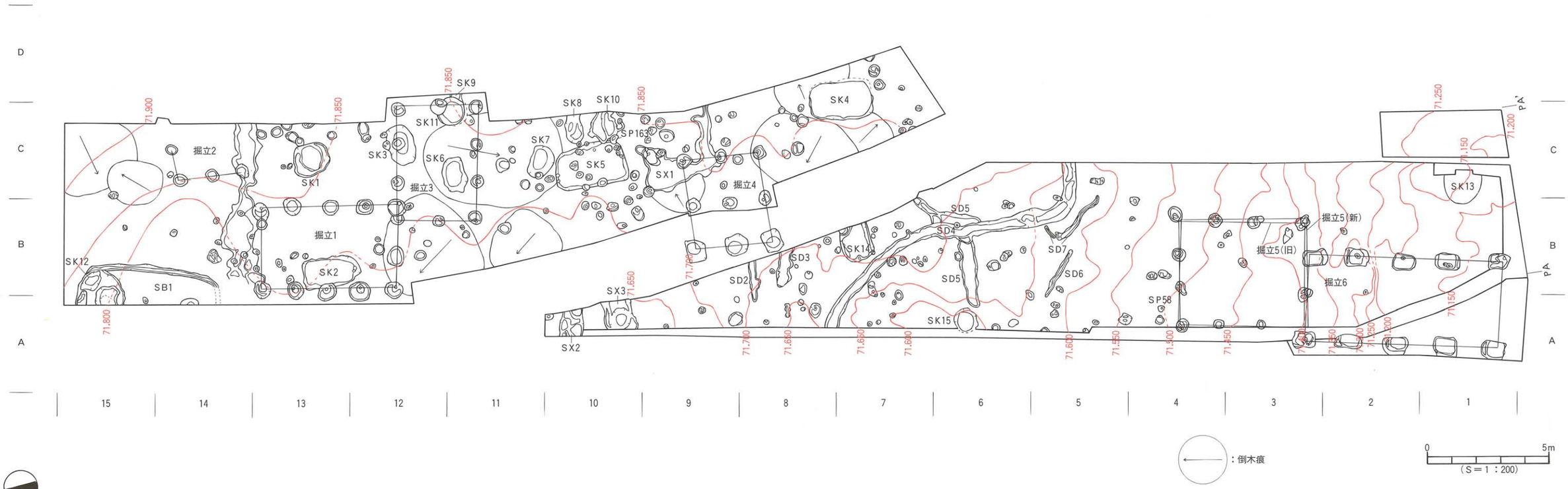
本調査については『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』に概要を報告しているが、整理の結果、遺構認定及び名称が若干異なっており、取り扱いには注意していただきたい。



第7図　調査地測量図


H.72.100m
P A — P A'
撹乱坑
撹乱坑
撹乱坑
Ⅰ
Ⅱ－1
Ⅱ－2
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ－1
0
1
2m
（S＝1：40）
Ⅰ　灰色粘質土（現耕作土）
Ⅱ－1　黄白色粘質土（旧耕作土）
Ⅱ－2　明灰褐色シルト（旧耕作土）
Ⅲ　明褐色シルト（造成土）
Ⅳ　黒褐色粘質土（包含層）
Ⅴ　黒色粘性土（無遺物）
Ⅵ　黒褐色土（無遺物）
Ⅶ－1　明黄白色シルト
Ⅶ－2　褐色シルト

第８図　南壁土層図


D
C
B
A
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
掘立1
掘立2
掘立3
掘立4
掘立5(新)
掘立5(旧)
掘立6
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SB1
SP16
SP58
SX1
SX2
SX3
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SD7
71.900
71.850
71.800
71.750
71.700
71.650
71.600
71.550
71.500
71.450
71.400
71.350
71.300
71.250
71.200
71.150
71.100
71.050
71.000
pA
pA'
：倒木痕
0
5m
(S＝1：200)

第９図　遺構配置図

（３）遺構と遺物（第９図）

検出遺構は縄文時代の土坑１基、弥生時代では土坑14基、溝３条、性格不明遺構３基、古墳時代では竪穴式住居址１棟、掘立柱建物址５棟、溝４条、古代では掘立柱建物址１棟である。

今回の調査では、縄文・弥生時代の土坑内よりサヌキトイドの剥片が多数出土した。そのため調査中にチップ・フレーク片が出土している土坑については、埋土を採集して洗浄を行った。その結果多数の剥片を検出することができた。結果の取り扱いについては、以下のように行った。剥片にはさまざまな形があり一定していないが、概ねその個体の長辺及び長軸寸法を基準とし５分類した。法量が３㎜以下を微細片、3.1㎜～５㎜までを細片、5.1㎜～10㎜までを小片、10.1㎜～30.0㎜までを中型片、30.1㎜以上を大型片と呼称し、破片別に出土点数比率を文章中に表記している。

１）縄文時代

縄文時代の遺構は土坑（ＳＫ）１基を、重機にて第Ⅴ層を除去する際に検出した。掘削作業で土坑の上部は失われたが、基底部分の調査を行うことができた。

ＳＫ13（第10図、図版６）

ＳＫ13は調査地南端のＣ１区で検出した。第Ⅴ層を除去する際に検出した。本来は第Ⅴ層上面からの掘り込みである。平面形態は楕円形と想定される。規模は南北検出長1.40ｍ、東西1.40ｍ、深さ13㎝を測る。断面形態は逆台形を呈する。埋土は１層黒色粘質土（粘性強）、２層暗褐色粘質土（地山の黄色土を含む）である。第Ⅴ層上面からの掘り込みであることや、断面形態などから想定できる規模は、東端を先行トレンチにより欠くが、土坑東側から25㎝離れた調査区壁面の土層の観察では遺構の確認はできなかったことなどから東西上場最大長1.60ｍ、深さは33㎝を測るものと思われる。遺物は、縄文土器、石器、サヌキトイド剥片が礫石と混在して出土した。サヌキトイドの剥片は図化を行っていない。

出土遺物（第11～13図、図版19・20）

縄文土器（１～10）１は深鉢の口縁部片で端部は面をもち、内外面ともナデ調整される。２は深鉢の胴部片で、胴部と頸部の境は不明瞭である。外面はケズリ、内面はナデ調整される。３～６は浅鉢の胴部片で、３～５の外面はケズリ、内面はナデ調整される。４の外面には煤が付着する。６は内外面ともミガキ調整され胎土も精良である。７・８は深鉢の口縁部片で７は尖り気味におさめる。８は面を持ちＤ字状の刻み、内面に３条の浅い沈線を施す。刻みの工具は二枚貝を使用か。内外面ともナデ調整される。９は浅鉢の波状口縁部片で、端部は尖る。外面はナデ、内面はケズリ調整される。10は深鉢の凹み底の底部で、外面はナデアゲ、内面はナデ調整される。胎土は粗。

石製品（11～16）11は台石の欠損品で、上面にのみ使用痕が見られる。石材は安山岩である。12は凹み石で、表裏とも叩きによる凹みが中央に見られる。石材は砂岩である。13～16は摺石で、全面に使用痕が見られる。石材は13・14が砂岩、15・16は安山岩である。

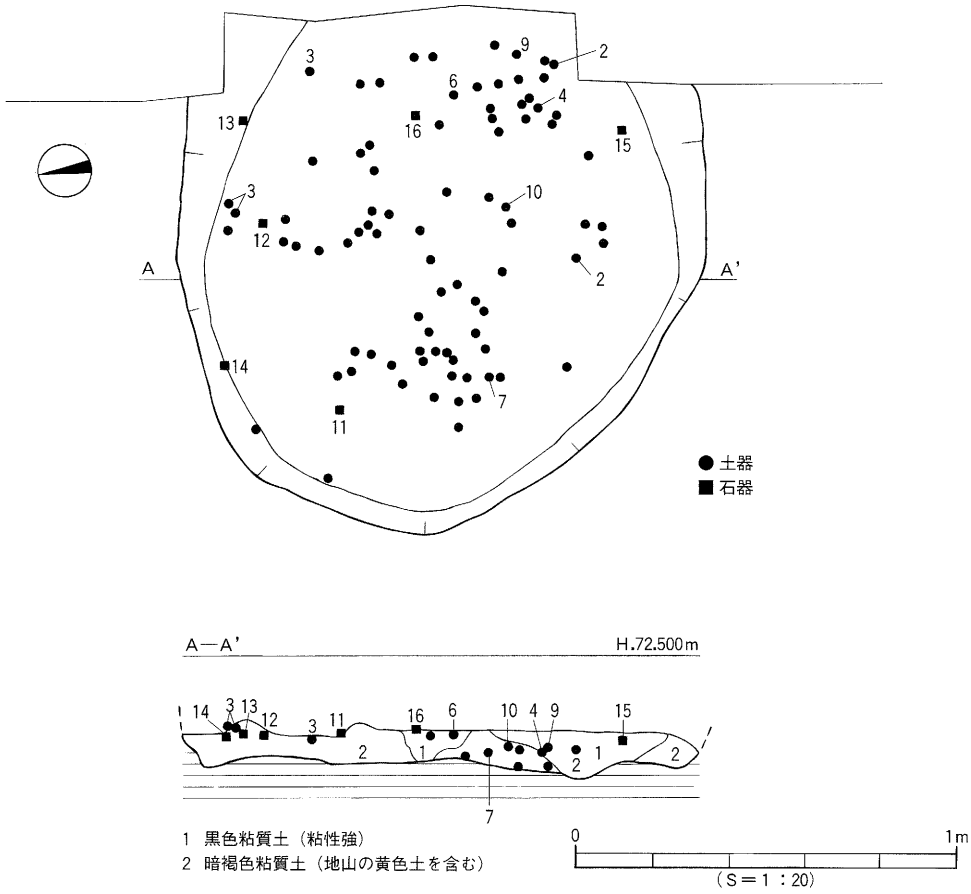
剥片は調査時と埋土洗浄作業にて検出した。微細片～大型片まで出土し、総点数115点で合計重量27.143ｇを量る。出土点数による比率は微細片46.1％、細片24.3％、小片17.4％、中型片8.7％、大型片3.5％で微細片の出土が目立つ。

２）弥生時代

弥生時代の遺構は、調査区Ａ～Ｄ６区より北側で検出された。検出遺構は、土坑14基、溝３条、性格不明遺構３基である。

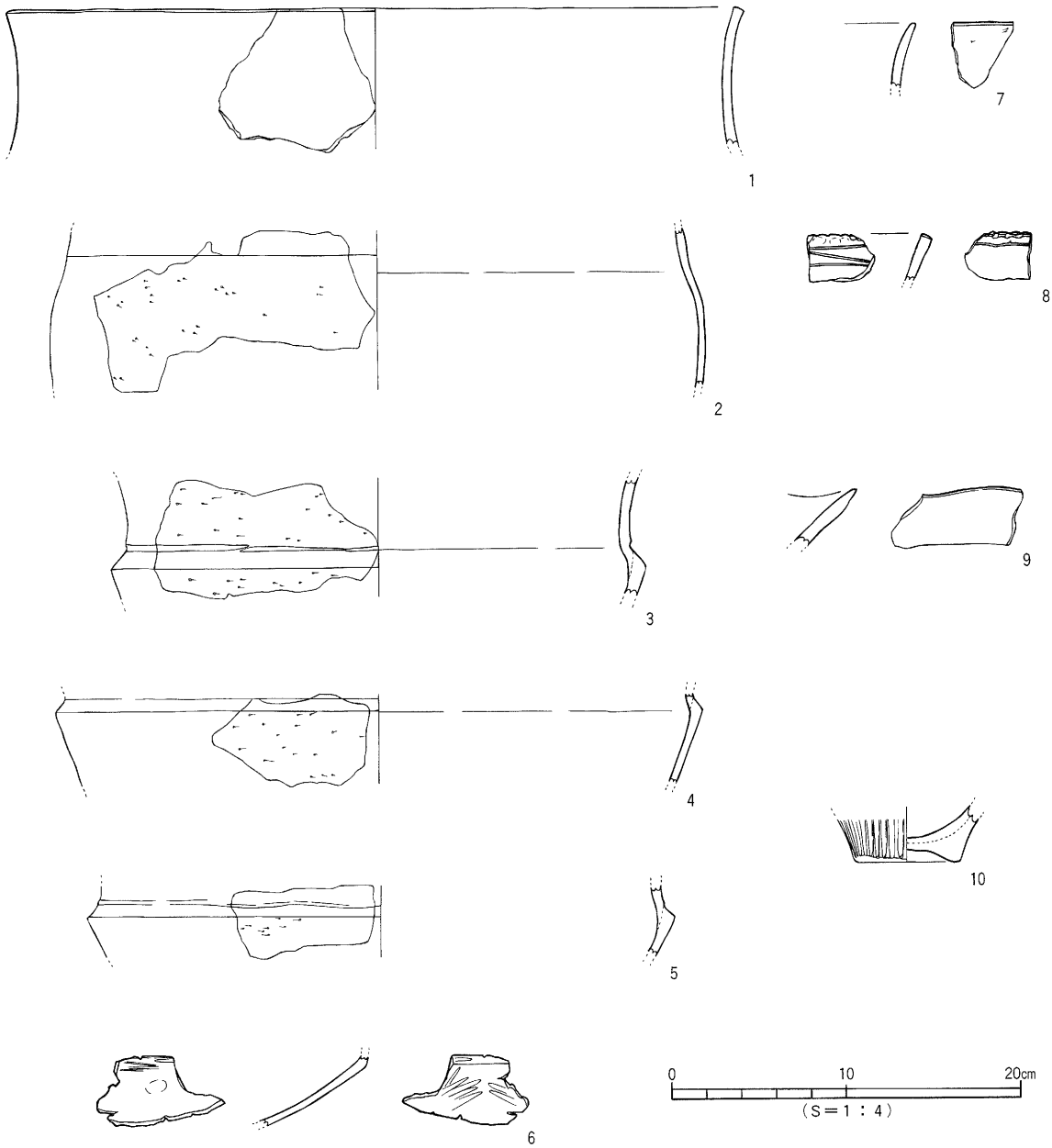
①土坑（ＳＫ）

土坑は、すべてが弥生時代前期末から中期初頭に位置づけられるもので、ここでは平面形態の違い



第10図　ＳＫ13測量図

により方形を呈するものをＡグループ、楕円形を呈するものをＢグループ、円形を呈するものをＣグループ、不整形なものをＤグループと分類を行った。以下、Ａグループより説明を行う。

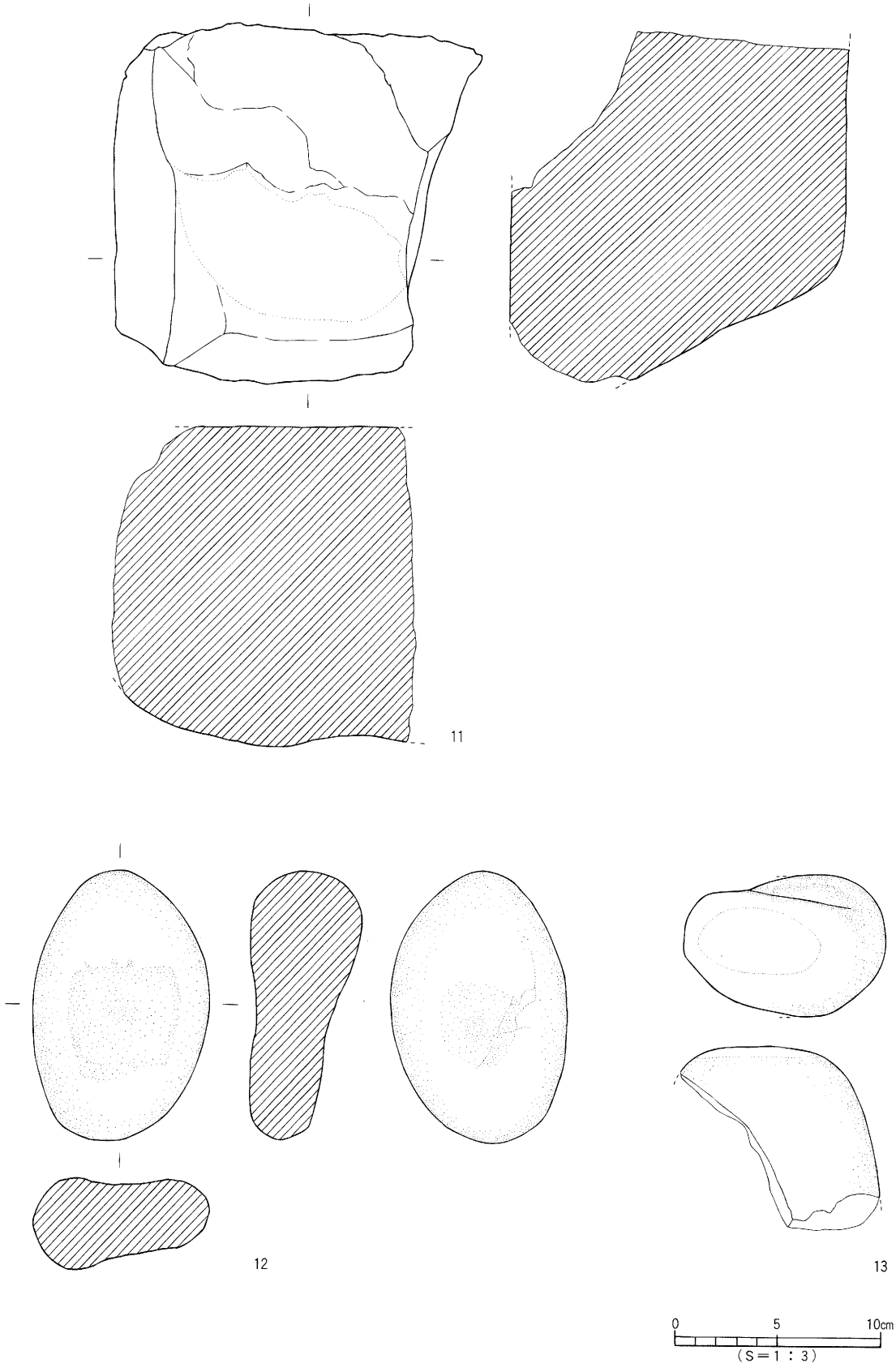


第11図　ＳＫ13出土遺物実測図（1）

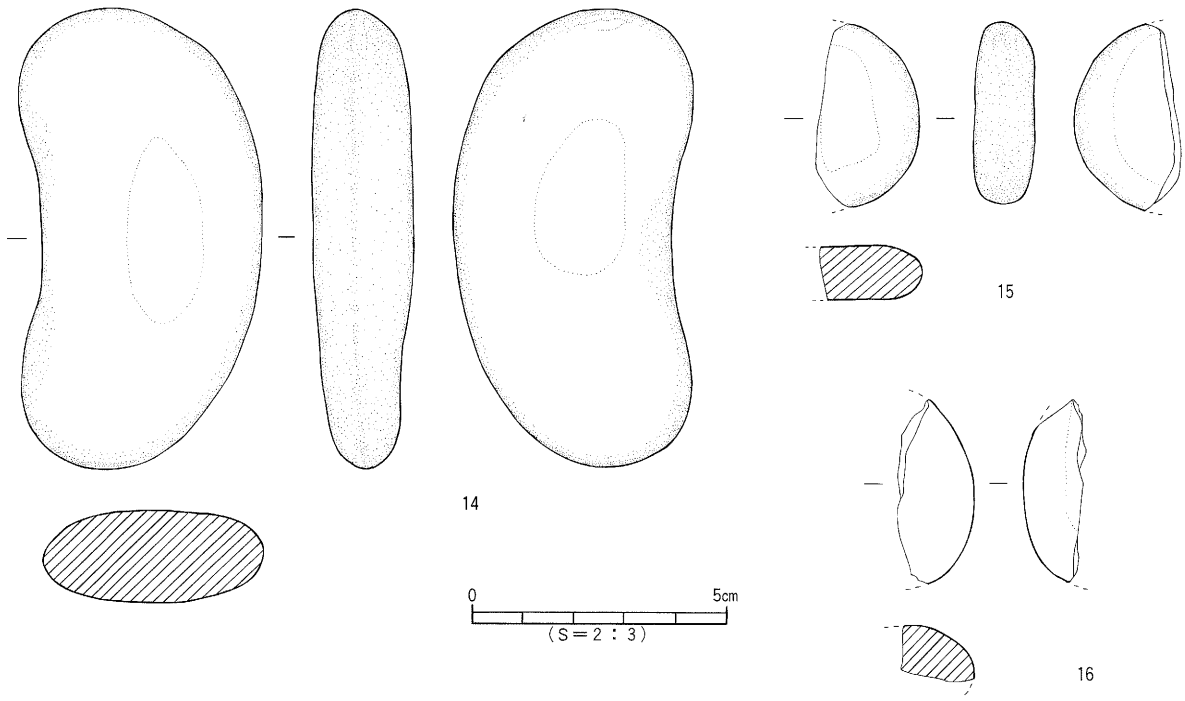
Ａグループ（ＳＫ４・５・2・14）

ＳＫ４（第14図、図版７・８）

調査地北半部南端のＣ７～Ｄ８区で検出した。いちばん近接するＳＫ14からはほぼ真西方向の5.5㎝を測る距離に位置し、土坑の長軸方位はほぼ南北方向を示す。規模は長さ2.67m、幅1.60m、深さ50㎝を測る。断面形態は土坑の西半部は逆台形、東半部は袋状を呈する。埋土は７層に分層される。１層灰褐色シルト（黄色土混・砂質気味）、２層褐色シルト（やや粘性・炭化物混）、３層褐色粘質土（礫石混）、4層黄褐色シルト（地山土混）、５層褐色粘質土、６層明褐色シルト（やや粘性）、第７層



第12図　ＳＫ13出土遺物実測図（2）



第13図　ＳＫ13出土遺物実測図（3）

黄褐色砂礫土である。遺物は少量の弥生土器、石器、サヌキトイドの剥片のほか礫石が出土した。弥生土器（19）と石製品（20）は北壁側からの出土であった。

出土遺物（第15図、図版21）

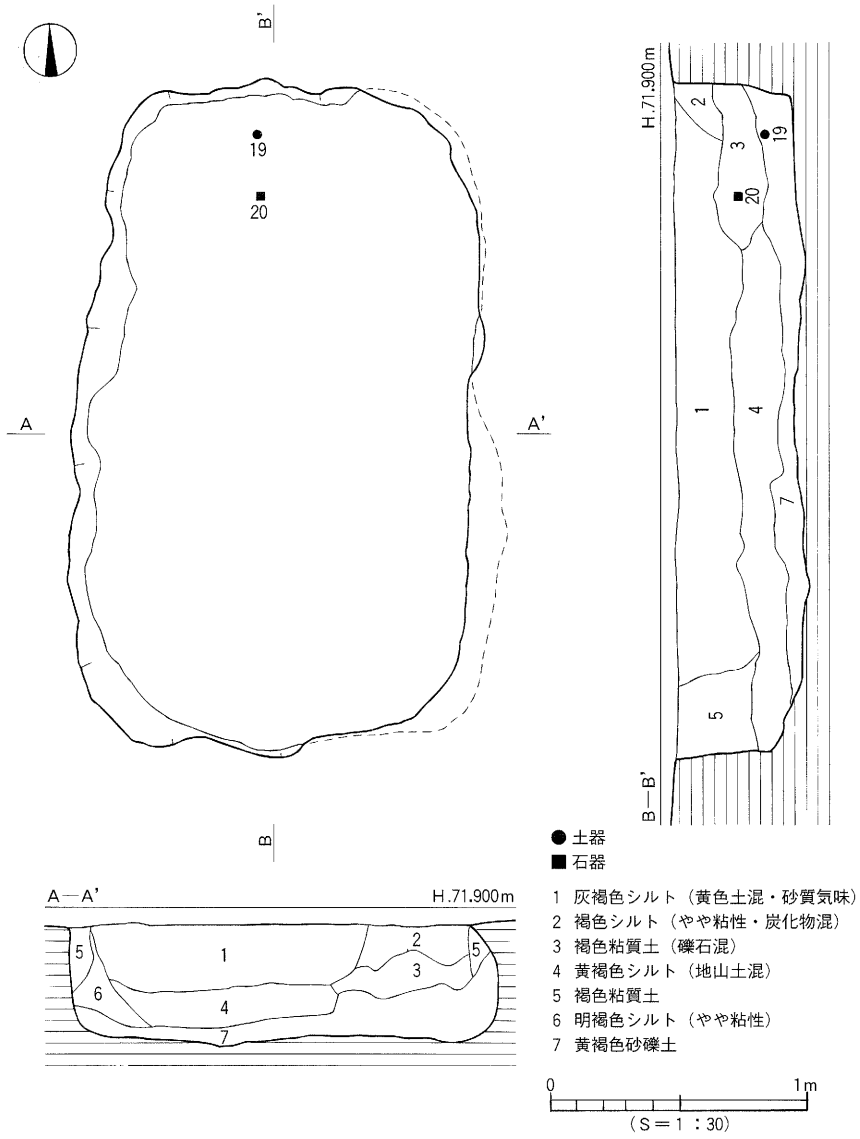
弥生土器（17～19）17・18は甕形土器。17は折曲口縁で、口縁直下に沈線が１条見られるが多重沈線になるものと思われる。18は平底の底部片。19は壺形土器の底部片。やや突出した平底で、外面は上方でハケ後ミガキ調整を施す。底部外面には籾圧痕が見られる。

石製品（20）20は台石で表裏面とも擦痕が見られる。石材は砂岩。

剥片は調査時に検出した。大型片１点で重量は10.786ｇを量る。

ＳＫ５（第16図、図版９）

調査地北半部の中央Ｃ10区に位置し、土坑の長軸方位は南北方向を示す。規模は長さ3.00ｍ、幅1.90ｍ、深さ24㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は明褐色シルト（やや粘性）の単一層である。土坑南東隅の基底面より４基の小ピットを検出した。ピットの平面形態は楕円形で、径12～32㎝、深さ８～24㎝を測る。埋土は灰褐色シルトである。ピット内からは、遺物は出土していない。土坑内からは土器、石器、石製装飾品、サヌキトイドの剥片が礫石と混在して出土した。土器は、北壁側と中央やや北寄りの部分に集中して出土した。

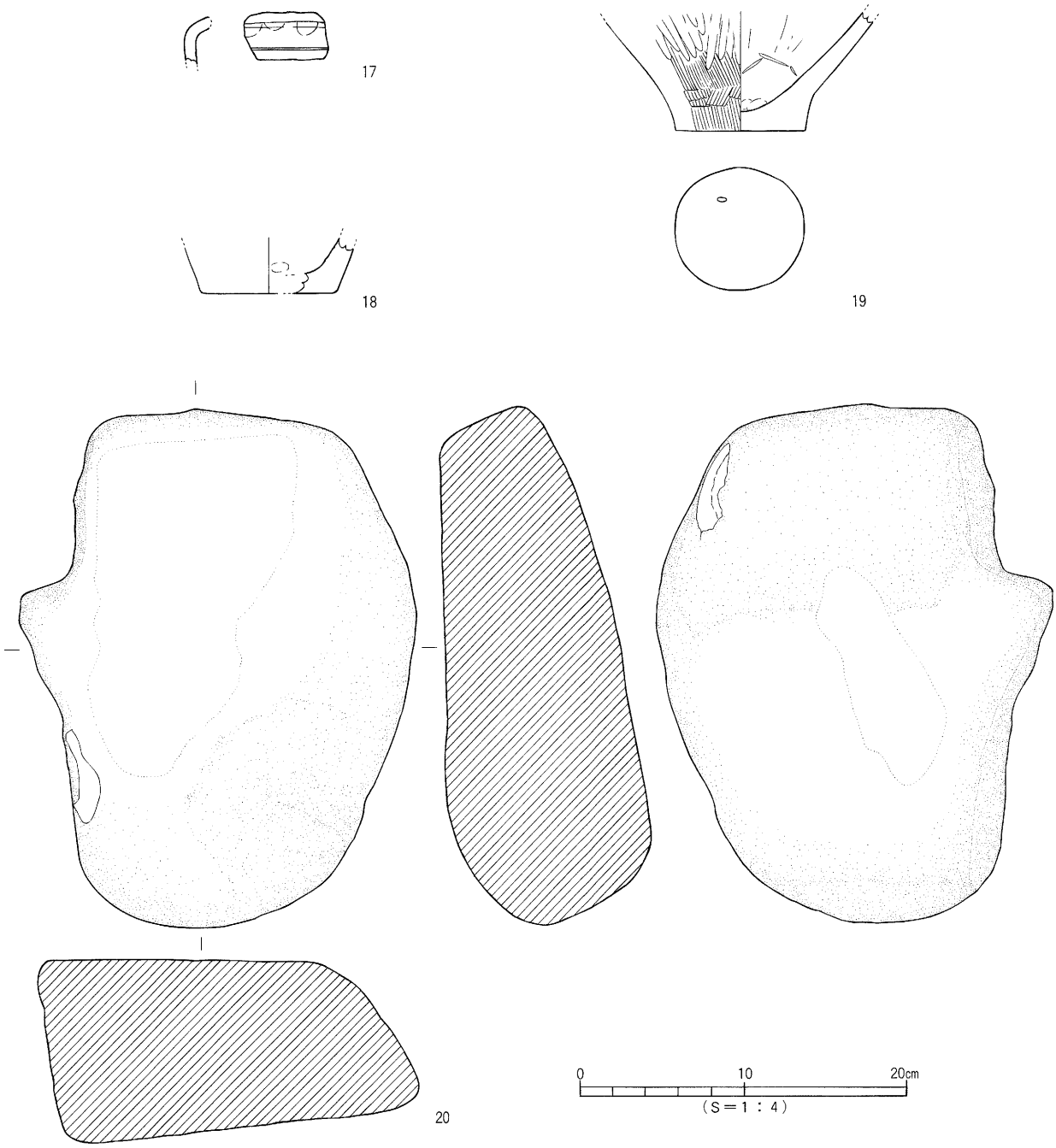


第14図　ＳＫ４測量図

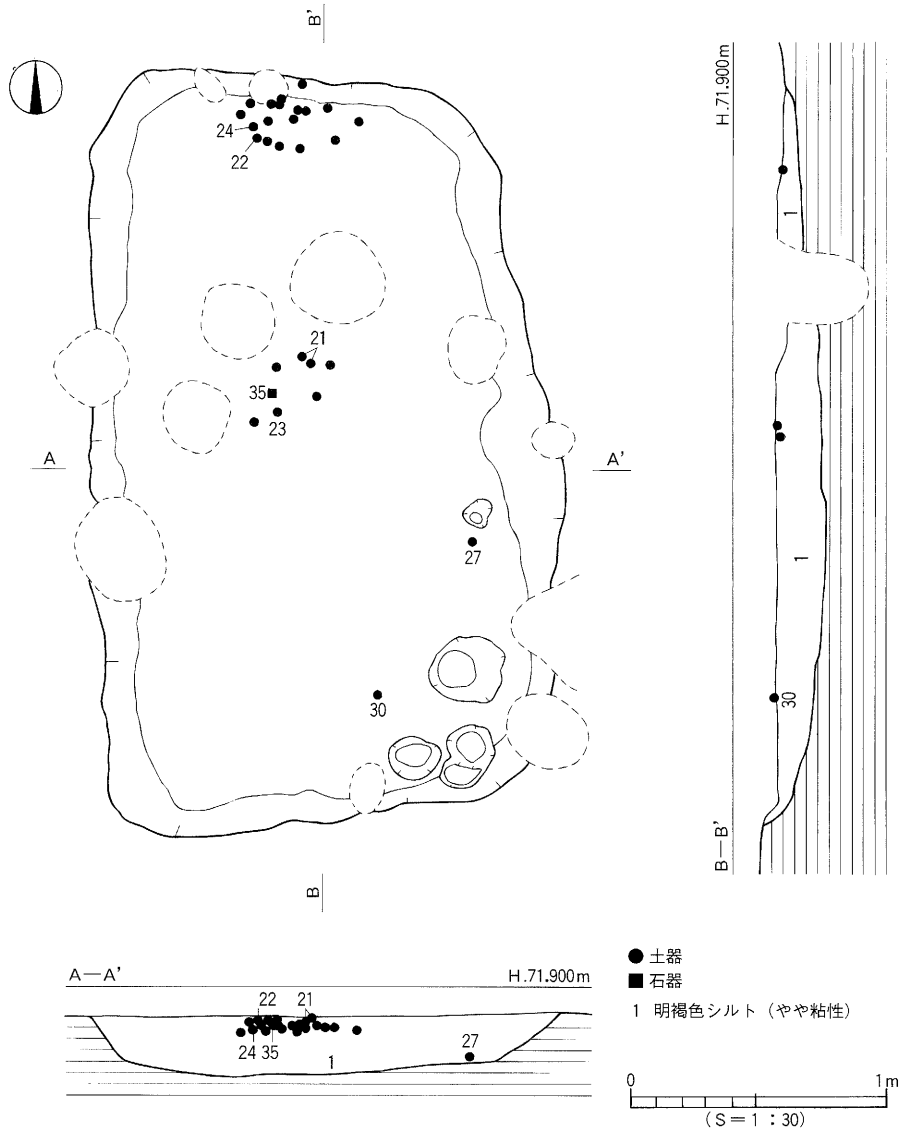
出土遺物（第17・18図、図版21）

弥生土器（21～31）21～27は甕形土器。折曲により口縁部を作りだすもので、施文に違いが見られる。口縁端部に刻目、頸部に多重沈線文と刺突列点文を施すタイプのもの（21）、口縁端部に刻目を施さないもの（22・23・24）、口縁端部にのみ刻目を施すもの（25・26）、無文のもの（27）となる。28は壺形土器で、口縁部に円孔2個が穿たれる。29～31は甕形土器の底部で、29・30は焼成後に円孔が穿たれて甑に転用されたものである。31は平底の底部片である。

石製品（32～38）32・33はサヌキトイド製の石鏃で、32は凹基式のものである。33は破片。34はサヌキトイド製の石錐で、先端を欠失している。35は砂岩製の石皿で、上面にのみ擦痕が見られる。36～38は碧玉製の管玉の破片で、外径は3.5㎜前後を測る。



第15図　ＳＫ４出土遺物実測図

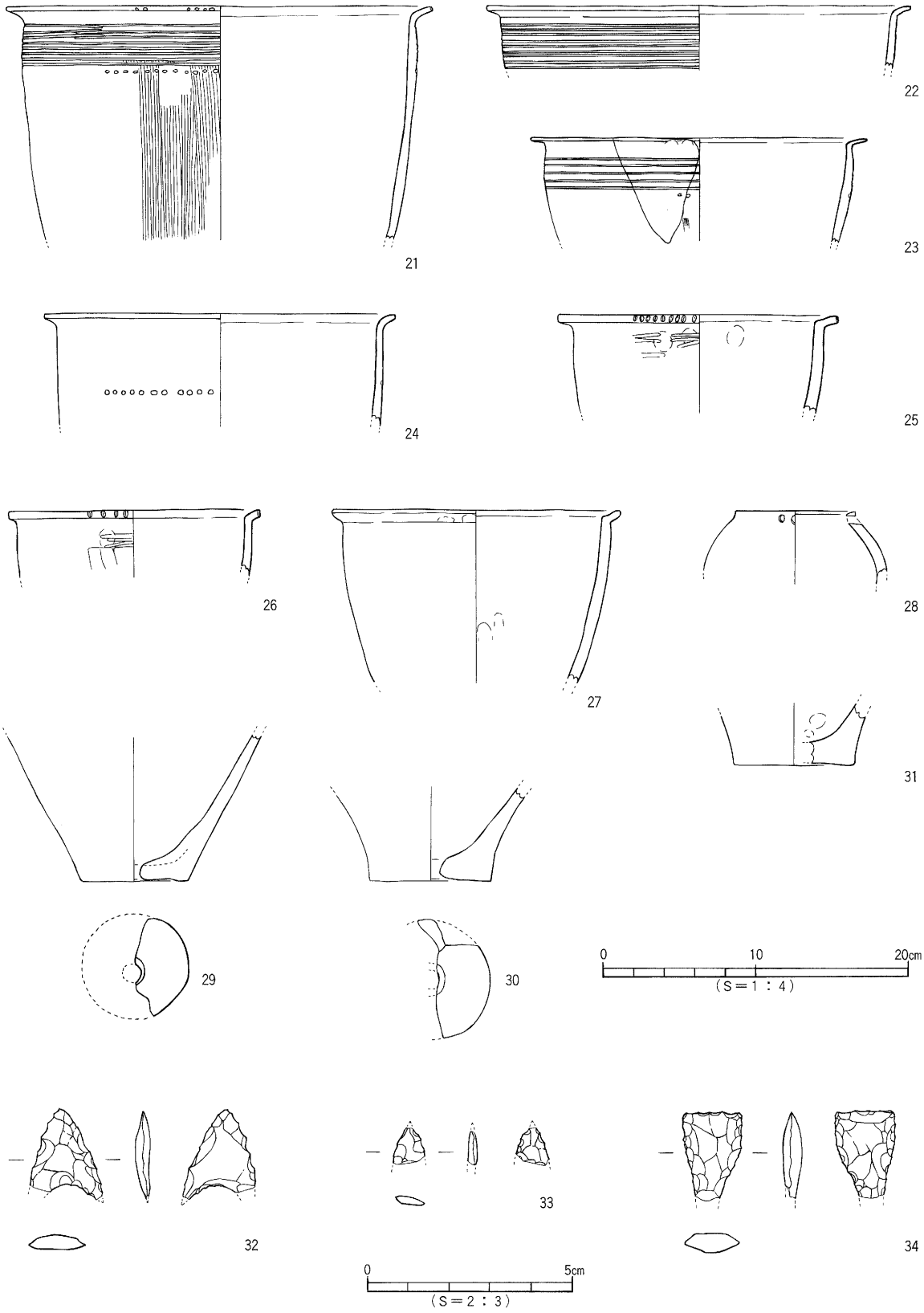


第16図　ＳＫ５測量図

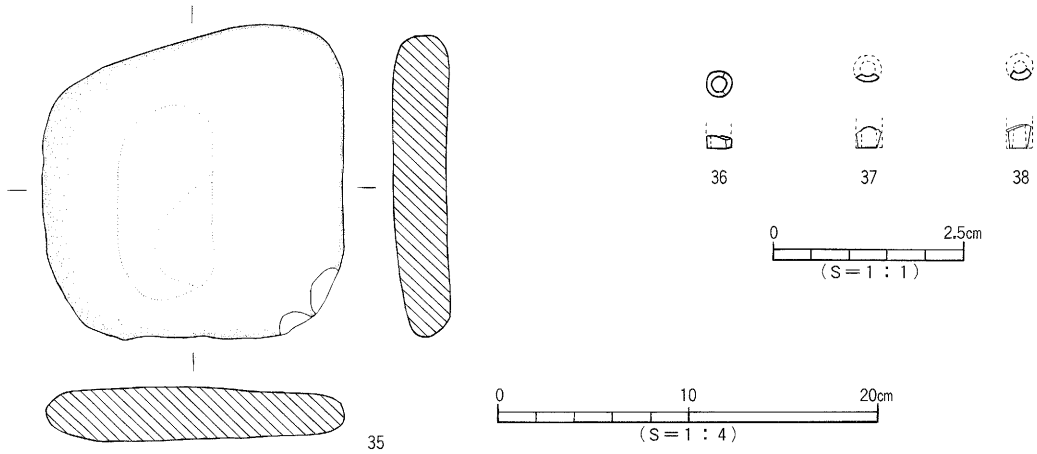
剥片は調査時と埋土洗浄作業にて検出した。微細片～大型片まで出土し、総点数9,832点で合計重量173.586ｇを量る。出土点数による比率は微細片44.10％、細片36.80％、小片17.06％、中型片2.00％、大型片0.04％で微細片の出土が目立つ。

ＳＫ２（第19図、図版10）

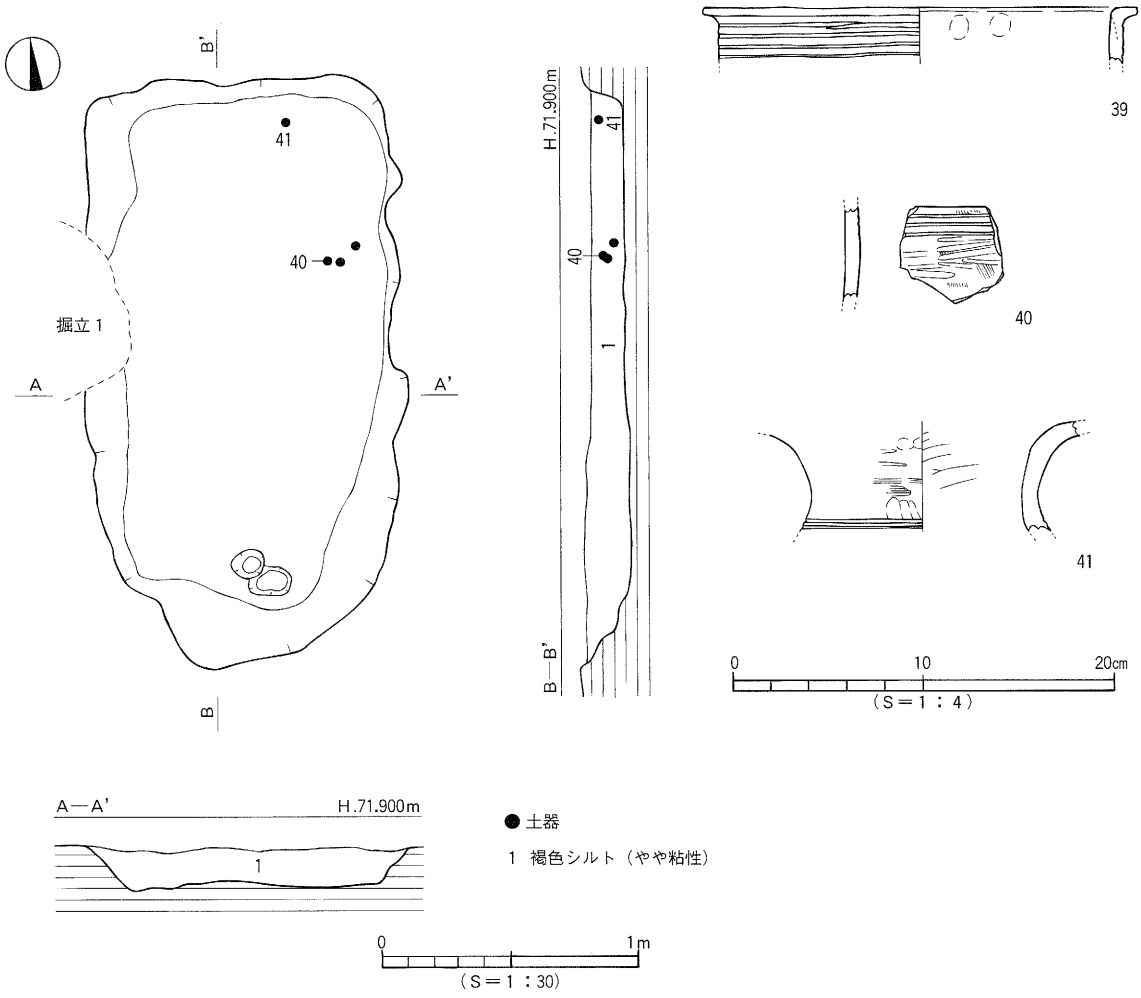
調査地北半部のＢ12・13区で検出した。古墳時代の掘立柱建物址（掘立１）柱穴に切られる。今回の調査ではＡグループのものとしては一番北に位置する。近接するＣグループに属するＳＫ１からはほぼ西方向に5mを測る距離に位置する。土坑の南側は、削平を受けているため不整形となっている。



第17図　ＳＫ５出土遺物実測図（1）



第18図　ＳＫ５出土遺物実測図（2）



第19図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図

土坑の長軸方位はほぼ南北方向を示す。規模は長さ2.30m、幅は北壁に近い部分で1.22m、深さ18cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は褐色シルト（やや粘性）の単一層である。土坑の南壁中央寄りの基底面より小ピット２基を検出した。ピットの平面形態は楕円形で、径14～17cm、深さ10～16cmを測る。埋土は褐色シルト（やや粘性）である。ピット内からは、遺物は出土していない。土坑内からは弥生土器、サヌキトイドの剥片が礫石と混在して出土した。

出土遺物

弥生土器（39～41）39・40は甕形土器で、頸部に多重沈線文が施されるが、39は折曲口縁。40は多重沈線文下の刺突文は施されない。41は壺の頸部片で、２条の沈線文が巡る。

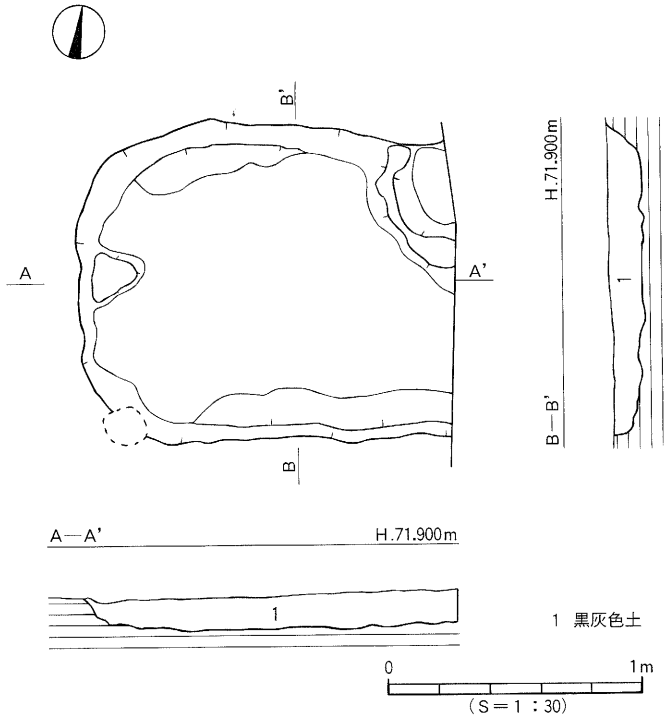
剥片は調査時に検出した。小片1点、中型片2点で合計重量1.435ｇを量る。

ＳＫ14（第20図、図版10）

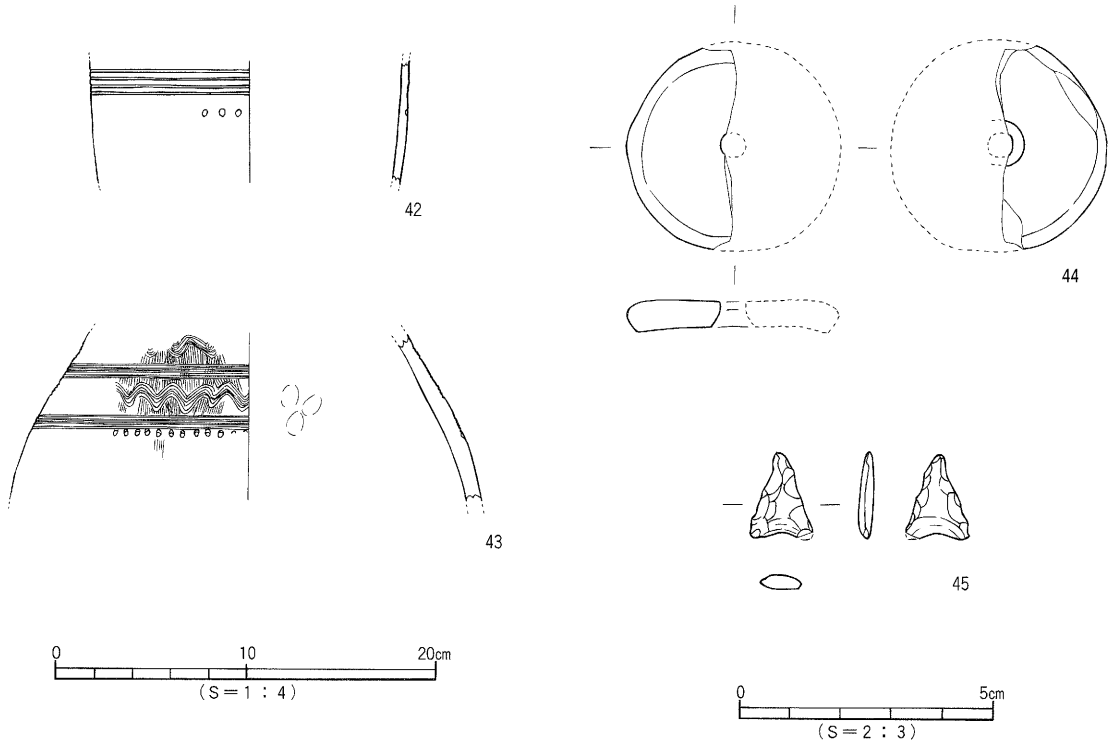
調査地南半部のＢ７区、ＳＫ４の西側5.5mの位置で検出した。土坑の東部は農道の保全のため未調査となった。Ａグループの土坑のうち、ＳＫ14のみ長軸方位がほぼ東西方向を示す。規模は検出長1.50m、幅1.30m、深さ12cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は黒灰色土の単一層である。土坑の北東隅は凹んでいる。土坑内からは少量の弥生土器、石器、サヌキトイドの剥片が出土した。

出土遺物（第21図、図版22）

弥生土器（42・43）42は甕形土器の胴部片で、多重沈線文（４条以上）下に刺突文が施される。43は壺の胴部片で、波状文と多重沈線文が巡り、最下段には刺突列点文が施される。43と同じ施文のものが調査では他に１点、北半部ＳＰ63（遺物No130）からも出土しているが、同一個体ではない。



第20図　ＳＫ14測量図



第21図　ＳＫ14出土遺物実測図

土製品（44）　44は紡錘車で、土器片から製作されたものである。

石製品（45）　45は石鏃で重量は0.50ｇを計る。石材はサヌキトイドである。

剥片は調査時と埋土洗浄作業にて検出した。微細片～中型片までの出土で、総点数440点で合計重量16.169ｇを量る。出土点数による比率は微細片48.20％、細片31.10％、小片17.10％、中型片3.60％で微細片の出土が目立つ。

Ｂグループ（ＳＫ12・３・６・７・８・９）

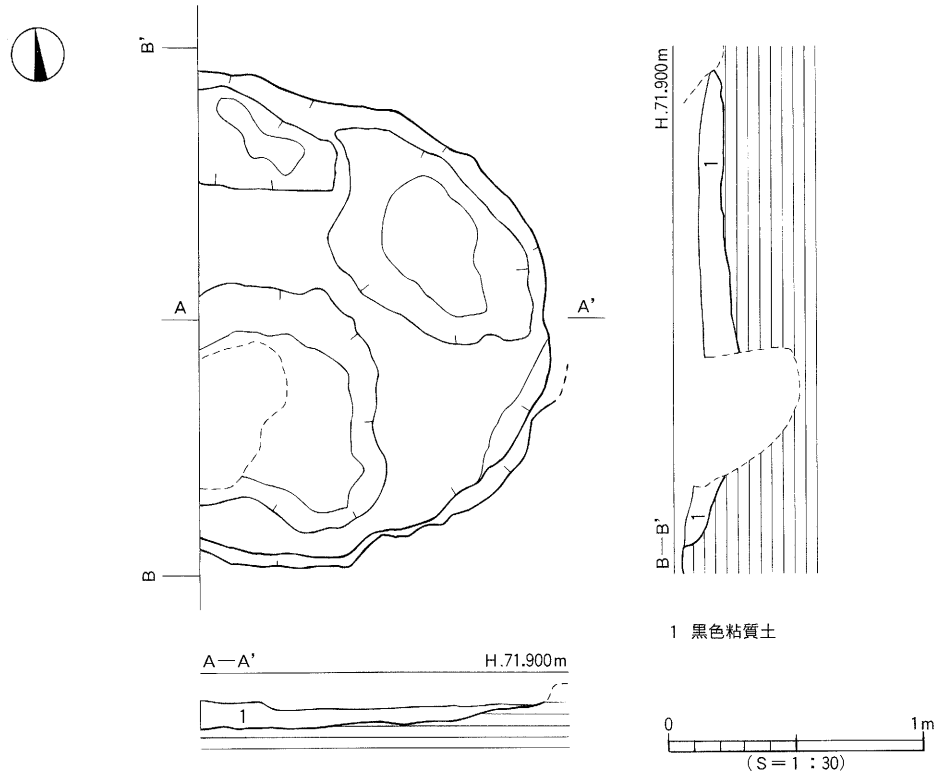
ＳＫ12（第22図、図版11）

調査地北端部のＢ14・15区で検出した。上面を古墳時代のＳＢ１に切られる。土坑の西部は農道の保全のため未調査となったが、平面形態は楕円形を呈するものと思われ、Ｂグループの中では規模が最大で、東西方向を示す。検出東西長1.34ｍ、南北長1.90ｍ、深さ14㎝を測り、断面形態はレンズ状を呈する。埋土は黒色粘質土の単一層である。土坑の基底面には多少の凹凸がある。土坑内からは少量の弥生土器、サヌキトイドの剥片が出土した。弥生土器は小片のため図化し得なかった。

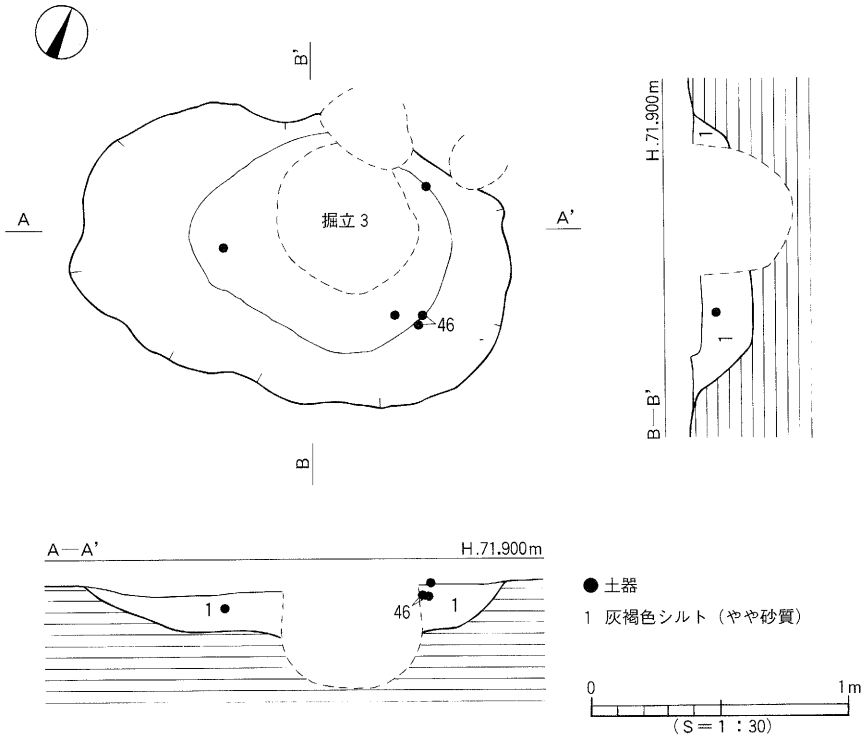
剥片は調査時に検出した。中型片１点、大型片１点で合計重量4.934ｇを量る。

ＳＫ３（第23図、図版11）

調査地北半部のＣ12区で検出した。古墳時代の掘立柱建物址（掘立３）の柱穴に切られる。土坑の長軸方位は東西方向であるが、やや東部側で北へ偏る。規模は長さ1.75ｍ、幅1.15ｍ、深さ24㎝を測



第22図　ＳＫ12測量図



第23図　ＳＫ３測量図

る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色シルト（やや砂質）の単一層である。土坑内からは少量の弥生土器とサヌキトイドの剥片が礫石と混在して出土した。

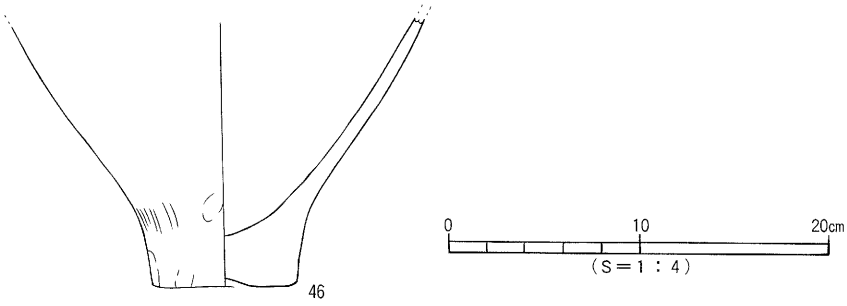
出土遺物（第24図、図版22）

弥生土器（46）46は甕形土器の底部片で、やや突出した底部は中央のみ上げ底である。

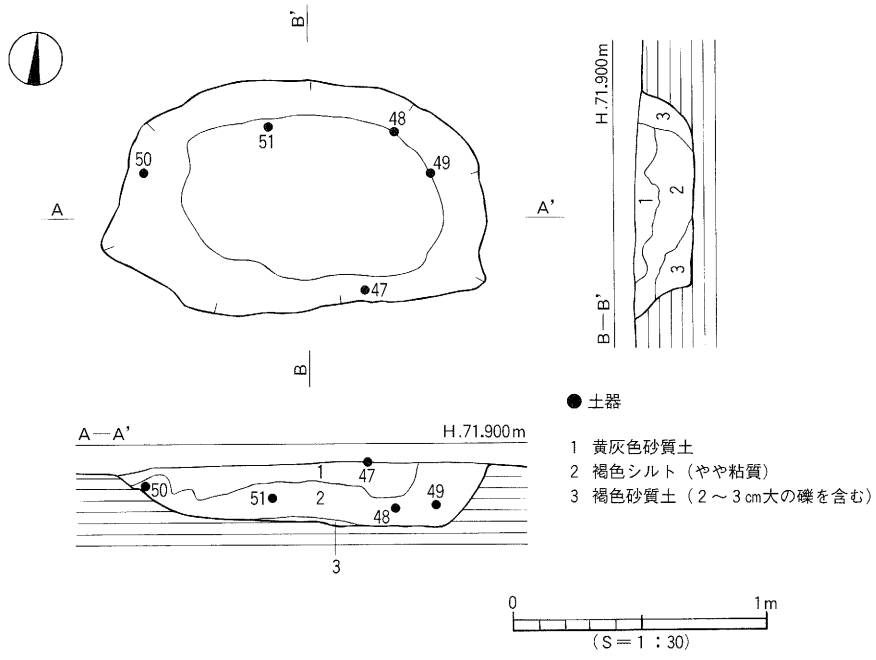
剥片は調査時に検出した。細片１点、中型片２点、大型片１点で合計重量3.225ｇを量る。

ＳＫ６（第25図、図版11）

調査地北半部のＣ11区で検出した。土坑の長軸方位はほぼ東西方向を示す。規模は長さ1.50m、幅0.90m、深さ23cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は1層黄灰色砂質土、２層褐色シルト（やや粘質）、３層褐色砂質土（2～3cm大の礫を含む）である。土坑内からは土器と礫石が出土した。



第24図　ＳＫ３出土遺物実測図



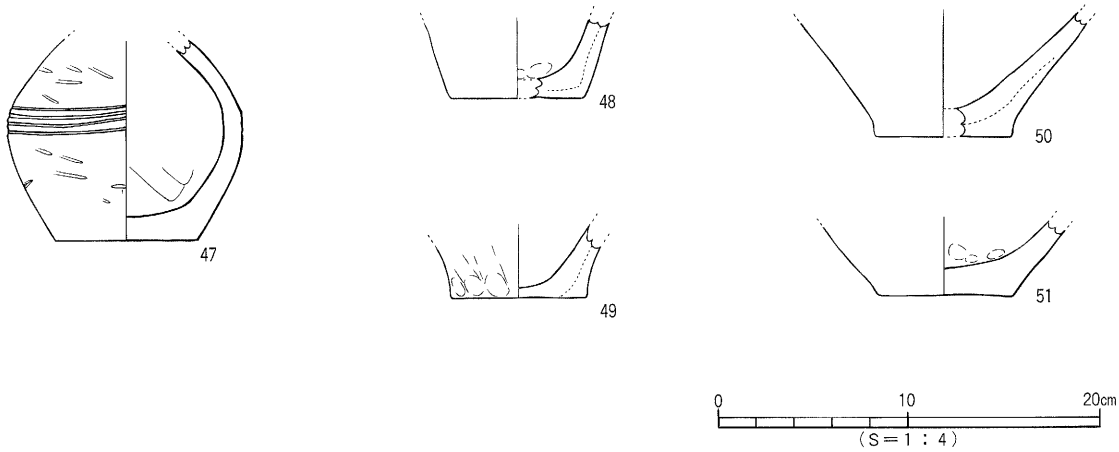
第25図　ＳＫ６測量図

出土遺物（第26図、図版22）

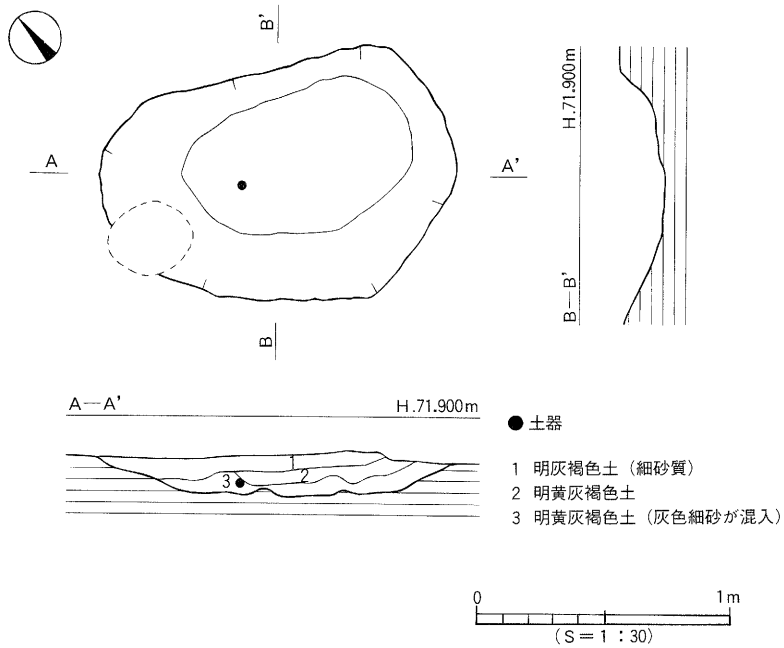
弥生土器（47～51）47は小型の壺で器壁は厚く、底部は胴部に比べ大きく作られている。胴部中央に４条の沈線文が施される。48・49は甕形土器の底部片で、49は若干突出する。50・51は壺形土器の底部片で50は突出する。

ＳＫ７（第27図、図版12）

調査地北半部のＣ11・12区で検出した。土坑の長軸方位は東西で、東西方向よりやや南へ偏る。規模は長さ1.40m、幅0.93m、深さ16cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は１層明灰褐色土（細砂質）、２層明黄灰褐色土、３層明黄灰褐色土（灰色細砂が混入）である。土坑内からは少量の土器片と礫石が２・３層中より出土したが、図化し得るものはなかった。



第26図　ＳＫ６出土遺物実測図



第27図　ＳＫ７測量図

ＳＫ8（第28図、図版12）

調査地北半部のＣ10区で検出した。遺構の東部は未検出である。土坑の長軸方位は東西方向を示す。規模は検出長1.14m、幅0.70m、深さ27cmを測る。基底面は北東側に最深部を測る二段掘り構造である。埋土は１層灰茶褐色シルト、２層明茶褐色シルト（炭化物混・やや粘性）である。土坑内からは弥生土器、サヌキトイドの剥片、礫石が出土した。礫石は大きさが25cm大を測るものが１点あり、土坑北西隅部の壁面に添う状態で出土したが、製品ではなかった。

出土遺物（第29図、図版22）

弥生土器（52・53）52・53は甕形土器で、52は逆Ｌ字状の口縁部をもつものと思われる。口縁直下の施文はない。53は平底の底部片。

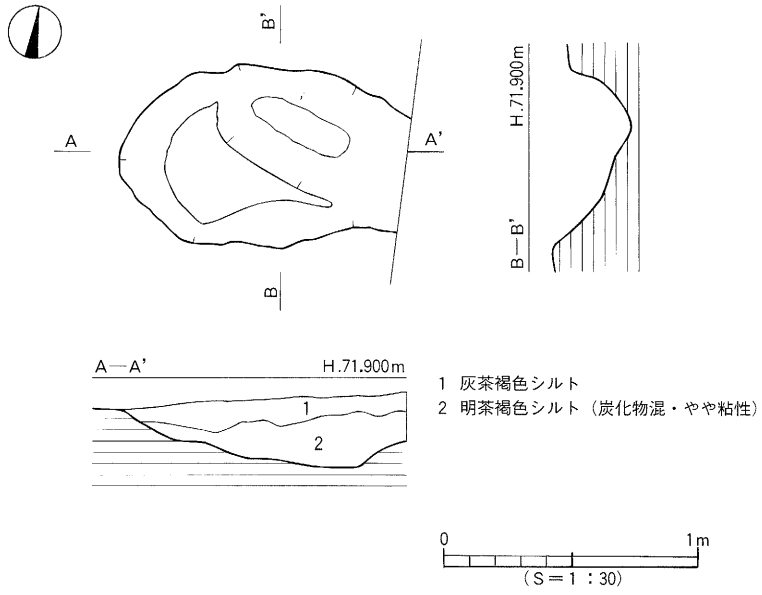
土製品（54）　54は紡錘車で、土器片から製作されたものである。

石製品（55～57）　55～57はサヌキトイド製で、55は石鏃の先端部片、56・57はわずかに細部加工が見られるもので加工途中のものと思われる。

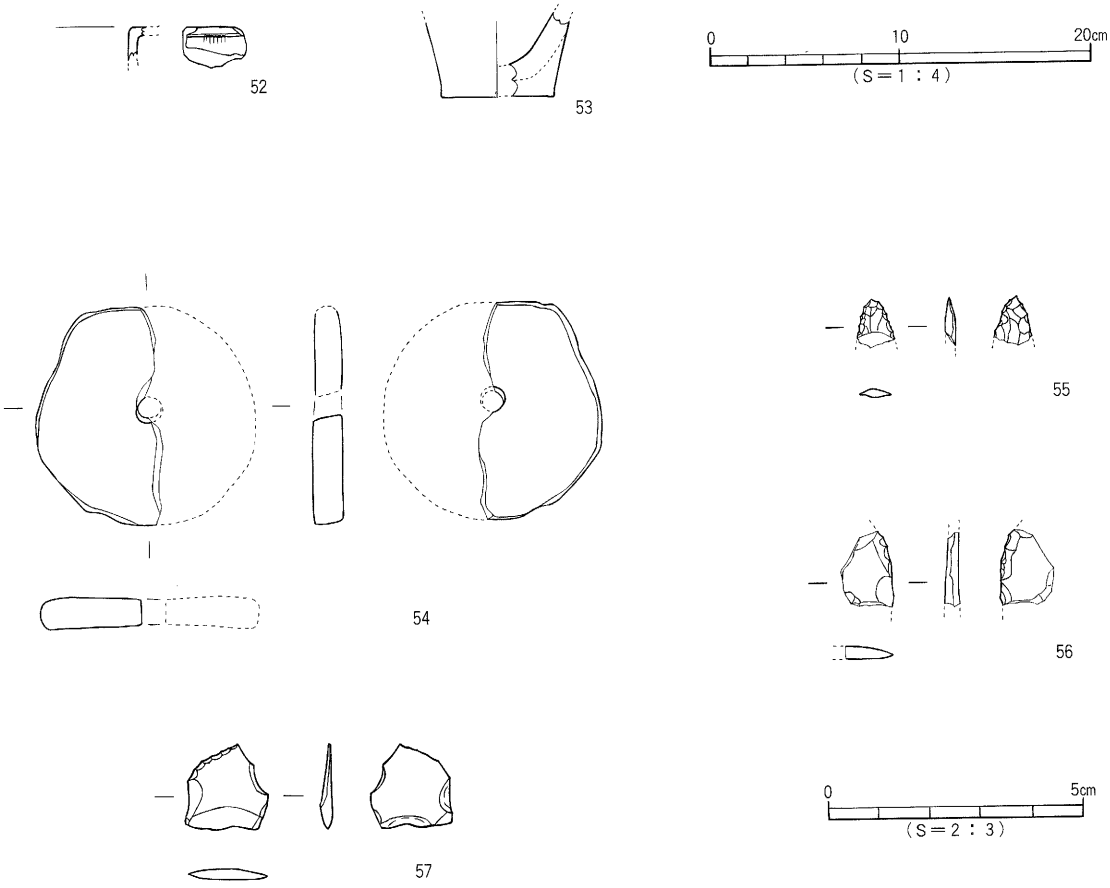
剥片は調査時と埋土洗浄作業にて検出した。微細片～大型片まで出土し、総点数1,781点で合計重量29.359ｇを量る。出土点数による比率は微細片46.6％、細片35.1％、小片16.4％、中型片1.8％、大型片0.1％で微細片の出土が目立つ。

ＳＫ９（第30図）

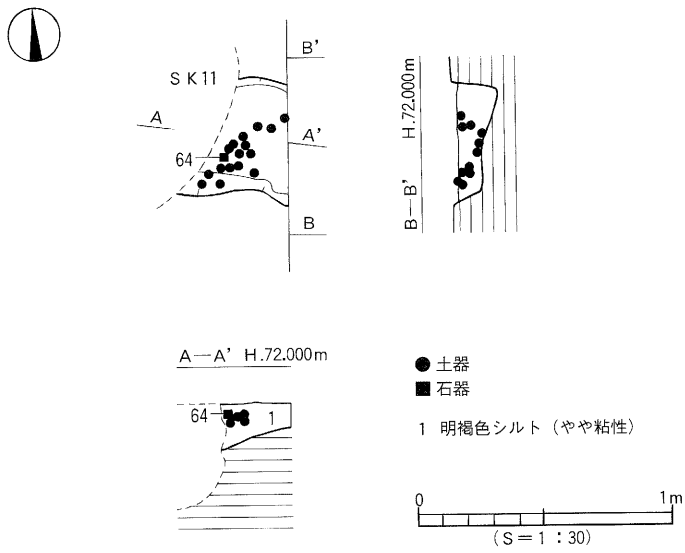
調査地北半分のＣ11区で検出した。西部はＳＫ11に切られ、東部は未調査となった。断面形態と方向から平面形態をＢグループに属するものと判断した。検出東西長0.45m、南北長0.45m、深さは最深部で20cmを測る。埋土は明褐色シルト（やや粘性）の単一層である。土坑内より土器、石器が出土した。規模がＢグループ中では最小となるが、土器の量は比較的多く出土した。



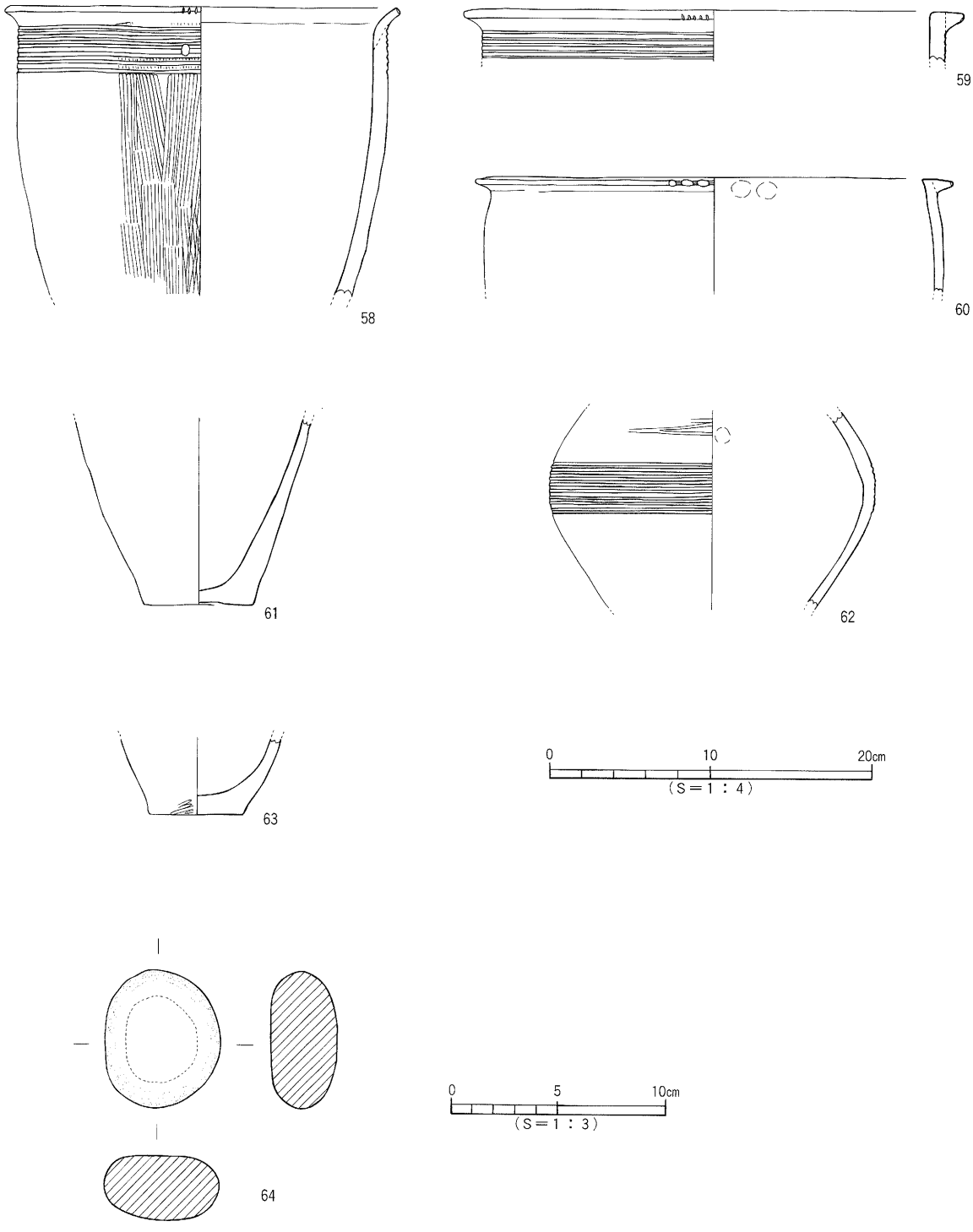
第28図　ＳＫ８測量図



第29図　ＳＫ８出土遺物実測図



第30図　ＳＫ９測量図

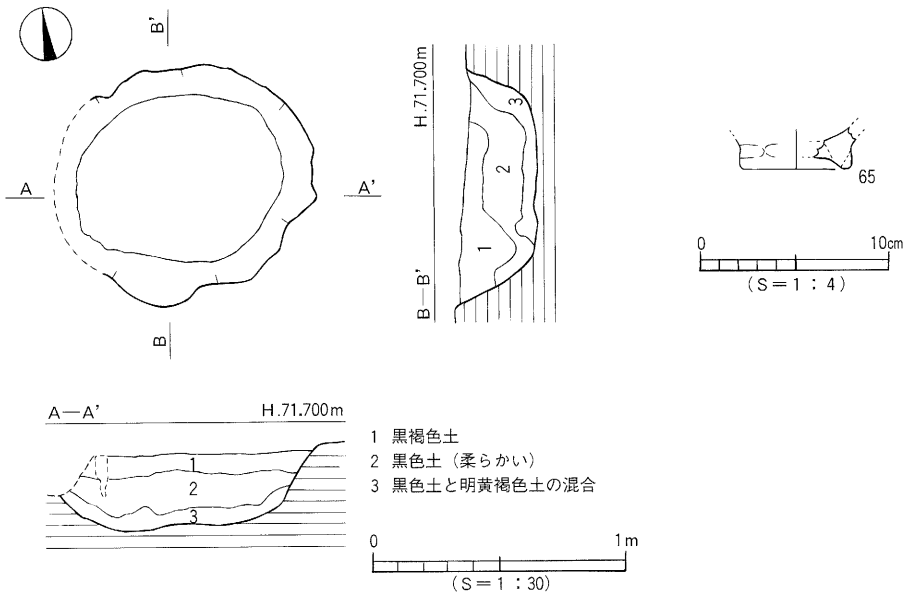


第31図　ＳＫ９出土遺物実測図

出土遺物（第31図、図版22）

弥生土器（58～63）58～60は甕形土器の口縁部片で、58は折曲口縁で口縁端部に刻目、頸部に多重沈線文を施す。外面はハケ調整が施される。59・60は貼付口縁で口縁端部は施文される。59は頸部に多重沈線文が施される。60の頸部は無文である。61・63は甕形土器の底部片。62は壺形土器の胴部片で、胴部中央に多重沈線文が巡る。

石製品（64） 64は砂岩製の摺石である。



第32図　ＳＫ15測量図・出土遺物実測図

Ｃグループ（ＳＫ15・11）

ＳＫ15（第32図）

調査地南半部のＡ６区で検出した。弥生時代の土坑群では南端に位置する。西部の上場は先行トレンチにより欠除する。規模は径0.94ｍ、深さ30㎝を測る。埋土は１層黒褐色土、２層黒色土（柔らかい）、３層黒色土と明黄褐色土の混合である。土坑内からは土器片１点とサヌキトイドの剥片１点が出土した。埋土と遺物からは縄文時代の可能性も考えられるが、出土遺物が小片のため明確には判断できず、弥生時代のＣグループに含めた。

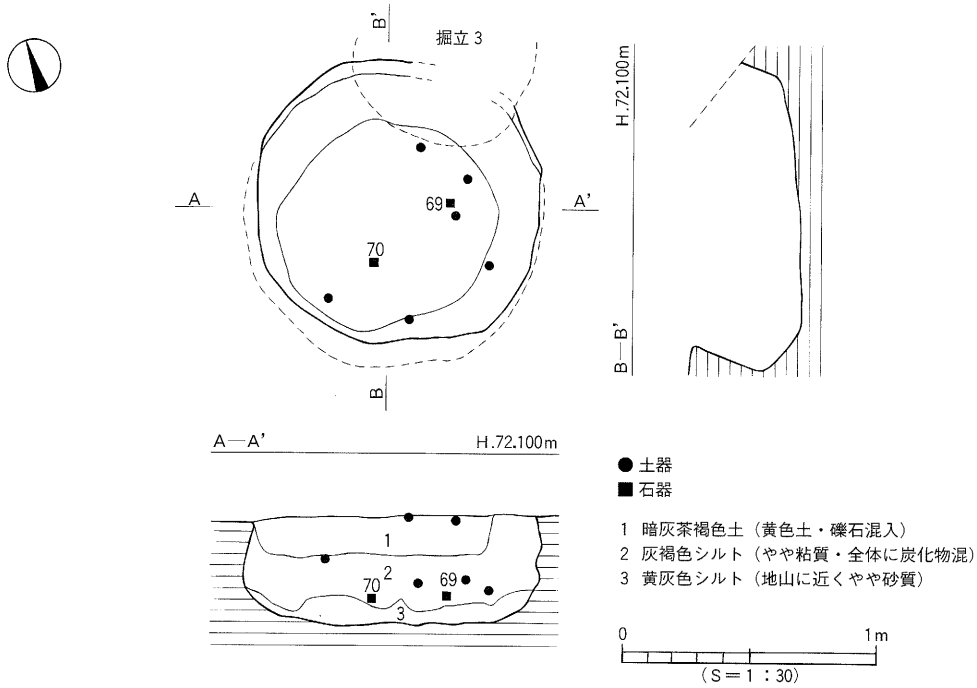
出土遺物

弥生土器（65）65は底部片で、突出する底部は上げ底で輪高台状になる。縄文土器の底部片とも考えられる。

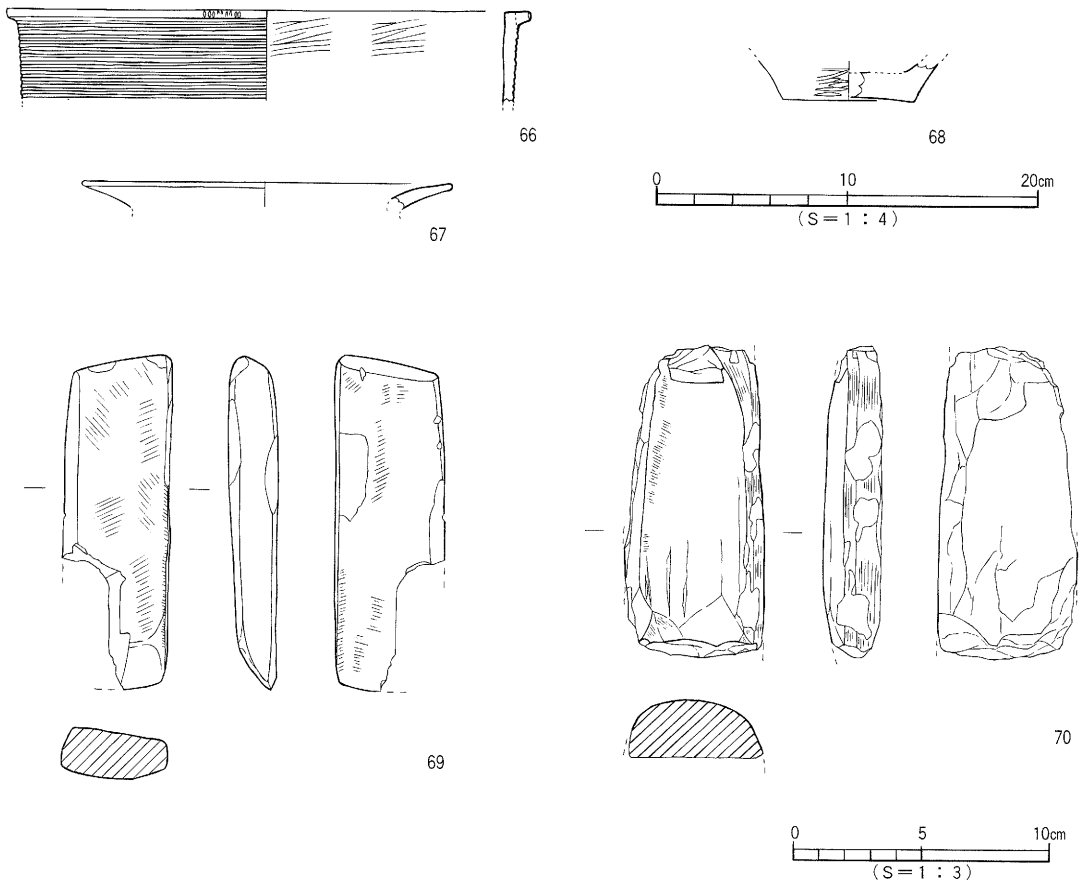
剥片は調査中に検出した。大型片１点で重量3.246ｇを量る。

ＳＫ11（第33図、図版12・13）

調査地北半部のＣ11・12区で検出した。古墳時代の掘立柱建物址（掘立３）に切られ、ＳＫ９を切る。規模は上場径1.10～1.18ｍ、壁面がオーバーハング状に掘られている部分では1.18～1.24ｍ、深さ



第33図　ＳＫ11測量図



第34図　ＳＫ11出土遺物実測図

44cmを測る。断面形態は袋状を呈する。埋土は１層暗灰茶褐色土（黄色土・礫石混入）、２層灰褐色シルト（やや粘質・全体に炭化物混）３層黄灰色シルト（地山に近くやや砂質）である。土坑内より弥生土器、石器、サヌキトイドの剥片１点が礫石と混在して出土した。一部を除いては袋状に掘られていることから、ＳＫ11は貯蔵穴と考えられる。

出土遺物（第34図、図版23）

弥生土器（66～68）66は甕形土器の口縁部片で、口縁端部には刻目、頸部には多重沈線文が施される。67は壺形土器の口縁部片と思われるもので、口縁端部を突がり気味に丸くおさめる。蓋形土器の端部片とも考えられる。68は壺形土器の底部でやや上げ底である。

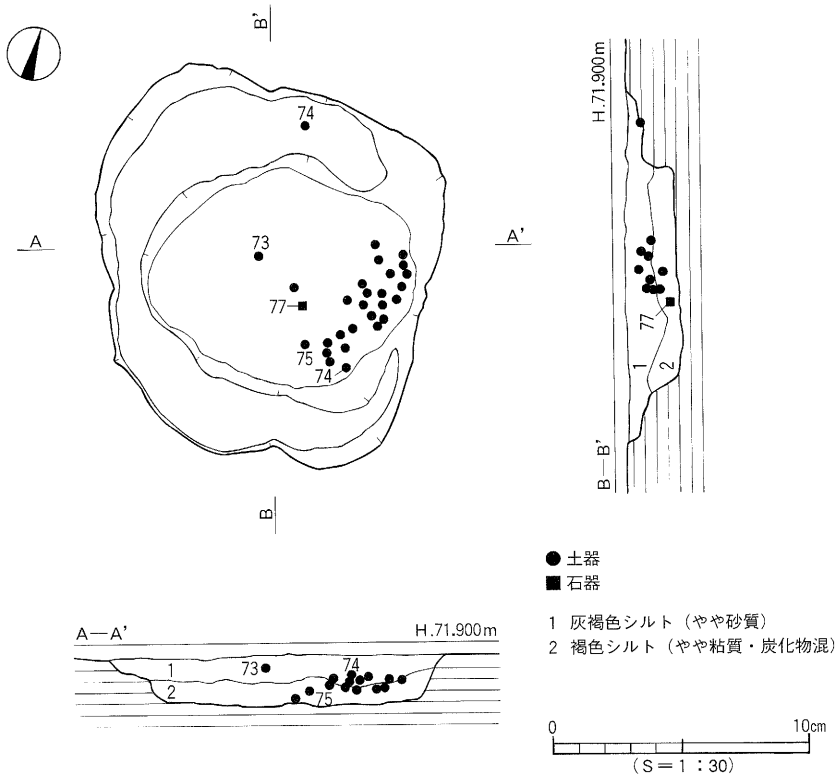
石製品（69・70） 69・70は緑色片岩製の石斧片で、69は片刃。70は蛤刃のタイプと思われる。

剥片は調査時に検出した。大型片１点で重量10.791ｇを量る。

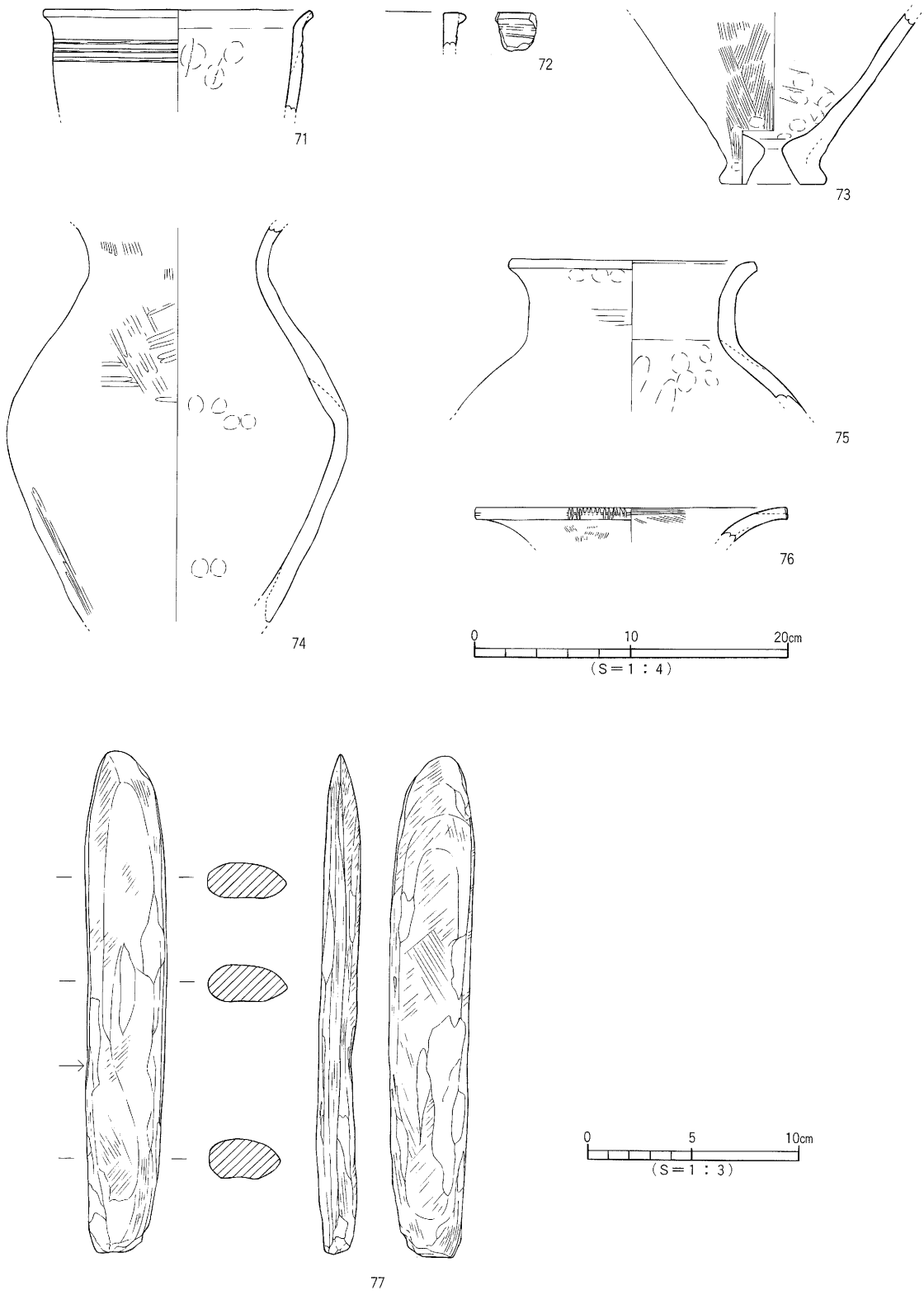
Ｄグループ（ＳＫ1・ＳＫ10）

ＳＫ1（第35図、図版13）

調査地北半部のＣ13区で検出した。西側のＳＫ２からは35m、南側のＳＫ３からは2.4mを測る距離に位置する。規模は南北長1.44m、東西最大長1.40m、深さ21cmを測る。長軸方位はほぼ南北方向を示す。土坑の掘り方は、土器が集中して出土した東側部分以外は２段の掘り方となりテラスをもつ。埋土は１層灰褐色シルト（やや砂質）、２層褐色シルト（やや粘質・炭化物混）である。遺物は土器・石器・サヌキトイドの剥片と小量の礫石が出土した。土器は東側に密集しており、剣形石製品は土坑中央付近の基底面で、鋒を南に向けた状態で出土した。



第35図　ＳＫ１測量図



第36図　ＳＫ１出土遺物実測図

出土遺物（第36図、図版23）

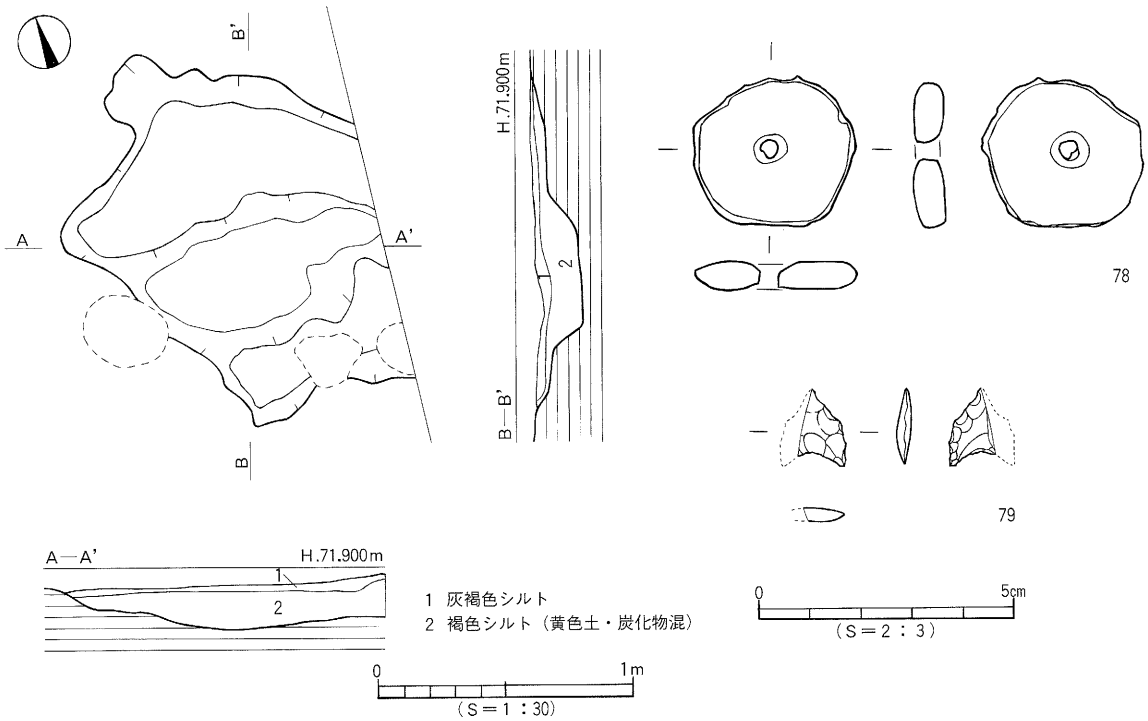
弥生土器（71～76）71～73は甕形土器で、71は折曲口縁で頸部に３条の沈線文が、72は貼付口縁で、頸部には多重沈線文が施される。71・72とも口縁端部の刻目は施されない。73は底部片で甑に転用されており、焼成後穿孔されている。外面はハケ調整が残る。74～76は壺形土器で、74・75は短い口頸部をもつもので74の頸部、75の口縁端部・頸部に施文は施されない。76は口縁部片で口縁端部には１条の沈線文を巡らせた後、狭い間隔で刻目が施される。

石製品（77）　77は緑色片岩製の剣形石製品と考えている。全体に厚みをもつ作りで、上端は丁寧に研磨され鋒としている。全長の下端より約３分の１（第36図中の矢印部分）のところに敲打で若干の凹みがつけられてあり、身と柄の境と考えられる。下端は敲打で成形後若干の研磨をしている。全体に研磨は施されているが、所々に自然面が残るため素材の細長い形状を生かし製作されたものと考えられる。

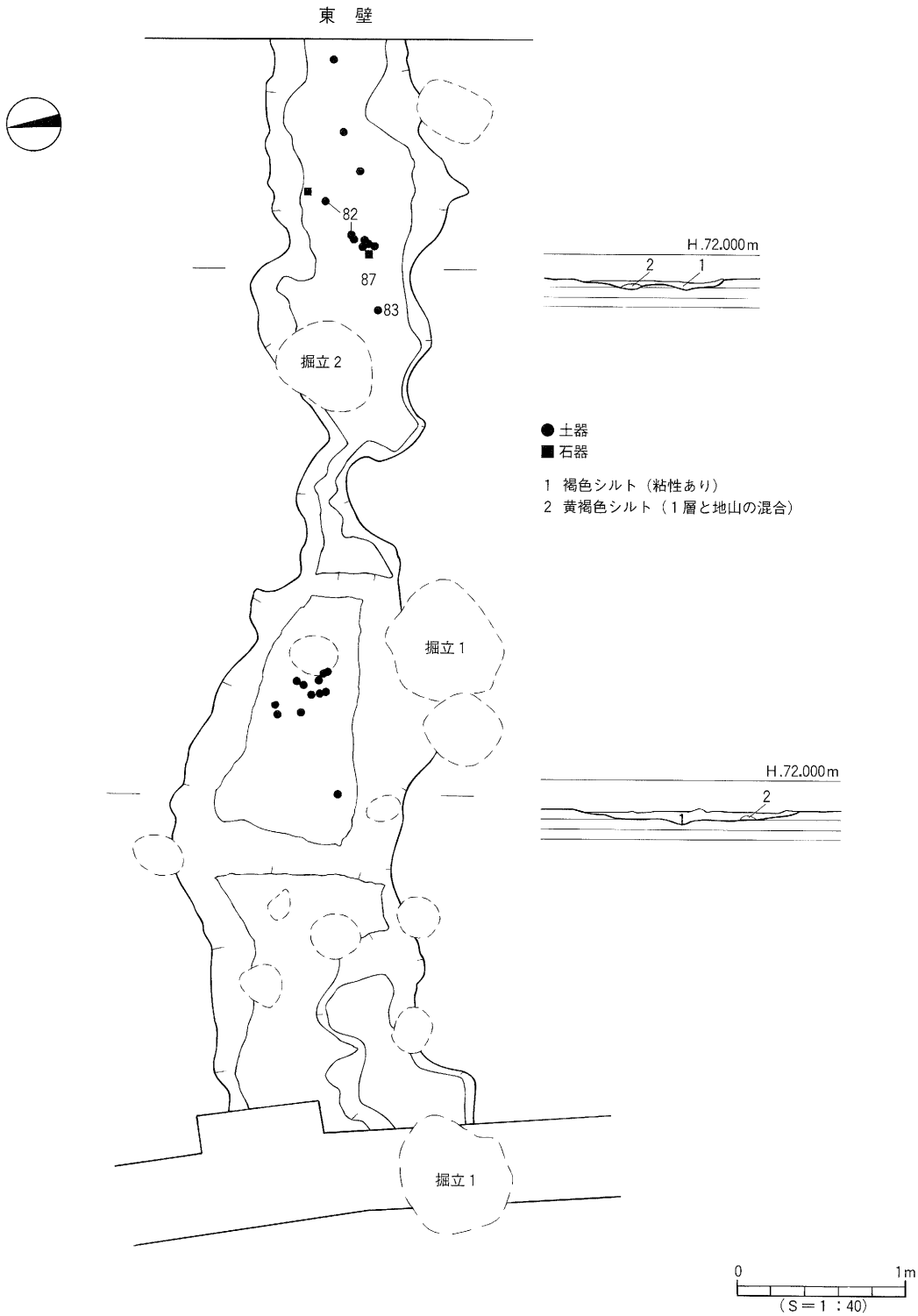
剥片は調査時に検出した。中型片１点、大型片１点で合計重量3.53ｇを量る。

ＳＫ10（第37図、図版14）

調査地北半部Ｃ10区で検出した。ＳＫ８の南辺に位置し、ＳＫ５を切る。平面形態は不整形であるが長軸方位は北でやや西へ偏った方向を示す。規模は長さ1.62m、幅1.10m、深さ18cmを測る。断面形態は長軸では２段の皿状を呈する。埋土は１層灰褐色シルト、２層褐色シルト（黄色土・炭化物混）である。土坑内より小量の弥生土器、石器、サヌキトイドの剥片が礫石と混在して出土した。



第37図　ＳＫ10測量図・出土遺物実測図


東　壁
82
87
83
掘立２
掘立１
掘立１
H.72.000m
2
1
H.72.000m
2
1
● 土器
■ 石器
1　褐色シルト（粘性あり）
2　黄褐色シルト（１層と地山の混合）
0
1m
（S＝1：40）

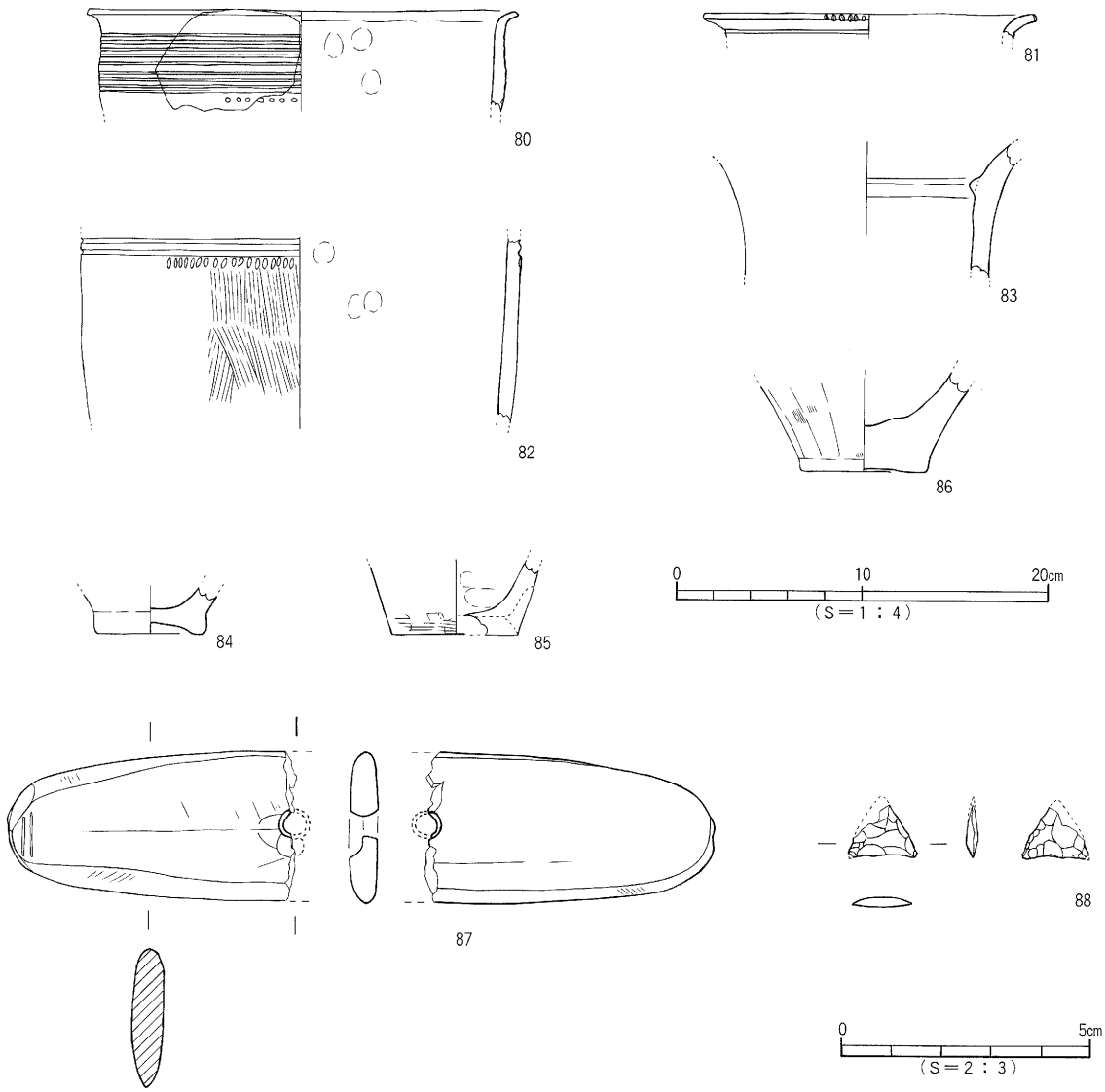
第38図　ＳＤ１測量図

出土遺物（第37図、図版24）

土製品（78）78は紡錘車で土器片から製作されたものである。

石製品（79）79は石鏃の破片で、石材はサヌキトイドである。

剥片は調査時と埋土洗浄作業にて検出した。微細片～大型片まで出土し、総点数5,089点で合計重量84.170ｇを量る。出土点数による比率は微細片48.20％、細片32.16％、小片17.60％、中型片2.00％、大型片0.04％で微細片の出土が目立つ。



第39図　ＳＤ１出土遺物実測図

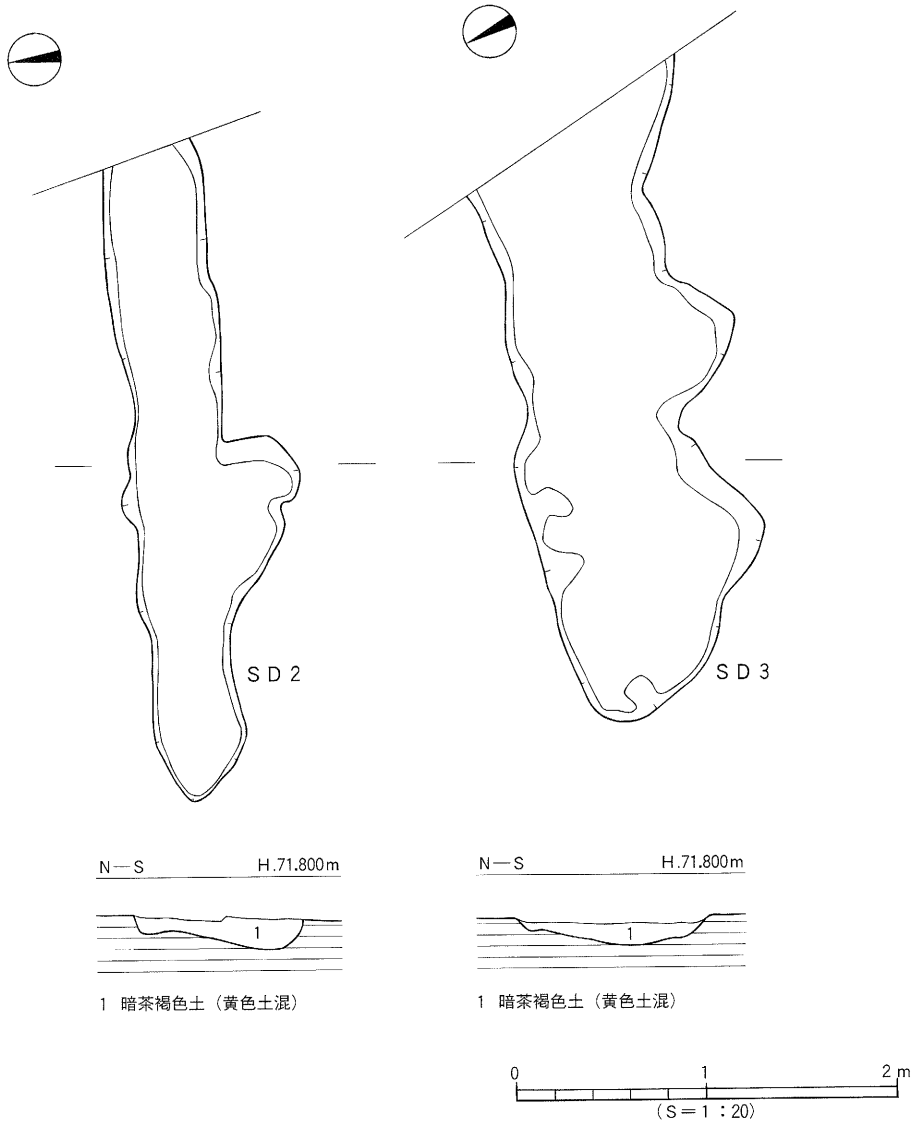
②溝（ＳＤ）

ＳＤ１（第38図、図版14）

調査地北半部のＢ12～Ｃ13区での検出で、東西方向を示す。古墳時代の掘立柱建物址（掘立１・２）に切られる。検出長7.00m、上場幅0.30～1.32m、深さ8～20cmを測り、東西とも調査区外へ続く。断面形態は浅いレンズ状を呈する。埋土は１層褐色シルト（粘性あり）、２層黄褐色シルト（１層と地山の混合）である。溝内より土器、石器、サヌキトイドの剥片が礫石と混在した状態で、東側と中央（やや西寄り）に集中して出土した。

出土遺物（第39図、図版14）

弥生土器（80～86）80～82・84・85は甕形土器。80は折曲口縁で端部に施文はされず、頸部は多重

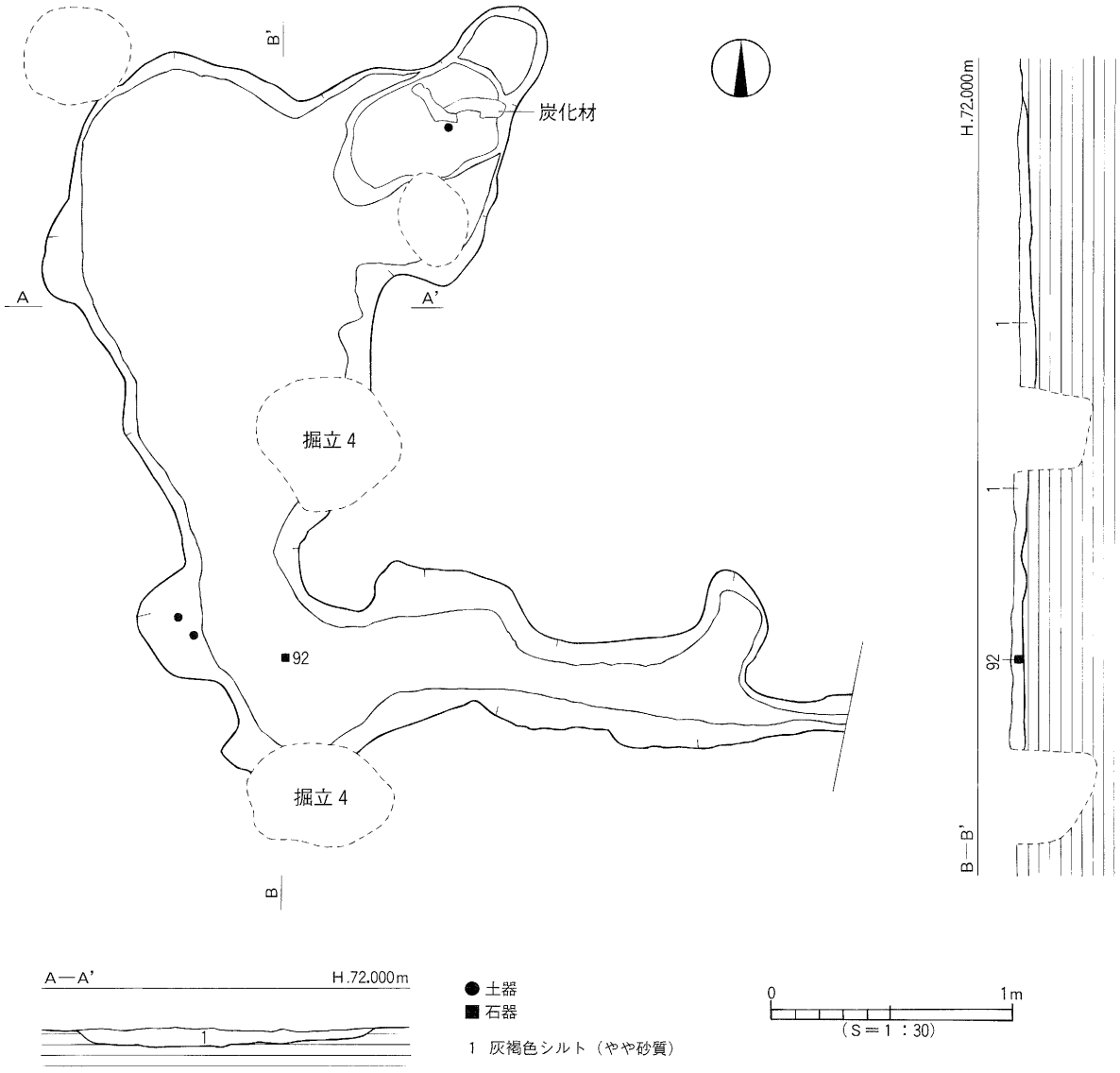


第40図　ＳＤ２・３測量図

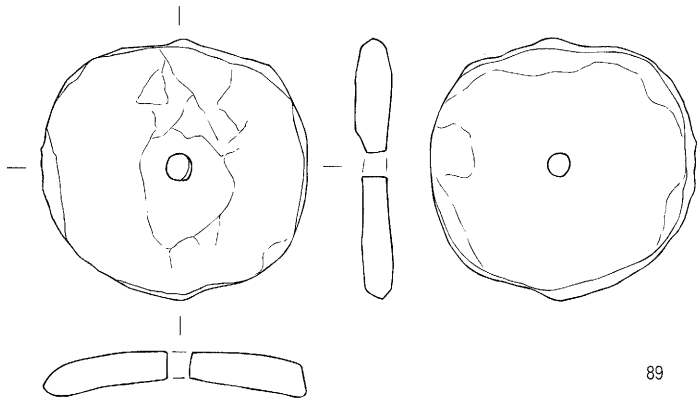
沈線文と刺突列点文が施される。81も折曲口縁で端部に刻目が施され、頸部は多重沈線文が施されるものと考えられる。82は胴部片で、多重沈線文と刺突列点文が施される。器面はハケ調整されている。83は壺形土器の頸部片で、内面に断面三角形の凸帯が付く。84・85は甕形土器の底部片で84は突出する底部で上げ底、85は平底である。86は壺形土器の底部片で、やや突出する底部でわずかに上げ底である。

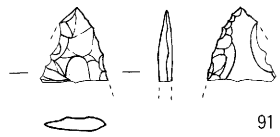
石製品（87・88）87は緑色片岩製の石庖丁の破片で、上下、左右とも対象的な作りとなり、平面形態は長楕円形と考えられる。円孔も中央に穿たれている。表面左端部に縦方向に二条の線刻が入る。88はサヌキトイド製の石鏃で、正三角形に近い形状をなす。

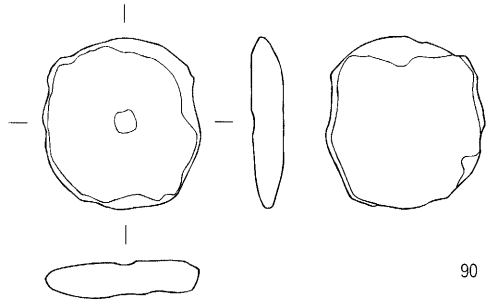
剥片は調査時に検出した。小片１点、中型片６点、大型片１点で合計重量9.058ｇを量る。

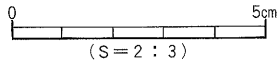


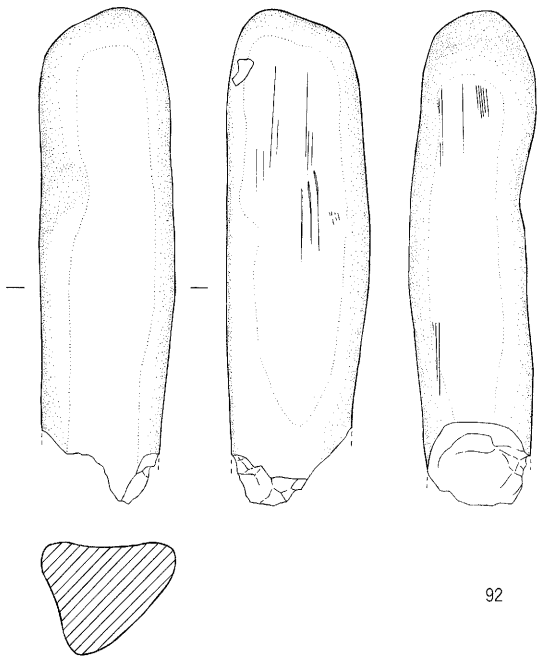
第41図　ＳＸ１測量図

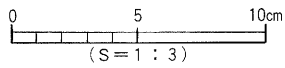












第42図　ＳＸ１出土遺物実測図

ＳＤ２（第40図）

調査地南半部のＡ・Ｂ８区での検出で東西方向を示す。溝の東端は北半部では検出されなかったため未調査部分で途切れるものと思われる。検出長1.75m、上場幅0.25～0.50m、深さ８㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は暗茶褐色土（黄色土混）の単一層である。溝内より小量の弥生土器が出土したが、小片のため図化し得なかった。

ＳＤ３（第40図）

調査地南半部のＢ８区での検出でＳＤ２の南隣に位置し、東西方向を示す。溝の東端はＳＤ２と同様、未調査部分で途切れるものと思われる。検出長1.75m、上場幅0.45～0.61m、深さ５㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は暗茶褐色土（黄色土混）の単一層である。溝内より小量の弥生土器、サヌキトイドの剥片と小礫が出土した。弥生土器は小片のため、図化し得なかった。

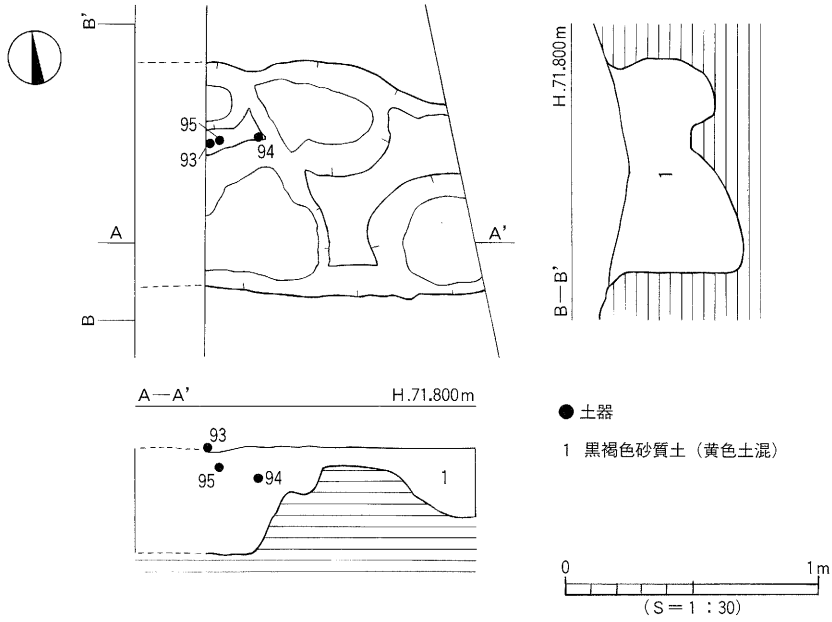
ＳＤ２とＳＤ３は上場幅に差があるが、溝の方向、埋土、遺物の出土状況が同じである事や、ほぼ平行に位置する事などから、同じ時期の同じ性格をもつ溝と考えられる。

剥片は調査時に検出した。微細片10点、細片３点、中型片１点で合計重量1.525ｇを量る。

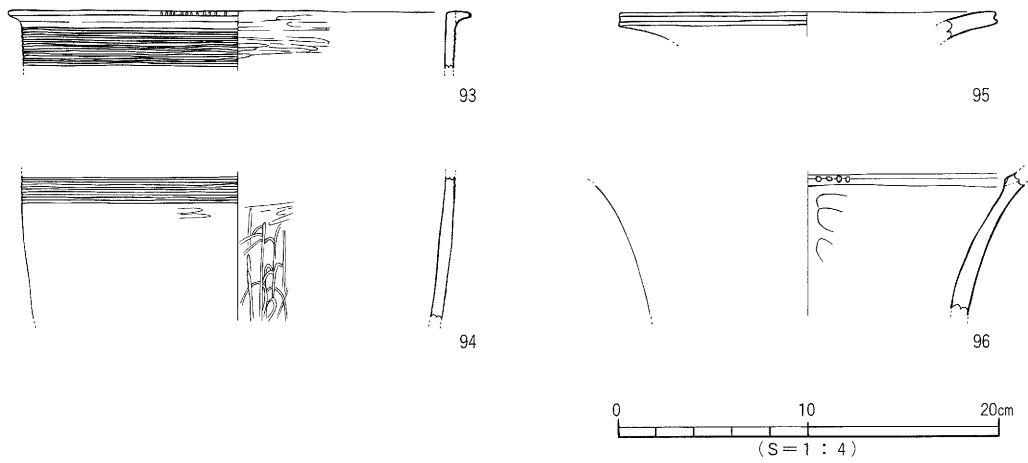
③性格不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ１（第41図）

調査地北半部のＣ９区で検出した。東壁に端を発し、幅を広げながら東方向へ、25mの距離で北方向へ方位をとる。古墳時代の掘立柱建物址（掘立４）に切られる。規模は東西長3.40m、南北長3.10



第43図　ＳＸ２測量図



第44図　ＳＸ２出土遺物実測図

m、深さ７㎝を測る。埋土は灰褐色シルト（やや砂質）の単一層である。北東隅の底面にて土坑が確認された。平面形態は楕円形を呈し、長径0.82m、短径0.45m、深さ10㎝を測り、埋土はＳＸ１と同様の灰褐色シルト（やや砂質）である。遺物はＳＸ1の底面と同じレベルで40㎝×５㎝の範囲に炭化材と紡錘車（89）が出土した。ＳＸ１内からは小量の土器片、石器、サヌキトイドの剥片、礫石が出土したが、土器片は小片のため図化し得なかった。

出土遺物（第42図、図版24）

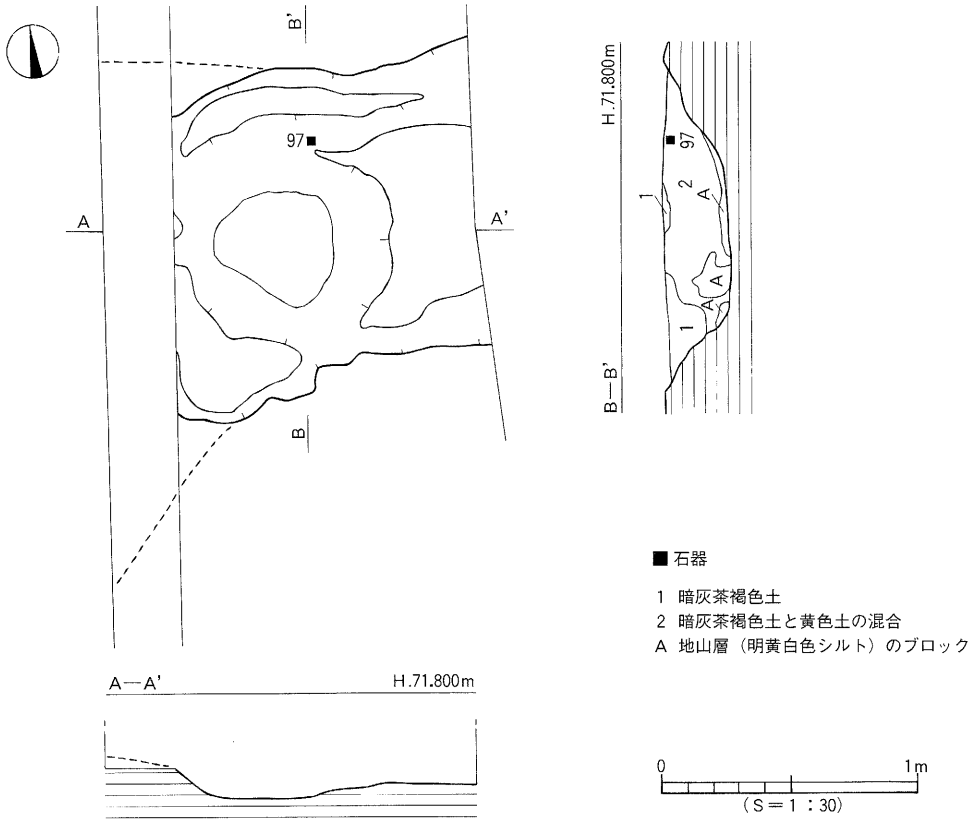
土製品（89・90）89・90は紡錘車である。土器片から製作されたもので、90は中央の円孔が貫通していない製作途中品である。

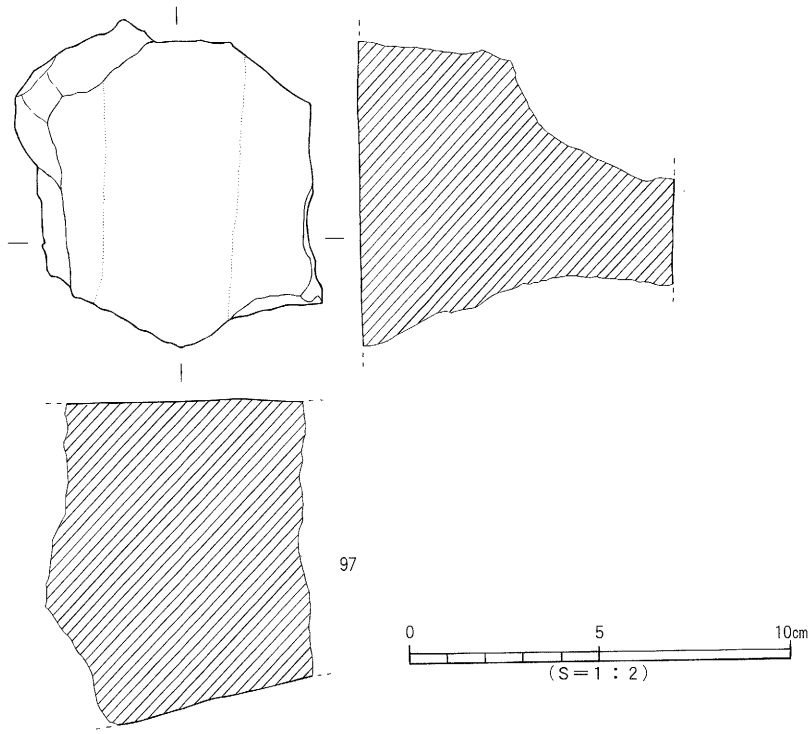
石製品（91・92）91はサヌキトイド製の石鏃で、破損品もしくは製作途中のものと思われる。92は断面形態が三角形を呈する砥石で、１面はほぼ平坦に、他の２面は凹む様に研磨使用されている。石材は安山岩である。

剥片は調査時と埋土洗浄作業にて検出した。微細片から大型片まで出土し、総点数587点で合計重量43.843ｇを量る。出土点数による比率は微細片33.5％、細片32.4％、小片24.2％、中型片9.4％、大型片0.5％で微細片と細片の出土がほぼ同率で、合計は全体の半数以上を占めている。

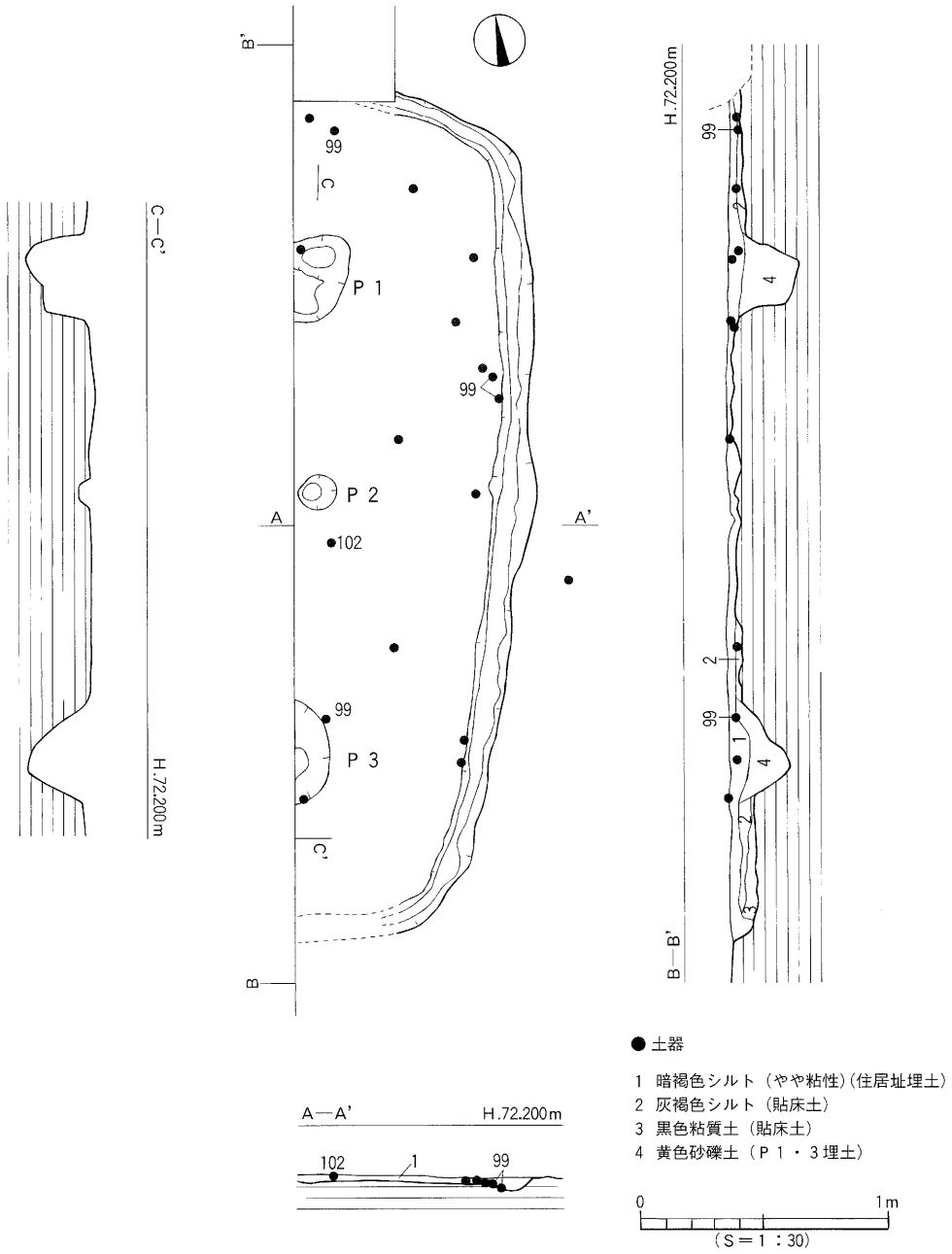
ＳＸ２（第43図）

調査地南半部のＡ10区で検出した。平面形態と砂質土の埋土より溝状と思われたが、調査地北半部では検出されなかったため未調査部分で途切れるものと思われる。検出長1.40m、幅0.90m、深さは最深部で55㎝を測る。底面の凹凸は著しい。埋土は黒褐色砂質土（黄色土混）の単一層である。ＳＸ２内からは弥生土器と10～20㎝大の礫石が混在して出土した。





第45図　ＳＸ３測量図・出土遺物実測図



第46図　ＳＢ１測量図

出土遺物（第44図、図版24）

弥生土器（93～96）　93・94は甕形土器。93は貼付口縁の甕で、口縁端部に刻目、頸部には多重沈線文が施される。94は胴部片で、多重沈線文が施される。95・96は壺形土器で、95は口縁端部に１条の沈線文が巡る。96は頸部片で、内面には断面三角形の凸帯が付き、凸帯上には刻目が施される。

ＳＸ３（第45図）

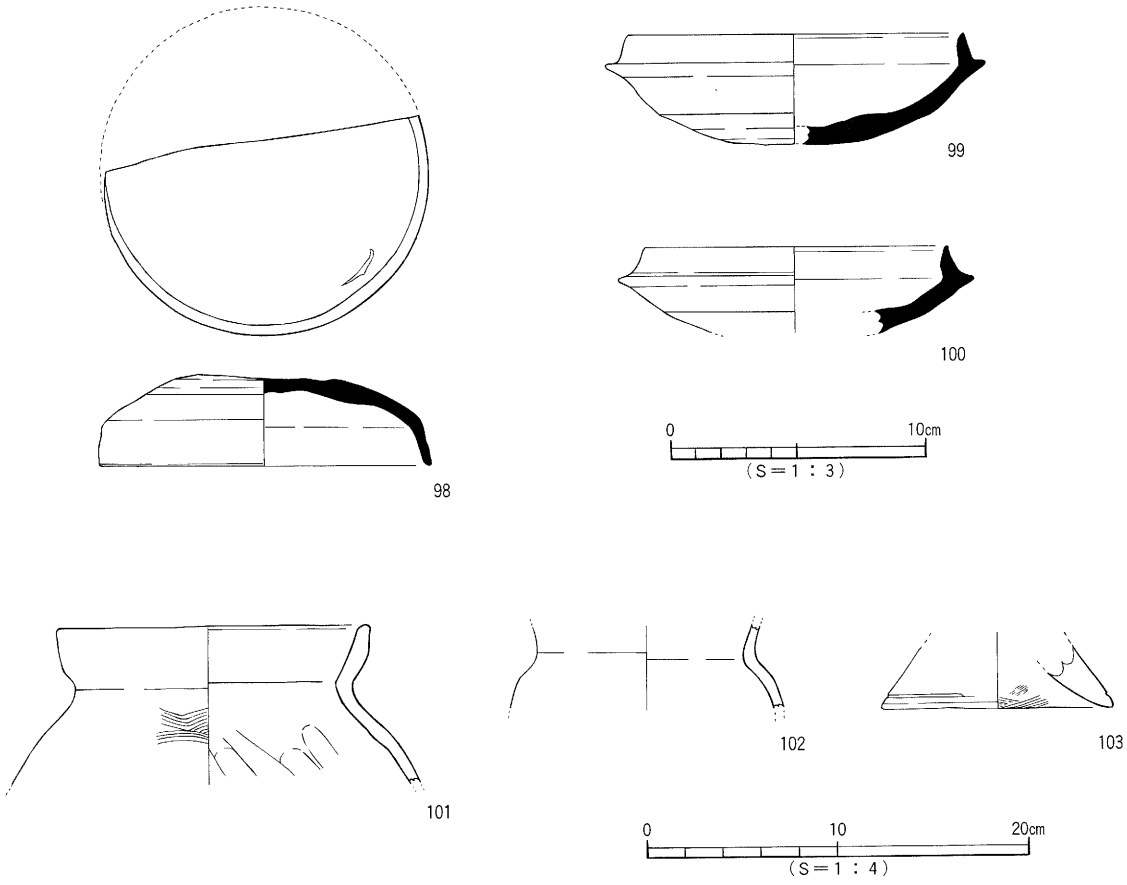
調査地南半部のＡ10区での検出で、ＳＸ２の南辺に位置する。ＳＸ３もＳＸ２と同様、未調査部分に東端があるものと思われる。基底面は調査区内で最深部を測り、西壁の観察では序々に浅くなるが、遺構幅は広くなることが判った。検出東西長1.30m、南北長1.40m、深さは最深部で27cmを測る。埋土は１層暗灰茶褐色土、２層暗灰茶褐色土と黄色土の混合土中に地山層がブロック状に入る。ＳＸ３内からは小量の土器片、石器が10～20cm大の礫石と混在して出土した。土器は小量で小片のため図化し得なかった。

出土遺物（第45図）

石製品（97）97は台石の破損品で上面にのみ擦痕が見られる。石材は安山岩である。

３）古墳時代

古墳時代の遺構は、調査地全域で検出された。検出遺構は竪穴式住居址１棟、掘立柱建物址５棟、溝４条である。



第47図　ＳＢ１出土遺物実測図

①竪穴式住居址（ＳＢ）

ＳＢ１（第46図、図版15）

調査地北半部のＡ14～Ｂ15区で検出された。掘立１の北辺に位置する。住居址西部は調査区外へ続く。平面形態は隅丸形方形を呈し、規模は南北長5.90m、東西検出長1.60m、壁体は遺構上部を削平されており５cmを測る。調査はまず、埋土の掘り下げを行い、遺物の検出、住居址内部施設の検出を行った。内部からは周壁溝、柱穴３基、貼床を検出した。周壁溝は壁体に添うように巡り、幅10cm～20cm、深さは床面から５～10cmを測る。埋土は住居址埋土と同じである。柱穴は貼床調整後に掘られている。Ｐ２は径12cm、深さ５cmを測り、埋土は住居址埋土と同じである。Ｐ１・Ｐ３は楕円形を呈し、規模は径50～60cm、深さ32～40cmを測る。柱穴埋土は黄色砂礫土である。貼床はＰ１の北側とＰ３の周りで２層を検出した。上層は灰褐色シルトで、５～10cmの厚さを測る。下層は黒色粘質土で、２～10cmの厚さを測る。住居址内から須恵器、土師器の他、サヌキトイドの剥片が出土した。

出土遺物（第47図、図版24）

須恵器（98～100）98は坏蓋で、天井部と口縁部の境は不明瞭である。天井部は回転ヘラケズリ、他は内面も含め回転ナデ調整される。天井部にヘラ記号が残る。99・100は坏身で器壁は厚い。たちあがりは短く内傾して、内面をナデ調整することより端部は尖る。受部は横方向に短くのびる。底部は回転ヘラケズリ、他は内面も含め回転ナデ調整される。

土師器（101～103）101・102は甕形土器である。101の口縁部は上外方に立ち上がり、端部は内傾する面をなす。口縁部内外面ともヨコナデ調整、胴部外面はハケ調整、内面は指頭痕を残す。102は頸部片で、２次焼成を受けており表面の剥離が著しい。103は高坏の脚部片で、第Ⅲ層出土の破片と接合できた。脚端部は尖り、端部のやや上方外面には沈線が施されるが全周はしない。内面はハケメ調整される。

剥片は調査中に出土した。混入品である。中型片が４点で合計重量2.946ｇを量る。

時期：出土した須恵器より、ＳＢ１の廃棄埋没時期は６世紀後半とする。

②掘立柱建物址（掘立）

掘立１（第48図、図版16）

調査地北半部のＡ12～Ｂ13区に位置し、ＳＫ２・ＳＤ１・掘立３を切る。規模は４間×１～２間で桁行長5.40m、梁行長3.50mを測る南北棟である。主軸は桁行方向でＮ－9°－Ｅである。柱穴の平面形態は円～楕円形である。規模は径60～80cm、深さ34～48cmを測る。埋土は３層に分かれ、１層黄色砂質土、２層明褐色シルト、３層暗褐色シルトである。柱穴内からは須恵器、弥生土器、石製品、サヌキトイドの剥片が出土した。

出土遺物（第49図、図版25）

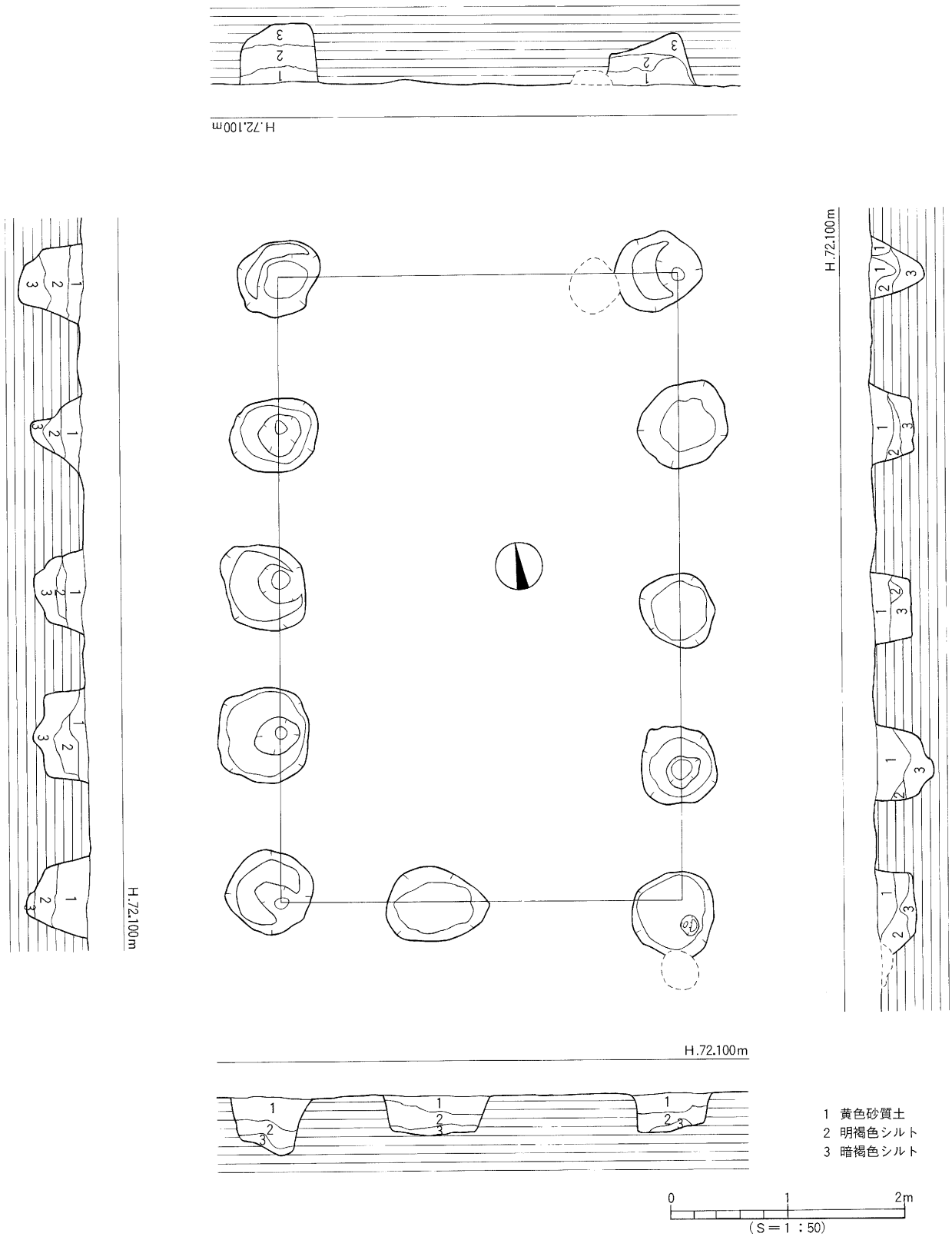
須恵器（104）104は高坏の脚裾部の小片である。わずかに外反し外下方に下がる裾部は、端部付近で外方向へ屈曲している。端面には沈線が１条施される。内外面とも回転ナデ調整される。

弥生土器（105～107）105～107は甕形土器で、105は頸部片で多重沈線文が施される。106・107は底部片で平底である。

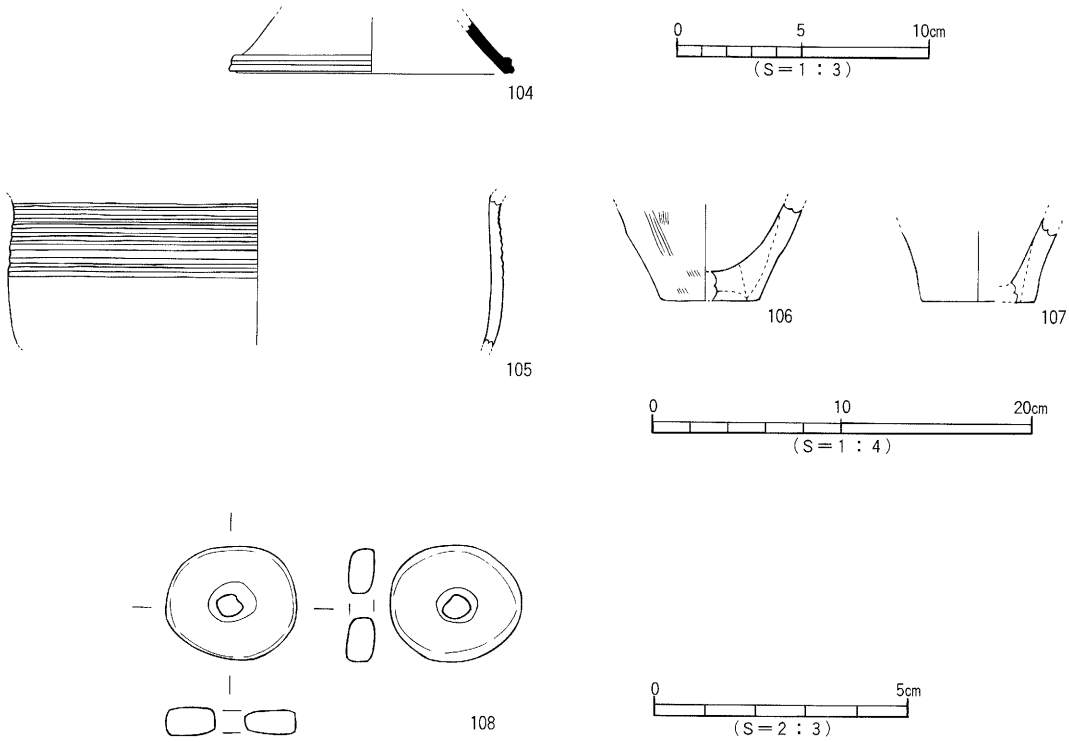
石製品（108）108は砂岩製の紡錘車で、側面には自然面が残るため、円礫を素材にして製作されたものと考えられる。円孔は表裏両方向から穿たれ貫通している。

剥片は調査時に検出した。中型片３点で合計5.056ｇを量る。

時期：小片ではあるが、出土した須恵器の形態より７世紀代とする。


H.72.100m
H.72.100m
H.72.100m
H.72.100m
1 黄色砂質土
2 明褐色シルト
3 暗褐色シルト
0
1
2m
(S＝1：50)

第48図　掘立１測量図



第49図　掘立１出土遺物実測図

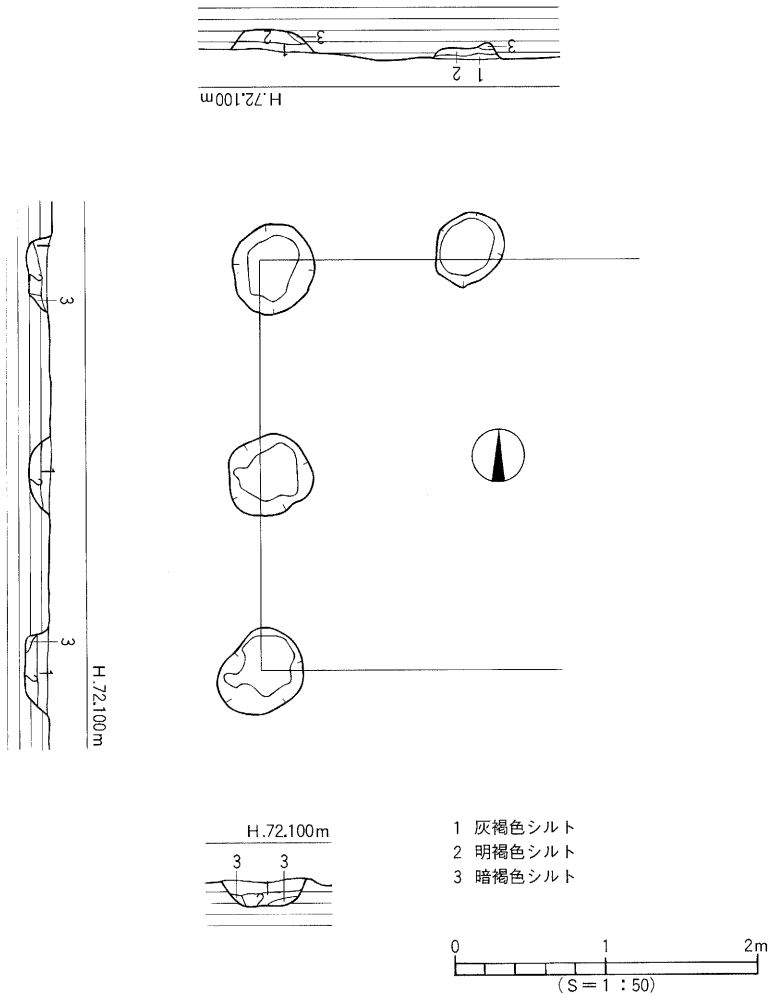
掘立２（第50図、図版16）

調査地北半部のＣ14区に位置し、ＳＤ１を切る。東西１～２間以上×南北２間の東西棟とおもわれるもので、桁行長2.50m以上、梁行長2.70mを測る。主軸は梁行方向で掘立４と同方向を示す。柱穴の平面形態は円～楕円形である。規模は径40～55cm、深さ８～15cmを測る。埋土は3層に分かれ、１層灰褐色シルト、２層明褐色シルト、３層暗褐色シルトである。柱穴内からの出土遺物は少量の土師器片と弥生土器片があるが、小片のため図化し得なかった。

時期：小量ではあるが土師器片が出土したこと、柱穴の平面形態、規模などから古墳時代とする。

掘立３（第51図、図版16）

調査地北半部のＢ11～Ｃ12に位置し、掘立１に切られ、ＳＫ３・11を切る。規模は３間×２間で桁行長4.68m、梁行長3.35mを測る東西棟である。主軸は梁行方向でＮ－10°－Ｅである。柱穴の平面形態は円～楕円形である。規模は径43～65cm、深さ35～54cmを測る。埋土は３層に分かれ、１層明褐

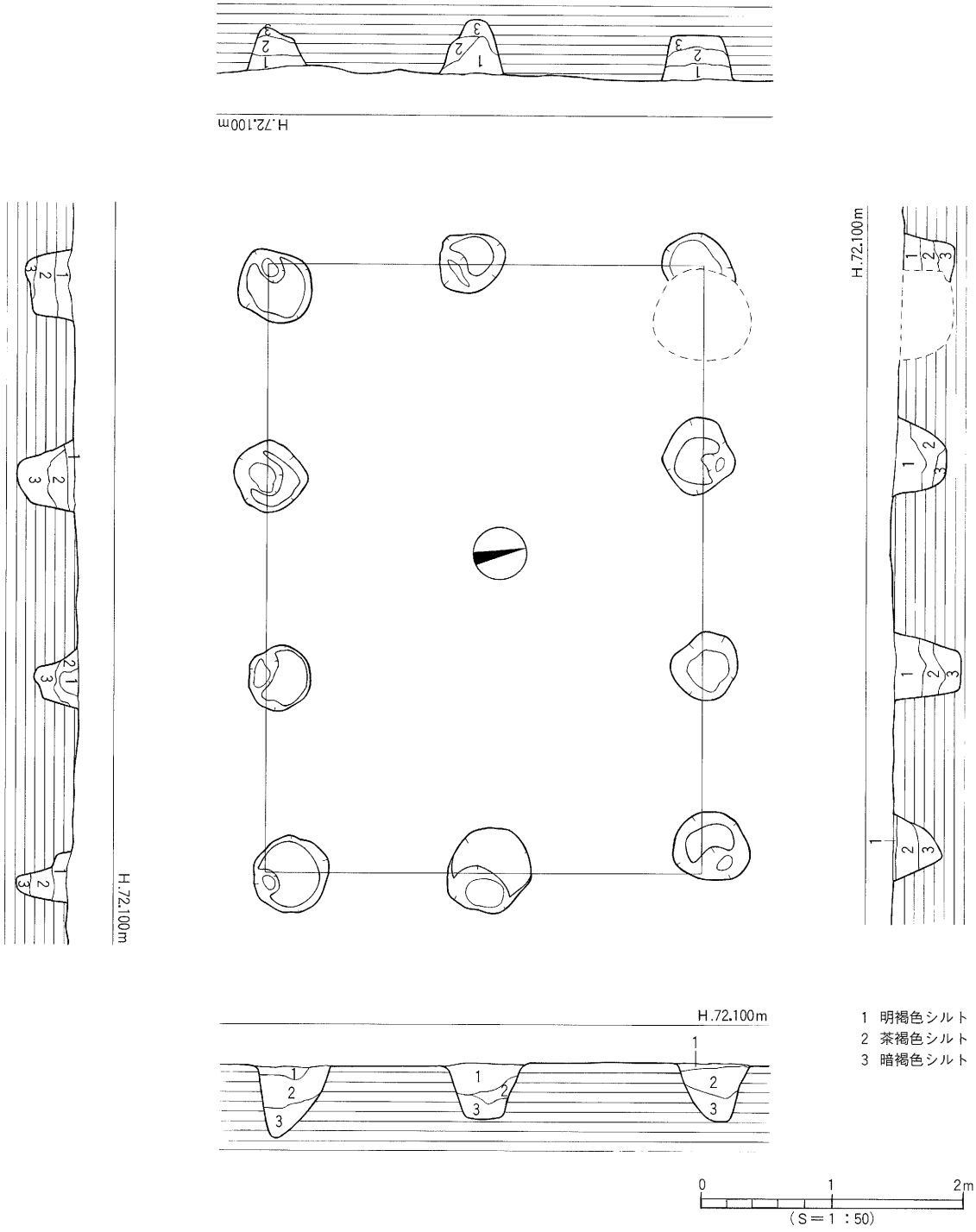


第50図　掘立２測量図

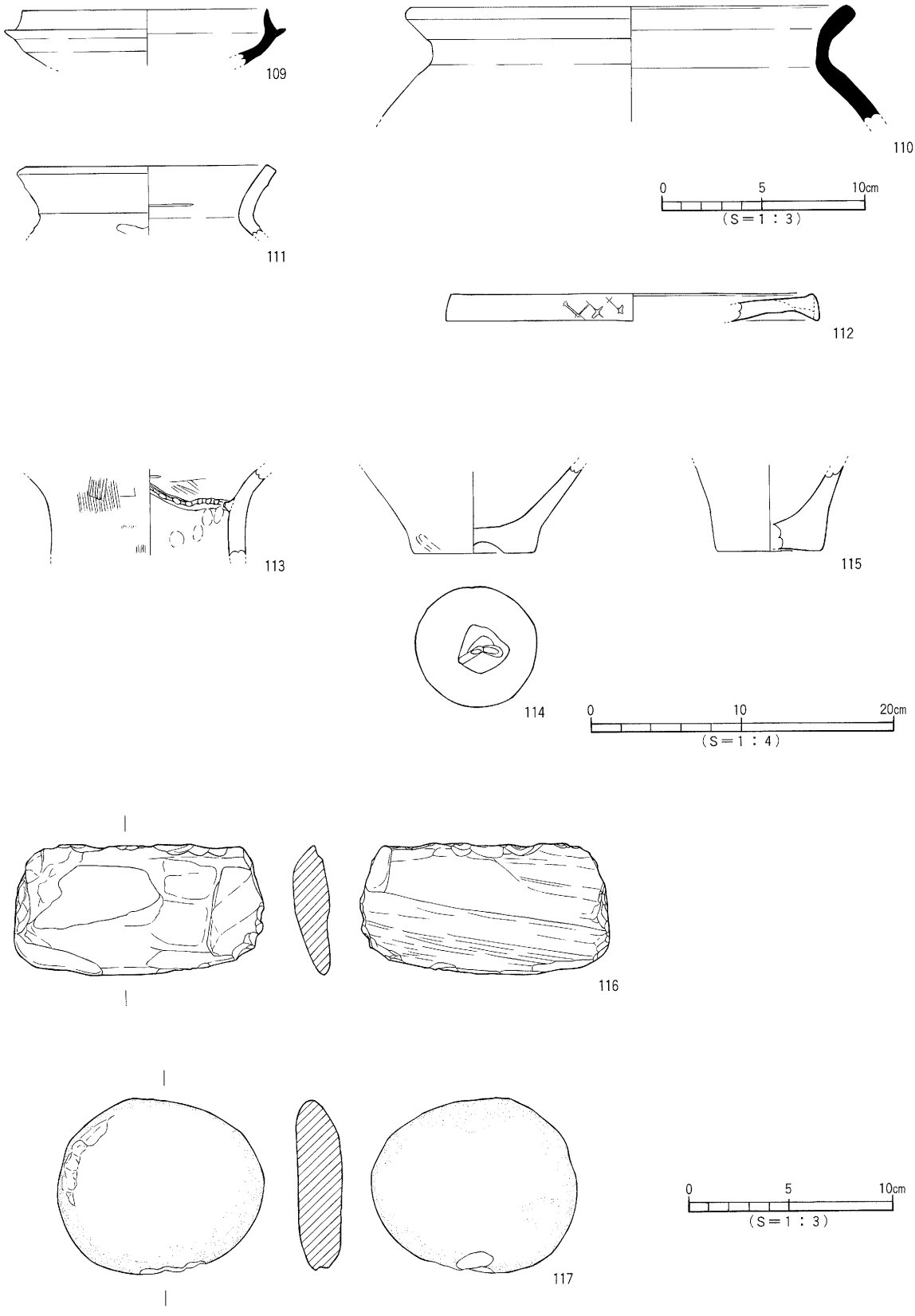
色シルト、２層茶褐色シルト、３層暗褐色シルトである。柱穴内からの出土遺物は須恵器、土師器、弥生土器、石製品、サヌキトイドの剥片がある。

出土遺物（第52・53図、図版25）

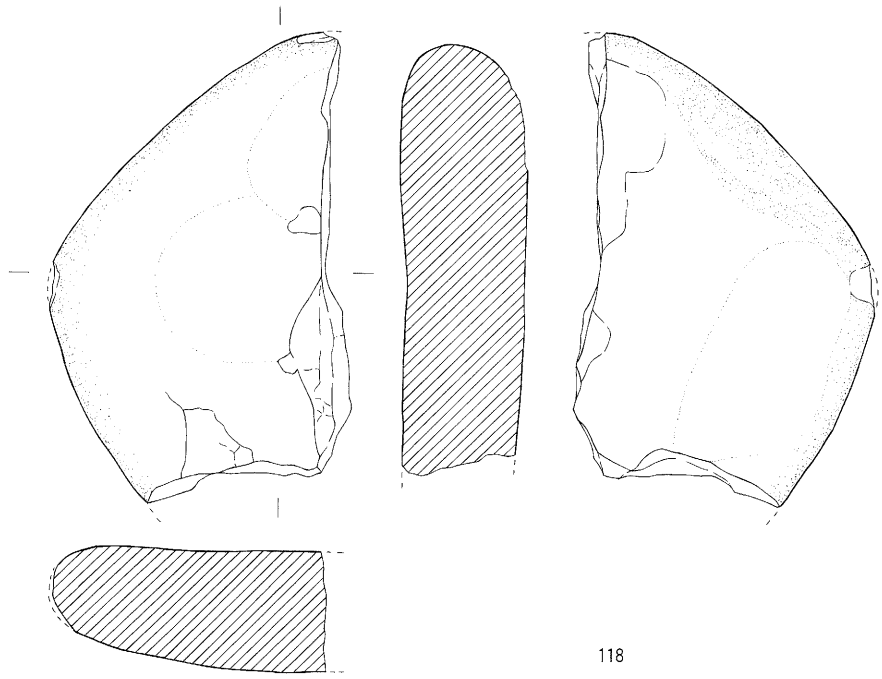
須恵器（109・110）109は坏身の口縁部片で、たちあがりは内傾後外反し、端部は尖る。受部は上外方にのびる。110は甕の口縁部片で、外反する端部は上外方に面をもち、断面方形を呈する。


H.72.100m
H.72.100m
H.72.100m
H.72.100m
1 明褐色シルト
2 茶褐色シルト
3 暗褐色シルト
0
1
2m
(S＝1：50)

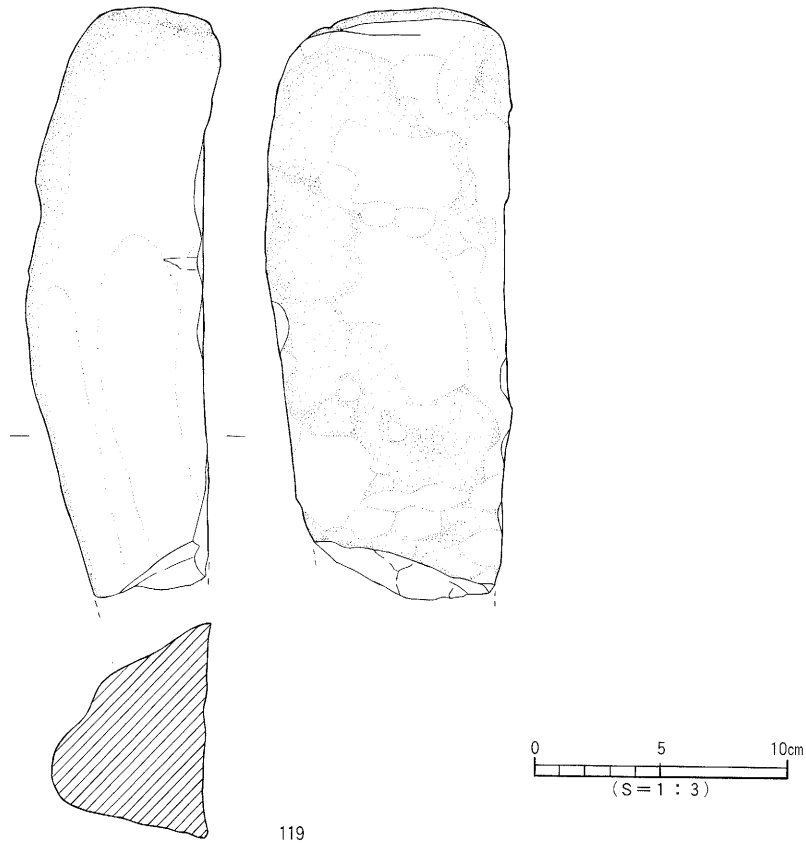
第51図　掘立３測量図



第52図　掘立３出土遺物実測図（1）

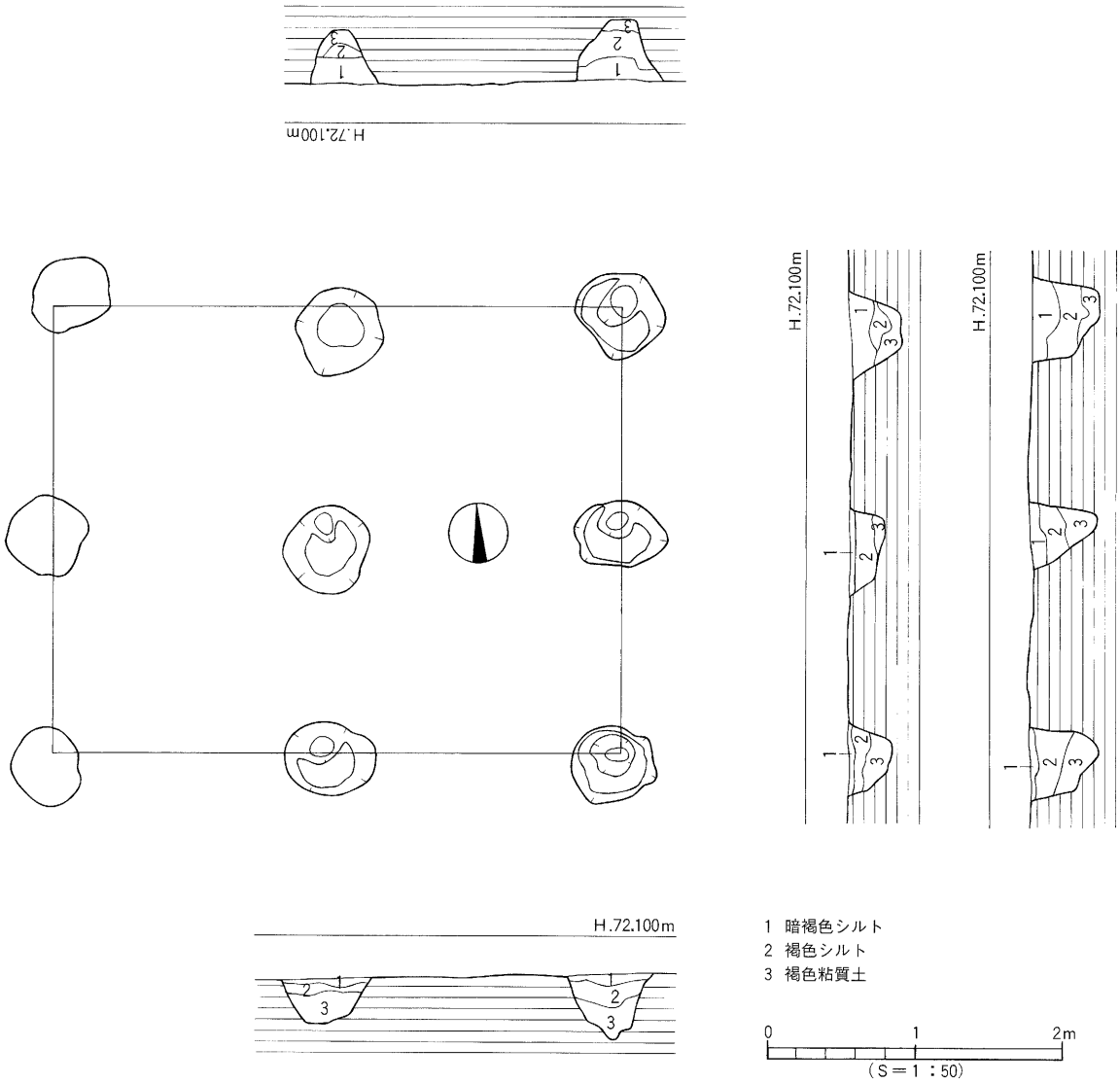


118

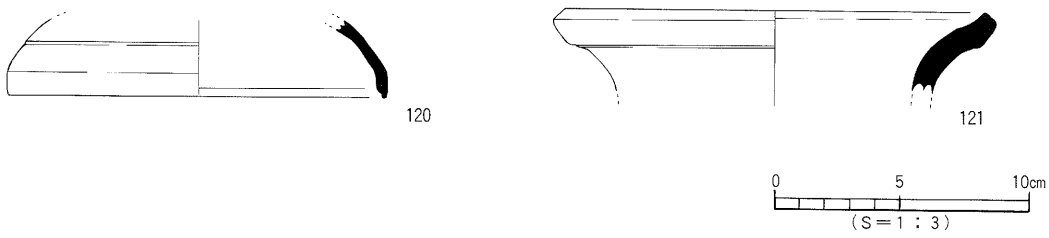


119

第53図　掘立３出土遺物実測図（2）



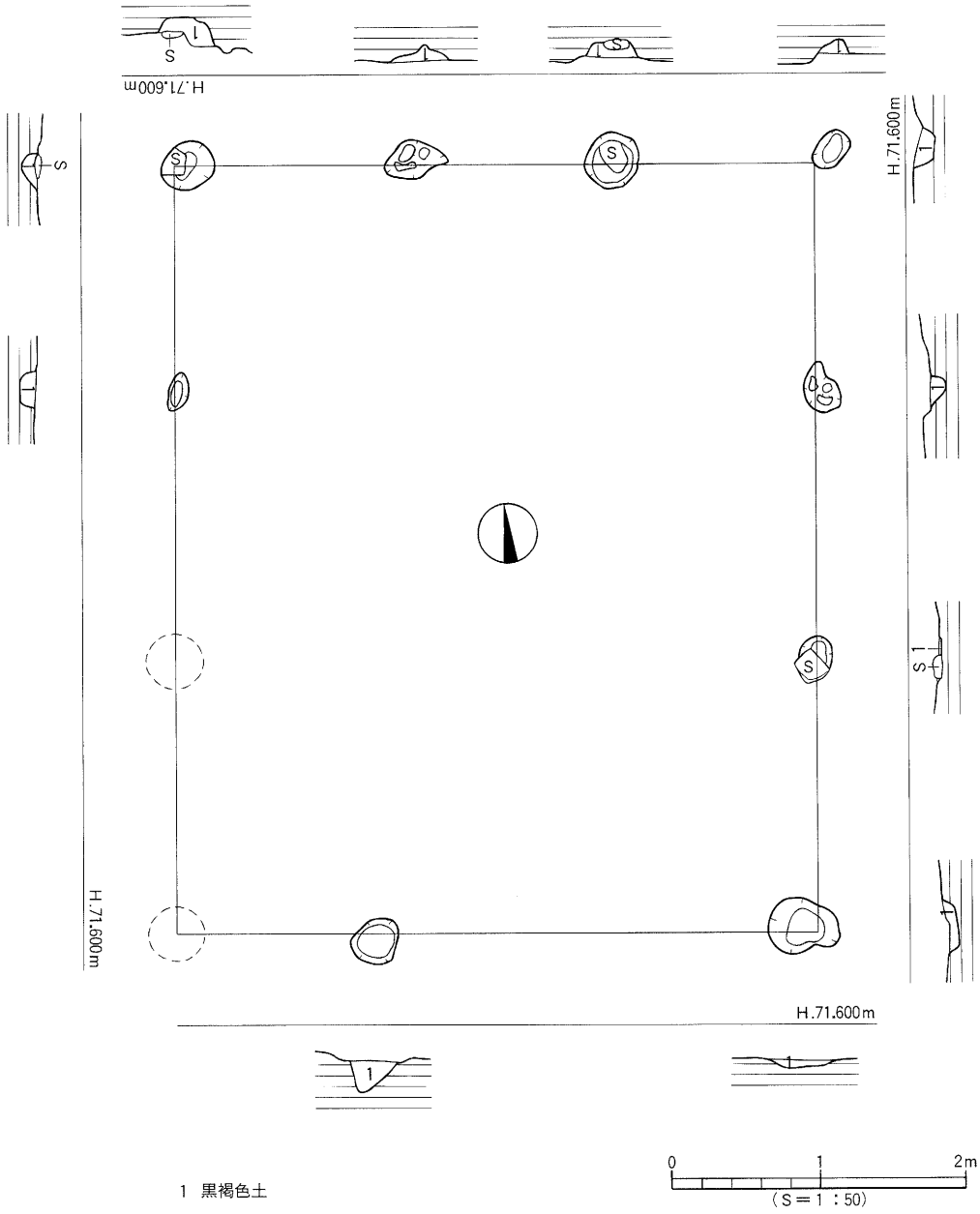
第54図　　掘立４測量図



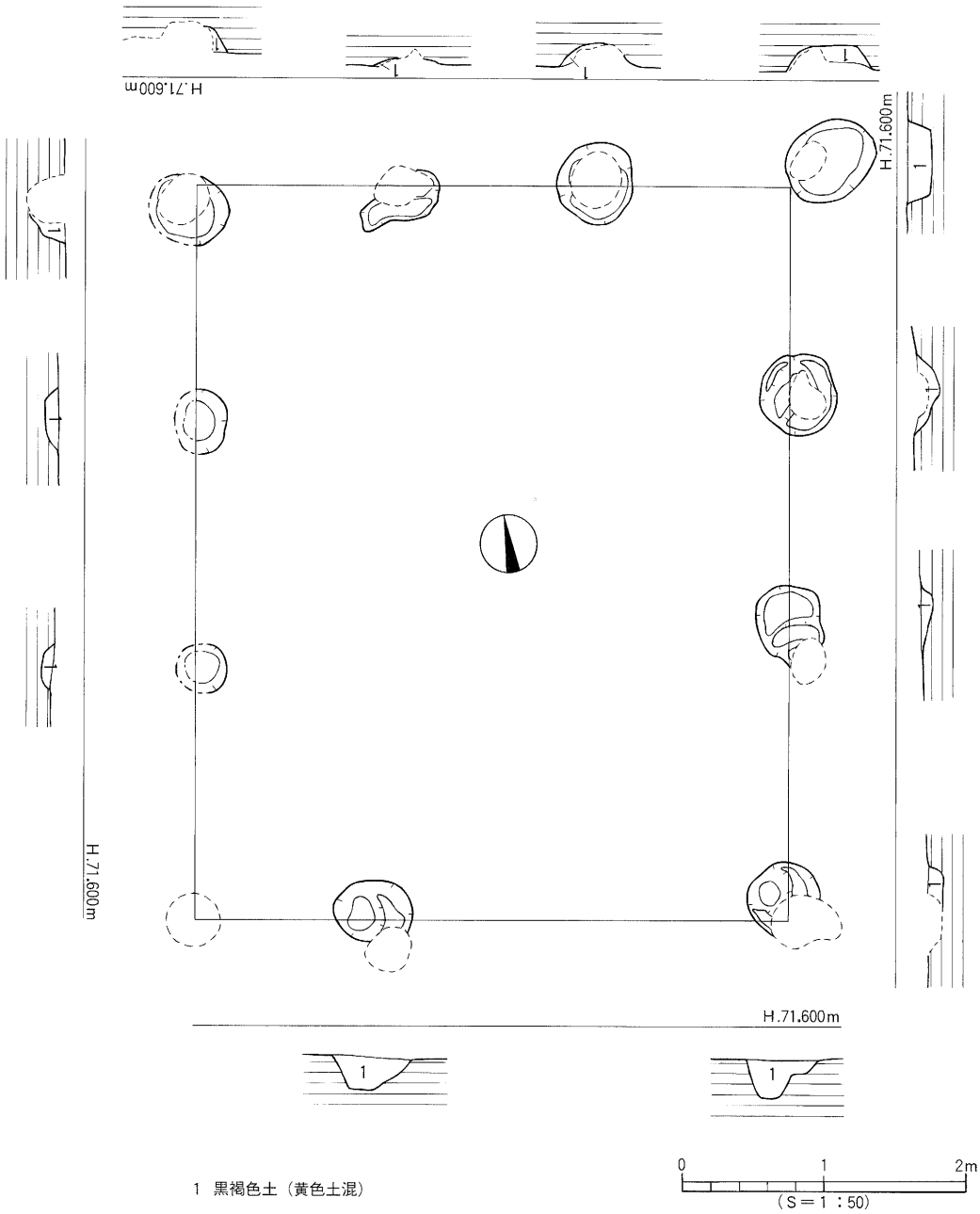
第55図　掘立４出土遺物実測図

土師器（111）111は甕形土器の口縁部片で、外傾する口縁部は上外方向に面をもつ。内面に浅い１条の沈線文が施されるが全周はしない。

弥生土器（112～113）　112・113は壺形土器である。112は口縁部片で、端部は上下方に拡張され格子目文が施される。113は頸部片で、内面には断面三角形の凸帯が付き、押圧による施文が施される。114・115は甕形土器の底部片。114は突出する平底で甑の転用品と思われ、底部外面は中央に穿孔されかけられている。115は平底である。



第56図　掘立５（新）測量図

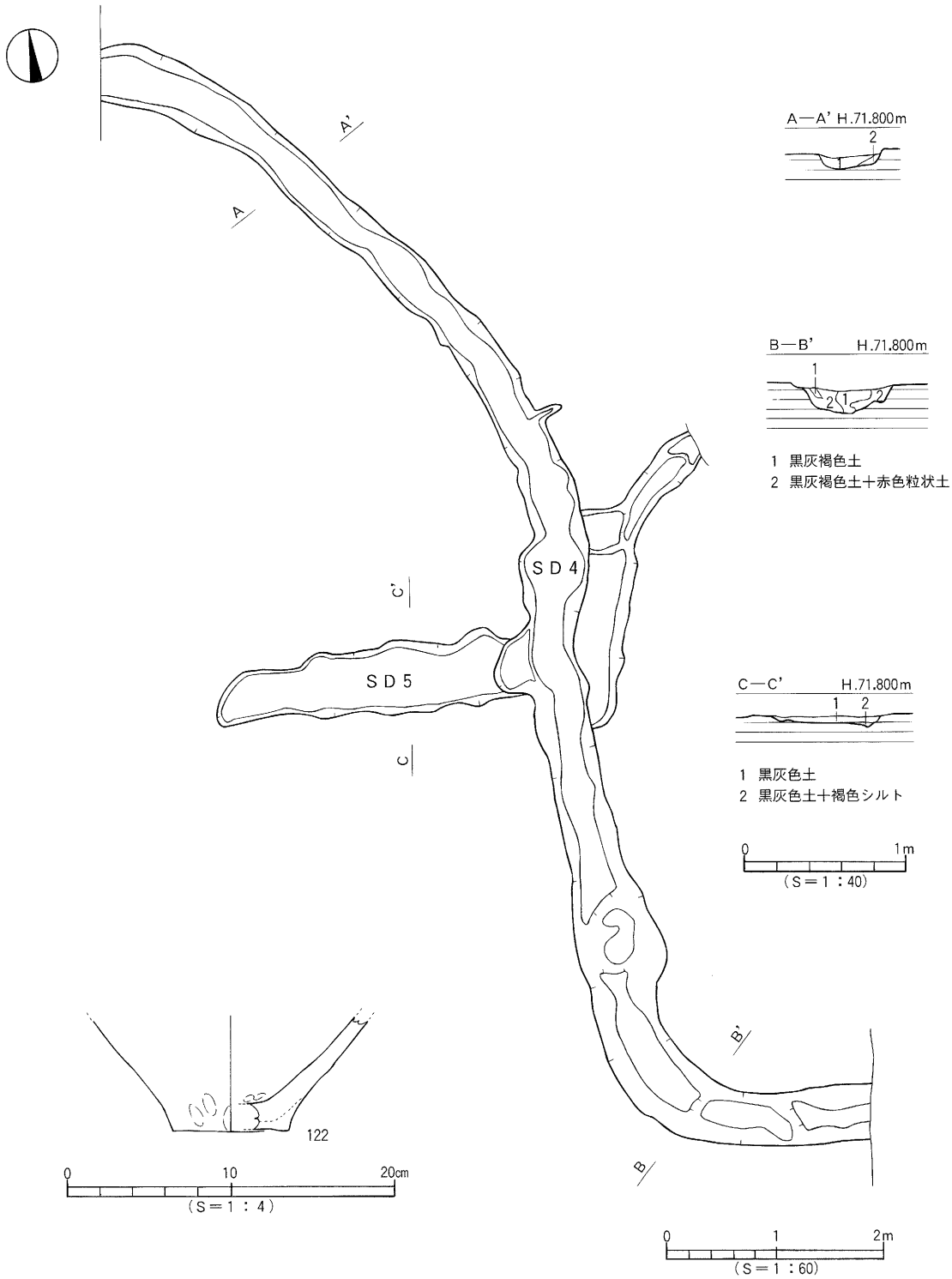


第57図　掘立５（旧）測量図

石製品（116～119）116は緑泥片岩製の石庖丁で製作途中品と思われる。周縁は打ち欠きされ整形されている。117は緑色片岩製の敲石と思われるもので、下端部中央に使用痕がみられる。118は砂岩製の石皿か台石の欠損である。表裏とも擦痕がみられる。119は砂岩製の砥石で、溝状に摺り減る使用痕が残り、破断面は平坦に使用されている。台石からの転用品。

剥片は調査時に検出した。小片２点で合計0.173ｇを量る。

時期：出土した須恵器の形態から７世紀代とする。



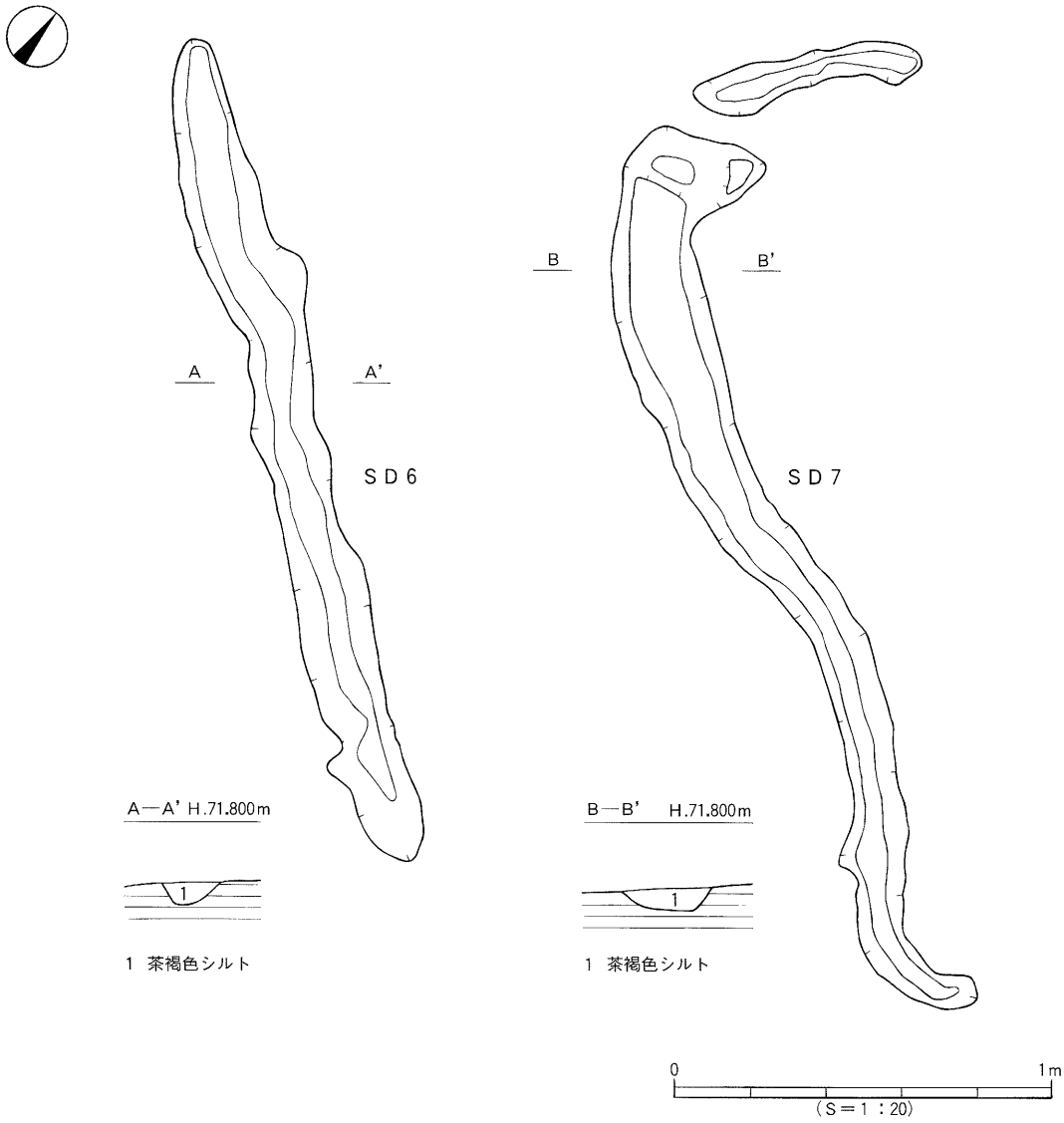
第58図　ＳＤ４・５測量図・ＳＤ５出土遺物実測図

掘立4（第54図、図版17）

調査地北半部のＢ８～Ｃ９区に位置し、ＳＸ１を切る。建物址の西側柱列は、農道下を一時的に壺掘りし、平面調査を行った。調査後、農道は使用するため直ちに埋め戻した。規模は２間×２間で桁行長3.90m、梁行長3.05mを測る東西棟で、掘立２と同一方向である。柱穴の平面形態は円～楕円形である。規模は径46～60cm、深さは26～45cmを測る。埋土は３層に分かれ、第１層暗褐色シルト、第２層褐色シルト、第３層褐色粘質土である。柱穴内からの出土遺物は須恵器がある。

出土遺物（第55図、図版25）

須恵器（120・121）120は坏蓋で、天井部と口縁部の境は不明瞭である。口縁端部内面は段をなす。



第59図　ＳＤ６・７測量図

121は甕の口縁部片で、外反する口縁部は上外方に面をもち、端部は玉縁状におさめる。口縁直下内面はナデ凹む。

時期：出土した須恵器の形態から7世紀前半とする。

掘立５（第56・57図、図版17）

掘立５には建て替えがあり、建て替え後を新、建て替え前を旧と表記する。第Ⅶ層上面で検出した。第Ⅶ層上面はＡ～Ｃ３区の北部より南下りの傾斜をなしていることと、柱穴が浅い遺存であったことなどから、新・旧の南東隅柱穴と新の南東隅北隣りの柱穴は掘削作業により消失したが、本来は遺存していたものと思われる。南東隅柱穴の西隣の柱穴は掘立６により消滅している。

調査地南半部のＡ３～Ｂ４区に位置し、掘立６に切られる。規模は３間×３間で東西棟である。

掘立５（新）：規模は桁行長5.25m、梁行長4.40mを測る。主軸は桁行方向でＮ－7°－Ｅである。柱穴の平面形態は楕円～不整形である。規模は径15～50cm、深さ2～20cmを測る。３基の柱穴より根詰め石を検出した。柱穴埋土は黒褐色土である。

掘立５（旧）：規模は桁行長5.15m、梁行長4.20mを測る。主軸は桁行方向でＮ－9°－Ｅである。柱穴の平面形態は円～不整形である。規模は径36～70cm、深さ８～26cmを測る。柱穴埋土は黒褐色土（黄色土混）である。柱穴内からの出土遺物は少量の縄文土器、弥生土器、須恵器があるが小片のため図化し得なかった。

時期：出土した須恵器の形態、掘立１・３と主軸方向が同じことなどから古墳時代とする。

③溝（ＳＤ）

ＳＤ４（第58図、図版17）

調査地南半部のＡ７～Ｃ５区に位置し、ＳＤ５を切る。溝西側、東側は調査区外に続くと思われる。規模は検出長13.00m、上場幅37～80cm、深さ10～24cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層黒灰褐色土、２層黒灰褐色土と赤色粒状土の混合土である。溝基底部は西側から東側へと下がる傾斜が確認できた。溝内からの出土遺物は須恵器、弥生土器、サヌキトイドの剥片と少量の礫石がある。弥生土器、須恵器は小片のため図化し得なかった。

剥片は調査時に出土した。中型片１点、大型片１点で合計重量は11.433ｇを量る。

時期：出土した須恵器の形態より古墳時代とする。

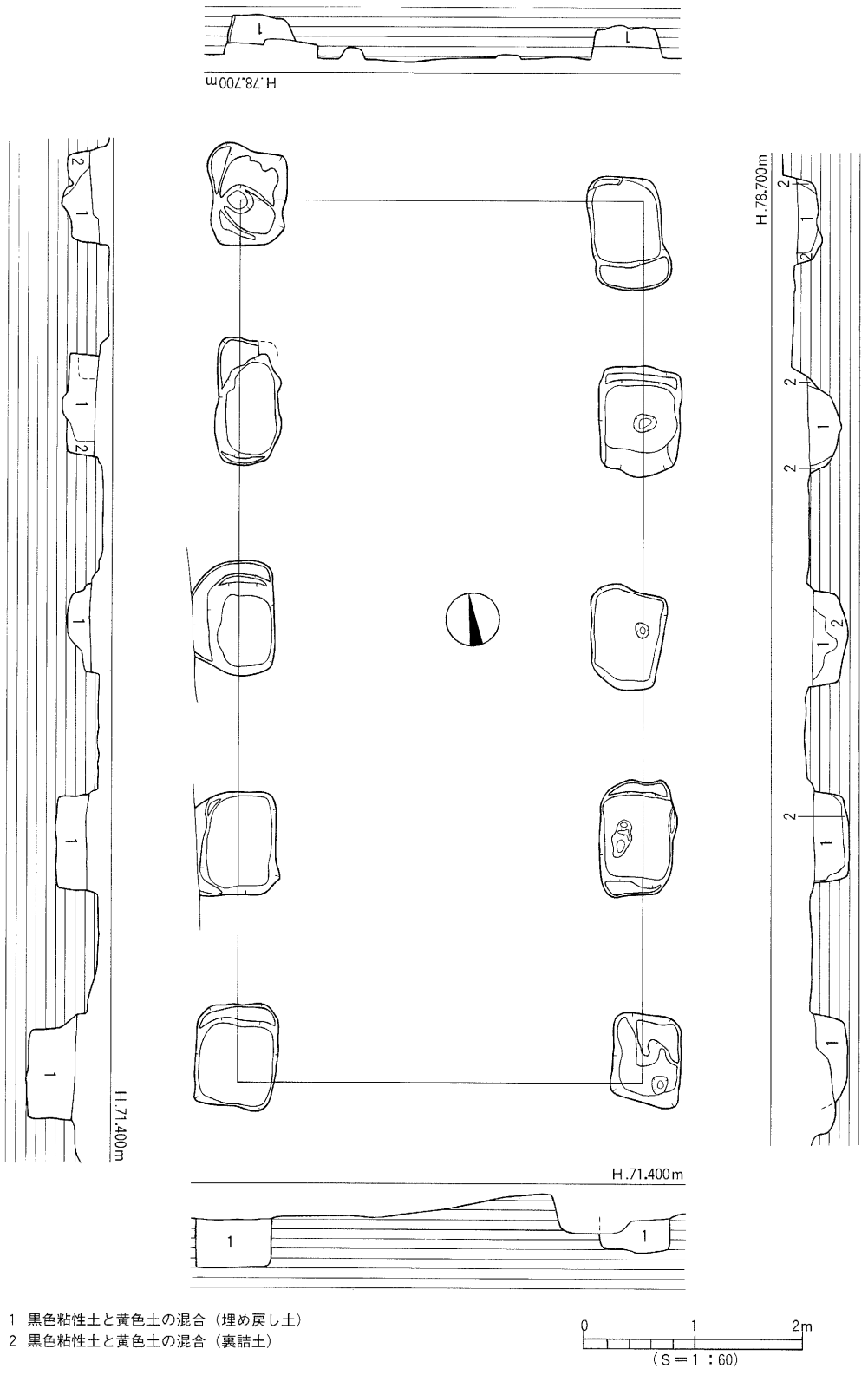
ＳＤ５（第58図、図版17）

調査地南半部のＡ６～Ｂ７区に位置し、ＳＤ４に切られる。東端からの延長部は北半部では検出されなかったため、未調査部分で途切れるものと思われる。規模は検出長5.50m、上場幅26～67cm、深さ６cmを測る。埋土は２層に分かれ、１層黒灰色土、２層黒灰色土と褐色シルトの混合土である。溝内からは少量の須恵器、弥生土器の他礫石が出土したが、須恵器は小片のため図化し得なかった。

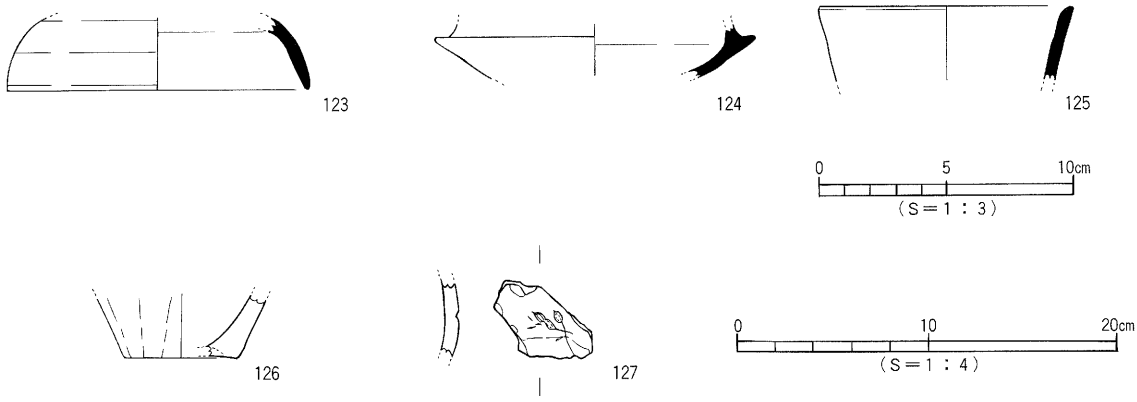
出土遺物（第58図）

弥生土器（122）122は壺形土器の底部片で、やや突出する底部は若干上げ底となる。混入品。

時期：出土した須恵器の形態と埋土がＳＤ４に酷似することなどから古墳時代とする。


H.78.700m
H.78.700m
H.71.400m
H.71.400m
1 黒色粘性土と黄色土の混合（埋め戻し土）
2 黒色粘性土と黄色土の混合（裏詰土）
0 1 2m
（S＝1：60）

第60図　掘立６測量図



第61図　掘立６出土遺物実測図

ＳＤ６（第59図）

調査地南半部のＢ６区に位置する。規模は長さ2.25m、上場幅15～24cm、深さ６cmを測る。断面形態は船底状を呈する。埋土は茶褐色シルトの単一層である。溝内からの出土遺物は少量の須恵器、弥生土器があるが、小片のため図化し得なかった。

時期：出土した須恵器の形態から古墳時代とする。

ＳＤ７（第59図）

調査地南半部のＢ～Ｃ５区に位置する。溝は北部で一端途切れ、やや蛇行する。規模は全長3.10m、上場幅７～30cm、深さ６cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は茶褐色シルトの単一層である。溝内からの出土遺物は少量の須恵器、弥生土器があるが、小片のため図化し得なかった。

時期：出土した須恵器の形態より古墳時代とする。

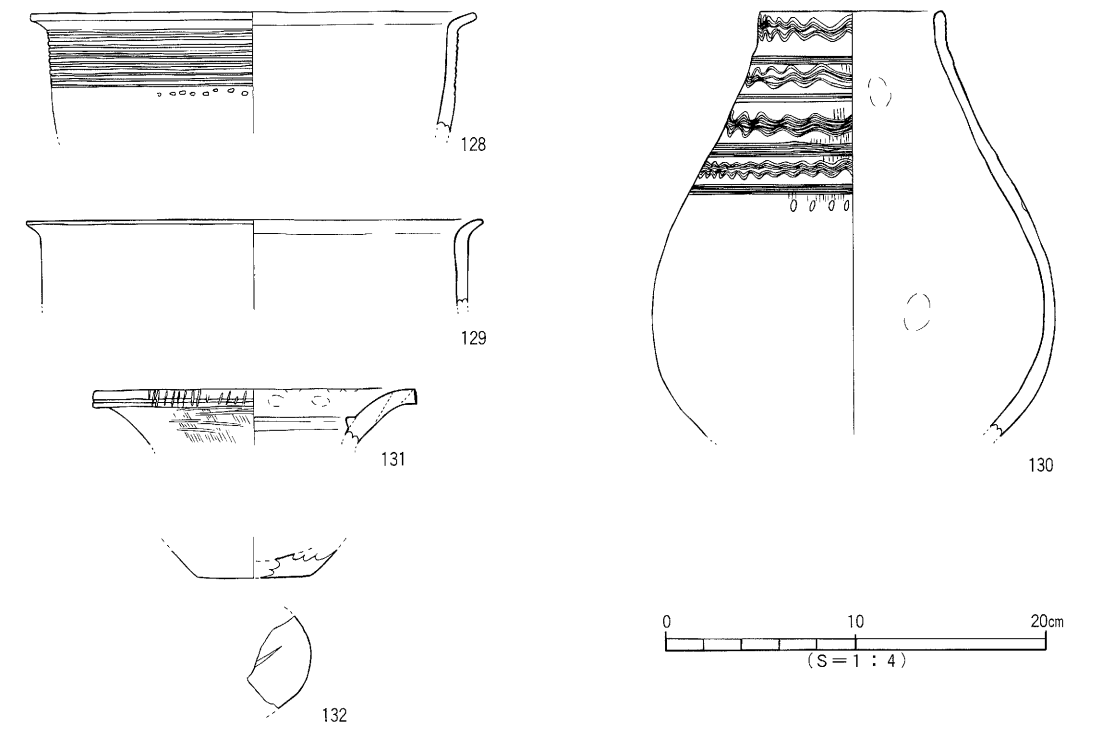
４）古代

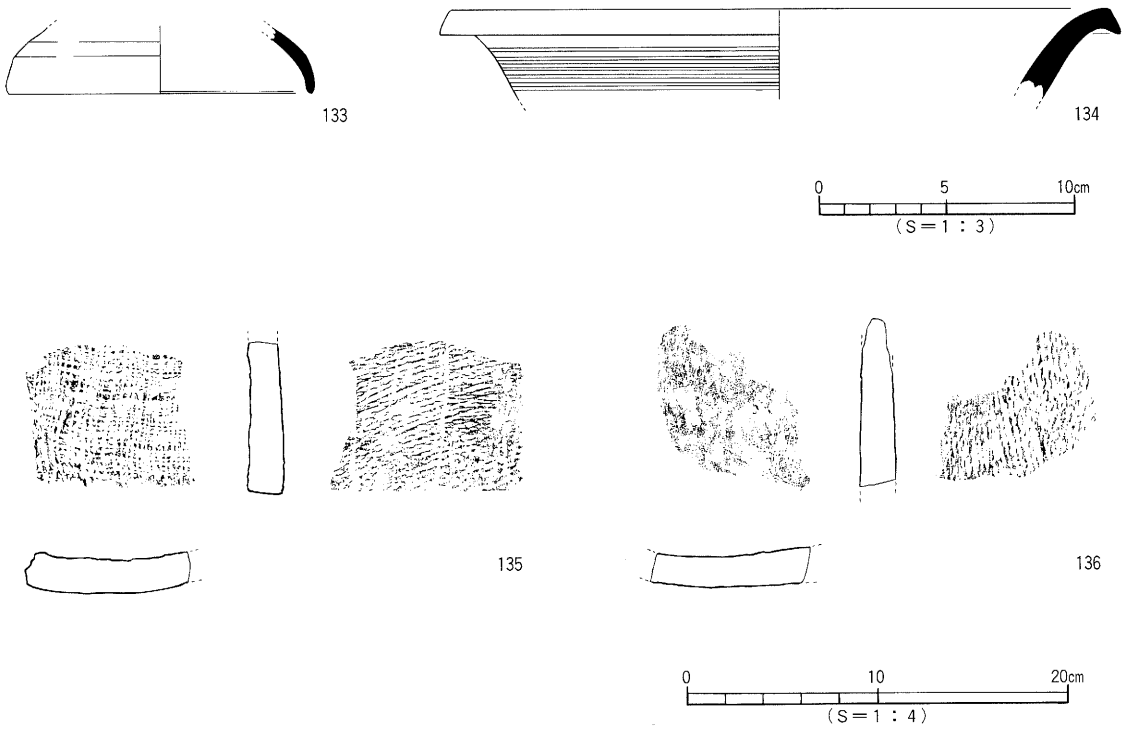
古代の遺構は調査地南半部でのみ検出された。検出遺構は掘立柱建物址１棟である。

①掘立柱建物址（掘立）

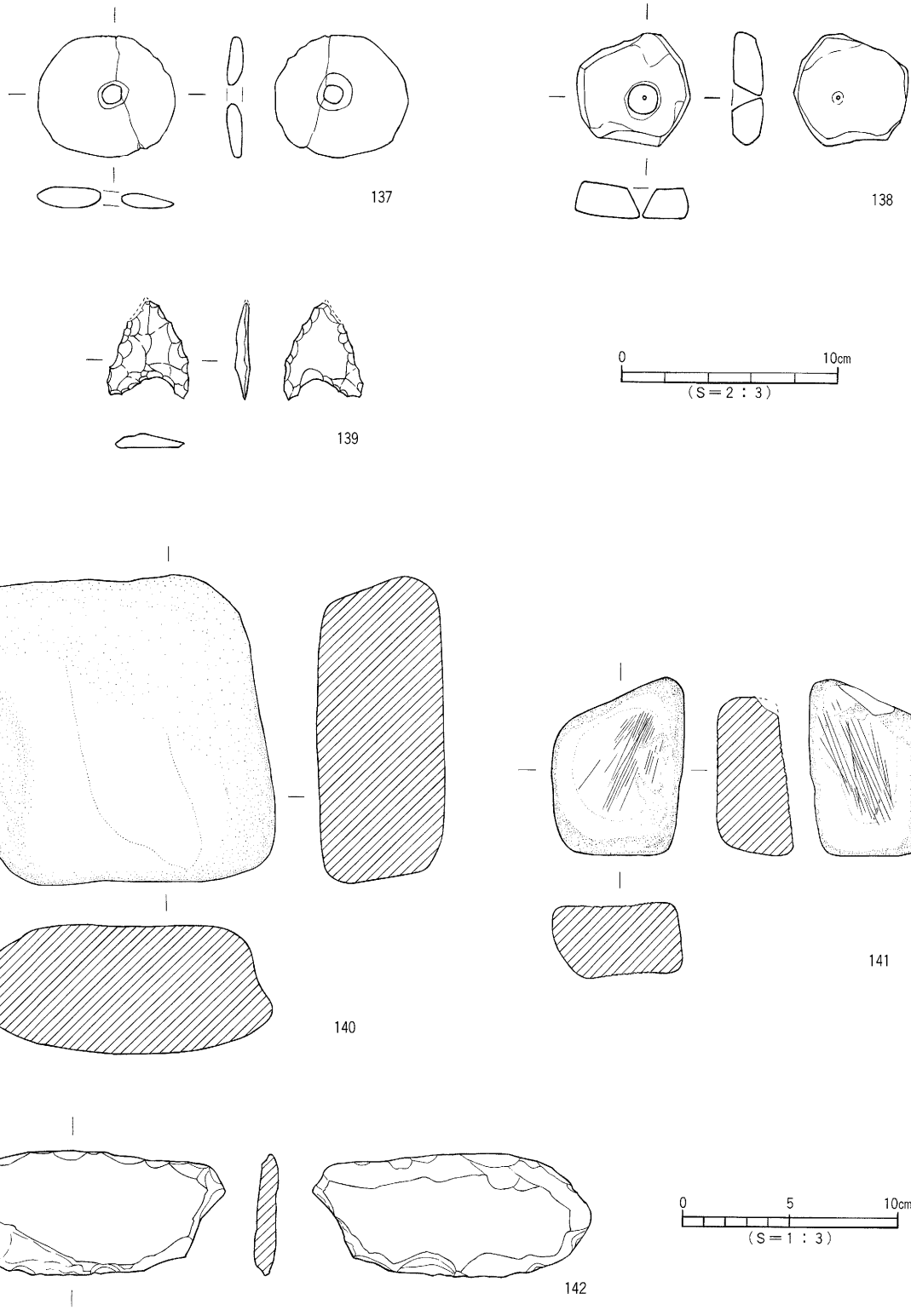
掘立６（第60図、図版18）

調査地南半部のＡ１～Ｂ３区に位置し、掘立５を切る。規模は４間×１間で桁行長8.10m、梁行長3.73mを測る南北棟である。主軸は桁行方向でＮ－10°－Ｅである。柱穴の平面形態は遺存状況の良好なものは方形ないし隅丸方形を呈し、断面形態は方形を呈する。柱穴規模は長さ80～95cm、幅65～75cm、深さ30～60cmを測る。埋土は２層に分かれ、１層黒色粘性土と黄色土の混合土（埋め戻し土）、２層黒色粘性土と黄色土の混合土である。柱痕が確認されなかったこと、土層の堆積状況から柱材は





第62図　柱穴出土遺物実測図（1）



第63図　柱穴出土遺物実測図（2）

抜き取られたと考えられる。柱穴掘り方で上場の浅い２段掘りは、抜き取り時の痕跡と考えられる。これらのことから埋土１層は柱の抜き取り後の埋め戻し土、２層は柱の立ち上げ時に詰め込まれた土と考えられる。柱穴内からの出土遺物は須恵器、弥生土器がある。

出土遺物（第61図、図版25）

須恵器（123～125）123は坏蓋の小片で、天井部と口縁部の境は不明瞭。口縁端部は丸くおさめる。124は坏身の受部片で、受部は上外方にのびる。125は坏と思われる口縁部片で、外傾するたちあがりは端部を丸くおさめる。

弥生土器（126・127）126は甕形土器の底部片で、平底である。外面はナデ上げによる調整が施される。127の器種は不明であるが、稲穂の圧痕がついている。

時期：出土した須恵器の特徴より、古代７～８世紀とする。

４）その他の遺構・遺物

①柱穴出土遺物（第62・63図、図版25・26）

弥生土器（128～132）128・129は甕形土器。折曲口縁で、128は頸部に多重沈線文と刺突列点文が施される。129は無文である。130・131は壺形土器で、130は水滴形の胴部から内傾する頸部は上方へ立ち上がり口縁部となる。口縁部より同じ工具による多重波状文と多重沈線文が１組となり胴部上位までに４段施され、最下段に刺突列点文を巡らせる。南半部検出のＳＫ14からも同じ文様パターンをもつものが出土している。131は口縁部片で、口縁端部は１条の沈線文を巡らせた後に刻目を施す。口縁内面には断面三角形の貼付凸帯が付く。132は平底の底部片で底外面にはヘラ記号が入る。

弥生土器は前期末から中期初頭に位置づけられる。

須恵器（133・134）133は坏蓋の小片で口縁端部はわずかに尖る。時期：７世紀。134は口縁部片で直線的に外傾する口縁部は端部付近で外反し、上外方向へ面をもち下方に拡張する。外面にはカキ目調整される。焼成不良品。時期：７世紀代。

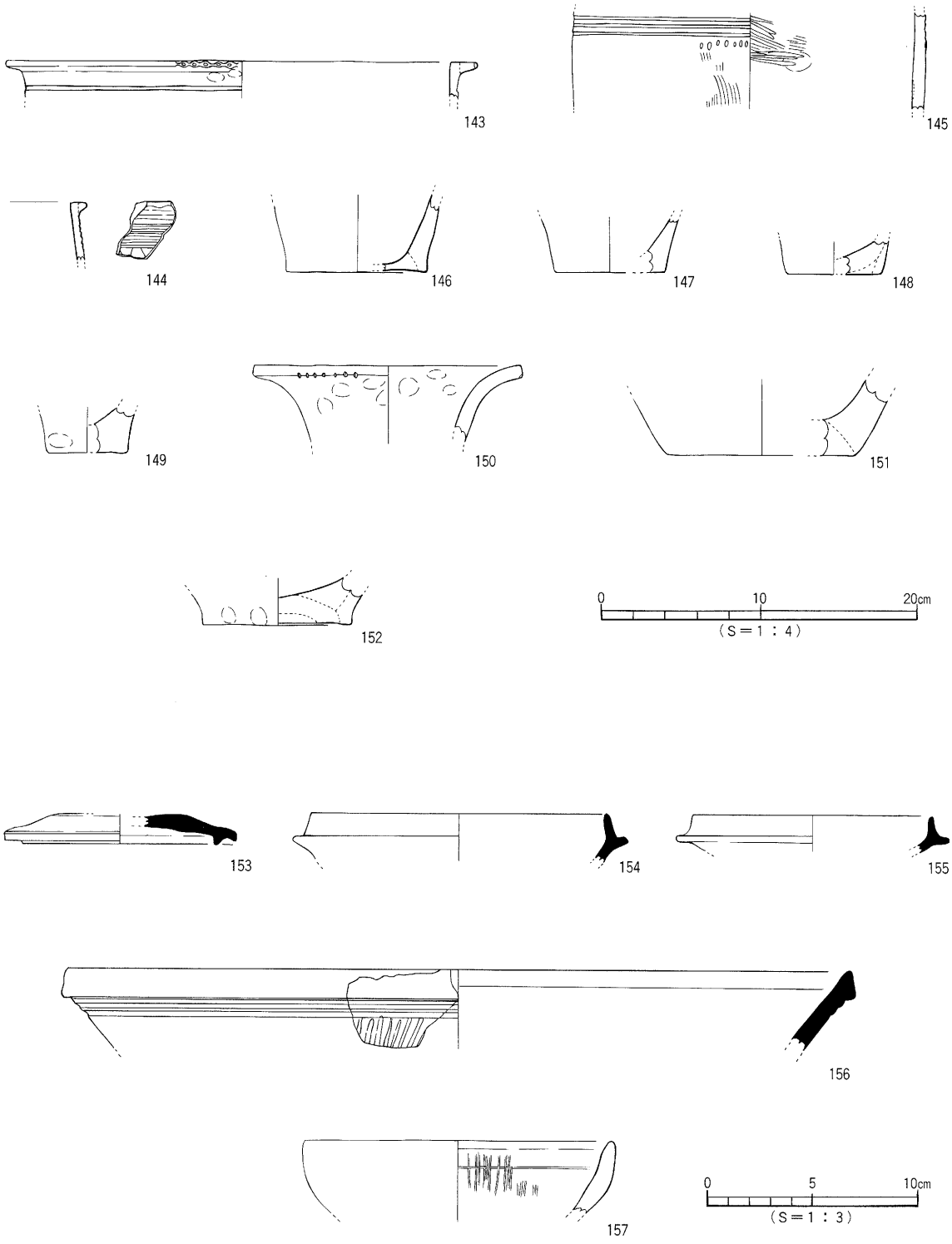
瓦（135・136）135は平瓦の角部の破片である。布目は粗く１㎠当り比較的安定しているところで経糸４本、緯糸５本がみられるがそれ以上粗い部分もある。焼成は良好で須恵質である。136も平瓦の破片で布目は細く１㎠当り経・緯糸とも10本がみられる。焼成は不良である。時期：古代。

土製品（137・138）137・138は土器片からの転用品の紡錘車である。137は磨滅により薄くなっている。138は製作途中品で円孔は貫通寸前で止まっている。時期：弥生時代前期末～中期初頭。

石製品（139～142）139はサヌキトイド製の凹基式無茎鏃である。140は砂岩製の摺り石で、上面にのみ擦痕がみられる。141は安山岩製の砥石で表裏とも筋状の研磨痕がみられる。142は緑泥片岩製の石庖丁の製作途中品で、縁は打ち欠いて成形している。土掘り具の可能性もある。時期：弥生時代前期末～中期初頭。

サヌキトイドの剥片：ＳＰ163からは調査時と埋土洗浄作業にて検出した。微細片～中型片まで出土し、総点数4,344点で合計重量48.224ｇを量る。出土点数による比率は微細片53％、細片33.7％、小片12.3％、中型片1.0％で微細片は半数を占める。

その他の柱穴（25基）からは調査時に検出した。図化は行っていない。微細片416点、細片243点、小片101点、中型片41点、大型片４点で合計重量62.327ｇを量る。



第64図　第Ⅳ層出土遺物実測図

②第Ⅳ層出土遺物（第64図、図版26）

弥生土器（143～152）

甕形土器（143～149）143・144は口縁部片で貼付口縁である。143の口縁端部は押圧後、刺突文が施され巡る。頸部には1条の沈線文が巡る。144は口縁部片で口縁端部は欠損している。頸部に6条の沈線文、その直下に山形文が施される。145は頸部片で、多重沈線文下に刺突文が巡る。146～149は底部片で、146はやや上げ底のもので、147～149は平底である。

壺形土器（150～152）150は口縁部片で、外反する口縁部は外方向に面をもち、口縁端面下端に刻目を施す。151・152は底部片で、151は平底、152はわずかに上底。

須恵器（153～156）153～155は蓋坏である。153は坏蓋で天井部は偏平。口縁端部はナデ調整により下方へわずかに拡張する。かえりは口縁端部より下方へ伸びる。時期：7世紀後半。154・155は坏身である。154のたちあがりは内傾後、外反気味に立ち上がる。155は受部には沈線が入り、受部と底部の境は明瞭である。時期：7世紀前半。156は甕の口縁部で、口縁部は直線的に上外方向へ立ち上がる。端部は外方に面を持ち、下方へ拡張される。端部直下に3条の沈線とヘラ描き斜線文が、内端面直下に沈線が1条巡る。時期：6世紀後半～7世紀前半。

土師器（157）157は坏である。内湾しながら立ち上がる口縁部で、端部は尖り気味に丸くおさめる。内面には口縁端部より1.6cmの位置に浅い沈線が1条施されている。また上下方向に暗文が看取される。時期：7世紀。

サヌキトイドの剥片を採集している。図化は行っていない。剥片は小片5点、中型20点で合計12.599gを量る。

③第Ⅲ層出土遺物（第65・66図、図版26）

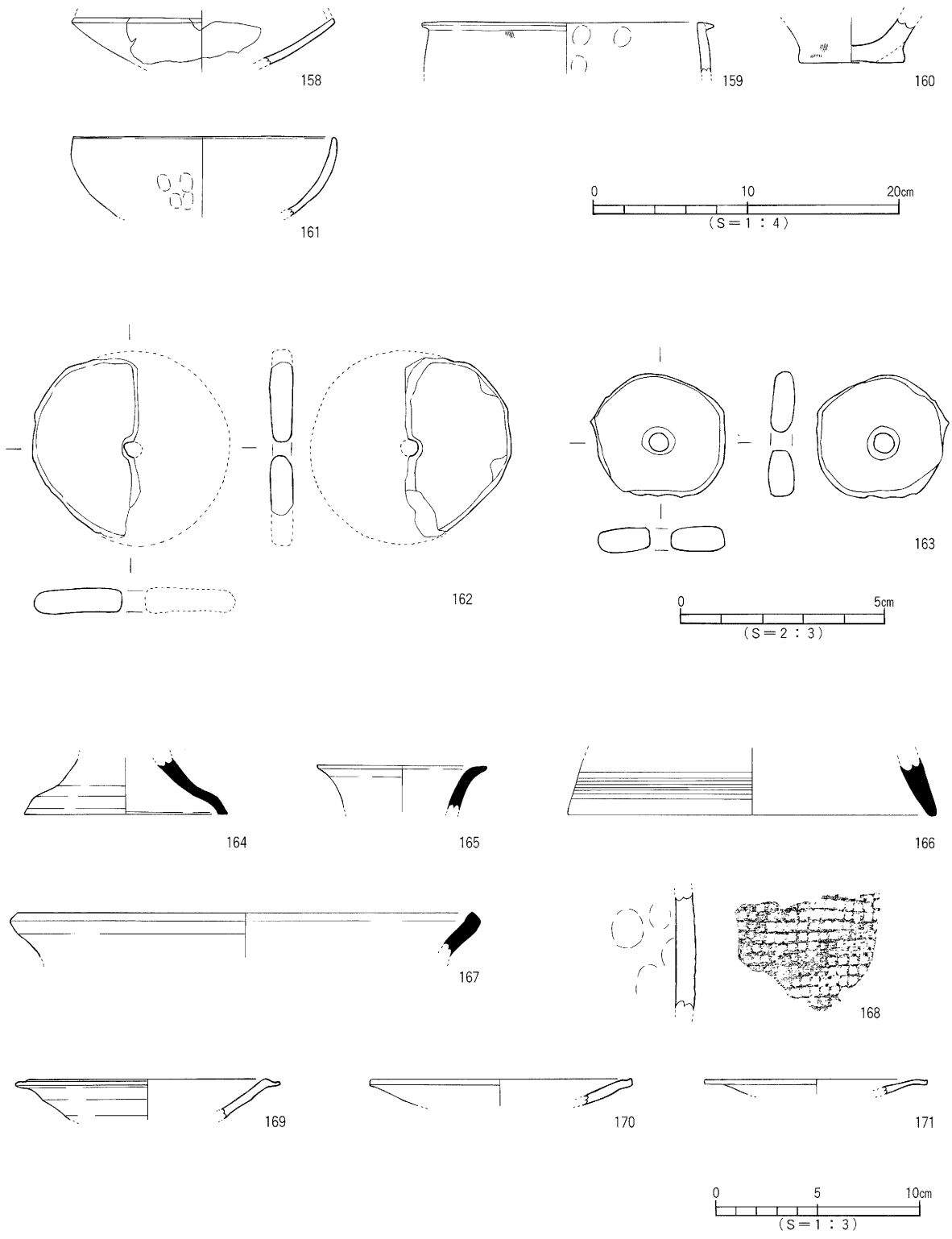
縄文土器（158）158は浅鉢形土器の胴部片で、胎土は精良である。時期：縄文時代晩期。

弥生土器（159～161）159は甕形土器の口縁部片で、貼付口縁である。施文は施されない。160は壺形土器の底部片で、突出する底部は中央がやや凹む。161は鉢形土器と思われる。内湾する口縁部で、端部を丸くおさめる。時期：159・160は弥生時代前期末から中期初頭。161は弥生時代後期に比定される。

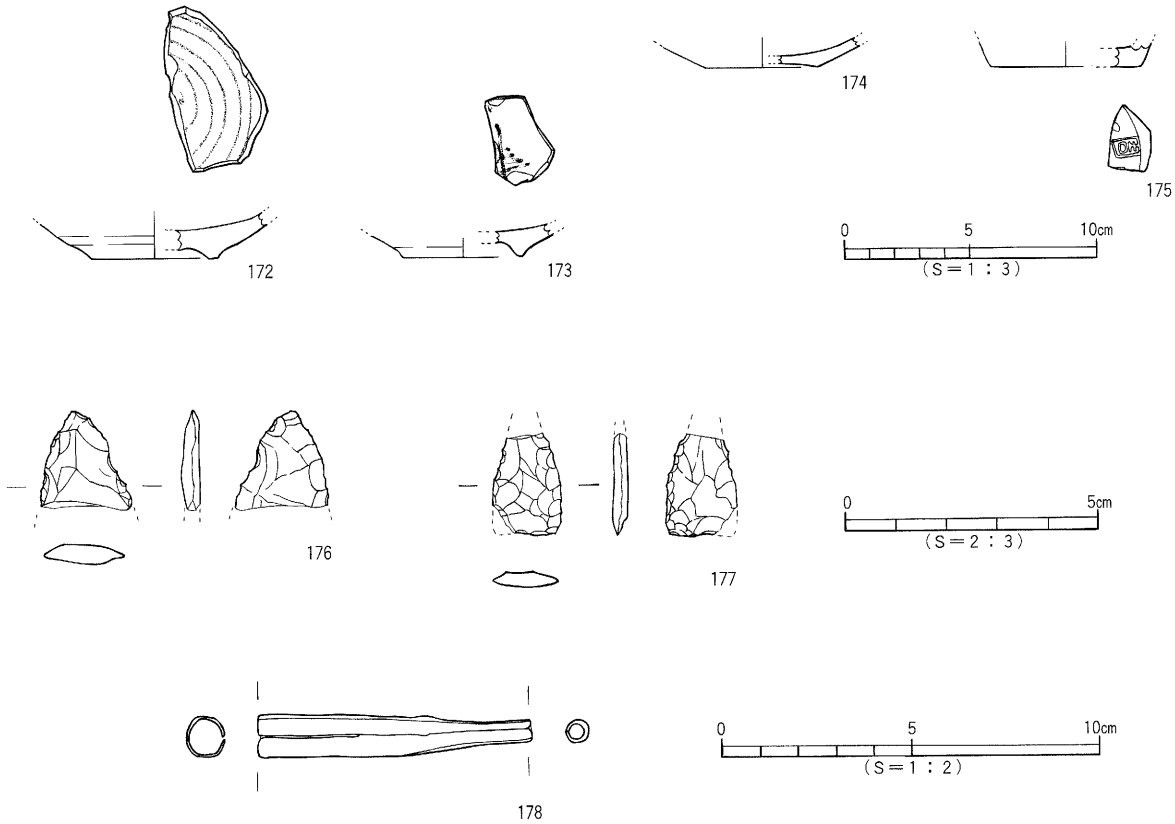
土製品（162・163）162・163は土器片からの転用品の紡錘車である。時期：弥生時代前期末から中期初頭に比定される。

須恵器（164～167）164は高坏の脚部片で、脚部は短脚で裾部は水平よりやや下向に伸び、外下方に屈曲して接地する。内外面とも回転ナデ調整。時期：7世紀前半～後半に比定される。165は壺の口縁部片で、外反しながら立ち上がる口縁部は外方で端部を尖り気味におさめる。166は器台の脚端部片と思われるもので、外面はカキ目調整される。167は甕の口縁端部片で、外傾する口縁部は上外方に面をもつ。口縁内面はナデ凹む。

陶器（168～175）168は亀山系と思われるもので、外面は正格子タタキ、内面は指頭痕が残る。焼成はやや良。169～174は皿の破片である。169～171は溝縁の段皿口縁部片。172～174は皿の底部片で、172は削り出し高台で内面にのみ施釉される。173は削り出し高台と思われるもので、高台は施釉される。見込みに絵柄が施される。174は平底の底部片で外面は回転ヘラケズリ、内面は施釉される。175は徳利もしくは瓶の底部片と思われるもので平底である。外面は底・体部ともに施釉、内面は無釉である。底部に刻印が施される。時期：168が中世、169～173は近世、174～175は近・現代に比定される。



第65図　　第Ⅲ層出土遺物実測図（1）

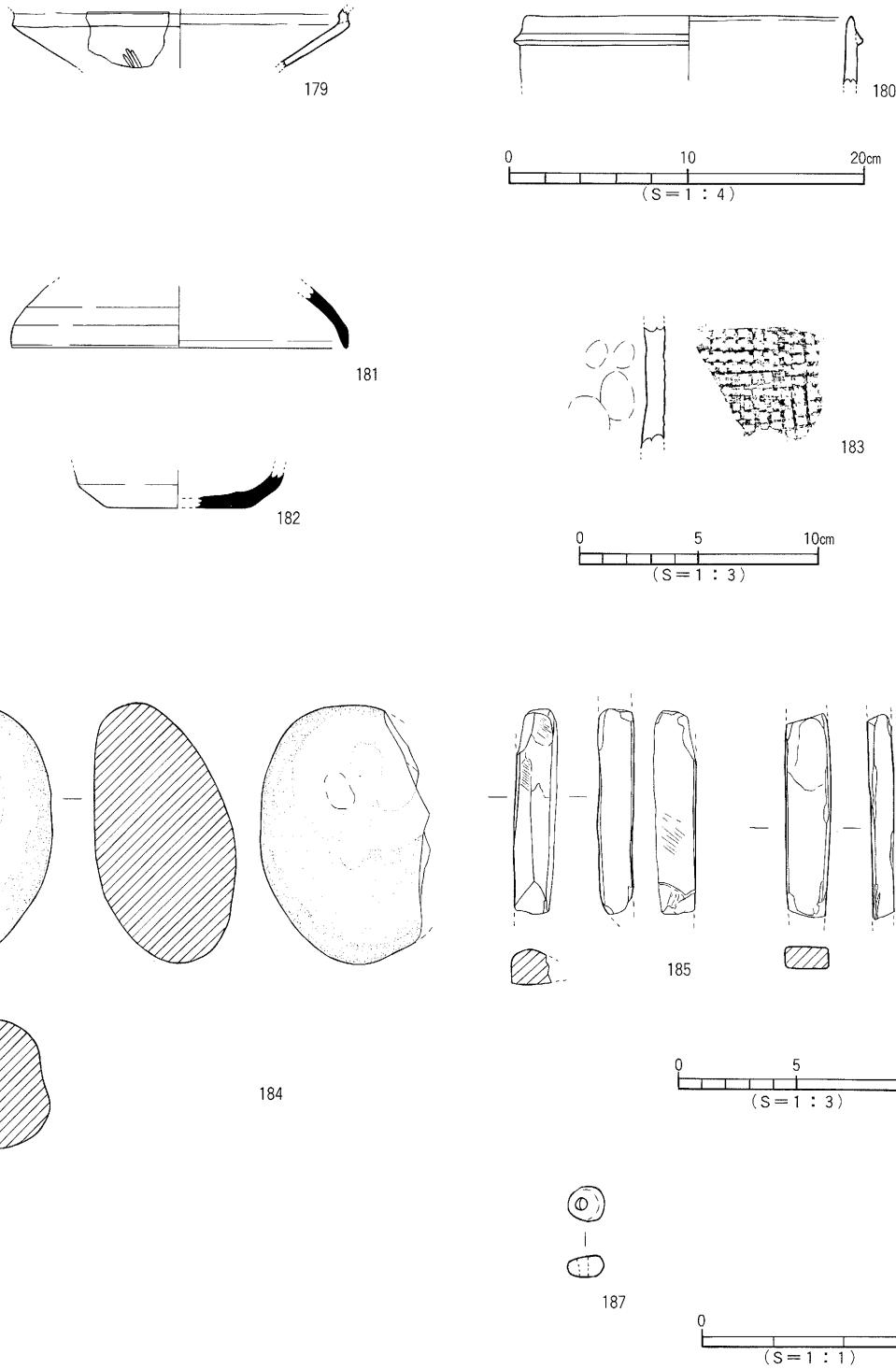


第66図　第Ⅲ層出土遺物実測図（2）

石製品（176・177）176はサヌキトイド製の鏃の製作途中品と思われるもので、細部加工が一部見られる。177はサヌキトイド製の平基式無茎鏃の破片である。時期：弥生時代に比定される。

金属製品（178）178は煙管の吸い口である。銅製で長さ7.2cmを測る。

サヌキトイドの剥片を採集している。図化は行なっていない。剥片は中型片３点、大型片３点で合計重量19.099ｇを量る。



第67図　出土層位不明遺物実測図

④第Ⅱ層出土遺物

サヌキトイドの剥片を採集している。図化は行なっていない。剥片は中型片15点、大型片４点で合計重量56.789ｇを量る。

⑤第Ⅰ層出土遺物

サヌキトイドの剥片を採集している。図化は行なっていない。剥片は中型片１点で1.064ｇを量る。

⑥出土層位不明遺物（第67図、図版26）

縄文土器（179）179は浅鉢の胴部片である。胎土は精良で、外面にはミガキ調整が看取される。

弥生土器（180）180は甕形土器で口縁下に断面三角形の凸帯を巡らす。口縁端面と凸帯文上ともに施文はされない。

須恵器（181・182）181は坏蓋で、内湾する口縁端部は尖り気味におさめられる。焼成は不良である。182は坏で、内面は回転ナデ調整、外面は回転ヘラケズリ調整である。

陶器（183）183は亀山系と思われるもので、外面は格子のタタキ、内面は指頭痕が残る。第Ⅳ層出土品（168）より焼成は良いが軟質である。

石製品（184～187）184は摺石の欠損品。185・186は緑泥片岩製。185は柱状片刃石斧、186は鑿の欠損品である。187は碧玉製の小玉である。

サヌキトイドの剥片を採集している。図化は行っていない。剥片は中型片４点、大型片１点で合計重量5.566ｇを量る。剥片はこの他に、遺構の切り合い関係が不明瞭であったため、埋土を混合して採集したものがある。本来はＳＰ163とＳＫ10に遺存していたもので、調査時と埋土洗浄作業にて検出した。微細片～中型片まで出土し、総点数3,710点で合計重量33.141ｇを量る。出土点数による出土は微細片35.30％、細片34.70％、小片11.40％、中型片0.60％である。

（４）小結

今回の調査では縄文・弥生・古墳時代と古代の遺構・遺物と、中・近世の遺物を検出した。

1）縄文時代

遺構は調査地南端部にて土坑１基を、遺物は土坑内及び後世の遺構内や覆土中より検出した。また調査地より南西方向150mの下苅屋遺跡２次調査地からも土器片が出土しており、調査地周辺には、特に古市遺跡、下苅屋遺跡２次調査地で検出された流路の影響を受けない微高地には集落が展開することが確実となった。今回検出された土坑は、遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられる。

2）弥生時代

弥生時代の遺構は土坑14基、溝３条、性格不明遺構３基を検出した。すべてが前期末から中期初頭に時期比定される。

前期末から中期初頭の土坑群が検出された遺跡には岩崎遺跡、久米高畑遺跡24～26次調査地などがある。検出された遺構は土坑群のみで、竪穴式住居址は検出されていない。また岩崎遺跡、久米高畑遺跡24・25次調査では２重に巡る環濠間と、おそらくは内濠の内側付近に集中して検出されており、集落内の端縁部に集中しているものと思われる。当調査地においても環濠は検出されていないものの竪穴式住居址などは検出されてなく、集落内での土坑の配置は岩崎遺跡や久米高畑遺跡24・25次調査と同様と考えられる。ＳＫ11は、壁面がオーバーハング状に掘られていることから貯蔵穴と考えられ、

岩崎遺跡における貯蔵穴の分類ではＡⅡ類に属する。ＳＫ４はＡグループに属するものであるが、ＳＫ４は貯蔵穴ＳＫ11の深さに近く50cmを測る。他の土坑の深さは平均で18cmである。断面形状においてもＳＫ４以外は皿状を呈するが、ＳＫ４は土坑東半部ではオーバーハング状に掘られており、断面形状も貯蔵穴ＳＫ11に近い。ＳＫ4の様な土坑の報告例はなく貯蔵穴とは断定しがたく、今回は貯蔵穴状と考えておき、今後の発掘調査によって類例が増え性格が解明される事を期待したい。調査地北半部Ｃ10区に位置するＳＫ５の基底面からは小ピットが検出された。小ピットの検出においては久米高畑遺跡24次調査地の年報中に上部施設が想定され、作業場的な施設であると指摘されている。ＳＫ５はこの様な性格の土坑と考えられる。遺構は廃棄される時点に於いて、単一層で埋まっているため人為的に埋め戻されたと考えられる。後述するが埋土中より弥生土器、石製品の他サヌキトイドの剥片が多量に出土した。多量にサヌキトイドの剥片が出土した土坑にＳＫ10がある。ＳＫ４を切る形で検出されたものでＳＫ５埋没後の遺構となり、剥片の多量の出土からＳＫ10は石器の製作場的な土坑と考えられる。ＳＫ５はＳＫ10以外の石器製作場より運ばれた土壌で埋め戻された事となり、調査区外には製作場的な土坑が存在するであろう。ＳＫ５・10から出土した剥片の出土量については後述する。Ｄグループに属するＳＫ１は東側が開口する蹄鉄状のテラスをもつ。この東側のテラスをもたない部分より土器が集中して出土した。また基底面の中央付近より緑泥片岩製の剣形石製品が出土したことなどから、ＳＫ４と同様、類例はないが墓的様相をもつものとしておきたい。

溝ＳＤ１は埋土の堆積状況から水利を目的としたものでなく、道路（通路）的なものと考えられる。溝は調査地の東西方向へ延長されるものと思われる。

３）古墳時代

遺構は竪穴式住居址１棟、掘立柱建物址５棟、溝４条を検出した。

竪穴式住居址ＳＢ１は西辺部のみの調査となったが、周壁溝が巡ることや主柱穴３基を確認したこと、また貼床調整後に柱穴が掘られたことなどが判り、成果の一つとなった。掘立柱建物址は建物の方向から３時期が確認できる。古い時期より１期として掘立２と掘立４が、２期として掘立３が、３期として掘立１と掘立５となる。新しくなるにつれて方向が東へ偏り、床面積が大きくなっていく傾向がみられる。掘立柱建物址のすべての柱穴からは柱痕跡が確認できなかった。柱材は抜き取られ新しい建物に使われたものであろう。溝ＳＤ４は埋土の堆積状況より空掘りであったと考えられ、区画溝的なものと想定され、少なくとも掘立柱建物址の１期段階では集落の南限を示していたのではないだろうか。

４）古代

古代の遺構は掘立柱建物址１棟がある。

平井地区で古代の建物址が検出されたのは初例であり、大きな成果となった。来住台地上で検出されている官衛遺跡から後続する遺跡群が久米窪田森元遺跡、久米窪田古屋敷遺跡で確認されていたが今回の調査で平井地区にまで確認された。建物址は桁行４間、梁行１間の南北棟のもので柱穴の配置から倉庫と想定される建物である。調査地周辺の平井谷には茨谷１号窯や、小野谷には松山平野東部古窯址群の生産地がある。調査地の字名が古市であること、今回の調査で倉庫的な建物が検出されたこと、古市遺跡の流路や溝からは当該期の須恵器が出土していることなどから須恵器の集積地的な役割を荷っていた遺跡とは考えられないだろうか。遺跡の広がりや性格の究明は、今後の周辺地域での調査の課題となる。

遺物では遺構内及び覆土から多量のサヌキトイドの剥片が、また紡錘車が本調査地でのみ出土した。剥片は縄文時代晩期の土坑と弥生時代前期末から中期初頭の土坑から出土しており、縄文時代の遺構の検出数が１基と少ない事から、調査地内より出土した剥片が縄文時代の土坑出土を除いては、弥生時代前期末から中期初頭の遺物として扱ってみる。紡錘車においても、弥生時代の遺構が前期末から中期初頭の短期間の存続であったことなどから、剥片と同様、当該期の遺物として扱うこととする。

今回の調査で出土した剥片は前述した様に若干縄文時代のものも混ざるため、遺跡から出土した全重量を確認する目的で一覧表（表１）を作成した。これらの中でも土坑ＳＫ10のデーターは、石器の製作場より出土したもので、今後の指標となり得る。調査時と埋土の洗浄作業にて検出した剥片は出土数と出土数による比率も記入している。出土一覧表の作成の結果、埋土の洗浄作業を行った土坑からの出土は微細片と細片の出土量が圧倒的に多く、ＳＫ10も含めて細部加工による破片を主に破棄したものと考えられる。遺構内からの大型片の出土が少ない理由として、大型片は充分に石器を作る大きさであること、弥生時代前期末から中期初頭以外の遺構内及び、第Ⅰ～Ⅲ層中からは大型片の出土が目立つ事などから、素材の粗割りは作業場内で行っていると考えられないだろうか。古市遺跡２次調査地からの剥片の出土総重量は681.218ｇを量る。剥片を検出する目的で埋土の洗浄作業を行ったが、土坑ＳＫ５の洗浄作業に於いては、剥片以外に碧玉製管玉の検出ができた。調査時には、よほど気を付けておかなければ見逃す恐れがある大きさの遺物である。埋土の洗浄作業の必要性を再認識することとなった。

今回の調査で、紡錘車を10点検出した。内訳は土器片からの転用品が９点、石製品が１点である。これらの出土により、松山市文化財調査報告書第64集に記載の集成図・一覧表には当該期の遺物の報告例が追加されることとなった。その結果、転用品は弥生時代前期末から中期初頭の報告例が加わった。石製品は、弥生時代中期中葉からの出現であったが、今回の出土で前期末から中期初頭に出現することがわかった。今回の報告では誌面の都合で集成図・一覧表の更新は行っていない。前回の報告以降も、発掘調査により資料の増加が見られ、これらも含めて今後更新を行い報告したい。以下、出土一覧表（表２）に記す。

籾圧痕が見られる遺物に遺物№19・127がある。特に№127は稲穂の圧痕がつく。籾圧痕が付けられていることで、当調査に於いても弥生時代前期末から中期初頭には稲作が行われていた事がわかる。今後の周辺地の調査により、当該期の水田址が検出されよう。

【文　献】

梅木謙一他　『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター1996
相原浩二他　『和気・堀江の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター1998
梅木謙一他　『小野川流域の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター1998
宮内慎一他　『岩崎遺跡』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター1998
河野史知他　『古市遺跡、下苅遺跡２・３次調査』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター2000
山之内志郎他　『小野地区の遺跡、北梅本悪社谷遺跡2次調査地、北梅本北池遺跡、北梅本太尺寺遺跡』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター2001
髙尾和長　『樽味四反地遺跡５次調査』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター2002

表1　剥片計量表

出土遺構	微細片	細片	小片	中型片	大型片	合計点数／合計重量(g)	備考
SK1				1	1	2／3.530	
SK2			1	2		3／1.435	
SK3		1		2	1	4／3.225	
SK4					1	1／10.786	
SK5	4,331／44.1%	3,623／36.8%	1,679／17.06%	195／2%	4／0.04%	9,832／173.586	
SK8	830／46.4%	625／35.1%	293／16.4%	32／1.8%	1／0.1%	1,781／29.359	
SK10	2,452／48.2%	1,637／32.16%	897／17.6%	101／2.0%	2／0.04%	5,089／84.170	
SK11					1	1／10.792	
SK12				1	1	2／4.934	
SK13	53／46.1%	28／24.3%	20／17.4%	10／8.7%	4／3.5%	115／27.143	
SK14	212／48.2%	137／31.1%	75／17.1%	16／3.6%		440／16.169	
SK15					1	1／3.246	
SD1			1	6	1	8／9.058	
SD3	10	3		1		14／1.525	
SD4				1	1	2／11.433	
SX1	197／33.5%	190／32.4%	142／24.2%	55／9.4%	3／0.5%	587／43.843	
SB1				4		4／2.946	
掘立1				3		3／5.056	
掘立3			2			2／0.173	
SP163	2,306／53%	1,461／33.7%	533／12.3%	44／1.0%		4,344／48.224	
柱穴内	416	243	101	41	4	805／62.327	
第Ⅳ層			5	20		25／12.599	
第Ⅲ層				3	3	6／19.099	
第Ⅱ層				15	4	19／56.789	
第Ⅰ層				1		1／1.064	
層位不明				4	1	5／5.566	
SP163+SK10	1,976／53.3%	1,288／34.7%	422／11.4%	24／0.6%		3,710／33.141	

表２　紡錘車一覧

番号	遺跡名	出土遺構	素材	断面形	法量				備考
					直径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	
44	古市２次	ＳＫ14	転用品	長方形	4.20	0.60	(0.50)	5.49	
54	古市２次	ＳＫ８	転用品	長方形	4.40	0.60	(0.40)	6.47	
78	古市２次	ＳＫ10	転用品	長方形	3.00	0.60	(0.40)	5.78	
89	古市２次	ＳＸ１	転用品	長方形	5.30	0.70	0.45	24.03	
90	古市２次	ＳＸ１	転用品	長方形	3.45	0.70		7.61	製作途中
108	古市２次	掘立１	石製品 砂岩	長方形	2.60	0.60	0.50	5.55	
137	古市２次	柱穴	転用品	長方形	2.80	0.40	0.40	3.27	磨滅著しい
138	古市２次	柱穴	転用品	長方形	2.70	0.70	0.60	5.65	製作途中 円孔は貫通寸前
162	古市２次	第Ⅲ層	転用品	長方形	4.50	0.60	(0.30)	7.45	
163	古市２次	第Ⅲ層	転用品	長方形	3.10	0.60	0.50	6.83	

遺構・遺跡一覧

（１）　以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（２）　遺物観察表の各記載について。

法量欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。

例)　口→口縁部、頸→頸部、底→底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）砂・長（１～４）→「１～４㎜大の砂粒・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。　◎→良好、○→良、△→不良

表3　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考	図版
1	C13	不整形	皿　状	1.44×1.40×0.21	灰褐色シルト (やや砂質)	弥生土器 石製品	弥生前期		13
2	B12・13	方　形	皿　状	2.30×1.22×0.18	褐色シルト (やや粘性)	弥生土器	弥生前期	SP8(掘立1)に切られる	10
3	C12	楕円形	皿　状	1.75×1.15×0.24	灰褐色シルト (やや砂質)	弥生土器	弥生前期	SP44,46,149に切られる	11
4	C7～D8	方　形	袋　状	2.67×1.60×0.50	灰褐色シルト (黄色土混・砂質)	弥生土器 石製品	弥生前期		7・8
5	C10	方　形	皿　状	3.00×1.90×0.24	明褐色シルト (やや粘性)	弥生土器 石製品 管玉	弥生前期		9
6	C11	楕円形	皿　状	1.50×0.90×0.23	黄灰色砂質土	弥生土器	弥生前期		11
7	C11・12	楕円形	皿　状	1.40×0.93×0.16	明灰褐色土 (細砂質)	弥生土器	弥生前期	SP128に切られる	12
8	C10	楕円形	皿　状	1.14×0.70×0.27	灰茶褐色シルト	弥生土器	弥生前期		12
9	C11	楕円形	皿　状	0.45×0.45×0.20	明褐色シルト (やや粘性)	弥生土器 石製品	弥生前期	SK11に切られる	
10	C10	不整形	皿　状	1.62×1.10×0.18	灰褐色シルト	弥生土器 石製品	弥生前期	SK5を切る	13
11	C11・12	円　形	袋　状	1.18～1.24×1.10～1.18×0.44	暗灰茶褐色土 (黄色土・礫石混入)	弥生土器 石製品	弥生前期	掘立3に切られ、SK9を切る	12
12	B14・15	楕円形	レンズ状	1.90×1.34×0.14	黒色粘質土	弥生土器	弥生前期	SB1に切られる	11
13	C1	楕円形	逆台形	1.40×1.40×0.13	黒色粘質土	縄文土器 石製品	縄文晩期		6
14	B7	隅丸方形	皿　状	1.50×1.30×0.12	黒灰色土	弥生土器 石製品	弥生中期		10
15	A6	円　形	皿　状	0.94×0.87×0.3	黒褐色土	弥生土器	弥生中期		

表4　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考	図版
1	B12～C13	レンズ状	7.00×1.32×0.20	褐色シルト (粘性あり)	弥生土器 石製品	弥生前期	掘立1・2に切られる	13
2	A・B8	皿　状	1.75×0.50×0.08	暗茶褐色土 (黄色土混)	弥生土器	弥生		
3	B8	皿　状	1.75×0.61×0.05	暗茶褐色土 (黄色土混)	弥生土器	弥生		
4	A7～C5	逆台形	13.00×0.80×0.24	黒灰褐色土	須恵器	古墳	SP5を切る	17
5	A6～B7	皿　状	5.50×0.67×0.08	黒灰色土	須恵器 弥生土器	古墳	SD4に切られる	17
6	B6	舟底状	2.25×0.24×0.06	茶褐色シルト	須恵器 弥生土器	古墳		
7	B5～C5	皿　状	3.10×0.30×0.06	茶褐色シルト	須恵器 弥生土器	古墳		

表５　性格不明遺構一覧

性格不明遺構(SX)	地　区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考	図版
1	C9	不整形	皿　状	3.40×3.10×0.07	灰褐色シルト(やや砂質)	弥生土器 石製品	弥生	掘立4に切られる	
2	A10	長方形	逆台形状	1.40×0.90×0.55	黒褐色砂質土(黄色土混り)	弥生土器	弥生前期		
3	A10	長方形	皿　状	1.40×1.30×0.27	暗灰茶褐色土	弥生土器 石製品	弥生		

表６　竪穴式住居址一覧

竪穴(SB)	時　期	平面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(m^2)	主柱穴(本)	内部施設				周壁溝	備　考	図版
						高床	土坑	炉	カマド			
1	古墳	隅丸方形	5.90×1.60×0.05	9.44	3					○	貼床	15

表７　掘立柱建物址一覧

掘立	規　模(間)	方向	桁　行		梁　行		床面積(m^2)	時　期	備　考	図版
			実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)				
1	4×2	南北	5.40	1.25·1.35·1.30·1.40	3.50	1.50·2.05	18.9	古墳	ＳＫ2·ＳＤ1·掘立3を切る	16
2	2×1	南北	2.50	1.40·1.30	2.70	1.30	6.75	古墳	ＳＤ1を切る	16
3	3×2	東西	4.68	1.65·1.60·1.40	3.35	1.75·1.50	15.678	古墳	掘立1に切られ、ＳＫ3·11を切る	16
4	2×2	東西	3.90	1.45·1.50	3.05	2.00	11.895	古墳	ＳＸ1を切る	17
5	3×3	北東	5.25	2.10·1.60·1.65	4.40	1.60·1.30·1.50	23.10	古墳	掘立6に切られる　新·旧あり	17
6	4×1	北東	8.10	1.90·2.0·1.93·2.05	3.73	3.73	30.213	古代	掘立5を切る	18

表８　ＳＫ13出土遺物観察表（土製品）　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
1	鉢	口径(41.2) 残高8.2	端部は面をもつ。	ナ　デ	ナ　デ	黒色·浅黄橙色 黒褐色	長(0.5～2) ○		19
2	鉢	残高9.3	胴部片。	ケズリ	ナ　デ	黒褐色 黒褐色	微砂粒 金 ○		19
3	鉢	残高6.8	1条の沈線。	ケズリ ナ　デ	ナ　デ	浅黄橙色 灰白色	石·長(0.5～2) 金 ○		19
4	鉢	残高5.2	胴部片。	ケズリ ナ　デ	ヨコナデ	灰黄褐色 黒褐色	微砂粒 金 ○		19
5	鉢	残高4.2	胴部片。	ケズリ ナ　デ	ナ　デ	灰黄色 黒褐色	微砂粒 金 ○		19
6	鉢	残高2.9	胴部片。	ミガキ	ミガキ	灰白色 灰黄色	微砂粒 金 ○		19
7	鉢	残高3.8	端部は尖る。	ケズリ	ナ　デ	褐灰色 褐灰色	微砂粒 金 ○		19
8	鉢	残高2.8	口縁端部にＤ字状の刻目。 外面に沈線1条、内面に沈線3条。	ナ　デ	ミガキ	褐灰色 褐灰色	微砂粒 金 ○		19

ＳＫ13出土遺物観察表（土製品）　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
9	鉢	残高3.3	波状口縁部で端部は尖る。	ナ　デ	ケズリ	にぶい黄橙色 灰白色	微砂粒 ○		19
10	鉢	底径5.6 残高3.3	凹み底。	ナ　デ	ナ　デ	にぶい橙色 黒褐色	微砂粒 金 ○		19

表９　ＳＫ13出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
11	台　石	破片	安山岩	17.20	17.10	15.80	7,500.00		20
12	凹み石	完形	砂　岩	13.30	8.80	5.30	750.00		20
13	摺　石	破片	砂　岩	8.90	9.90	7.00	885.00		20
14	摺　石	完形	砂　岩	9.20	4.40	1.90	111,058.00		20
15	摺　石	破片	安山岩	3.70	2.00	1.13	10,710.00		20
16	摺　石	破片	安山岩	3.70	1.50	1.00	6.45	円盤型	20

表10　ＳＫ４出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
17	甕	残高3.0	頸部に1条の沈線。	ナデ ㊦(指頭痕)	ナ　デ	にぶい橙色 橙　色	石・長(0.5~2) ○		
18	甕	底径(8.4) 残高3.5	突出する底部。	マメツ	マメツ ㊦(指頭痕)	にぶい橙色 灰白色	石・長(1~2) ○		
19	壺	底径7.0 残高7.3	底部外面に籾圧痕。	ハケ(6本／cm) →ミガキ ㊦ナ　デ	ナ　デ ㊦(指頭痕)	にぶい赤褐色 明褐灰色	長(0.5~1.5) 金 ○		21

表11　ＳＫ４出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
20	台　石	完形	砂　岩	24.60	31.90	13.00	12,400.00		21

表12　ＳＫ５出土遺物観察表（土製品）　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
21	甕	口径(27.8) 残高15.4	折り曲げ口縁。沈線8条。口縁端面と8条の沈線下に1条の刺突文が巡る。	㊤ヨコナデ ハケ(6本／cm)	マメツ	にぶい橙色 灰白色	石・長(0.5~1.5) ○		21
22	甕	口径(28.0) 残高4.2	如意形口縁。 9条の沈線。	ナ　デ	マメツ	にぶい橙色 黄橙色	石・長(1~3) ○		
23	甕	口径(22.2) 残高6.8	折り曲げ口縁。 5条以上の沈線。直下に刺突文。	マメツ	マメツ	明黄橙色 黄橙色	石・長(0.5~3) ○		
24	甕	口径(23.0) 残高7.3	沈　線 刺突文 } 痕跡あり。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長(0.5~1.5) ○		

ＳＫ５出土遺物観察表（土製品）　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
25	甕	口径(18.4) 残高6.5	L字状口縁。 口縁端部に刻目。	ミガキ ㊀ヨコナデ (指頭痕)	ナデ	灰褐色 にぶい黄橙色	石・長(0.5~1) ○		
26	甕	口径(16.4) 残高4.4	L字状口縁。 口縁端部に刻目。	ナデ→ミガキ ㊀ヨコナデ	ナデ	灰褐色 にぶい黄橙色	石・長(0.5~1.5) ○		
27	甕	口径(19.0) 残高11.4	折り曲げ口縁。	ナデ (指頭痕)	ナデ	褐灰色 にぶい黄橙色	微砂粒 ○		21
28	壺	口径(8.0) 残高4.8	口縁部に２ヶ所の円孔あり。 １ヶ所のみ貫通。	マメツ	ナデ	浅黄橙色 黒褐色	微砂粒 ○		21
29	甑	底径(7.0) 残高9.6	焼成後穿孔。	マメツ	マメツ	にぶい橙色・にぶい赤橙色 灰白色・にぶい赤橙色	石・長(0.5~2.5) 金 ○	甕からの転用品	21
30	甑	底径(8.0) 残高6.3	突出する底部。 焼成後穿孔。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 灰白色	石・長(0.5~2.5) ○	甕からの転用品	21
31	甕	底径(8.0) 残高3.1	突出する底部。 わずかに上げ底。	マメツ	マメツ	橙色 黒褐色	石・長(0.5~2) 金 ○		

表13　ＳＫ５出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
32	鏃	１部欠損	サヌキトイド	2.40	1.40	0.40	1.29		21
33	鏃	先端部	サヌキトイド	0.90	0.80	0.20	0.15		
34	錐	先端部欠損	サヌキトイド	2.20	1.50	0.50	1.70		21
35	石皿	完形	砂岩	16.50	15.80	2.80	1.33		

表14　ＳＫ５出土遺物観察表（装身具）

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 最大厚(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
36	管玉	破片	碧玉	(1.60)	3.50	0.80	0.02		21
37	管玉	破片	碧玉	(2.70)	(3.50)	0.90	0.01		21
38	管玉	破片	碧玉	(3.20)	(2.80)	1.00	0.02		21

表15　ＳＫ２出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
39	甕	口径(23.0) 残高3.0	折り曲げ口縁。 ４条以上の沈線。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色・黒褐色 にぶい橙色	微砂粒 ○		
40	甕	残高5.1	４条以上の沈線。	ハケ(8本／cm) →ミガキ	ナデ	にぶい橙色 橙色	微砂粒 ○		
41	壺	残高5.2	２条の沈線。	ミガキ (指頭痕)	ナデ	灰白色 橙色	石・長(0.1~2) ○		

表16　ＳＫ14出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
42	甕	残高6.6	４条以上の沈線。 直下に刺突文。	マメツ	マメツ	黒褐色・明黄褐色 黒褐色	石・長(1~5) ○		
43	壺	残高8.9	波状文 沈線 } 同じ工具。５条。 最下段に１条の刺突列点文。	ハケ(12本／cm)	ナデ	にぶい橙色 黄灰色	微砂粒 ○		22
44	紡錘車	径(4.2) 厚さ0.6 重量5.490g	土器片より製作。 断面長方形。	ナデ	マメツ	褐色	石・長(1) ○	転用品	22

表17　ＳＫ14出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
45	鏃	ほぼ完形	サヌキトイド	1.70	0.90	0.30	0.50		22

表18　ＳＫ３出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
46	甕	底径7.6 残高14.1	突出する底部。 底部中央のみ上げ底。	ハケ →ナデ	マメツ	橙色 にぶい橙色	石・長(1~4) ○		22

表19　ＳＫ６出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
47	壺	底径(7.5) 残高10.6	４条以上の沈線。	ミガキ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(0.5~2) ○		22
48	甕	底径(7.0) 残高4.3	平底。	ナデ	マメツ (指頭痕)	にぶい黄褐色 黄橙色	微砂粒 ○		
49	甕	底径(7.0) 残高4.0	平底。	ナデ (指頭痕)	マメツ	明赤褐色 にぶい黄褐色	石・長(0.5~2) ○		
50	壺	底径(7.0) 残高6.7	やや突出する底部。	マメツ	ナデ	にぶい橙色 灰白色	石・長(0.5~1.5) ○		
51	壺	底径7.0 残高4.1	平底。	ナデ	ナデ (底)(指頭痕)	明褐灰色・黒褐色 灰白色	微砂粒 金 ○		

表20　ＳＫ８出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
52	甕	残高1.8	折り曲げ口縁。	ハケ(6本／cm)	ナデ	灰白色 灰白色	石・長(0.5~1.5) ○		
53	甕	底径(6.0) 残高4.5	平底。	ナデ	ナデ	橙色 暗褐色	石・長(0.5~2) ○		
54	紡錘車	径4.4 厚さ0.6 重量6.47g	土器片より製作。 断面長方形。	マメツ	マメツ	橙色	石・長(1) ○	転用品	22

表21　ＳＫ８出土遺物観察表（石製品）　(1)

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
55	鏃	先端部のみ	サヌキトイド	1.00	0.80	0.20	0.10		

ＳＫ８出土遺物観察表（石製品）　(2)

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
56	鏃	破片	サヌキトイド	1.50	1.10	0.30	0.57		
57	鏃	破片	サヌキトイド	1.70	1.60	0.20	0.75		

表22　ＳＫ９出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
58	甕	口径(24.2) 残高18	折り曲げ口縁。端面に刻目。 ７条の沈線。	ハケ(6本／cm) ㊀ ヨコナデ	ナ　デ ㊀ ヨコナデ	にぶい黄橙色 黄橙色	微砂粒 ○		22
59	甕	口径(31.4) 残高3.2	貼り付け口縁。端面に刻目。 ５条の沈線。	ヨコナデ	ヨコナデ	褐灰色 褐灰色	微砂粒 金 ○		
60	甕	口径(29.0) 残高7.2	貼り付け口縁。 口縁端面に押圧痕。	ナ　デ ㊀ ヨコナデ	ナ　デ	褐　色 にぶい褐色	微砂粒 ○		
61	甕	底径6.8 残高11.8	突出気味の底部。 底部中央のみ上げ底。	ナ　デ	マメツ	にぶい橙色 灰褐色	石･長(0.5~3) 金 ○		
62	壺	残高12.5	９条の沈線。	ミガキ	マメツ	淡黄色 黄灰色	石･長(1~4) ○		22
63	壺	底径5.8 残高4.9	やや突出する底部。	ミガキ	マメツ	明褐灰色･黒褐色 にぶい橙色	石･長(1~3) ○		

表23　ＳＫ９出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
64	摺石	完形	砂岩	6.50	5.50	3.10	150.00		22

表24　ＳＫ15出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
65	甕	底径(6.0) 残高2.2	輪高台状の底部。	ナ　デ (指頭痕)	ナ　デ	浅黄橙色 褐灰色	石･長(0.5~3) ○	縄文片 ？	

表25　ＳＫ11出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
66	甕	口径(27.8) 残高4.8	貼り付け口縁。端部に刻目。 沈線12条。	マメツ	ミガキ	にぶい橙色 黒褐色	石･長(1~1.5) 金 ○		
67	壺	口径(19.4) 残高1.4	口縁部片。 蓋形土器。	マメツ	ナ　デ	灰白色 にぶい黄橙色	微砂粒 金 ○		
68	甕	底径(6.8) 残高2.1	若干上げ底。	タタキ	マメツ	にぶい黄橙色 灰白色	微砂粒 金 ○		

表26　ＳＫ11出土遺物観察表（石製品）　(1)

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
69	扁平片刃石斧	刃部欠損	緑色片岩	13.40	4.30	2.00	192.00		23

ＳＫ11出土遺物観察表（石製品）　(2)

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
70	蛤刃石斧	破片	緑色片岩	12.40	5.60	2.30	292.00		23

表27　ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
71	甕	口径17.0 残高7.6	折り曲げ口縁。 ３条の沈線。	㊀ヨコナデ マメツ	ヨコナデ	にぶい橙色 灰白色	微砂粒 ○		
72	甕	残高2.4	貼り付け口縁。 頸部に２条以上の沈線。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 灰白色	石･長(0.5~2) ○		
73	甑	底径(6.4) 残高11.2	突出する底部。 焼成後穿孔。	ハケ(7本／cm) (指頭痕)	ナ　デ (指頭痕)	灰白色 灰白色	微砂粒 ○		23
74	壺	残高25.5	胴部片。	ハケ(7本／cm) →ミガキ	マメツ (指頭痕)	灰白色 灰白色	微砂粒 ○		23
75	壺	口径(15.6) 残高9.8	短く外反する口縁。	ナ　デ (指頭痕)	ナ　デ (指頭痕)	灰白色 灰白色	微砂粒 金 ○		23
76	壺	口径(20.0) 残高2.2	口縁外端面に沈線２条の後、 刻目を施す。	ハケ(8本／cm) →ナ　デ	ハケ(8本／cm)	灰白色 灰白色･茶褐色	微砂粒 ○		

表28　ＳＫ１出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
77	剣　形	完形	緑色片岩	24.10	3.90	1.70	324.00		23

表29　ＳＫ10出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
78	紡錘車	径3.0 厚さ0.6 重量5.78g	土器片より製作。 断面長方形。	マメツ	マメツ	浅黄色 浅黄色	石･長(0.5~3) ○	転用品	24

表30　ＳＫ10出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
79	鏃	約1/2残	サヌキトイド	2.60	0.90	0.30	0.32	凹基式無茎	

表31　ＳＤ１出土遺物観察表（土製品）　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
80	甕	口径(23.4) 残高5.5	折り曲げ口縁。 沈線９本。刺突文１条。	マメツ	ナ　デ	灰白色 にぶい黄橙色	石･長(1~3) ○		
81	甕	口径(18.0) 残高1.4	折り曲げ口縁。 口縁端部に刻目。１条以上の沈線。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰褐色 にぶい橙色	微砂粒 ○		
82	甕	残高10.1	胴部に沈線２条以上。 刺突文１条。	ハケ(6本／cm)	ナ　デ (指頭痕)	灰白色 にぶい黄橙色	微砂粒 ○		
83	壺	残高7.3	口縁内面に断面三角形の凸帯。	ナ　デ	ナ　デ	灰黄色 灰黄色	石･長(1~5) ○		

ＳＤ１出土遺物観察表（土製品）　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
84	甕	底径(6.0) 残高3.6	突出する底部。 輪高台状。	マメツ	ナデ	にぶい黄橙色 橙色	石・長(1~2.5) ○		
85	甕	底径(7.0) 残高4.2	平底。	ハケ→ナデ	マメツ (指頭痕)	浅黄橙色 褐灰色	微砂粒 ○		
86	甕	底径(6.8) 残高5.5	突出する底部。 若干上げ底。	ハケ(7本/cm)→ミガキ ㊎ミガキ	マメツ	にぶい橙色 灰白色	石・長(1~3) ○		

表32　ＳＤ１出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
87	石庖丁	長楕円形 線刻あり	緑色片岩	5.90	3.10	0.60	19.84		24
88	鏃	先端部欠損 片脚わずかに欠損	サヌキトイド	1.10	1.40	0.30	0.27		

表33　ＳＸ１出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
89	紡錘車	径5.3 厚さ0.7 重量24.03g	土器片より製作。 断面長方形。	ナデ	マメツ	褐色 薄褐色	石・長(0.5~3) ○	転用品	24
90	紡錘車	径3.45 厚さ0.7 重量7.61g	土器片より製作。 断面長方形。	ハケ	マメツ	薄黄色 薄黄色	石・長(1~3) ○	製作途中品	24

表34　ＳＸ１出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
91	鏃	先端部のみ残存	サヌキトイド	1.50	1.40	0.30	0.52	未製品	
92	手持ち砥石	端部欠損	安山岩	19.60	5.60	5.10	670.00		24

表35　ＳＸ２出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
93	甕	口径(24.5) 残高3.0	貼り付け口縁。端部に刻目。 ９条以上の沈線が巡る。	ナデ (指頭痕)	ミガキ	にぶい褐色 にぶい橙色	微砂粒 金 ○		24
94	甕	残高7.7	６条以上の沈線。	ミガキ	ミガキ	黒褐色 にぶい黄橙色	石・長(0.5~1.5) 金 ○		24
95	壺	口径(20.0) 残高2.0	口縁端部に１条の沈線。	ナデ	ナデ (指頭痕)	にぶい橙色 橙色	石・長(1~2) ○		
96	壺	残高7.3	口縁内面に刻目凸帯。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長(0.5~5) ○		24

表36　ＳＸ３出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
97	砥石	破片	安山岩	8.10	7.80	8.60	650.00		

表37　ＳＢ１出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
98	坏蓋	口径13.0 器高3.5	天井部にヘラ記号。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	㊦　ナ　デ ㊐ 回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ○		24
99	坏身	口径(13.2) 残高4.4	たちあがりは短く内傾。	㊐回転ナデ ㊎回転ヘラケズリ	㊐ 回転ナデ ㊎　ナ　デ	灰　色 灰　色	微砂粒 ○		24
100	坏身	口径(12.0) 残高2.9	たちあがりは短く内傾。	㊐回転ナデ ㊎回転ヘラケズリ	回転ナデ	淡黄色 淡黄色	微砂粒 △		24
101	甕	口径(16.4) 残高8.4	外傾する口縁。 端部は内傾する面をなす。	㊐ ヨコナデ ハケ(6本／cm)	㊐ ヨコナデ ナ　デ	茶褐色 茶褐色	微砂粒 ○		
102	甕	残高4.6	頸部片。	マメツ	マメツ	橙　色 橙色・にぶい赤褐色	微砂粒 ○		
103	支脚	底径(10.4) 残高2.8	外面に沈線。 全周はしない。	マメツ	ハケ(10本／cm)	橙　色 にぶい橙色	微砂粒 金 ○		24

表38　掘立１出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
104	高坏	底径(11.3) 残高2.2	脚端部に凹線状のくぼみ。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 △		25
105	甕	残高8.2	10条の沈線。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1~3) 金 ○		
106	甕	底径(5.2) 残高5.2	平底。	ハ　ケ ㊎ マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	微砂粒 ○		
107	甕	底径(6.0) 残高4.5	平底。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	微砂粒 金 ○		

表39　掘立１出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				径(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
108	紡錘車	完形	砂岩	2.60		0.60	5.55	断面長方形	25

表40　掘立３出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
109	坏身	口径(12.0) 残高2.8	たちあがりは内傾外反し端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ○		25
110	甕	口径(21.5) 残高6.9	外反する口縁。 断面方形。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	微砂粒 △		25
111	甕	口径(15.9) 残高4.6	外傾する口縁。 上外方向に面をもつ。	㊐ マメツ ナ　デ	ナ　デ	橙　色 橙　色	石・長(0.5~4) ○		
112	壺	口径(24.0) 残高1.8	端部は上下方に拡張。 口縁端部に斜格子目文。	ナ　デ	マメツ	にぶい黄橙色 灰白色	石・長(0.5~1.5) ○		
113	壺	残高5.8	内面に押圧のある凸帯。	ハケ(8本／cm)	ミガキ ナ　デ (指頭痕)	淡黄色 にぶい橙色	微砂粒 金 ○		
114	壺	底径(8.0) 残高5.8	突出する底部。 底部中央に穿孔の痕跡。	ナ　デ	マメツ	にぶい黄橙色 灰白色	石・長(1~5) ○		
115	甕	底径(7.0) 残高5.7	平底。	マメツ	マメツ	橙　色 橙　色	石・長(0.5~3) 金 ○		

表41　掘立３出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
116	石庖丁	完形	緑色片岩	12.50	6.40	1.80	218.00	製作途中	
117	敲石	完形	緑色片岩	8.30	10.30	2.20	388.00		
118	石皿か台石	破片	砂岩	17.30	10.80	4.80	1,430.00		
119	砥石	破片	砂岩	23.50	7.00	9.40	2,020.00		

表42　掘立４出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
120	坏蓋	口径(15.0) 残高3.0	口縁端部内面は段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色 褐灰色・にぶい橙色	微砂粒 ○		
121	甕	口径(16.5) 残高3.2	外反する口縁。 上外方に面をもち玉縁状。	回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰　色	石・長(1~2) ○	自然釉	

表43　ＳＤ５出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
122	壺	底径(7.0) 残高7.1	やや突出する若干上げ底の底部。	マメツ (指頭痕)	マメツ (指頭痕)	灰白色 灰白色	石・長(1~2.5) ○		

表44　掘立６出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
123	坏蓋	口径(12.0) 残高3.8	天井部と口縁部の境は不明瞭。	㋐回転ヘラケズリ ㋑回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ○		
124	坏身	残高2.1	受部は上外方につく。	マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	微砂粒 △		
125	坏	口径(10.0) 残高3.0	外傾する口縁。	———	回転ナデ	暗オリーブ灰色 灰白色	微砂粒 ○	自然釉	
126	甕	底径(6.0) 残高3.4	平底。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(0.5~1.5) ○		
127	不明	残高4.2	外面に稲穂の圧痕。	ナ　デ	ナ　デ	浅黄橙色 橙　色	微砂粒 金 ○		25

表45　柱穴出土遺物観察表（土製品）　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
128	甕	口径(23.4) 残高6.4	折り曲げ口縁。 沈線10条。 刺突文1条。	マメツ	ナ　デ	にぶい黄褐色 浅黄橙色	石・長(0.5~1.5) 金 ○		
129	甕	口径(20.0) 残高4.5	折り曲げ口縁。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(2~4) ○		
130	壺	口径(8.7) 残高22.6	5条の波状文・沈線が1組4段入る。直下に刺突文。	ハ　ケ		橙色・明赤褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~4) ○		26
131	壺	口径(16.8) 残高2.9	口縁内面に断面三角形の凸帯。 口縁端面に1条の沈線後刻目。	ハケ(8本／cm) →ナデ	ヨコナデ (指頭痕)	灰白色 灰白色	微砂粒 金 ○		

柱穴出土遺物観察表（土製品）　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
132	甕	底径(6.0) 残高1.5	ヘラ記号有り。	マメツ	剥離	橙色 橙色	石・長(1~2) 金 ○		
133	坏蓋	口径(12.0) 残高2.7	天井部と口縁部の境は不明瞭。	㋐回転ヘラケズリ ㋑回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
134	甕	口径(26.0) 残高3.6	口縁端部下方を拡張。 外面に櫛描文が施されている。	㋑ 回転ナデ カキ目	回転ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	密 △		
135	平瓦	長さ8.1 幅8.9 厚さ1.9	布目、1㎠あたり経糸4本・緯糸5本。	布目痕	細縄タタキ	灰色 灰色	密 ○		25
136	平瓦	長さ7.3 幅9.6 厚さ1.8	布目、1㎠あたり経糸・緯糸とも10本。	布目痕	細縄タタキ	浅黄褐色 浅黄褐色	密 △		25

表46　柱穴出土遺物観察表（2）（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
137	紡錘車	径2.8 厚さ0.4 重量3.276g	土器片より製作。 断面長方形？	マメツ	マメツ	薄黄橙色 薄橙色	石(0.5~3) ○		26
138	紡錘車	径2.7 厚さ0.7 重量5.65g	土器片より製作。 断面長方形。 穿孔は貫通寸前。	ミガキ	ナデ	薄茶色 褐色	○	転用品	26

表47　柱穴出土遺物観察表（2）（石製品）

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
139	鏃	完形(1部分欠損)	サヌキトイド	(2.30)	1.90	0.40	1.20	凹基式無茎	26
140	摺石	完形	砂岩	14.30	13.70	6.00	2,150.00		26
141	砥石	完形	安山岩	8.30	6.10	3.60	285.00		26
142	石庖丁	完形	緑泥片岩	13.10	5.70	1.00	132.00	製作途中品 土掘り具の可能性も	26

表48　第Ⅳ層出土遺物観察表（土製品）　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
143	甕	口径(29.8) 残高2.4	貼り付け口縁。口縁端面に押圧。 後刺突。胴部に沈線1条以上。	ナデ	ナデ (指頭痕)	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石・長(0.5~2.5) 金 ○		
144	甕	残高3.7	貼り付け口縁。 沈線6条。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ○		
145	甕	残高6.2	3条以上の沈線、その直下に刺突列点文。	ハケ(5本／cm)	ミガキ (指頭痕)	にぶい橙色 にぶい褐色	微砂粒 ○		
146	甕	底径(9.0) 残高5.0	若干上げ底。	マメツ ㋒ナデ(指頭痕)	ナデ	橙色 黒褐色	石・長(1) ○		
147	甕	底径(7.0) 残高3.5	平底。	ナデ	ナデ	橙色 暗褐色	石・長(1~2) ○		
148	甕	底径(6.0) 残高2.2	平底。	マメツ	マメツ	橙色 にぶい橙色	石・長(1~5) ○		
149	甕	底径(5.0) 残高2.9	突出する平底の底部。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 橙色	微砂粒 ○		

第Ⅳ層出土遺物観察表（土製品）　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
150	壺	口径(16.8) 残高4.9	口縁端面下端部に刻目。	ナ　デ (指頭痕)	ナ　デ (指頭痕)	灰白色 灰白色	石・長(1~2) ○		
151	壺	底径(11.9) 残高4.9	平底。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 灰黄色	石・長(1~3) ○		
152	甕	底径(9.4) 残高3.0	若干上げ底。	ナ　デ ㊦(指頭痕)	マメツ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(0.5~2.5) ○		
153	坏蓋	口径(11.0) 器高1.4	天井部は偏平。 かえりは下方へ伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		26
154	坏身	口径(14.2) 残高2.2	たちあがりは内傾。	㊐回転ナデ ㊦回転ナデ	回転ナデ	灰白色・灰色 灰白色	微砂粒 ○		
155	坏身	口径(11.4) 残高1.7	たちあがりは外反気味に上方へ 立ちあがる。	回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰　色	微砂粒 ○		
156	甕	口径(37.0) 残高3.8	外傾する口縁。外方に面をもち下方へ拡張 ←外面には凹線3条。斜線文。	回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰　色	微砂粒 ○		26
157	坏	口径(14.8) 残高3.5	内湾する口縁。端部は尖る。 内面に上下方向に暗文。	ナデ？	ヨコナデ →ミガキ	にぶい橙色 橙　色	微砂粒 金 ○		26

表49　第Ⅲ層出土遺物観察表（土製品）　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
158	浅鉢	口径(17.0) 残高3.0	胴部片。	ナ　デ	ナ　デ	灰褐色 黒褐色	微砂粒 金 ○		
159	甕	口径(19.2) 残高3.3	貼り付け口縁。	マメツ	ナ　デ	灰白色 橙　色	石・長(1~3) ○		
160	甕	底径(7.0) 残高3.0	突出する底部。 底部中央がやや上げ底。	ハケ(12本／cm)	ナ　デ	にぶい橙色 灰白色	石・長(0.5~1.5) ○		
161	鉢	口径(17.0) 残高5.2		マメツ (指頭痕)	マメツ	灰白色・橙色 灰白色	微砂粒 ○		
162	紡錘車	径4.5 厚さ0.6 重量7.45g	土器片より製作。 断面長方形。	マメツ	ハケ？	明黄色 明茶色	石・長(0.5~3) ○	転用品	26
163	紡錘車	径3.1 厚さ0.6 重量6.83g	土器片より製作。 断面長方形。	マメツ	マメツ	灰　色 にぶい黄色	石・長(0.5~3) ○		26
164	高坏	底径(5.0) 残高2.8	水平よりやや下方に伸びる裾部。 外下方に屈曲して接地。	回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰白色	微砂粒 ○		
165	壺	口径(8.4) 残高3.2	外反する口縁。 端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	暗赤灰色 赤灰色	微砂粒 ○		
166	器台	底径(18.0) 残高2.9	脚端部片。 外面に９条の回転カキメ。	ナ　デ	ナ　デ	灰　色 灰　色	微砂粒 ○		
167	甕	口径(22.2) 残高2.2	外傾する口縁は上外方に面をもつ。 内面はナデ凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ○	自然釉	
168	甕	残高6.8	胴部片。	格子タタキ	(指頭痕)	黄灰色 灰白色	微砂粒 △	亀山焼系	
169	皿	口径(12.8) 残高2.0	溝縁。	施　釉	施　釉	灰白色 灰白色	密 ○		
170	皿	口径(10.8) 残高1.3	溝縁。	㊐ 施　釉 回転ナデ	施　釉	にぶい黄色 黄褐色	密 ○		

第Ⅲ層出土遺物観察表（土製品）　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
171	皿	口径(11.0) 残高0.7	溝縁。	施　釉	施　釉	淡黄色 淡黄色	密 ○		
172	皿	底径(5.0) 残高1.8	削り出し輪高台。見込みに八ヶ目模様(?)	回転ケズリ	施　釉	にぶい黄褐色 灰オリーブ色	密 ○		
173	皿	底径(5.0) 残高1.3	削り出し輪高台。 見込みに絵柄。	施　釉	施　釉	灰白色 灰白色・緑灰色	密 ○		
174	皿	底径(4.4) 残高1.2	わずかに上げ底の底部。	回転ナデ ㊧回転糸切り	施　釉	にぶい橙色 赤黒色	密 ○		
175	瓶 (徳利?)	底径(6.0) 残高1.0	底部に刻印。	施　釉	回転ナデ	にぶい褐色 橙　色	密 ○		

表50　第Ⅲ層出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備　考	図版
176	鏃	茎部欠損	サヌキトイド	2.00	1.85	0.40	1.40	製作途中品	
177	鏃	先端及び 片脚端欠損	サヌキトイド	2.05	1.40	0.30	0.99		

表51　第Ⅲ層出土遺物観察表（金属製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備　考	図版
178	キセル	吸い口部	銅	7.28	1.00	1.10	11.79		

表52　出土層位不明遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
179	浅鉢	残高3.4	胴部片。	ミガキ	ナ　デ	褐灰色 灰白色	微砂粒 金 ○		22
180	甕	残高3.5	口縁部に断面三角形の凸帯。	マメツ	マメツ	にぶい橙色・黄灰色 灰白色	石・長(1~5) ○		
181	坏蓋	口径(14.0) 残高2.7	内湾する口縁。 端部は尖り気味。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	微砂粒 金 ○		
182	坏	底径(6.0) 残高1.5	底部片。	回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰　色 灰　色	微砂粒 ○		
183	甕	残高5.2	胴部片。	格子タタキ	(指頭痕)	橙　色 浅黄橙色	石・長(0.5~2) ○	亀山焼系	

表53　出土層位不明遺物観察表（石製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備　考	図版
184	摺　石	2／3残存	砂　岩	11.00	7.25	5.35	650.00		
185	石　斧	刃部欠損	緑泥片岩	8.70	1.75	1.50	46.50	柱状片刃	
186	鑿			8.70	1.90	0.90	36.80		

表54　出土層位不明遺物観察表（装身具）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量			備　考	図版
				径(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)		
187	小　玉	完形	碧　玉	0.50	0.30	0.13		26

第３章

五　楽　遺　跡

－１次調査－

第３章　五楽遺跡

１．調査に至る経緯

1996（平成８）年１月、松山市道路部道路建設第一課（以下、道路建設第一課）より松山市道「平井・食場線」（松山市平井町～食場町）道路建設工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「№90 権現山古墳群」及び「№98 かいなご古墳群」に含まれる。周辺地域には６世紀後半に築造されたと推定される平井谷１号墳が所在するほか、７世紀初頭の茨谷１号窯をはじめとする須恵器窯址群が分布する。また調査地周辺地域ではこれまでに上苅屋遺跡１・２次調査、下苅屋遺跡の調査が行われ、古墳時代の小型石室、竪穴式住居址、掘立柱建物址、土坑、溝などが検出されている。今回の試掘調査対象地の南端と交差する「市道平井・水泥線新設工事」に伴う発掘調査では、古市遺跡、下苅屋遺跡２・３次調査が行われており、古市遺跡では、弥生時代から古代にかけて機能していたと考えられる自然流路や室町時代の水路が、下苅屋遺跡２次調査では、古市遺跡から続く自然流路、古墳時代の集落関連遺構、中世の生産遺構を、下苅屋遺跡３次調査では、古市遺跡、下苅屋遺跡２次調査地を経て３次調査地に続く自然流路、古墳時代後期を主体とした集落、近世の墓が検出されている。このように申請地周辺には多くの遺跡が分布している。

これらのことから、道路建設課第一課と文化教育課は協議のうえ、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため試掘調査を実施することとなった。（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、1996（平成８）年５月より試掘調査を開始した。

２．試掘調査

（１）調査の経緯（第68図）

古市地区と同様、試掘調査にあたり、調査対象地を便宜上、生活道・農道・河川などの現況地目と旧字名から、古市地区の北側より五楽１地区～６地区と区分を設けた。調査地の現況はそのほとんどが水田耕作地である。着手前に立会人のもと申請地を確認後、調査対象地（買収完了）全面の除草作業を行い試掘トレンチの掘削作業に入った。試掘トレンチは各地区の地形などを考慮して設定した。古市地区の調査と同様、掘削作業は埋め戻しも含めて、現況農道や用水路、用水パイプの保全を前提としているため、重機は使用せずすべてのトレンチを手掘りにて行った。トレンチ番号は「Ｔ－６・Ｔ－７・・・Ｔ－32」と表記している。なお１地区～６地区の所在地・面積・調査期間・調査担当者は表55のとおりである。

（２）調査の概要

１）１地区（第69・70図）

調査地は、小野谷に水源を発する小野川と、平井谷に水源を発する堀越川によって形成された扇状地の扇央付近、標高72mの古市地区の北隣に位置する。調査地はすべてが水田耕作地である。地形はＴ－８Ｂから北方向へ段状に下がる。高低差は耕作土上面で最大0.7mを測る。トレンチは３本を設定し、掘削、調査、測量と写真撮影後に埋め戻しを行った。

基本層位は、第１層灰色粘質土（耕作土）、第２層黄灰色シルト（床土）、第３層明灰褐色シルト、

第68図　試掘調査用地区割図（S＝1：3,000）

表55　試掘調査一覧

地区名	所　在　地	面積(㎡)	期　　間	調査担当
1	松山市平井町甲846　外4	1,407.6	平成8年5月23日～6月5日	山本　健一 山之内志郎
2	松山市平井町甲821　外3	869.4	平成8年6月5日～6月11日 平成9年3月26日～4月8日	〃
3	松山市平井町甲719－1　外4	1,638.0	平成8年6月6日～6月11日 平成9年4月8日～4月10日	〃
4	松山市平井町甲725　外5	1,520.1	平成8年7月12日	〃
5	松山市平井町甲731－1　外4	1,264.8	平成8年7月8日～7月9日	〃
6	松山市平井町甲742－1　外5	1,504.2	平成8年6月18日～6月27日	〃

第4層黒色粘質土、第5層灰色粘質土、第6層黄色砂礫層（地山）である。

遺構はT－8Aに於いて、竪穴式住居址1棟、土坑1基、溝1条、柱穴7基、T－8Bに於いて、土坑6基、柱穴25基、T－8Cにおいて柱穴2基を確認した。これらの遺構は埋土から弥生時代～古墳時代と考えられる。

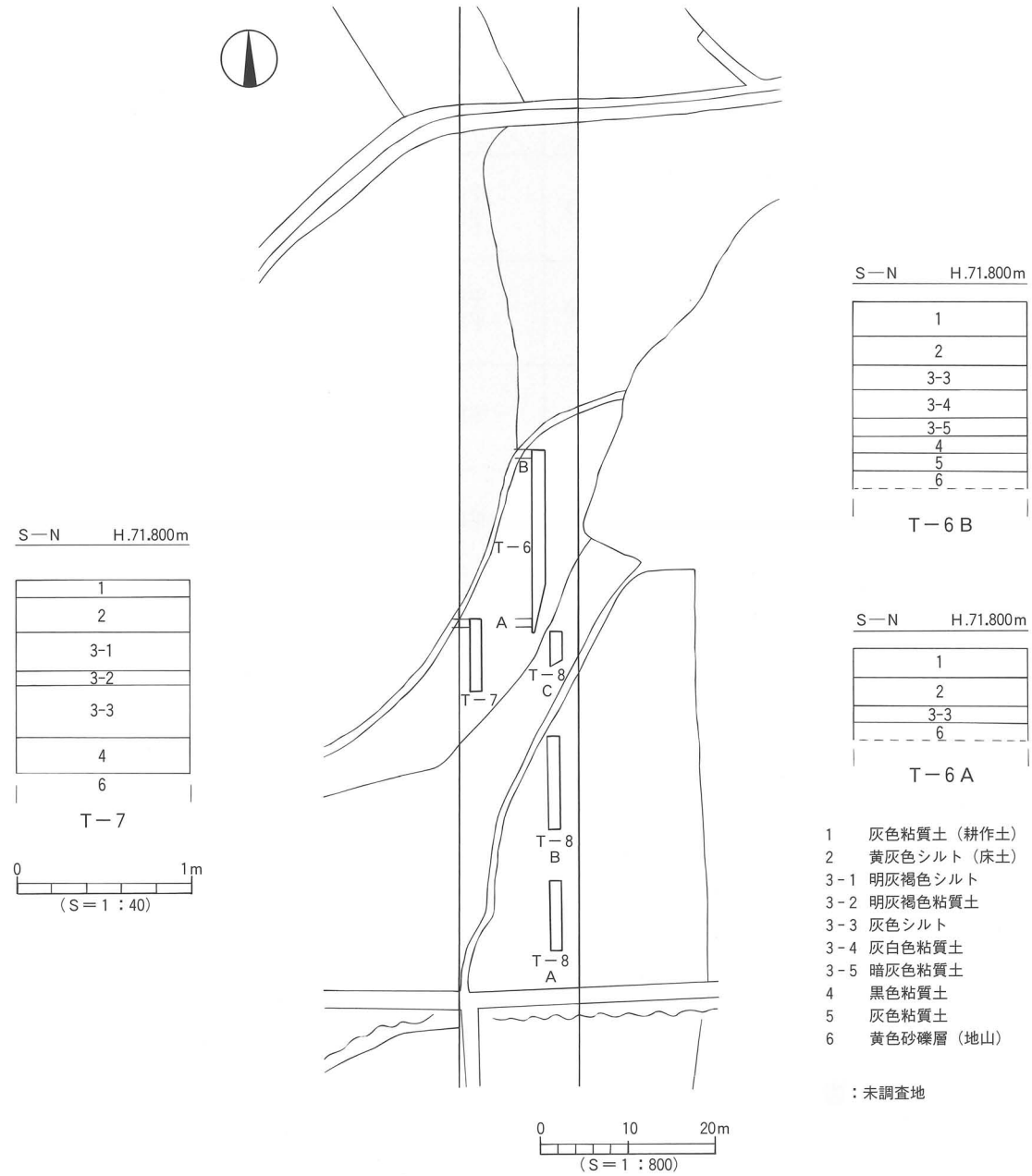
遺物はT－8A・T－8Bより弥生土器、須恵器が出土した。

以上のことから、本調査地内には弥生時代および古墳時代の集落関連遺構の存在が明らかとなり、本格調査を実施することとなった。

2）2地区の調査（第71図）

調査地は、微高地である五楽1地区より段状に下がった低地の部分から2地区北端の小障子川へ段状にゆるやかに上っていく凹地に位置する。調査地はすべてが水田耕作地である。調査は2地区北部の買収完了地部分にT－9を設定し調査を行った後、他の地区の調査を行った。よって各地区でトレンチ番号が前後している。

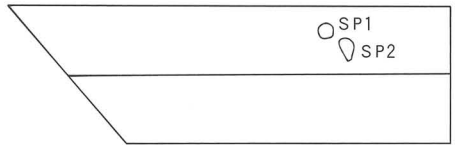
基本層位は、T－9とT－25～27では異なる。T－9の基本層位は、第1層灰色土（耕作土）、第2層燈色砂質土（床土）、第3層黄灰色砂質土、第4層灰褐色砂質土、第5層黄灰色砂質土、第6層暗灰褐色土、第7層灰褐色シルト（地山）、第8層灰白色シルト（地山）である。T－25～27の基本



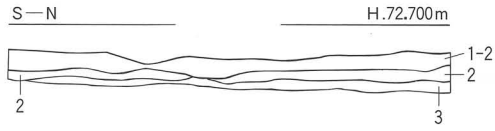
第69図　五楽１地区トレンチ位置図・柱状土層図

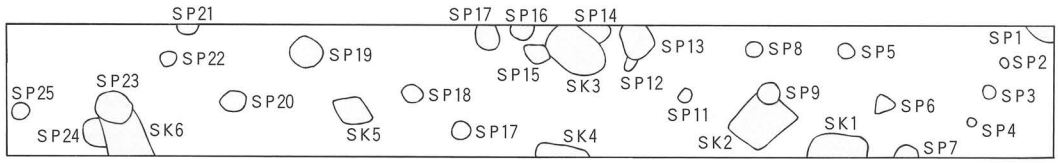
層位は、第１層灰色粘質土（耕作土）、第２層燈灰色砂質土、第３層白色微砂質土、第４層明灰色粘質土、第５層白色シルト（地山）、第６層燈白色シルト（５～10cm大の礫が入る・地山）、第７層燈灰色粘質土（地山）である。

調査の結果、遺構・遺物とも検出されなかった。

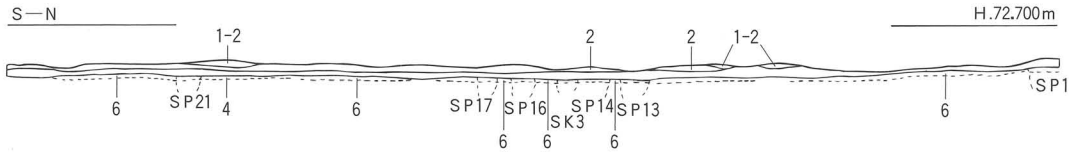


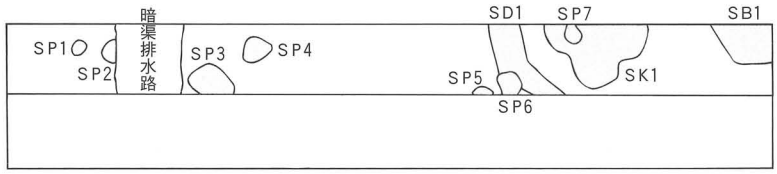
T－8C



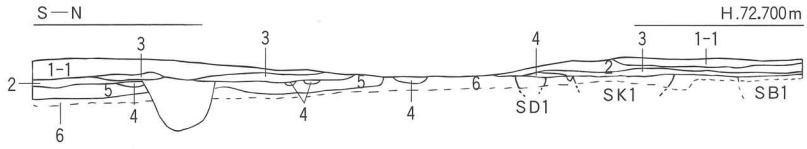


T－8B

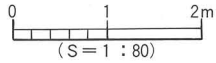




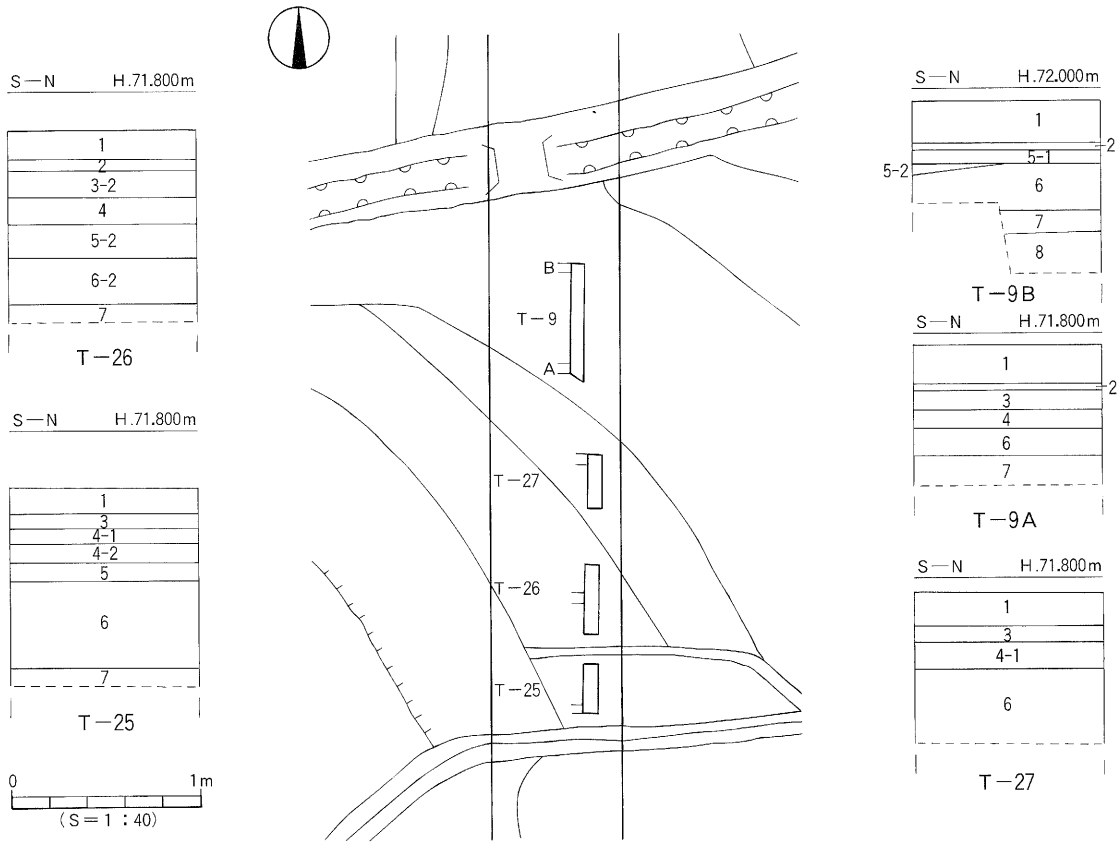
T－8A



1－1　造成土
1－2　灰色粘質土（耕作土）
2　　黄灰色粘質土（床土）
3　　暗灰色シルト（旧耕作土）
4　　灰褐色砂質土（旧耕作土）
5　　黒色シルト
6　　赤褐色土（地山）



第70図　Ｔ８測量図・土層図



T－25～27
1　灰色粘質土（耕作土）
2　橙灰色砂質土（床土）
3　白色微砂質土
4－1　明灰色粘質土
4－2　灰色粘質土
5　白色シルト（地山）
6　橙白色シルト（5～10cm大の礫が入る）
7　橙灰色粘質土

T－9
1　灰色土（耕作土）
2　橙色砂質土（床土）
3　黄灰色砂質土
4　灰褐色砂質土
5－1　黄灰色砂質土
5－2　明黄灰褐色土
6　暗灰褐色土
7　灰褐色シルト
8　灰白色シルト（地山）

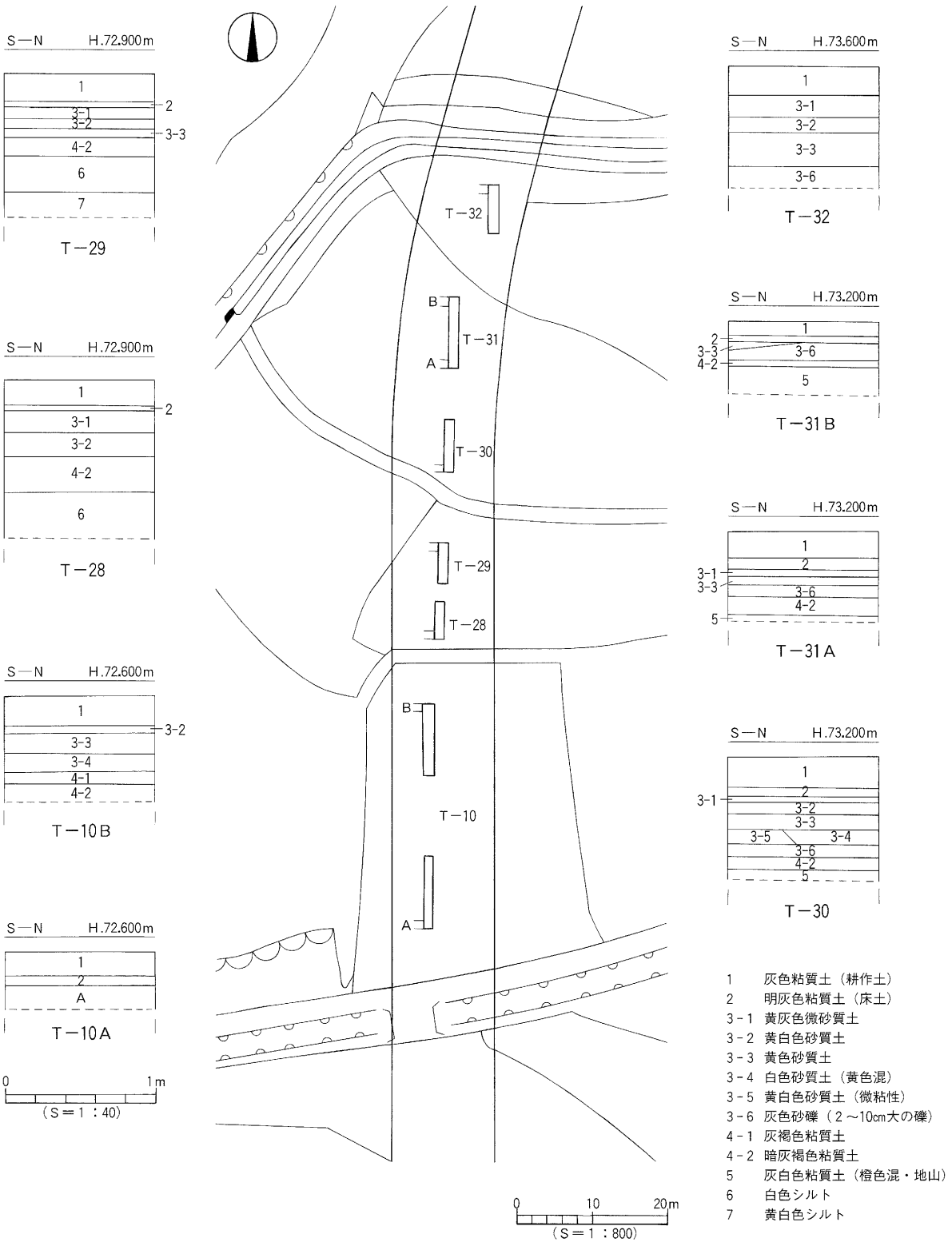
第71図　五楽２地区トレンチ位置図・柱状土層図

３）３地区の調査（第72図）

調査地は、堀越川によって形成された扇状地内に位置し、南端を小障子川、北端を堀越川が流れ中州状を形成している部分にあたる。調査地はすべてが水田耕作地で南端より段上にゆるやかに上っていく。調査地の南端と北端の耕作土面での比高差は１ｍを測る。３地区も諸条件によりトレンチ番号が前後する。

基本層位は、第１層灰色粘質土（耕作土）、第２層明灰色粘質土（床土）、第３層黄灰色微砂質土～灰色砂礫層、第４層灰褐色粘質土、第５層灰白色粘質土（燈色混・地山）、第６層白色シルト（地山）、第７層黄白色シルト（地山）である。

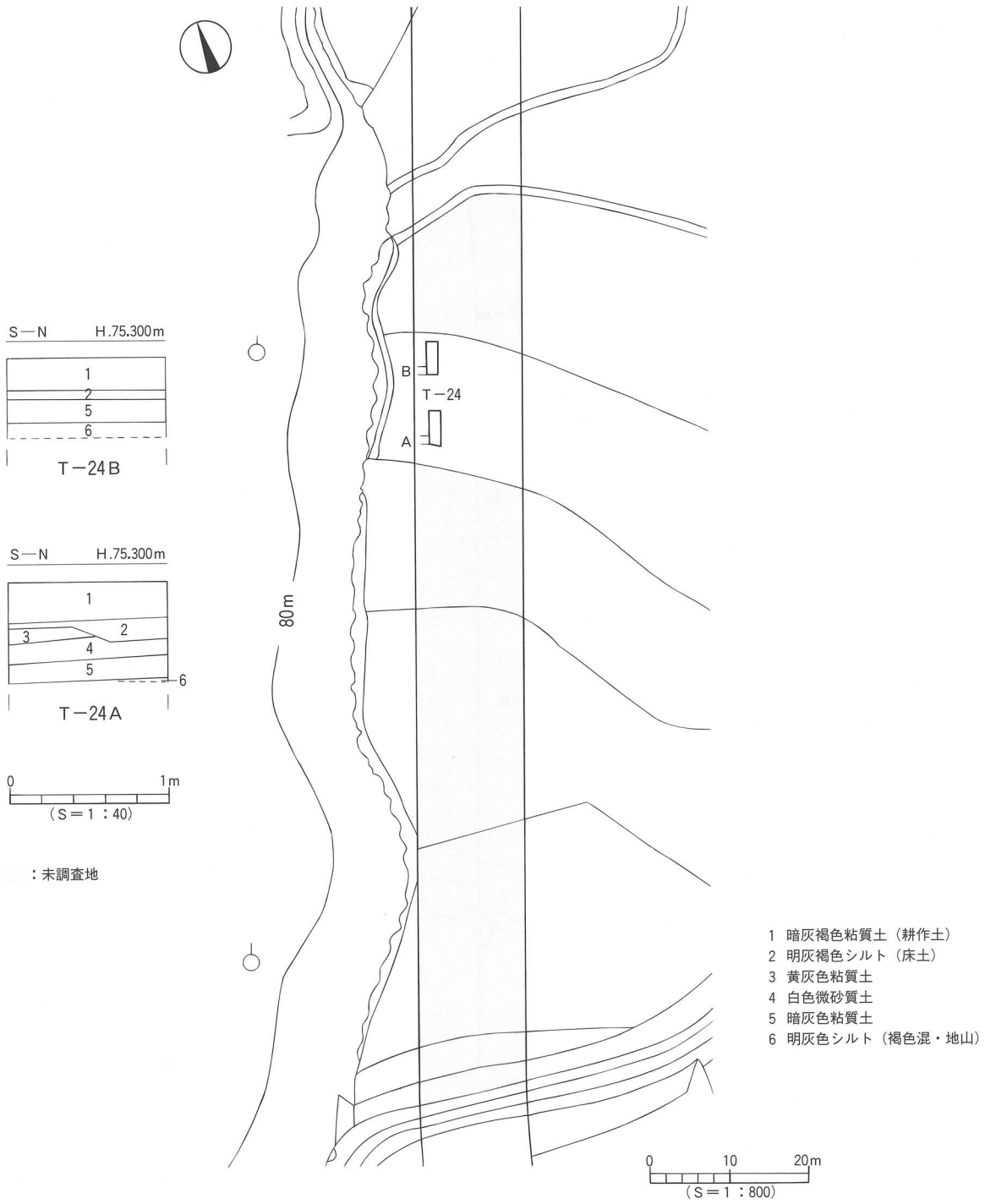
調査の結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。



第72図　五楽３地区トレンチ位置図・柱状土層図

4）4地区の調査（第73図）

調査地は堀越川によって形成された扇状地内に位置する。南端は堀越川、北端は平井谷西側の尾根裾部が扇状地と接する部分にあたる。調査地はすべてが水田耕作地内である。4地区は諸条件によりＴ－24を設定し、調査を行った。



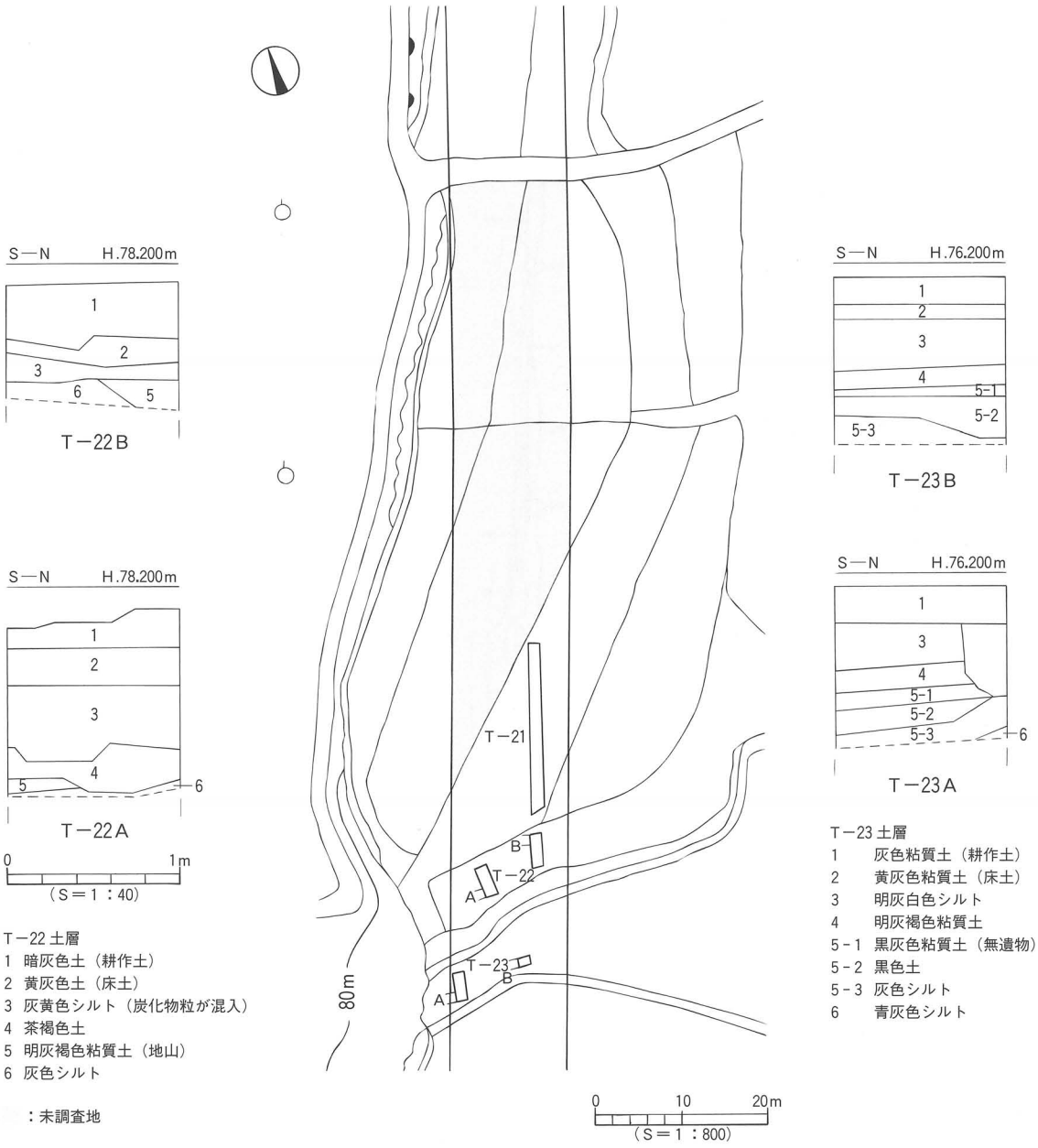
第73図　五楽4地区トレンチ位置図・柱状土層図

基本層位は、第１層暗灰褐色粘質土（耕作土）、第２層明灰褐色シルト（床上）、第３層黄灰色粘質土、第４層白色微砂質土、第５層暗灰色粘質土、第６層明灰色シルト（褐色混・地山）である。

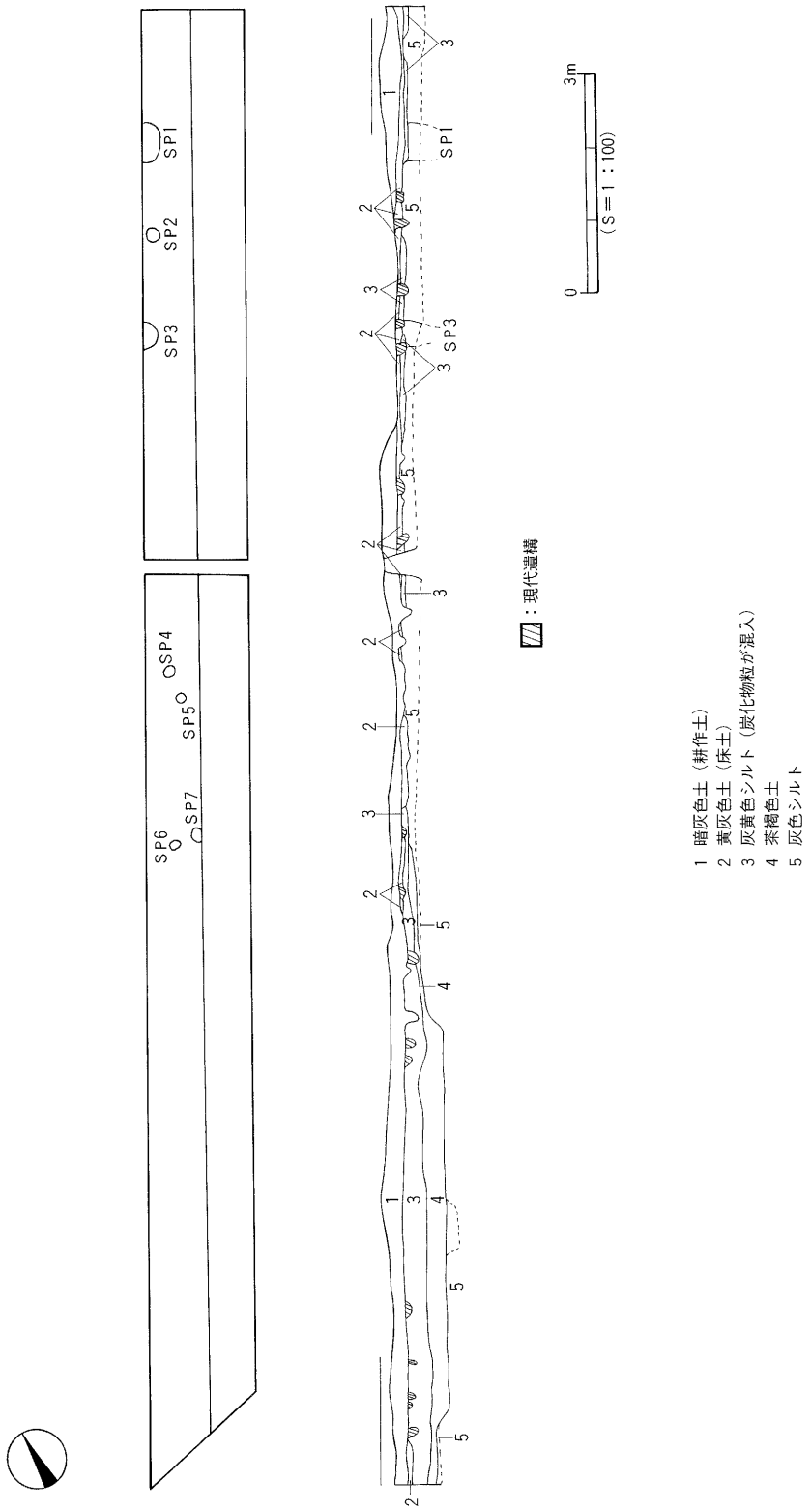
調査の結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

５）５地区の調査（第74・75図）

調査地は、扇状地奥端部へ落ち込む堀越川によって開析された小断丘上の落ち込み部と、断丘上端部付近に位置する。高低差は4.1ｍを測る。調査地は水田地と一部畑地になる。５地区は諸条件により３本のトレンチを設定した。



第74図　五楽５地区トレンチ位置図・柱状土層図



第75図　T21測量図・土層図

基本層位は、段丘落ち込み部のＴ－23と段丘上のＴ－22とでは異なる。Ｔ－23の基本土層は第１層灰色粘質土（耕作土）、第２層黄灰色粘質土（床土）、第３層明灰白色シルト、第４層明灰褐色粘質土、第５層黒灰色粘質土（無遺物）～灰色シルト、第６層青灰色シルト（地山）である。Ｔ－22の基本層位は第１層暗灰色土（耕作土）、第２層黄灰色土（床土）、第３層灰黄色シルト（炭化物粒が混入）、第４層茶褐色土、第５層明灰褐色粘質土（地山）、第６層灰色シルト（地山）である。

遺構・遺物ともにＴ－21より検出した。遺構は柱穴７基を、遺物は土師器、陶器が出土した。

以上のことから、本調査地内には中世から近世の集落関連遺構の存在が明らかとなった。

６）６地区の調査（第76図）

調査地は、５地区北部の小断丘上に位置し、平井谷西側の尾根据部分にあたる。調査地はすべて水田耕作地内で南端より段上に緩やかに上ってゆき、高低差は耕作土上面で２ｍを測る。調査は農繁期の田植え作業と重り、対象地が水浸しとなったことや、諸条件などから壺掘りとなった。トレンチは８本を設定した。

基本層位は、第１層灰褐色微粘性土（耕作土）、第２層黄灰色微粘性土～青灰色微粘性土（床土）、第３層灰色微粘性土～青灰色粘性土、第４層黒灰色土（無遺物）、第５層灰色シルト～青灰色砂礫（地山）である。

調査の結果、遺構・遺物ともに検出されなかった。

（３）小　結

調査の結果、遺構・遺物を検出しなかった地区に、２地区から４地区と６地区がある。２地区から４地区は土層の堆積状況などから、堀越川と小障子川とによって影響を受けたと思われる氾濫原や凹地であり、遺跡としての土地利用はされなかったものと推定される。また６地区においては、耕作地整備などの掘削による削平の影響を受けていた事などが、遺構・遺物が検出されなかった要因と考えられる。１地区と５地区では遺構・遺物を検出し、集落関連遺構の存在が明らかとなり、１地区を五楽遺跡Ａ区、５地区を五楽遺跡Ｂ区とし、本格調査を実施することとなった。

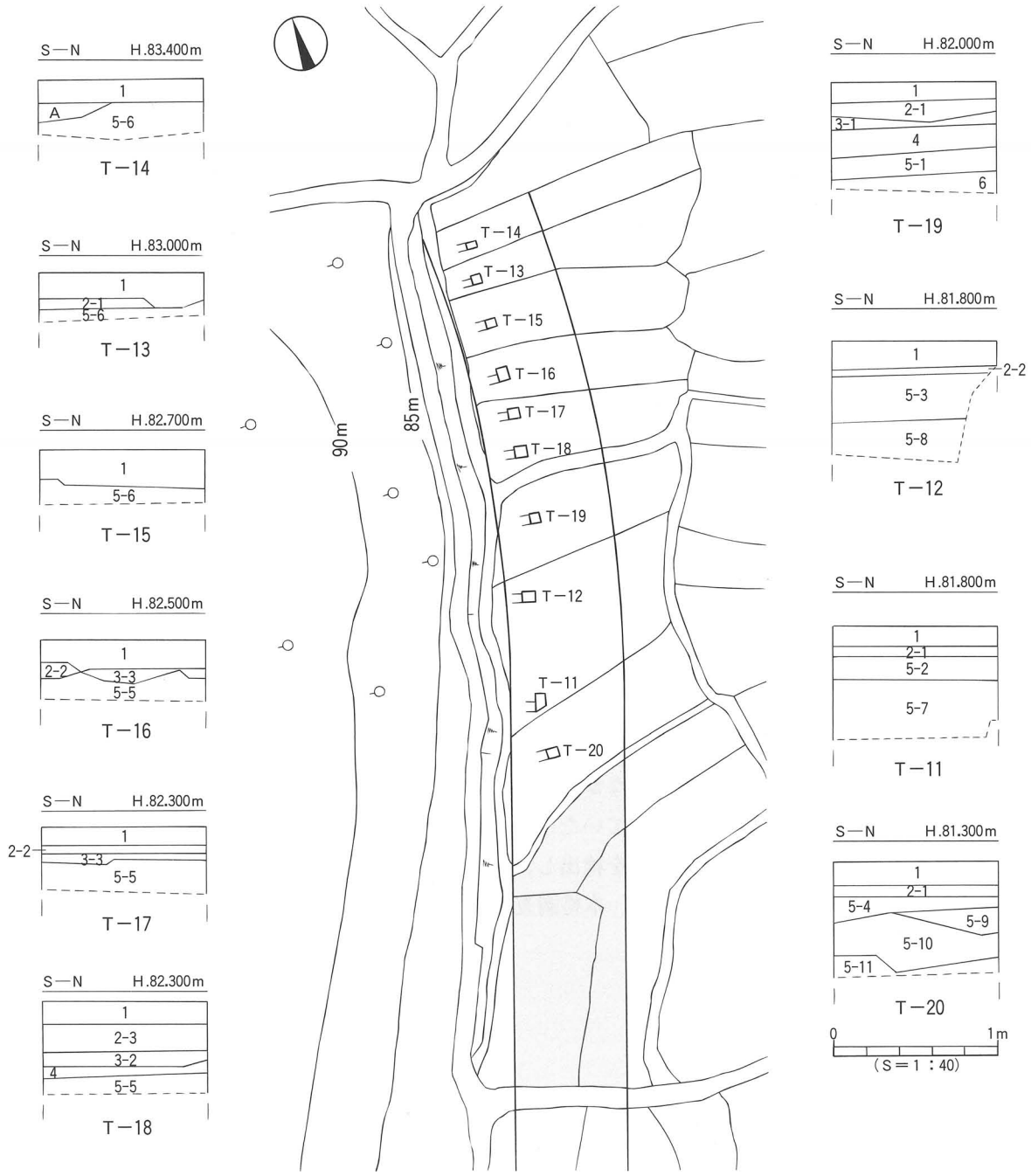
３．本格調査

〔１〕五楽遺跡Ａ区の調査

（１）調査の経緯

１）経緯（第77図）

試掘調査の結果、文化教育課・埋蔵文化財センターと道路建設第１課は発掘調査について協議を行い、開発工事によって失われる遺構や遺物について、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。今回の調査では、弥生時代・古墳時代・近世における集落構造解明を主目的とした。調査区の設定にあたっては、掘削土置き場、畦・取水パイプの保全等の諸条件から、調査地全域の掘削は行なえず、第79図に示す調査区の形状・配置となった。調査は諸条件などにより調査地を南北方向に二分する形で行った。平成８年10月28日より西半部から着手、同年12月29日に調査を終了、引き続き西半部を埋め戻す形で追手返しを行い、東半部を開始した。順次、遺構の掘り下げ、測量、図面作成、写真撮影を行い、平成９年３月６日に埋め戻しも含めて五楽遺跡Ａ区の調査を終了した。



1　灰褐色微粘性土（耕作土）
2-1　黄灰色微粘性土（床土）
2-2　暗灰色微粘性土（床土）
2-3　青灰色微粘性土（床土）
3-1　灰色微粘性土
3-2　明灰色微粘性土
3-3　青灰色粘性土
4　黒灰色土（無遺物）
5-1　灰色シルト
5-2　黄灰色シルト
5-3　明灰色シルト
5-4　白色シルト
5-5　明青灰色シルト
5-6　黄橙色シルト（礫石混）
5-7　黄白色シルト
5-8　暗灰色砂礫
5-9　青灰色粘質土
5-10　青灰色砂質土
5-11　青灰色砂礫
A　造成土

：未調査地

第76図　五楽６地区トレンチ位置図・柱状土層図

2）調査組織

調査地　　松山市平井町甲1721・1722－1
遺跡名　　五楽遺跡Ａ区調査地
調査面積　　321.7㎡
調査担当　　山本健一・山之内志郎

（2）層　位（第78図、図版32）

本調査地は、小野谷に水源を発する小野川と、平井谷に水源を発する堀越川によって形成された扇状地の扇央付近、標高72ｍに立地し、調査以前は水田地であった。基本層位は第Ⅰ層灰色粘質土、第Ⅱ層黄灰色シルト、第Ⅲ層灰色シルト、第Ⅳ層茶褐色シルト、第Ⅴ層黒褐色粘質土、第Ⅵ層黒色粘性土、第Ⅶ層灰色砂礫層である。

第Ⅰ層：現耕作土で14～40cmの厚さを測る。

第Ⅱ層：耕作土の床土で5～12cmの厚さを測る。

第Ⅲ層：旧耕作土で、調査地内の海抜72.05ｍライン（第79図参照）より低位部分に見られる。厚さ５～８cmを測る。

第Ⅳ層：調査地中央西部のＡ３～５区のみで見られる。第Ⅲ層以前の耕作土もしくは造成土と思われる。

第Ⅴ層：遺物包含層である。調査地のＣ～Ｄ・２～３区で堆積し、厚さ５cm前後を測る。土層図には現れない。遺物は弥生土器、須恵器を包含する。

第Ⅵ層：調査地南東部に堆積し、12～24cmの厚さを測る。無遺物層である。古市遺跡２次調査地の基本層位である第Ⅴ層と同じである。

第Ⅶ層：地山と呼ばれるものである。Ⅶ－１層茶褐色シルトで調査地全域に見られるが、先述した第Ⅳ層直下はⅦ－２層灰色砂礫層となる。

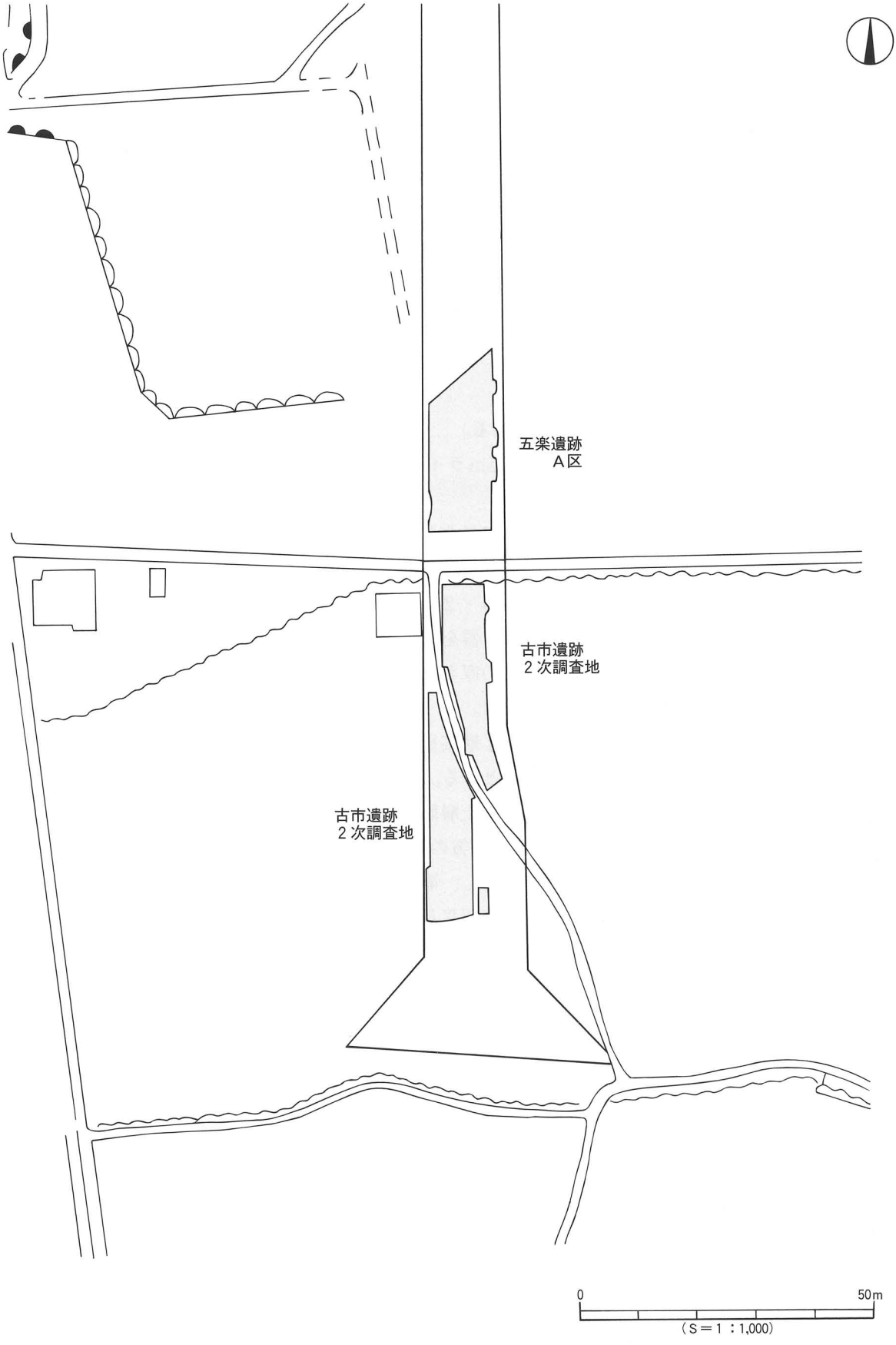
遺構の検出作業は第Ⅶ層上面にて行ったが、土層観察の結果、すべての遺構が第Ⅵ層上面での検出になる。なお、調査にあたり調査区内を４ｍ四方のグリットに分けた。グリットは西から東へＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ、南から北へ１・２・３・・・・とし、第77図に示した。

本調査については『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』に概要を報告しているが、整理の結果、遺構認定及び名称が若干異なっており、取り扱いには注意していただきたい。

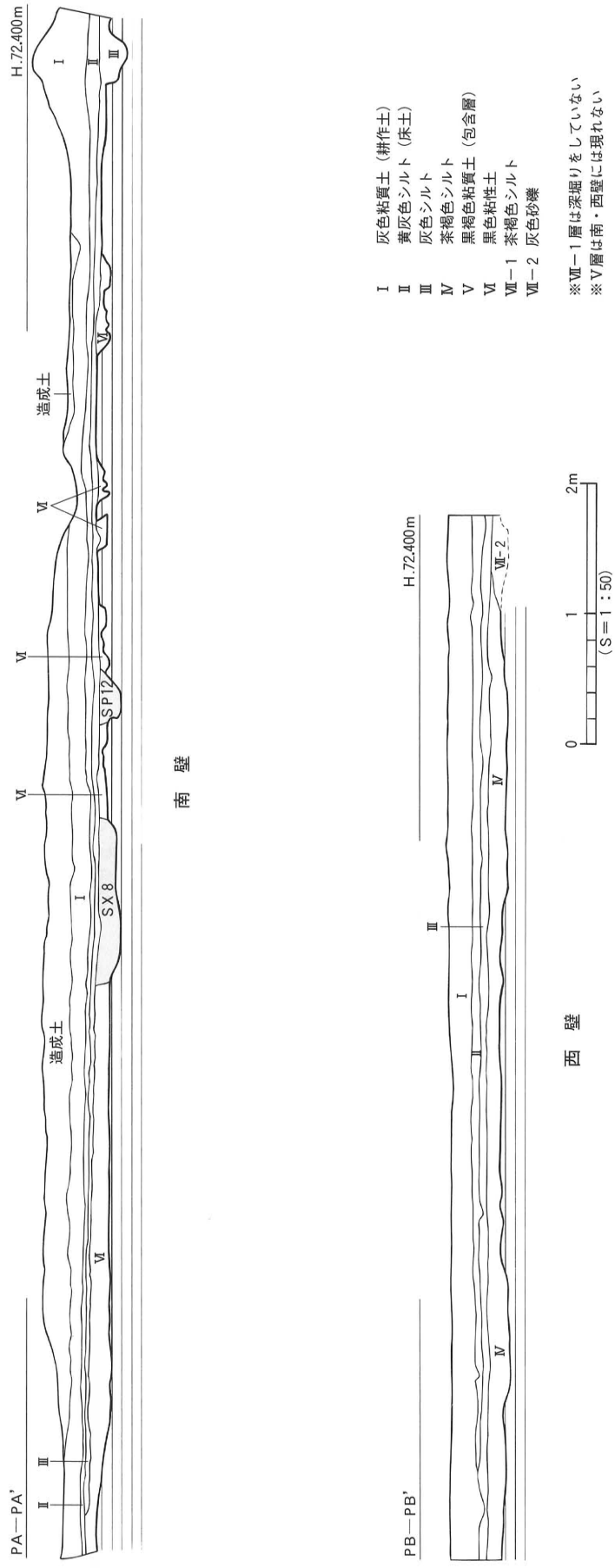
（3）遺構と遺物

検出遺構は、弥生時代の土坑12基、土器埋納坑１基、溝１条、性格不明遺構３基、古墳時代では土坑４基、近・現代では墓１基、土坑１基である。

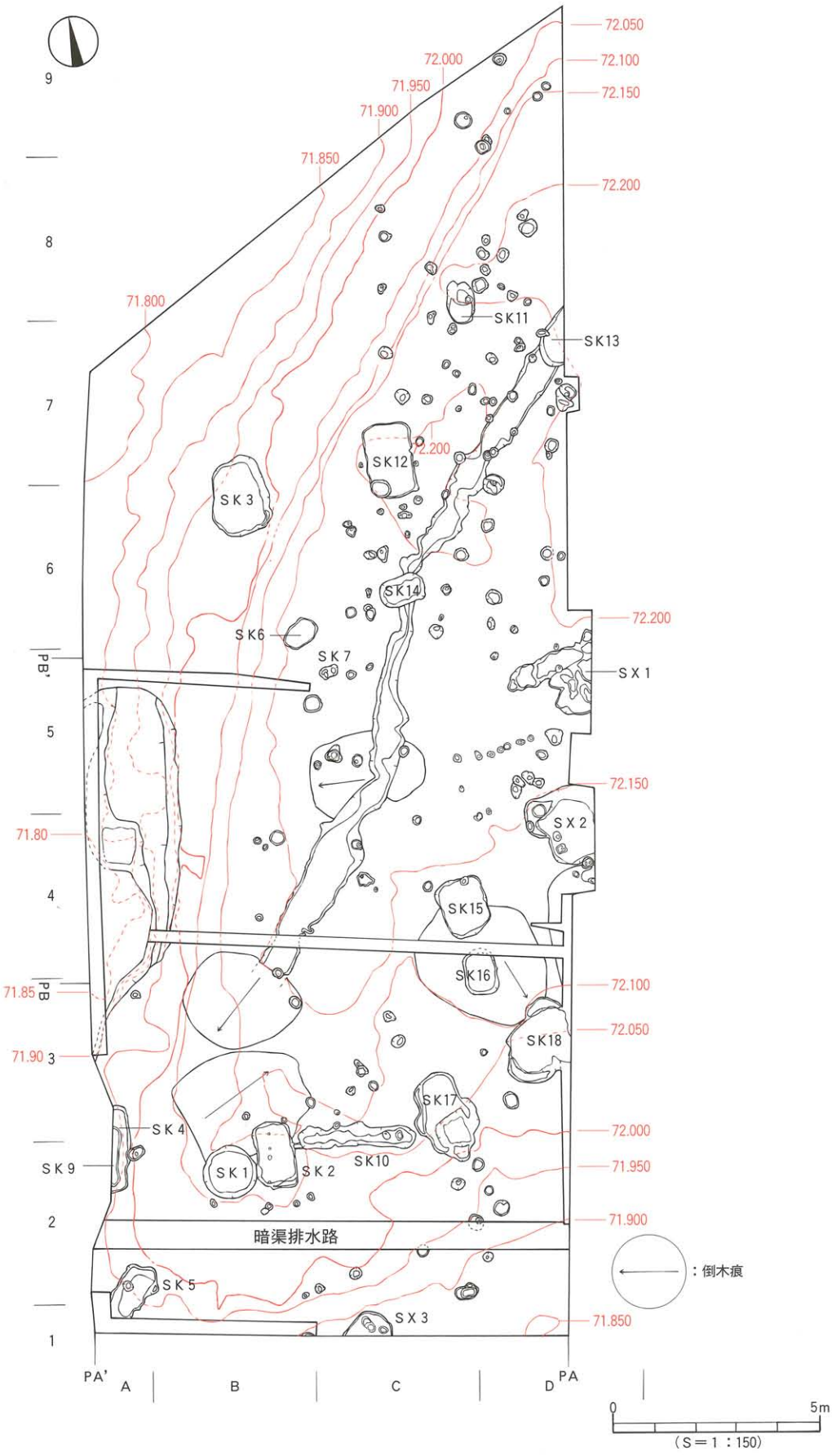
今回の調査では、弥生時代の土坑内よりサヌキトイドの剥片が多数出土した。そのため、調査中にチップ、フレーク片が出土している土坑については、埋土を採集して洗浄作業を行った。その結果の取り扱いについては、以下のように行った。剥片にはさまざまな形があり一定していないが、概ね、その個体の長辺及び長軸寸法を基準とし、大きさにより５分類した。法量が３㎜以下を微細片、3.1㎜～５㎜までを細片、5.1㎜～10㎜までを小片、10.1㎜～30㎜までを中型片、30.1㎜以上を大型片と呼称し、破片別に出土点数比率を文章中に表記している。



第77図　調査地測量図


H.72.400m
造成土
SP12
SX8
南　壁
PA—PA'
H.72.400m
西　壁
PB—PB'
0
1
2m
(S＝1：50)
Ⅰ　灰色粘質土（耕作土）
Ⅱ　黄灰色シルト（床土）
Ⅲ　灰色シルト
Ⅳ　茶褐色シルト
Ⅴ　黒褐色粘質土（包含層）
Ⅵ　黒色粘性土
Ⅶ－1　茶褐色シルト
Ⅶ－2　灰色砂礫
※Ⅶ－1層は深堀りをしていない
※Ⅴ層は南・西壁には現れない

第78図　南・西壁土層図


72.050
72.000
72.100
71.950
72.150
71.900
71.850
72.200
71.800
SK11
SK13
SK12
72.200
SK 3
SK14
72.200
SK 6
SK 7
SX 1
PB'
72.150
SX 2
71.80
SK15
SK16
72.100
PB
71.85
72.050
SK18
71.90
SK17
SK 4
72.000
SK 9
SK 1
SK 2
SK10
71.950
71.900
暗渠排水路
：倒木痕
SK 5
SX 3
71.850
PA'
A
B
C
D
PA
0
5m
(S＝1：150)

第79図　遺構配置図

１）弥生時代

弥生時代の遺構は土坑11基、土器埋納坑１基、溝１条、性格不明遺構３基である。

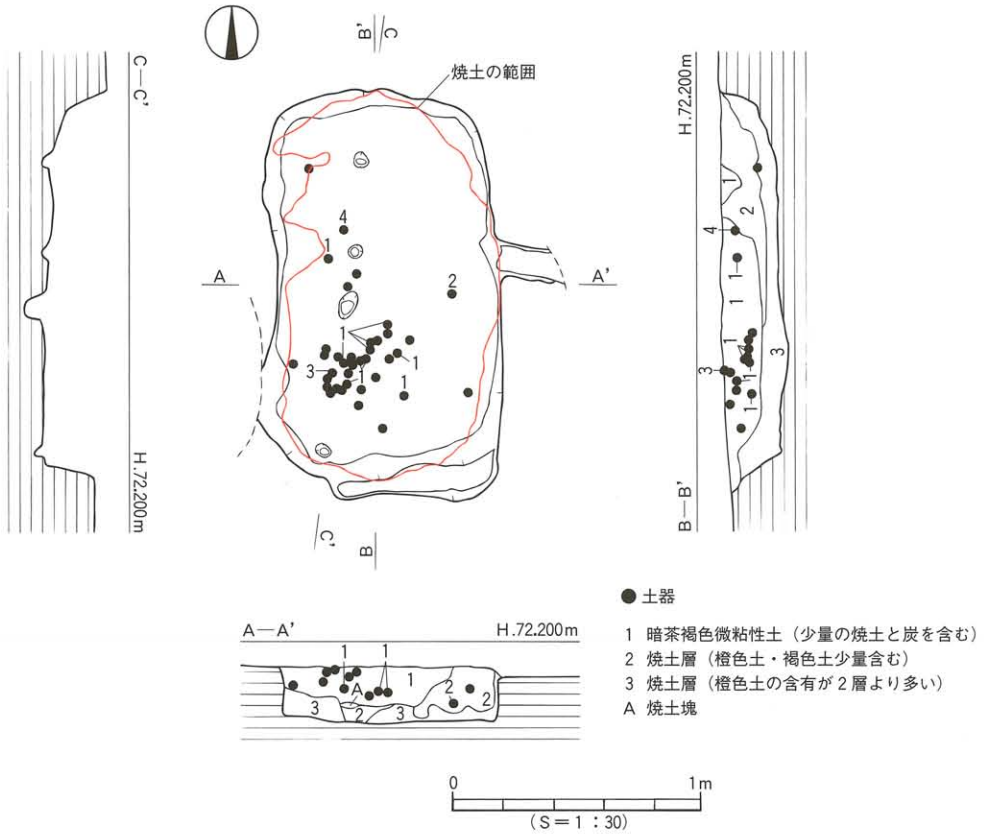
①土坑（ＳＫ）

土坑は、すべてが弥生時代前期末から中期初頭に位置づけられるもので、平面形態の違いにより方形を呈するものをＡグループ、楕円形を呈するものをＢグループと分類を行った。以下、Ａグループより説明を行う。

Ａグループ（ＳＫ２、３、４、12、15、16）

ＳＫ２（第80図、図版33）

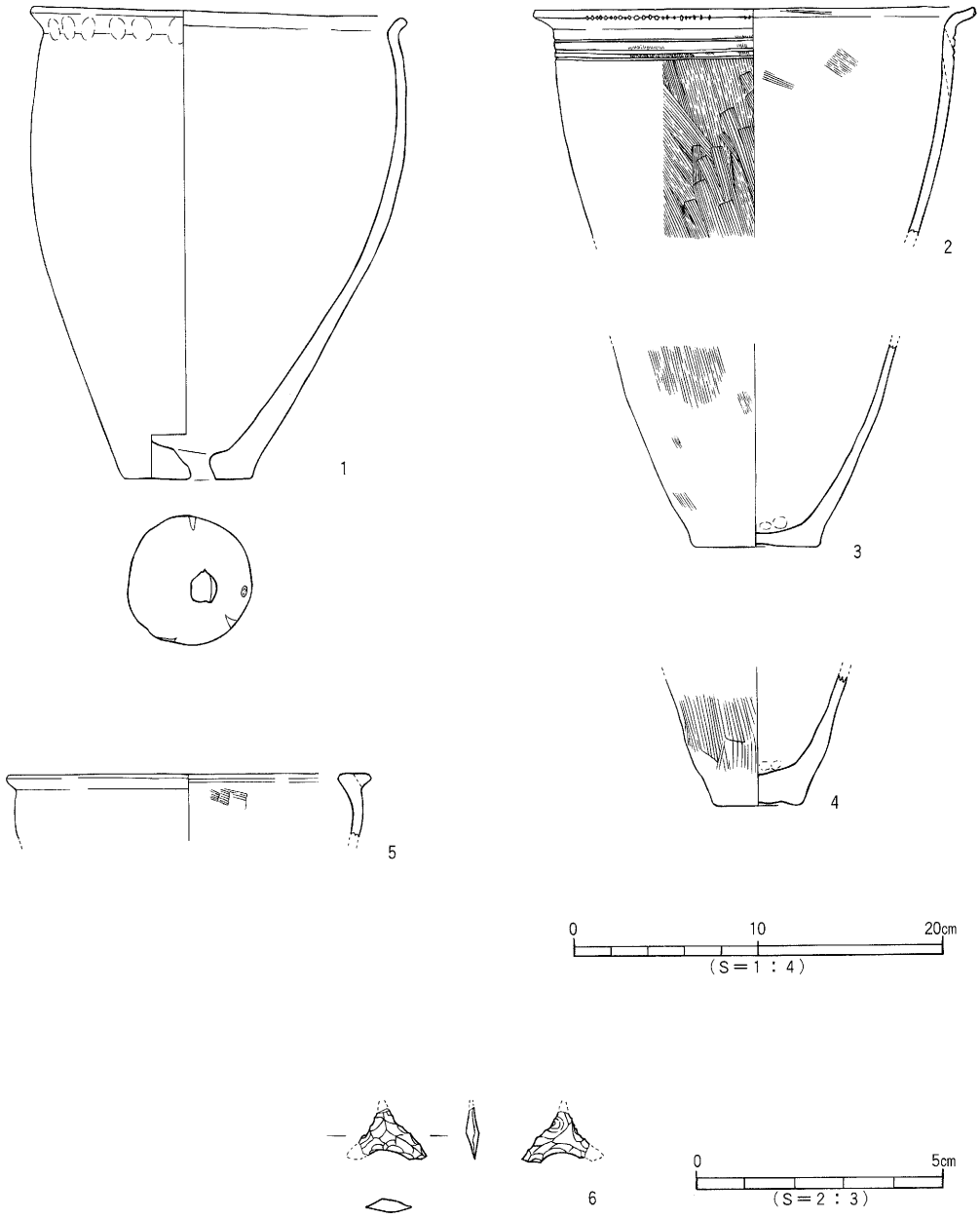
調査地南部のＢ２・３区に位置し、ＳＫ10に切られる。土坑の長軸方位は南北方向を示す。規模は長さ1.60m、幅0.90m、深さ26cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は３層に分かれ、１層暗茶褐色微粘性土（少量の焼土と炭を含む）、２層焼土層（橙色土・褐色土少量含む）、３層焼土層（橙色土・橙色土の含有が２層より多い）である。基底面より直線的に並ぶ小ピットを検出した。ピットの平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径６～10cm、深さ３～10cmを測り、埋土は暗茶褐色土である。また、土坑東壁側に浅い溝を検出した。規模は長さ26cm、幅12cm、深さ３cmを測り、埋土は土坑埋土の１層と同じである。溝の性格は不明である。土坑内からは弥生土器、石製品、サヌキトイドの剥片が、５～10cm大の礫石と混在して出土した。



第80図　ＳＫ２測量図

出土遺物（第81図、図版46）

弥生土器（１～５）１～５は甕形土器である。１は接合され一個体となった。器高25.5cm、口径20.0cm、底径7.0cmを測る。折曲口縁で、無文である。底部に籾圧痕が付く。焼成後、底部に穿孔し甑に転用している。２は口縁部片。折曲口縁で、口縁端部下端に刻目、頸部には３条の沈線文が施される。外面はハケ目調整が顕著に残る。３・４は底部片で、やや突出する底部は中央付近で若干上げ底となる。５は鉢形土器の口縁部片で、貼付口縁である。



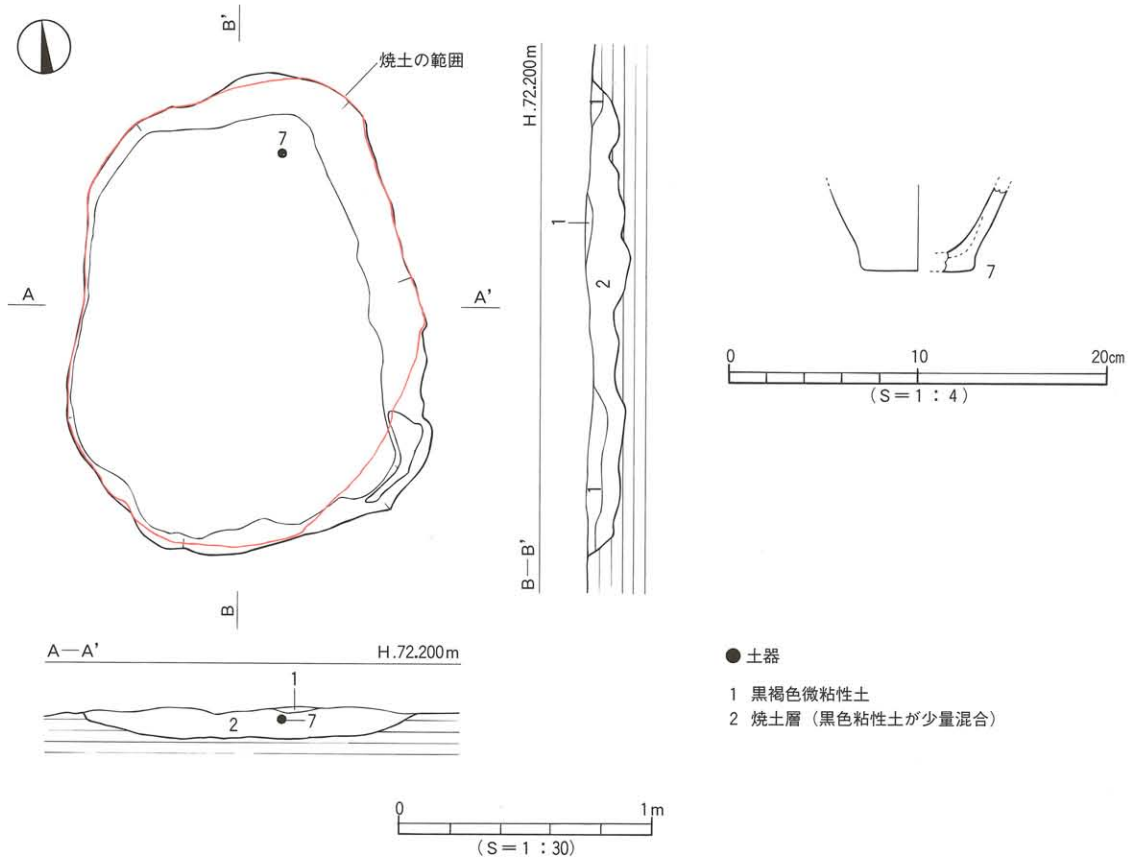
第81図　ＳＫ２出土遺物実測図

石製品（６）６はサヌキトイド製の凹基式無茎石鏃である。

剥片は調査時と遺構埋土の洗浄作業により検出した。微細片～大型片まで出土し、総点数876点で合計重量96.902ｇを量る。出土点数による比率は微細片18.10％、細片29.80％、小片35.20％、中型片15.90％、大型片1.00％で小片の出土が目立つ。

ＳＫ３（第82図、図版34）

調査地北部のＢ６・７区に位置し、遺構上面は先述（（２）基本層位第Ⅲ層）したように削平を強く受けている。規模は長さ1.87ｍ、幅1.44ｍ、深さ18㎝を測り、断面形態は皿状を呈する。長軸方向は南北方位を指す。埋土は２層に分かれ、１層黒褐色微粘性土、２層焼土層（黒色粘性土が少量混合）である。土坑内からの出土遺物は弥生土器のほか、サヌキトイドの剥片、赤色頁岩の剥片１点、焼土魂１点、炭化物の小片１点がある。焼土魂は土坑中央の南東寄りで出土した。大きさは長さ27㎝、幅15cm、厚さ２㎝を測る。炭化物は焼土魂の上面より出土した。大きさは５×６㎝で厚さ１㎝を測る。



第82図　ＳＫ３測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第82図）

弥生土器（７） ７は甕形土器の底部片で、突出する平底の底部である。

剥片は調査時に焼土中より検出した。微細片１点、細片２点、小片１点、中型片１点で合計重量0.403ｇを量る。赤色頁岩の剥片は大型片（５×4.3㎝大）１点で重量20.348ｇを量る。

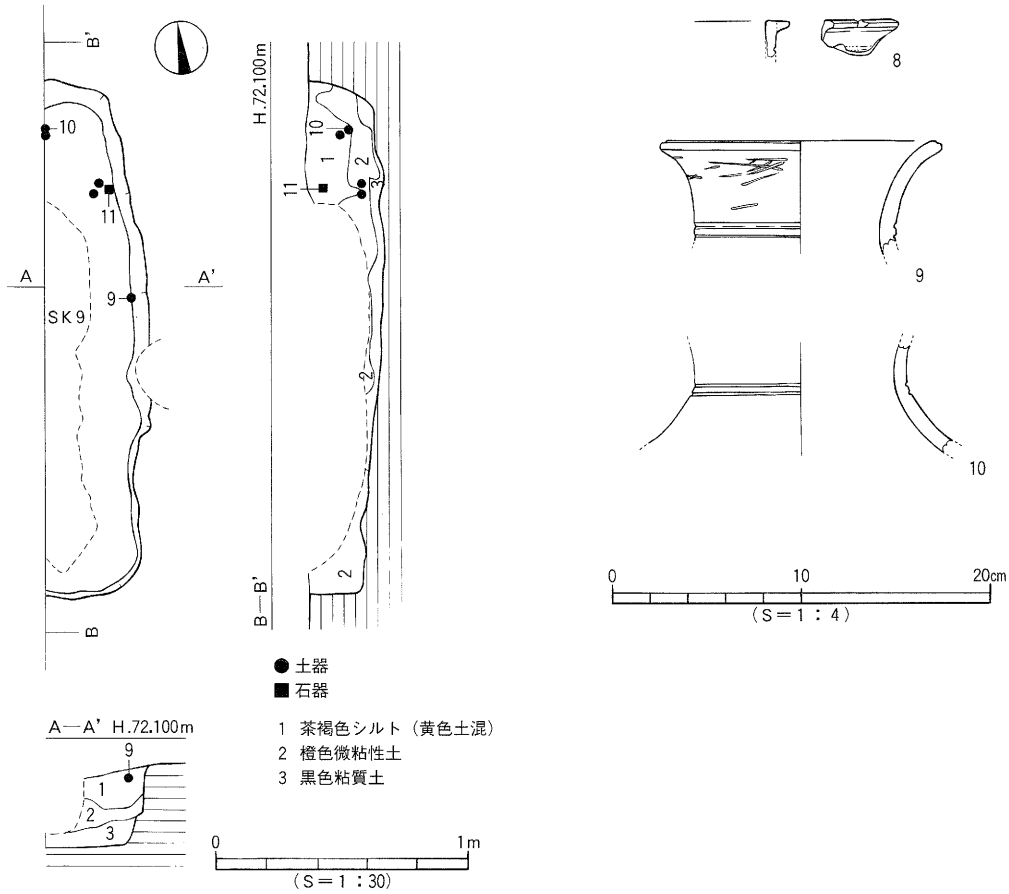
ＳＫ４（第83図、図版34）

調査地南西部のＡ２・３区に位置し、ＳＫ９と柱穴に切られる。規模は長さ2.00m、検出幅0.43m、深さ32㎝を測り、断面形態は逆台形状を呈する。長軸方向は南北方位を指すが、やや東へ偏る。埋土は３層に分かれ、１層茶褐色シルト（黄色土混）、２層橙色微粘性土、３層黒色粘質土である。土坑からの出土遺物は弥生土器、石製品と数点の礫石がある。

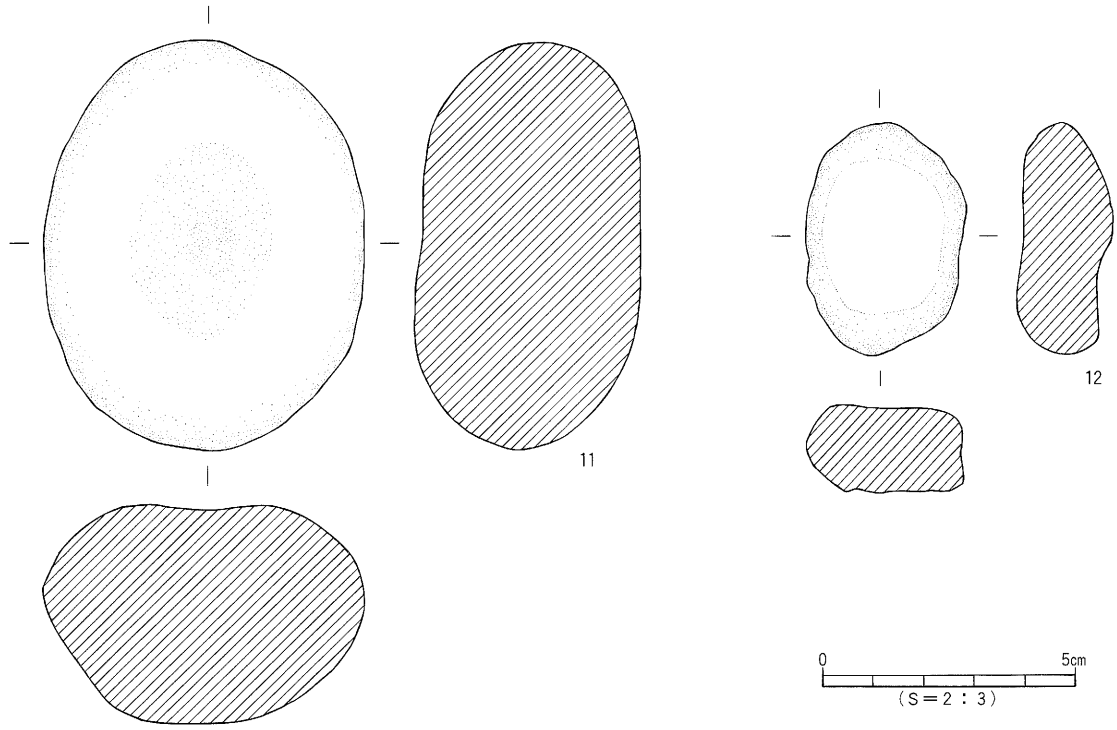
出土遺物（第83・84図、図版46）

弥生土器（８～10）８は甕形土器の口縁部片で、貼付口縁である。頸部には沈線文が施されている。９・10は壺形土器。９は口頸部片、10は頸部片で、頸部にはともに２条の沈線文が施される。

石製品（11・12）12は砂岩製の敲石で、表面の中央に使用痕がみられる。12は砂岩製のもので、器種・用途は不明である。表面は赤色（顔料付着か）をおびる。



第83図　ＳＫ４測量図・出土遺物実測図（1）



第84図　ＳＫ４出土遺物実測図（2）

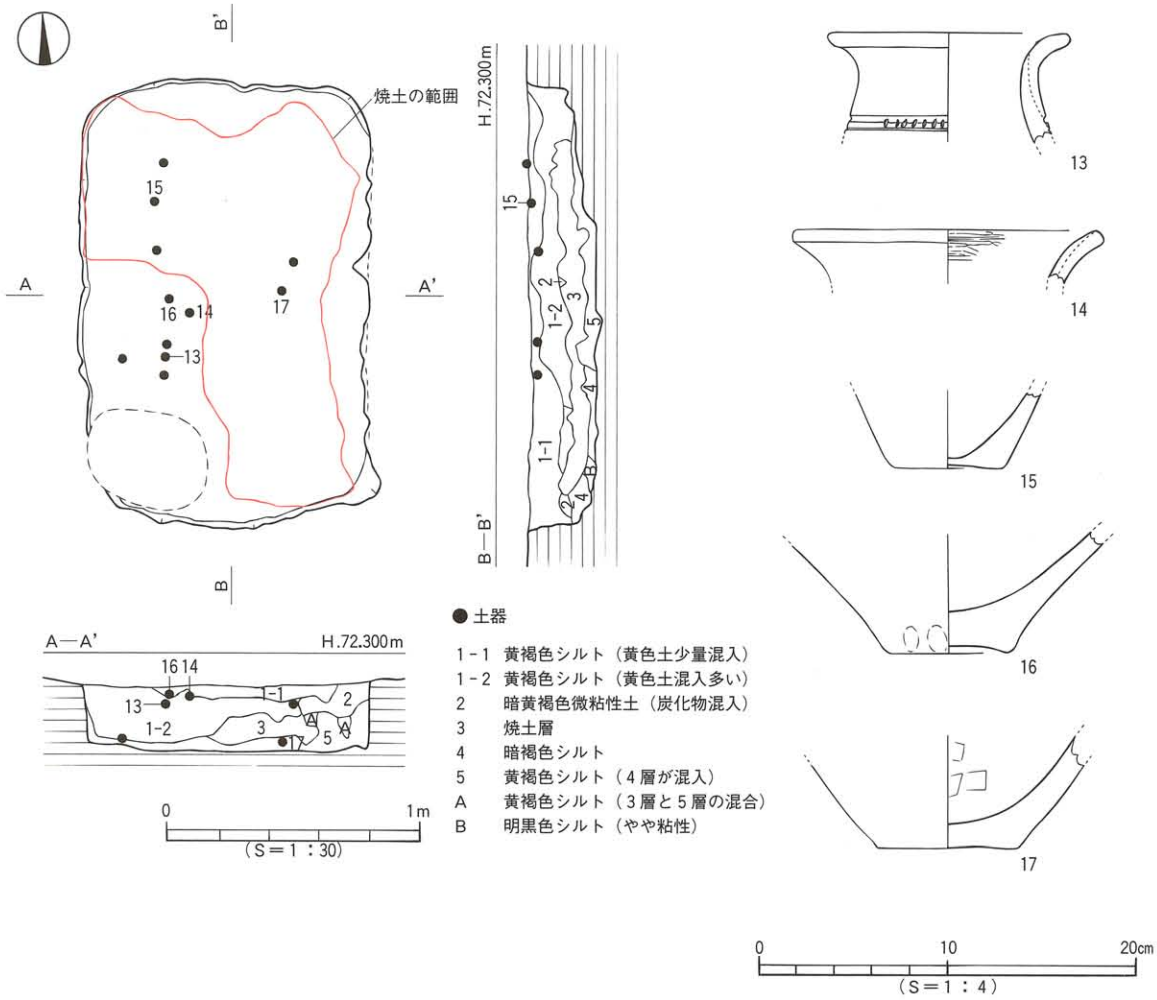
ＳＫ12（第85図、図版35）

調査地北部のＣ６・７区に位置し、柱穴に切られる。規模は長さ1.77m、幅1.18m、深さ28cmを測り、断面形態は方形を呈する。土坑西壁は上場より外方へ掘られてオーバーハングしている。長軸方向は南北方位を指す。埋土は５層に分かれ、１層黄褐色シルトで黄色土の混合が少なくない１－１層、多い１－２層となる。２層暗黄褐色微粘性土（炭化物混入）、３層焼土層、４層暗褐色シルト、５層黄褐色シルト（４層混入）である。３層までを除去した基底面はほぼ平坦となる。土坑内からは弥生土器、サヌキトイドの剥片が、礫石と混在して土坑東半部に集中した状況で出土した。

出土遺物（第85図、図版46）

弥生土器（13～17）13・14・16・17は壺形土器である。13は口頸部片で、外反する口縁は外方向に短くおさめ、頸部には２条の沈線文、沈線文間に刺突文を施す。14は口縁部片で、口縁は短く外反する。15は甕形土器の底部で、底部中央付近が若干上げ底となる。16・17は壺形土器の底部で16は上げ底、17は平底である。

剥片は、調査時と埋土洗浄作業にて検出した。微細片～中形片まで出土し、総点数は417点で合計重量10.685ｇを量る。出土点数による比率は微細片54％、細片28.3％、小片14.4％、中形片3.1％、大形片0.2％で、微細片は全体の半数を、微～細片の合計は８割を占める。



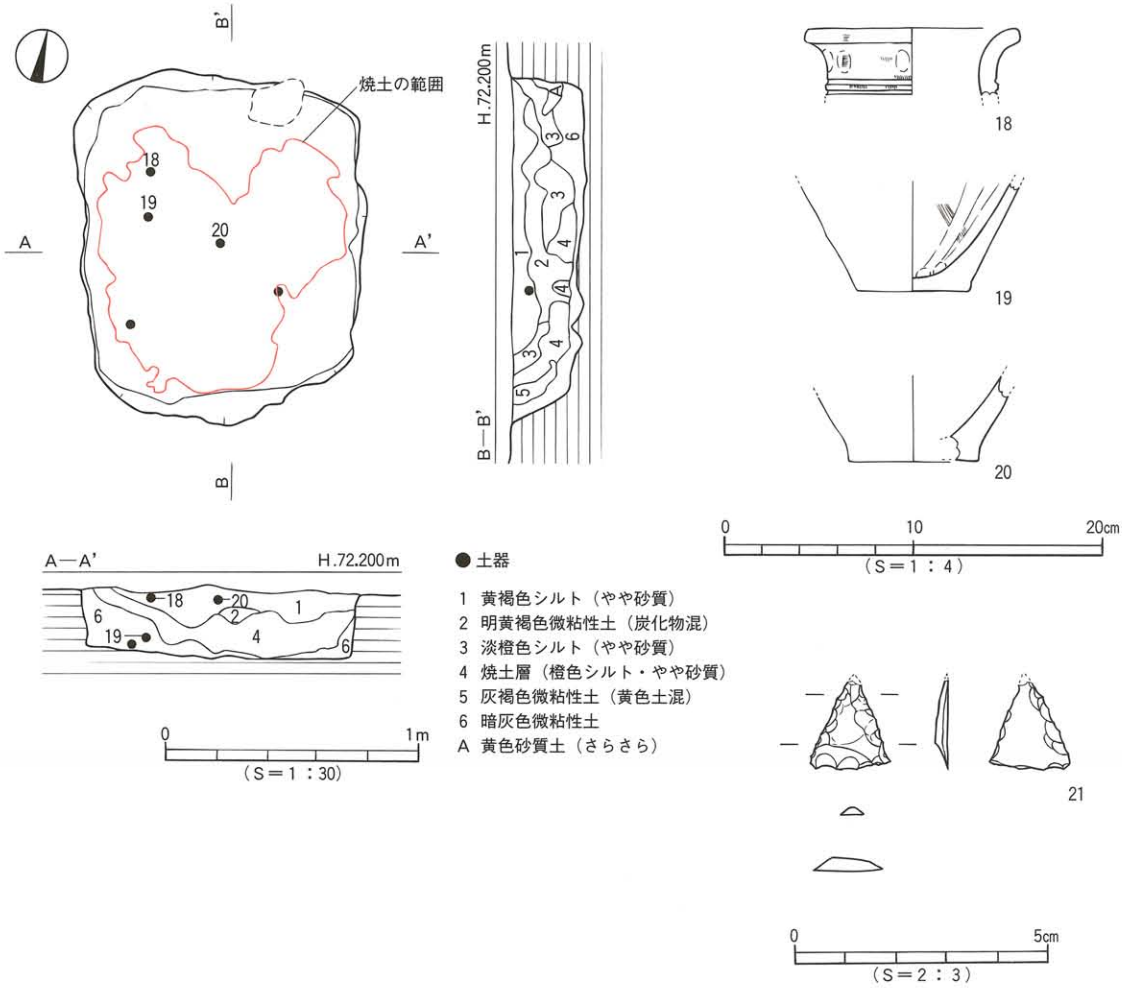
第85図　ＳＫ12測量図・出土遺物実測図

ＳＫ15（第86図、図版36・37）

調査地中央やや東寄りのＣ・Ｄ４区に位置し、柱穴に切られる。規模は長さ1.33m、幅1.12m、深さ26cmを測り、断面形態は南壁が外傾する方形を呈する。長軸方向は南北方位であるが、わずかに西へ偏る。埋土は６層に細分され、１層黄褐色シルト（やや砂質）、２層明黄褐色微粘性土（炭化物混）、３層淡橙色シルト（やや砂質）、４層焼土層、５層灰褐色微粘性土（黄色土混）、６層暗灰色微粘性土である。４層までを除去した基底面は長さ80cm、幅74cm、深さ15cmの規模で南東寄りの凹地状となる。土坑内からは弥生土器、石製品、サヌキトイドの剥片が、礫石と混在した状況で出土した。

出土遺物（第86図、図版46）

弥生土器（18～20）18は壺形土器の口縁部片で、外反する口縁は短くおさめる。頸部に２条の沈線文が施される。19・20は甕形土器の底部片で、19の底部は突出する平底、20は上げ底となる。



第86図　ＳＫ15測量図・出土遺物実測図

石製品（21）　21はサヌキトイド製で、表面と裏面の一辺に細部加工が見られる。鏃の未製品と考えられる。

剥片は調査時と埋土洗浄作業にて検出した。微細片～大型片まで出土し、総点数239点で合計重量7.990ｇを量る。出土点数による比率は微細片43.10％、細片36.40％、小片14.70％、中型片5.40％、大型片0.40％で、ほとんどが微細片と細片になる。大型片１点には自然面が残る。

ＳＫ16（第87図、図版37）

調査地Ｃ３～Ｄ４区のＳＫ15の南隣に位置する。規模は長さ1.06ｍ、幅0.82ｍ、深さ22㎝を測り、断面形態は南壁が外傾する逆台形を呈する。長軸方向はほぼ南北方位を指す。埋土は２層に分かれ、１層茶褐色シルト（微砂質、１㎝程度の礫を含む）、２層暗褐色微粘性土（１～２㎝大の礫を含む）である。土坑内より弥生土器、縄文土器、石製品、サヌキトイドの剥片が散在した状況で出土した。

出土遺物（第87図、図版47）

弥生土器（22・23）22・23は壺形土器。22は口縁部片で、端部には１条の沈線文、端部下端には刻目を施す。内面には凸帯が付く。23は底部片でやや突出する平底で、籾圧痕が付く。

縄文土器（24）24は深鉢の口縁部片で、端部は押圧文が施される。内・外面ともナデ調整が施されている。

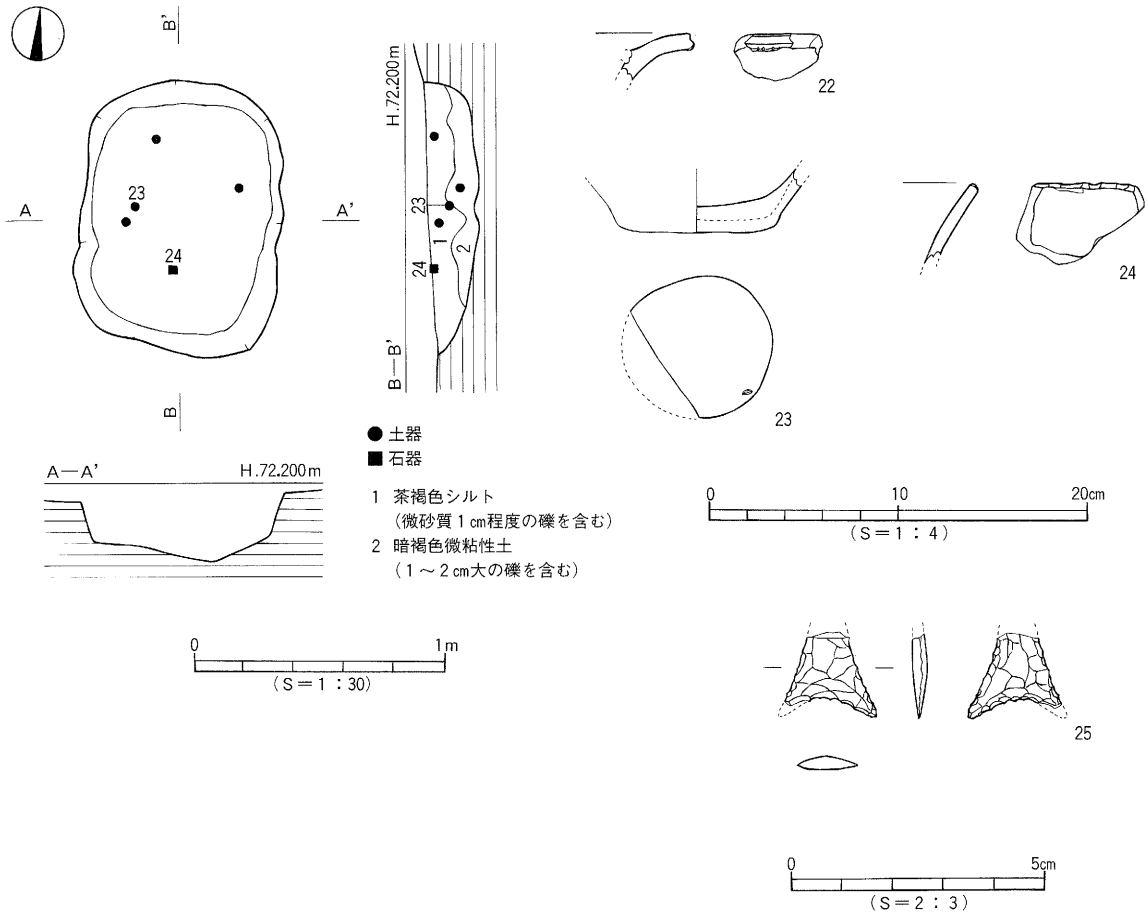
石製品（25）25はサヌキトイド製の凹基式無茎鏃の欠損品である。

剥片は調査時に検出した。微細片48点、細片28点、小片９点、中型片３点で合計重量1.753ｇを量る。

Ｂグループ（ＳＫ５、10、17、18）

ＳＫ５（第88図、図版38）

調査地南西隅Ａ１・２区に位置し、柱穴に切られる。規模は長軸1.50m、短軸0.76m、深さ17㎝を測り、断面形態は皿状を呈する。長軸方向は土坑北辺で北東方位を指す。埋土は黒褐色粘性土の単一



第87図　ＳＫ16測量図・出土遺物実測図

層である。土坑内より弥生土器、サヌキトイドの剥片が３～５cm大の礫石多数と混在した状況で出土した。

出土遺物（第88図）

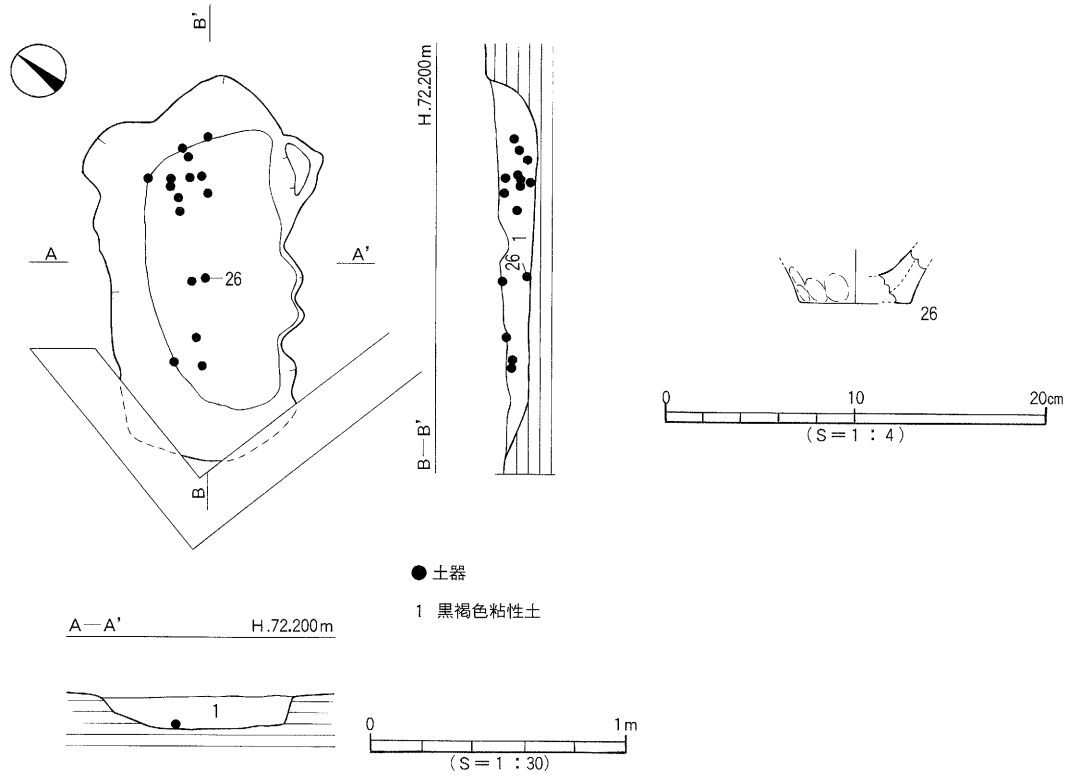
弥生土器（26）26は甕形土器の底部片で、平底と思われる。

剥片は調査時に検出した。大型片１点で、重量3.716ｇを量る。

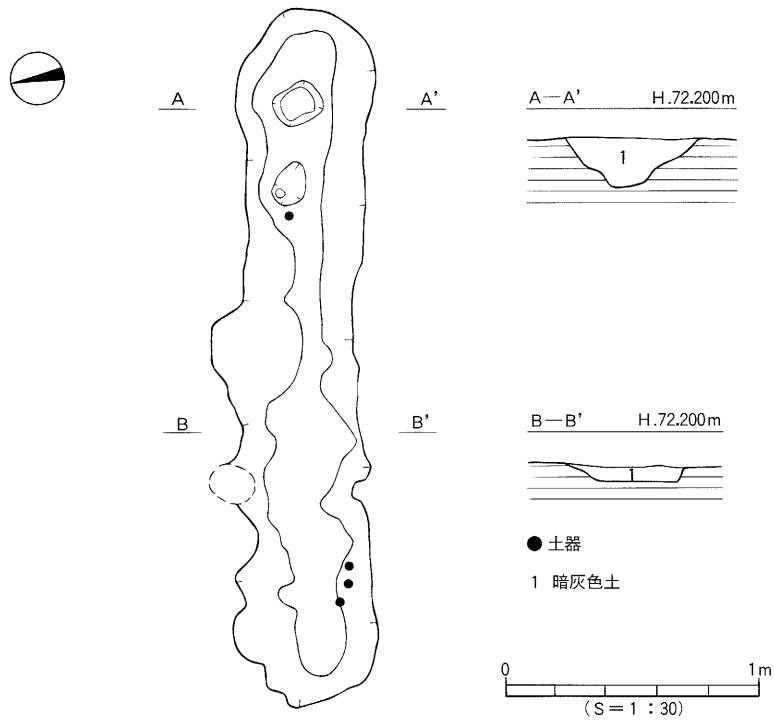
ＳＫ10（第89図、図版38）

調査地南部Ｂ２～Ｃ３区に位置し、ＳＫ２を切り柱穴に切られる。規模は長軸2.74ｍ、短軸0.50～0.60cm、深さ６～10cmを測り、断面形態は皿状を呈する。長軸方向は東西方向ではあるが、東端側で南に偏る。基底面は西から東へ緩やかな傾斜がある。埋土は暗灰色土の単一層である。東端部の基底面よりり小ピット２基を確認した。ピットの平面形態は楕円形を呈し、規模は径14～21cm、深さ６～15cmを測る。埋土は土坑埋土と同じである。ピット内からの遺物の出土はない。土坑内からは弥生土器の小片、サヌキトイドの剥片が散在した状況で出土したが、弥生土器は小片のため図化し得なかった。

剥片は調査時に検出した。中型片１点、大型片１点で合計重量4.002ｇを量る。



第88図　ＳＫ５測量図・出土遺物実測図



第89図　ＳＫ10測量図

ＳＫ17（第90図、図版38・39）

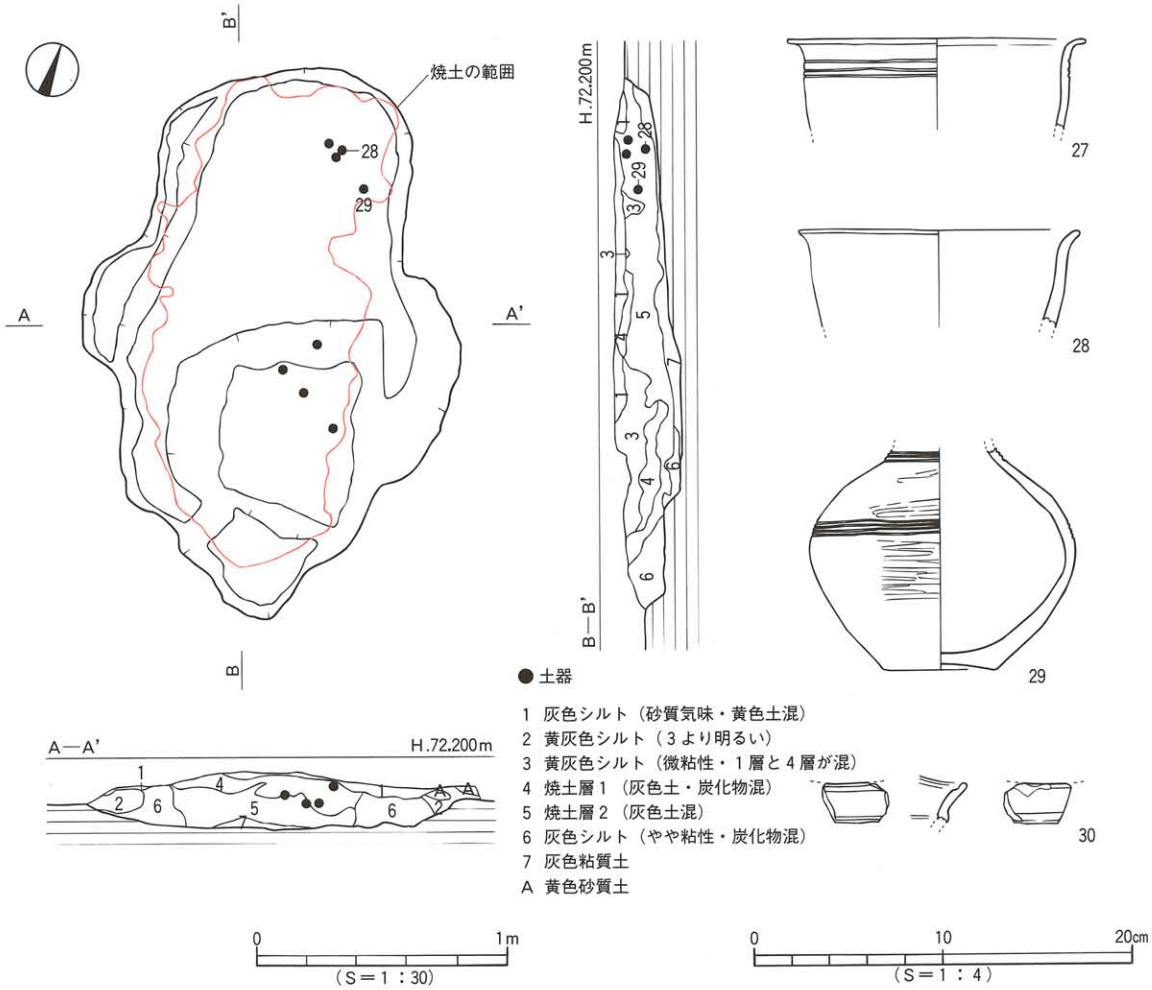
調査地南部西寄りのＣ２・３区に位置する。規模は長軸2.10m、短軸1.50m、深さ38cmを測り、長軸方向はほぼ南北方位を指す。断面形態は皿状を呈する。東・西辺に半円形の張り出しが付くが、西側は規模が東より小さい。埋土は７層に細分され、１層灰色シルト（砂質気味・黄色土混）、２層黄灰色シルト（３層より明るい）、３層黄灰色シルト（微粘性・１層と４層が混）、４層焼土層１（灰色土・炭化物混）、５層焼土層２（灰色土混）、６層灰色シルト（炭化物混）、７層灰色粘質土である。焼土層２（５層）を除去した基底面は長さ175cm、幅78cm、深さ15cmの長方形状の凹みとなる。土坑内より弥生土器・縄文土器・サヌキトイドの剥片が、５～25cm大の礫石と混在して出土した。

出土遺物（第90図、図版47）

弥生土器（27～29）27・28は甕形土器の口縁部片で、折曲口縁である。27の頸部には３条の沈線文が巡る。29は壺形土器で、胴部上位に４条、頸部に３条の沈線文が施される。底部は上底である。外面はミガキ調整される。

縄文土器（30）30は浅鉢の波状口縁部片で、端部は鍵形を呈する。胎土は混合物が多い。

剥片は調査時と埋土洗浄作業にて検出した。微細片～中型片まで出土し、総点数243点で合計重量6.236ｇを量る。出土点数による比率は、微細片43.6％、細片30.9％、小片21.4％、中型片4.1％で微～細片の出土は全体の７割を占める。



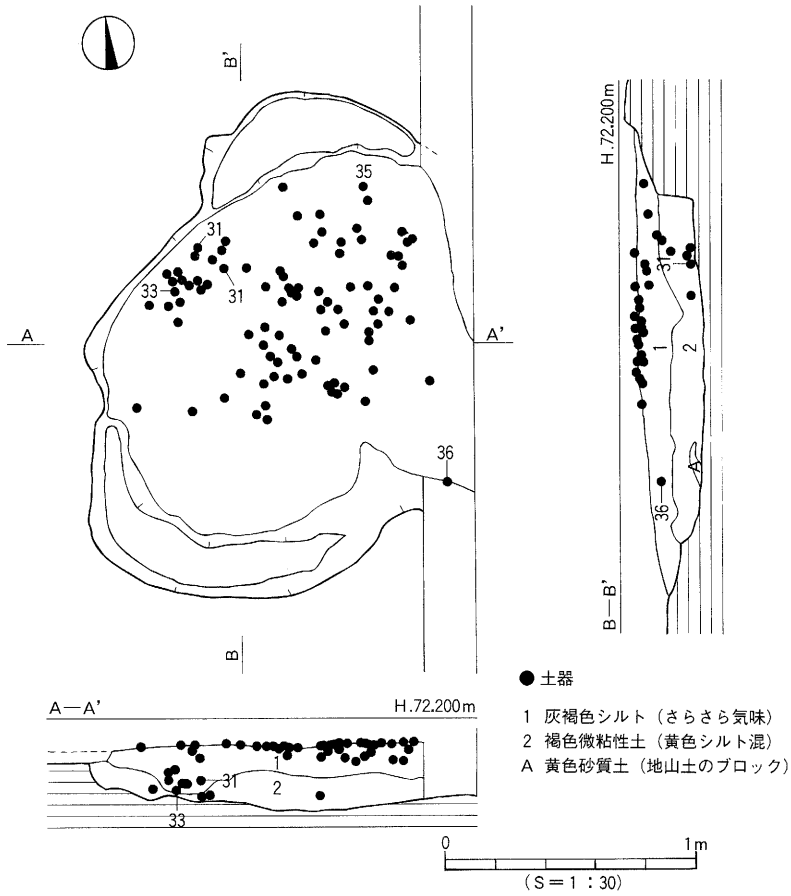
第90図　ＳＫ17測量図・出土遺物実測図

ＳＫ18（第91図、図版40）

調査地南部東端のＤ３区に位置し、東側は調査区外へと続き未調査となったが張り出すものと考えられる。また、北・南辺には三日月状のテラスを持つ。規模は長軸2.10m、検出短軸長1.56m、深さ26cmを測り、断面形態は皿状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層灰褐色シルト（さらさら気味）、２層褐色微粘性土（黄色シルト混）である。土坑内からは弥生土器、サヌキトイドの剥片、緑色チャートの剥片が、５～25cm大の礫石と混存し、１層中からの出土が目立つ状況であった。特に礫石は１層上面に集中した。

出土遺物（第92図、図版47）

弥生土器（31～36）31～35は甕形土器である。31は折曲口縁で、頸部に多重沈線文、その下に刺突

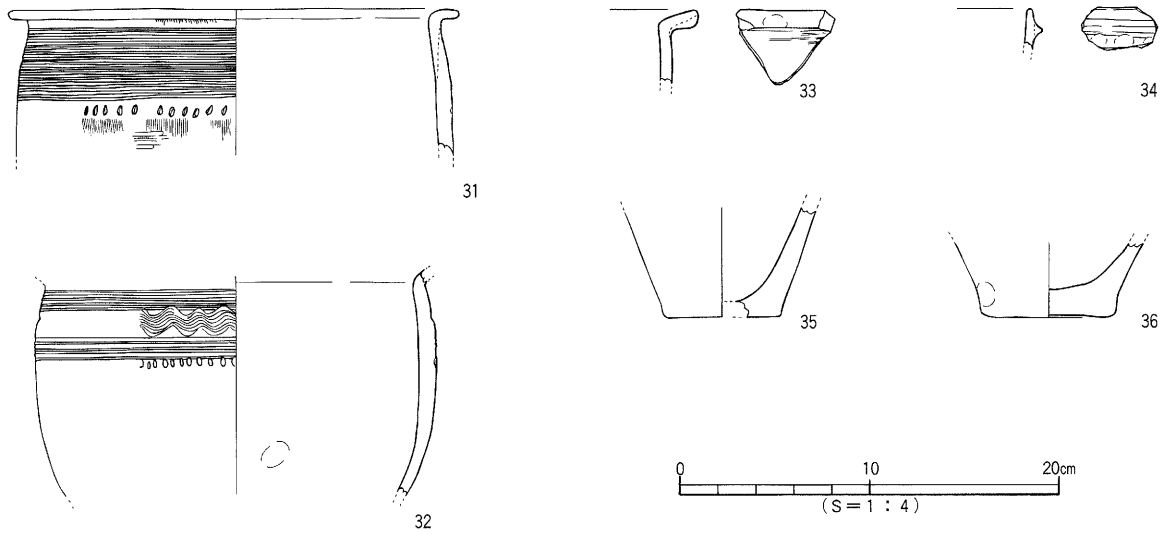


第91図　ＳＫ18測量図

列点文を施す。32は胴部片で、頸部には７条１組の沈線文が２段、沈線文間に、沈線文と同じ工具による波状文、最下段に刺突列点文が施される。33は口縁部片で、折曲口縁は端部を肥厚させている。34は口縁端部下外面に貼付凸帯が巡る。35は平底の底部片。36は壺形土器でやや突出する底部は若干上げ底となる。

剥片は、調査時に検出した。微細片～大型片まで出土し、総点数15点で合計重量17.324ｇを量る。出土点数による比率は微細片13.3％、細片13.3％、小片26.7％、中型片40％、大型片6.7％で、中型片の出土が目立つ。

緑色チャートの剥片は１点出土した。自然面が残るもので、中型片で5.219ｇを量る。



第92図　ＳＫ18出土遺物実測図

②土器埋納坑

土器埋納坑は１基を確認した。調査当初は２基の土坑の切り合い関係があると思われたが、調査が進むにつれて、同時に掘られたことが判った。

ＳＫ７（第93図、図版40・41）

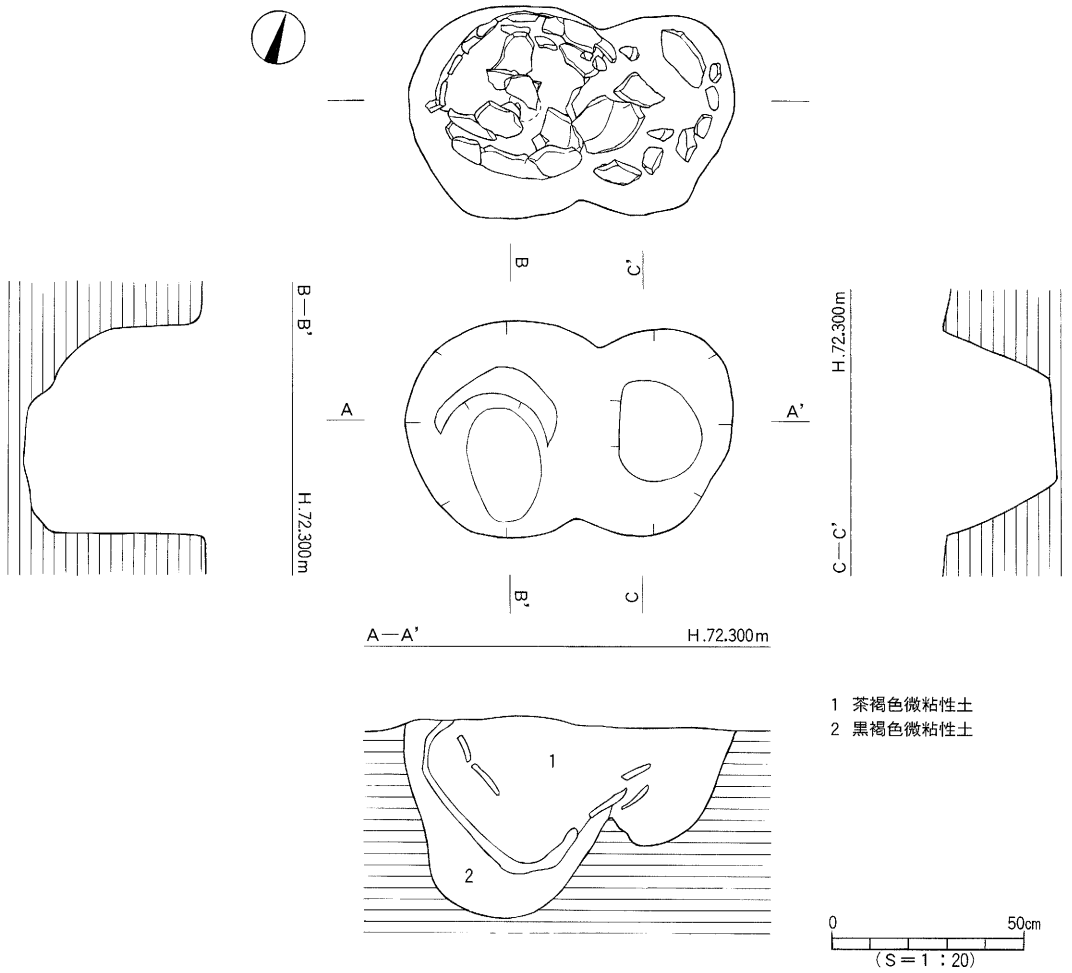
調査地中央部北寄りのＣ５区に位置する。耕作土直下が検出面であるため上部は削平を受けている。平面形態は、土坑が東西に２基並んだ様なダルマ形となる。規模は東西長0.86m、南北長0.58m、深さ28～52cmを測る。埋土は２層に分かれ、１層茶褐色微粘性土、２層黒褐色粘性土である。西半部より壺形土器の胴部片（38）がほぼ納められた状態で、東半部より同一個体の口縁部（37）と一部の胴部片が出土した。また胴部片（38）の中からは甕形土器の底部片（39）が出土した。また、埋土の洗浄作業も行ってみた。その結果、サヌキトイドの剥片を少量検出した。

剥片は微細片２点、小片１点で合計重量0.038ｇを量る。

出土遺物（第94図、図版47）

弥生土器（37～39）37・38は同一個体の壺形土器である。37は口縁部で、外反する口縁は短くおさめる。38は胴中央部分で最大径を計る器形となる。底部はやや上底となる。内・外面とも磨滅を受けているが、外面はハケ目調整後ミガキ調整が、内面にはミガキ調整が施される。39は甕形土器の底部片で突出する平底である。

時期：出土した壺形土器の形態より、弥生時代前期末から中期初頭とする。



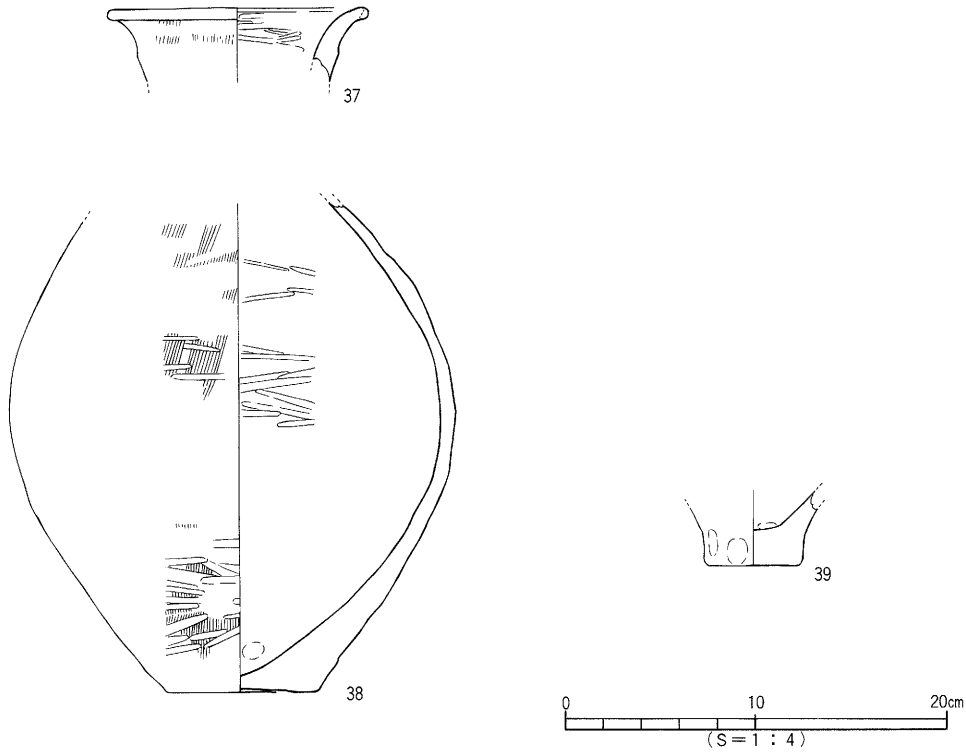
第93図　ＳＫ７測量図

③溝（ＳＤ）

ＳＤ１（第95図）

調査地北東部より中央南寄りのＢ４～Ｄ７に位置し、ＳＫ13・14及び柱穴に切られる。ほぼ直線的に伸びる溝で、溝北端部で北東方位を指す。南東端は耕作地整備の掘削によりＢ４区以西は消滅している。規模は検出長17.7m、上場幅0.20～1.20m、深さ４～８㎝を測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層褐色シルト、２層暗褐色シルトである。２層には土坑群で検出された焼土層（橙色シルト）・Ａ層が見られる。溝内より弥生土器と５～10㎝大の礫石が少量出土した。出土した弥生土器は、小片のため図化し得なかった。

時期：出土した弥生土器の形態より、弥生時代前期末から中期初頭とする。



第94図　ＳＫ７出土遺物実測図

④性格不明遺構（ＳＸ）

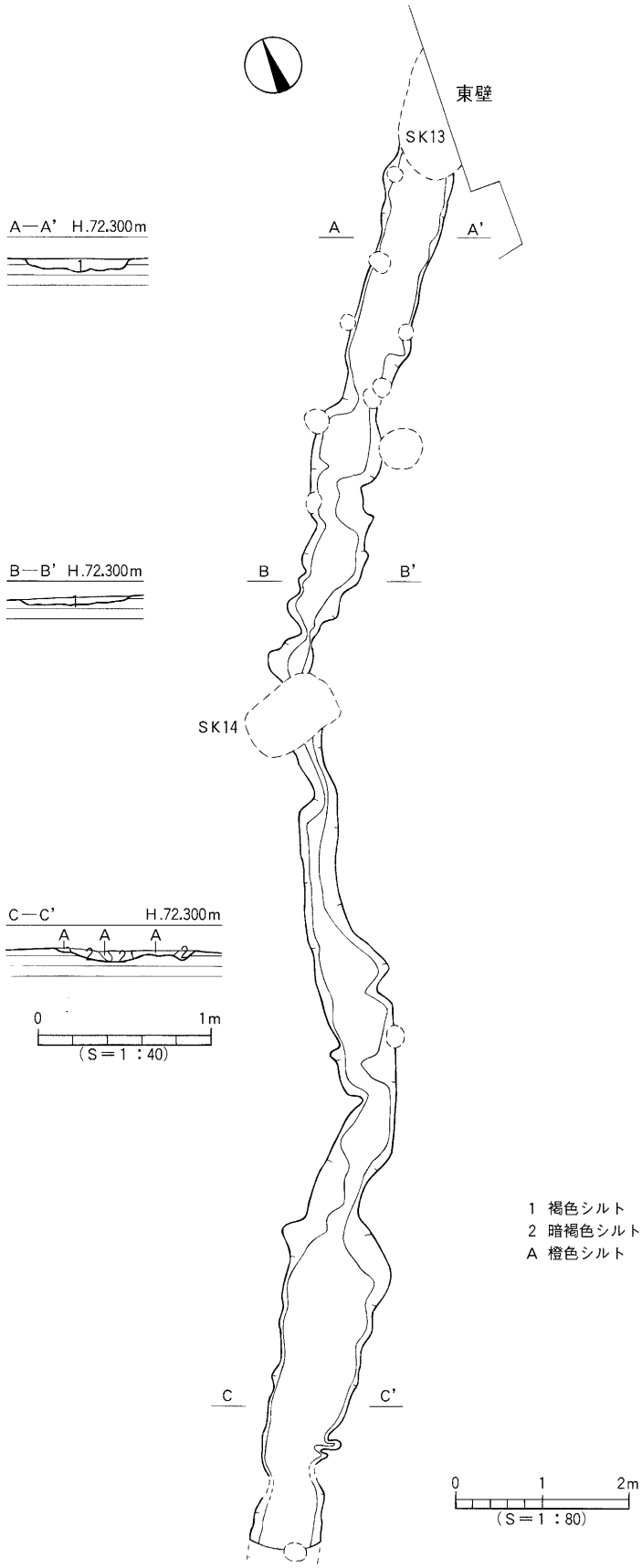
性格不明遺構は３基を検出した。３基とも弥生時代前期末から中期初頭に位置付けられる。

ＳＸ１（第96図、図版41）

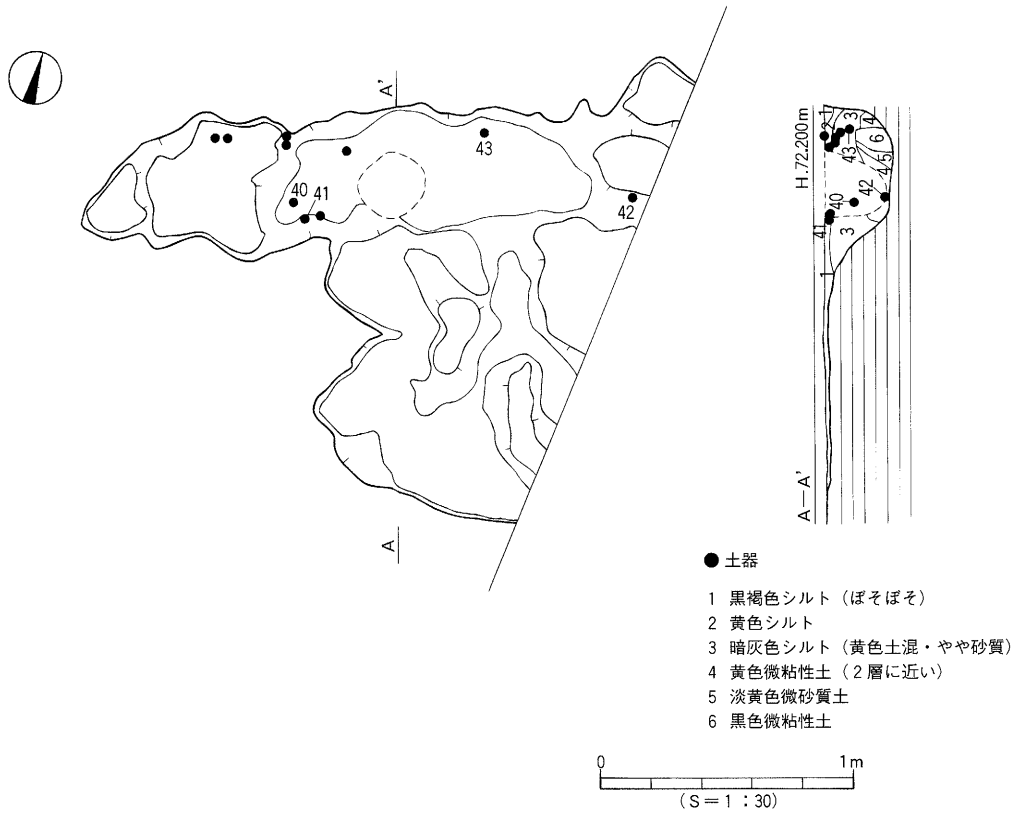
調査地中央西端のＤ５・６区に位置し、柱穴に切られる。遺構東部は調査区外へ続く。平面形態は不整形で、完掘後の基底面は南側にテラスを持ち、北側は東西方向に溝状の深まりをもつ。規模は東西検出長2.49m、南北長1.50m、深さは南側テラス部で２～４cm、北側の溝状部で19～27cmを測る。埋土は６層に細分される。１層黒褐色シルト（ぼそぼそ）、２層黄色シルト、３層暗灰色シルト（黄色土混・やや砂質）、４層黄色微粘性土（２層に近い）、５層淡黄色微砂質土、６層黒色微粘性土である。土坑内からは弥生土器が５～15cm大の礫石と混在し、北側の溝状部分から多く出土した。

出土遺物（第97図、図版47）

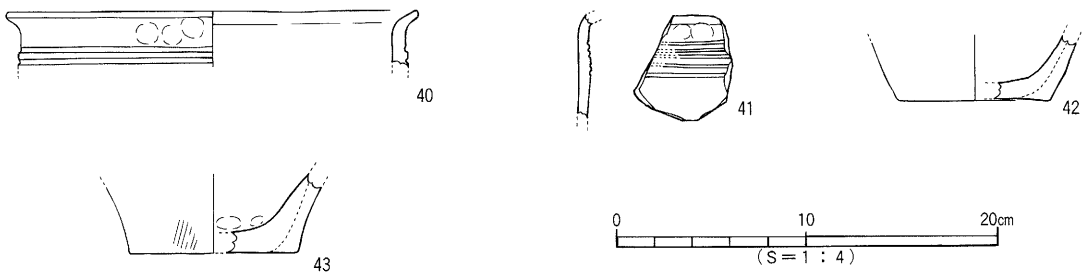
弥生土器（40～43）40・41は甕形土器。40・41は折曲口縁で、40の頸部には深い沈線文が２条まで見られ、41は浅い沈線文が５条施されている。42・43は壺形土器の底部片で、42は底部中央部付近がやや上げ底となり、43は突出する平底である。


東壁
SK13
A
A'
A—A' H.72.300m
1
B
B'
B—B' H.72.300m
1
SK14
C—C' H.72.300m
A A A
2 2 2
0 1m
(S=1:40)
C
C'
1 褐色シルト
2 暗褐色シルト
A 橙色シルト
0 1 2m
(S=1:80)

第95図　ＳＤ１測量図



第96図　ＳＸ１測量図



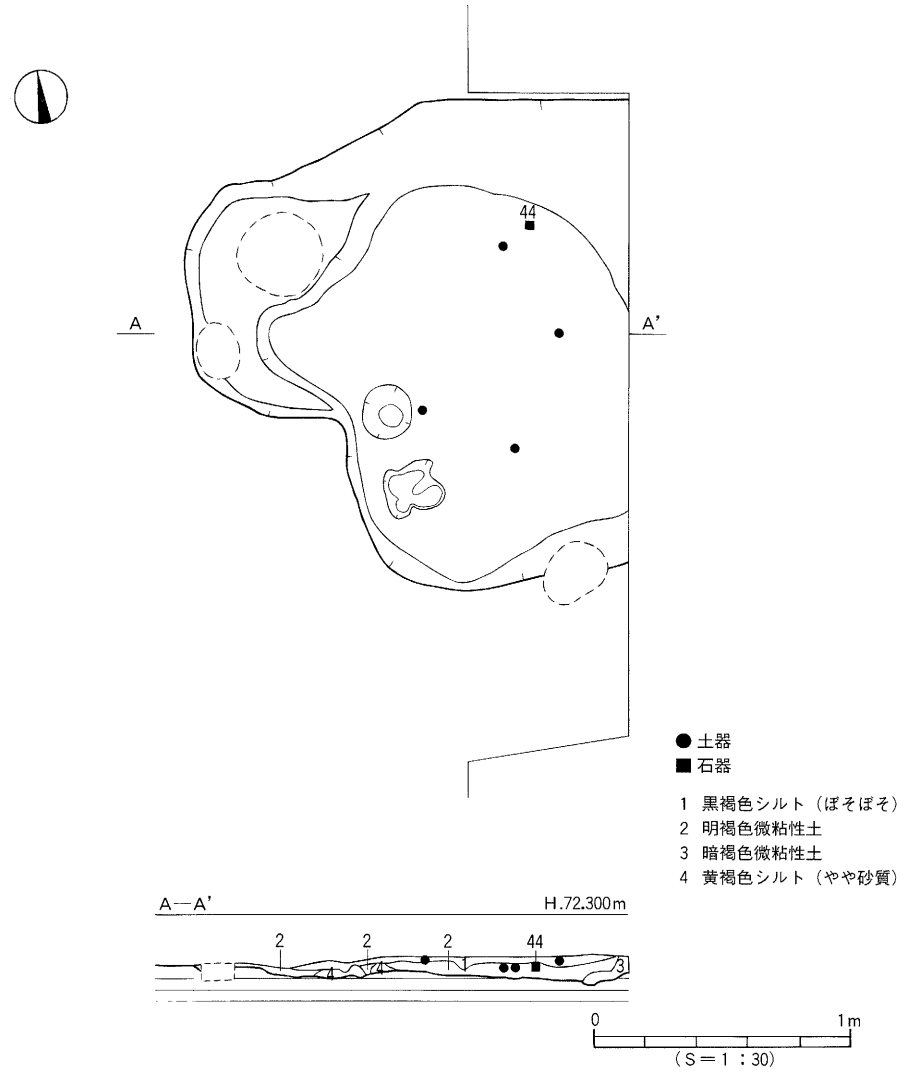
第97図　ＳＸ１出土遺物実測図

ＳＸ２（第98図、図版42）

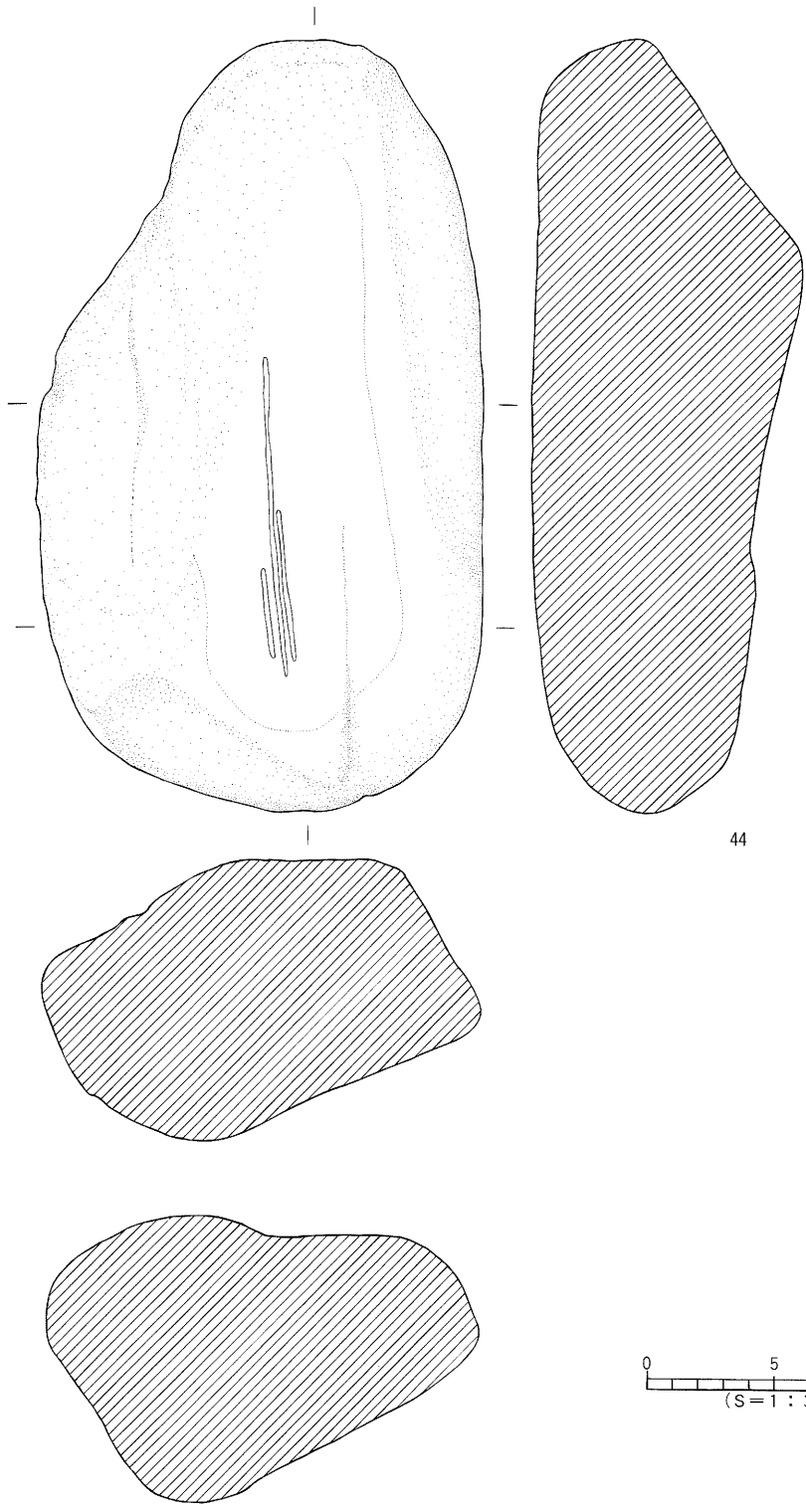
調査地中央部西端のＤ４・５区に位置し、柱穴に切られる。遺構東部は調査区外へ続く。平面形態は北半部西側で半円状に張り出した不整形になる。規模は東西検出長1.74ｍ、南北長1.93ｍ、深さ２～12㎝を測る。断面形態は浅い皿状を呈する。埋土は４層に分かれ、１層黒褐色シルト（ぼそぼそ）、２層明褐色微粘性土、３層暗褐色微粘性土、4層黄褐色シルト（やや砂質）である。南半基底部西端より小ピット２基を検出した。ピットの平面形態は円～楕円形を呈し、径20～26㎝、深さ９～17㎝を測る。埋土は黄褐色シルト（やや粘性）である。ピット内からの遺物の出土はない。土坑内からは弥生土器、石製品、サヌキトイドの剥片が、５～15㎝大の礫石と混在した状況で出土したが、弥生土器は小片のため図化し得なかった。

出土遺物（第99図、図版48）

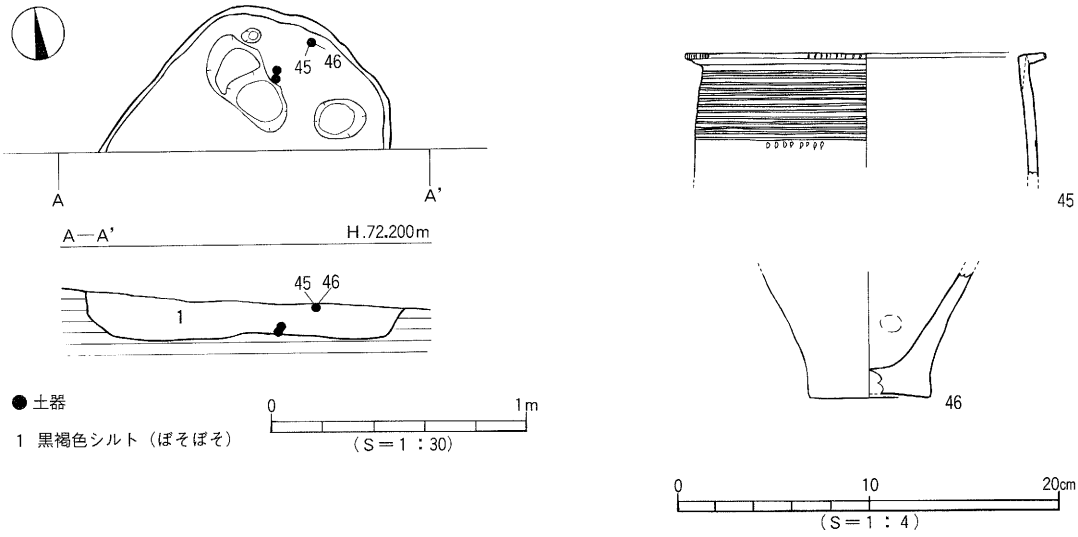
石製品（44）44は砂岩製の砥石である。上面のみ平坦な擦痕と３条の溝状の使用痕が見られる。剥片は中型片が１点である。重量は1.012ｇを量る。



第98図　ＳＸ２測量図



第99図　ＳＸ２出土遺物実測図



第100図　ＳＸ３測量図・出土遺物実測図

ＳＸ３（第100図、図版42）

調査地南端部のＣ１区に位置し、南部は調査区外へ続く。規模は東西長1.17m、南北検出長0.57m、深さは18cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色シルト（ぼそぼそ）の単一層である。基底面より小ピット４基を検出した。ピットの平面形態は楕円形で、径６～25cm、深さ５～20cmを測る。埋土は土坑埋土と同じである。遺物の出土はない。土坑内からは弥生土器が、数点の礫石と混在し、遺構北部に集中した状況で出土した。

出土遺物（第100図、図版48）

弥生土器（45・46）45・46は胎土・器面調整が同じで同一個体である。45は貼付口縁で口縁端面に刻目を、頸部に櫛状工具による浅い多重沈線文と、沈線文下に刺突列点文が巡る。46は突出するやや上げ底の底部となる。内外面ともナデ調整が施される。

２）古墳時代

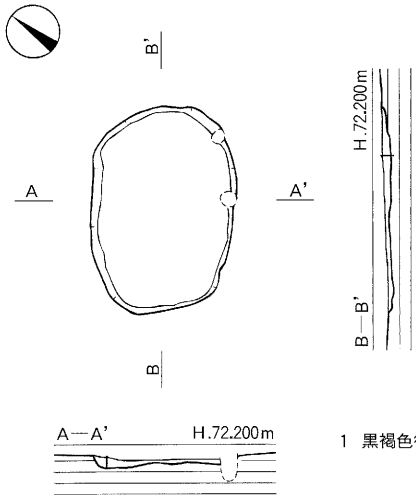
古墳時代の遺構は、調査地北半部より土坑４基を検出した。土坑の平面形態は、いずれも楕円形を呈する。ＳＫ６・11は遺物の出土はなかったが、平面形態、埋土、規模などがＳＫ13・14と類似することから古墳時代の遺構とした。

土坑（ＳＫ）

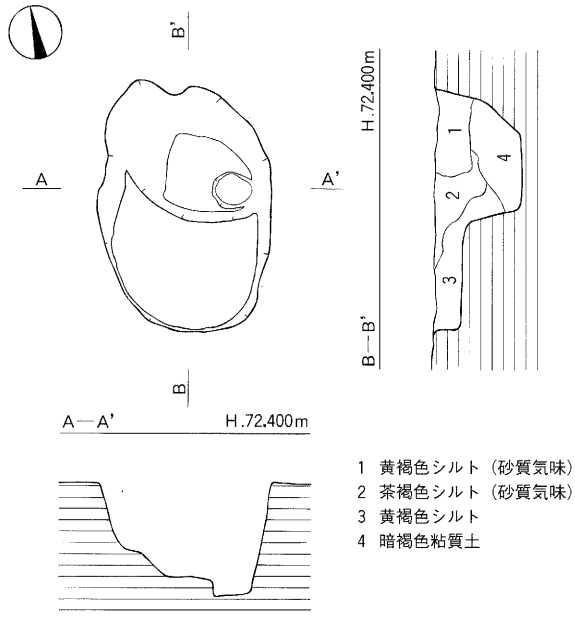
ＳＫ６（第101図、図版42）

調査地中央部寄りの北半部Ｂ・Ｃ６区に位置し、東辺を現代の杭跡により切られる。長軸方向は北東方位を指す。規模は長軸0.82m、短軸0.60m、深さ5cmを測る。断面形態は浅い皿状を呈する。埋土は黒褐色微粘性土の単一層である。

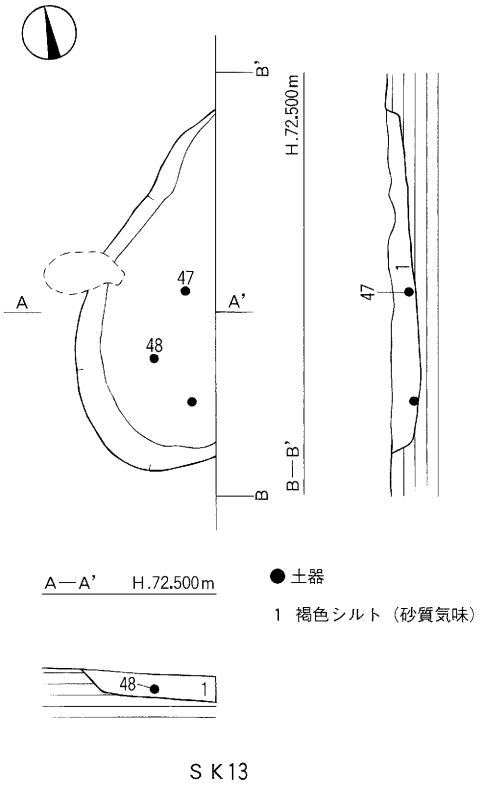
時期：遺物は出土していないが、平面形態、埋土、規模などから古墳時代とする。



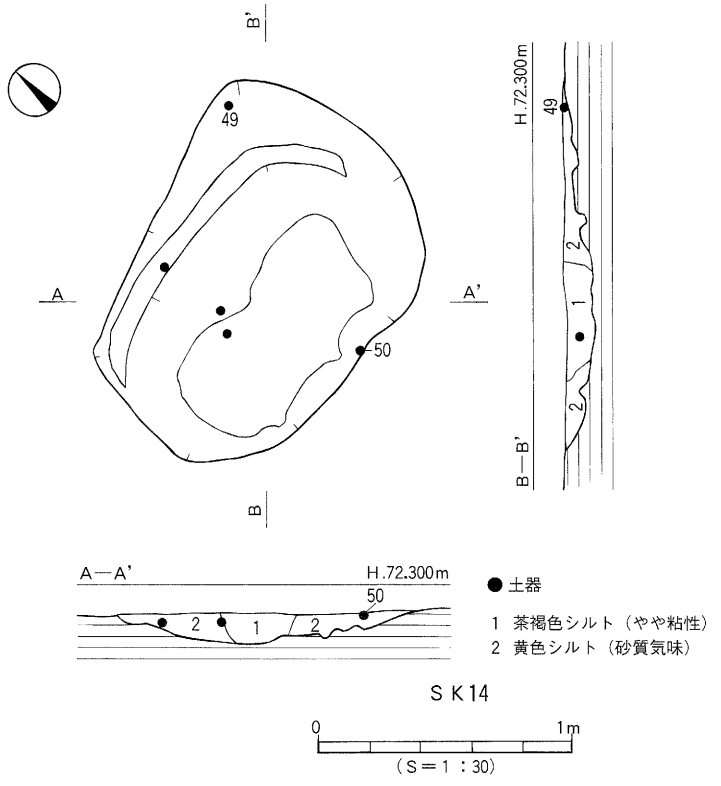
SK6



SK11



SK13



SK14

第101図　SK6・11・13・14測量図

ＳＫ11（第101図、図版43）

調査地北部東寄りのＣ７・８区に位置する。長軸方向は南北を指すが、長軸北側でやや東に偏る。規模は長軸0.96m、短軸0.70m、深さ44cmを測る。断面形態は長軸側で２段の逆台形状を呈する。埋土は４層に分かれ、１層黄褐色シルト（砂質気味）、２層茶褐色シルト（砂質気味）、３層黄褐色シルト、４層暗褐色粘質土である。埋土の堆積状況と、東側中央に円形の凹みがみられることから柱穴の可能性もある。

時期：遺物は出土していないが、平面形態、埋土、規模などから古墳時代とする。

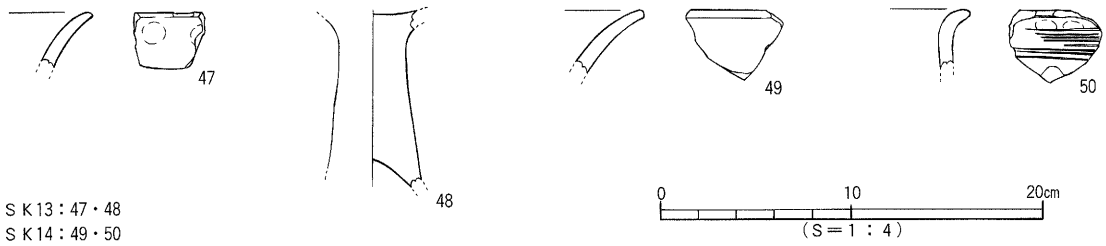
ＳＫ13（第101図、図版43）

調査地北部東端のＤ７区に位置し、ＳＤ１を切り柱穴に切られる。遺構東部は調査外へ続く。長軸方向は長軸北側で北東方位を指す。規模は検出長軸1.34m、短軸0.80mを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は褐色シルト（砂質気味）の単一層である。土坑内からは土師器、須恵器片が少量出土したが、須恵器片は小片で図化し得なかった。

出土遺物（第102図、図版48）

土師器（47・48）47は甕形土器の口縁部片で、外反する口縁部は、端部は尖り気味に丸くおさめる。48は高坏形土器で、中実の柱部である。

時期：出土した土師器、須恵器の形態から７Ｃ代とする。



第102図　ＳＫ13・14出土遺物実測図

ＳＫ14（第101図、図版43）

調査地中央部北寄りのＣ６区に位置し、ＳＤ１を切る。長軸方向は、東西方向ではあるが長軸東側でやや北へ偏る。規模は長軸3.00m、短軸2.10mを測る。断面形態は浅いレンズ状を呈する。埋土は２層に分かれ、１層茶褐色シルト（やや粘性）、２層黄色シルト（砂質気味）である。土坑内より少量の土師器と混入品の弥生土器、サヌキトイドの剥片が出土した。

出土遺物（第102図、図版48）

土師器（49）49は甕形土器の口縁部片で、外反する口縁は端部を尖り気味に丸くおさめる。

弥生土器（50）50は甕形土器の口縁部片で、折曲口縁である。頸部は櫛状工具による多重沈線文が施される。

剥片は混入品と思われたが、調査時に検出したため埋土を採取し洗浄作業をおこなった。その結果、微細片～小片までを検出した。微細片24点、細片20点、小片12点で合計重量0.640ｇを量る。

時期：出土した土師器の形態より古墳時代後期とする。

3）近・現代

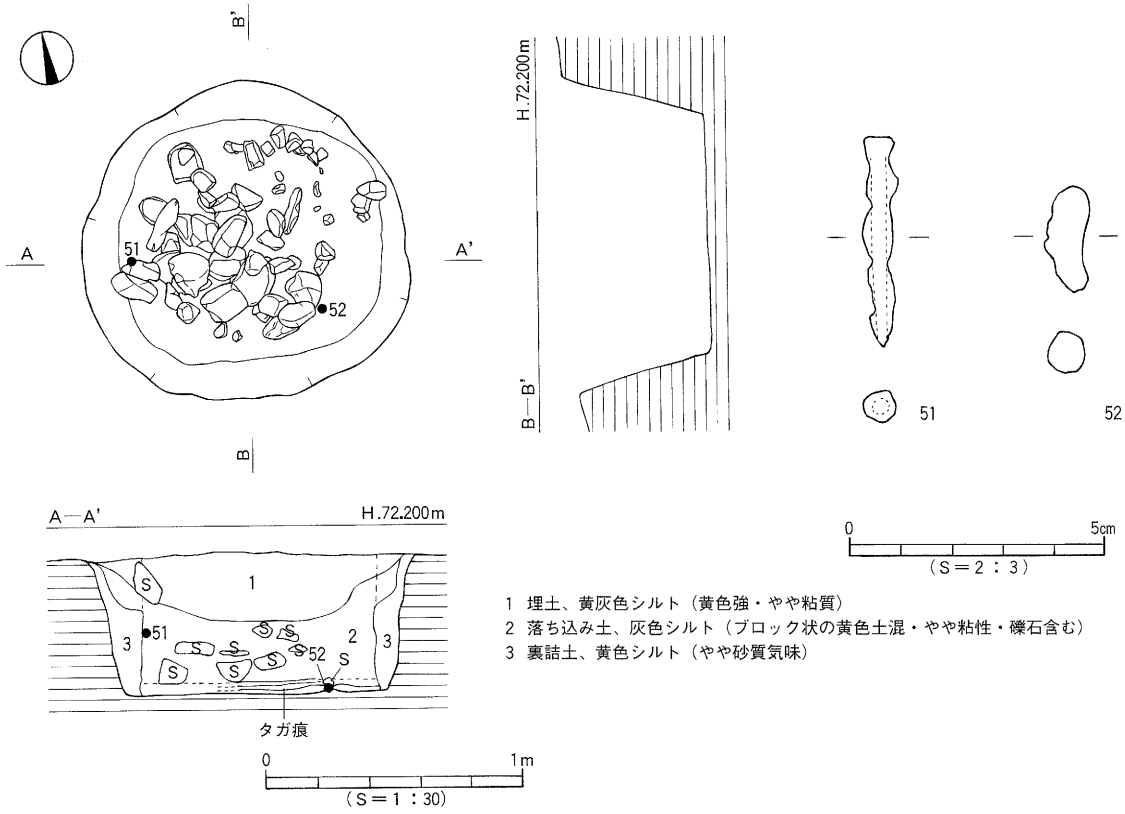
近・現代の遺構は、調査地南西部で土坑２基を検出した。このうち、１基は桶棺墓である。

ＳＫ１【墓】（第103図、図版44）

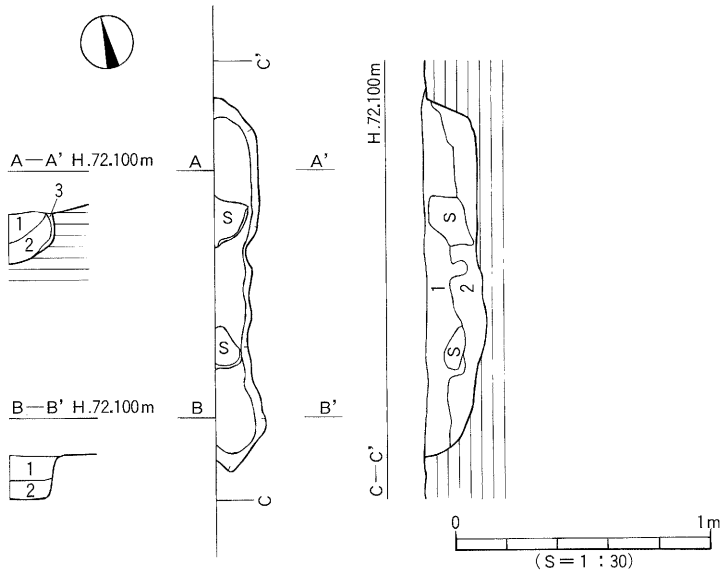
調査地南西部のＢ２区に位置し、ＳＫ２を切る。墓坑の平面形態は円形を呈し、規模は径1.25～1.30m、深さ56cmを測る。断面形態は逆台形状を呈する。埋土は３層に分かれ、１層黄灰色シルト（黄色強・やや粘性）、２層灰色シルト（ブロック状の黄色土混・やや粘性）、３層黄色シルト（やや砂質気味）である。１層は覆土、２層は落ち込み土で、礫石が多量に混入している。３層は棺を埋置した時の裏詰土である。

上部施設は落ち込み土中に多量の礫石が混入していることから、礫石で葺かれたマウンド状の土盛りがなされていたことが判る。地下施設は、平面では円、断面では台形の棺痕跡が、また３層の下端部壁面にタガのスタンプが確認できたことで桶棺の埋置となる。棺の規模は口径93cm、底径92cm、高さ56cmを測り、棺径は大型の部類に入る。棺の形態は手洗状を呈する。棺内からは遺骸体、副葬品の出土はなく、鉄製品が出土した。棺外からも副葬品が出土していない。

埋葬形態は、棺径は大きいが高さが低い事などから側臥屈葬と考えられる。



第103図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図



第104図　ＳＫ９測量図

出土遺物（第103図、図版48）

鉄製品（51・52）蓋板を止めたと思われる釘で、サビ土に覆われている。図中の断面形状は推定である。51は現存長4.2cmを測る。

ＳＫ９（第104図、図版45）

調査地南部西端のＡ２・３区に位置し、ＳＫ４を切る。遺構西部は調査区外へ続く。長軸方向は南北をさすが、長軸北側でやや東へ偏る。平面形態は楕円形を呈するものと思われ、規模は長軸1.40m、検出短軸長12～17cm、深さ24cmを測る。埋土は３層に分かれ、１層灰色シルト、２層灰色砂質土、３層灰色粘質土である。土坑内からは17cm大と20cm大の礫石２点が出土したが、石製品ではない。他の遺物の出土は見られなかった。土坑の性格は不明である。

４）その他の遺構・遺物

①柱穴出土遺物（第105・106図、図版48）

弥生土器（53）53は壺形土器の口縁部片で、外反する口縁は短く、端部は丸くおさめる。

石製品（54～58）54は緑泥片岩製の鑿である。頭部より刃部にかけて除々に幅狭に作られ片刃の刃部をもつ。刃部先端と頭部の一部を欠く。55は砂岩製の凹石で、表面のほぼ中央に擦痕による凹みがある。56はサヌキトイド製の凹基式無茎鏃である。平面形態は二等辺三角形を呈し、基部はわずかに抉られている。57はサヌキトイド製で、鏃への製作途中の欠損品と考えられる。基部と刃部に細部調整が見られる。58は砂岩製の台石で、表面に擦痕が見られる。

図化はしていないが、サヌキトイドの剥片が出土している。剥片は中型片１点で0.251ｇを量る。

②第Ⅴ層出土遺物（第107図）

弥生土器（59～65）

甕形土器（59・60・62）59・60は折曲口縁である。60は口縁端部下端に刻目、59・60とも頸部には３条の沈線文が施される。62はややくびれをもつ上げ底の底部片である。

壺形土器（61・63～65）61は頸部片で、多重沈線文間に凸帯文が施される。凸帯は頂部を押圧した後、刺突文が施される。63～65は底部片である。63はやや突出する平底で、底部に籾圧痕がある。64・65はわずかに上底である。

図化は行っていないが、サヌキトイドと緑色チャートの剥片が出土している。サヌキトイドの剥片は中型片４点で2.514ｇを、緑色チャートの剥片は中型片１点で0.365ｇを量る。

③第Ⅱ層出土遺物

サヌキトイドの剥片を採集している。図化は行っていない。剥片は中型片１点で重量1.248ｇを量る。

④第Ⅰ層出土遺物

サヌキトイドの剥片を採集している。図化は行なっていない。剥片は中型片１点で重量6.012ｇを量る。

⑤層位不明出土遺物（第108図）

弥生土器（66・67）66・67は甕形土器の底部片で、66は平底、67はわずかに上底である。

陶磁器（68～70）　68は磁器碗である。器壁は厚く内外とも施釉される。外面には染付けが見られる。69・70は削り出し高台の陶器皿底部片である。69は高台付近には施釉されない。施釉は乳白色を呈し光沢はない。70は内外面とも施釉される。

サヌキトイドの剥片を採集している。図化は行っていない。剥片は中型片２点、大型片１点で合計重量4.447ｇを量る。

（４）小　結

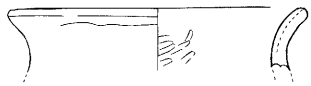
今回の調査では、縄文、弥生、古墳時代と近世の遺構と遺物を検出した。

１）縄文時代

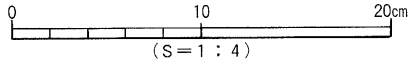
弥生時代の土坑ＳＫ16・17より混入品ではあるが、縄文時代晩期の浅鉢片と深鉢片が出土した。古市遺跡２次調査地では当該期の土坑を検出しており、調査地周辺にも遺構の存在が充分に考えられる。また、古市遺跡２次調査地と近接していること、出土土器の時期が同じことから同一集落内であると考えられる。

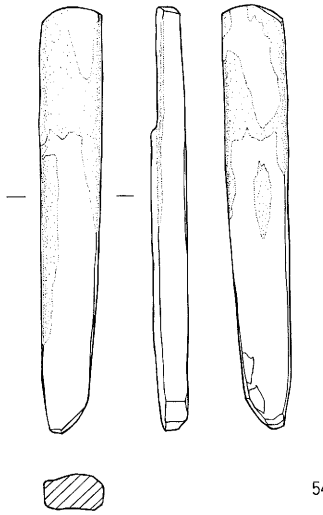
２）弥生時代

弥生時代の遺構は土坑11基、土器埋納坑１基、溝１条、性格不明遺構３基を検出した。すべての遺構が前期末から中期初頭に時期比定される。

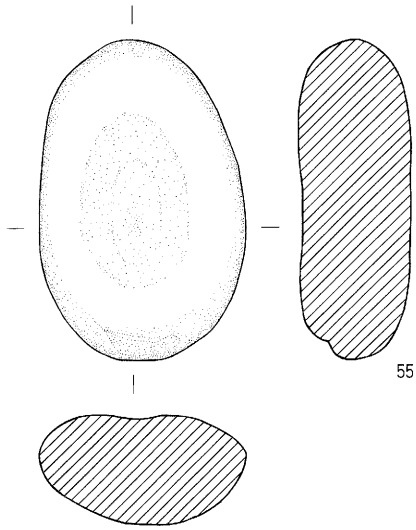


53

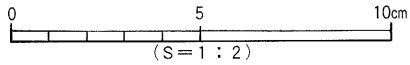


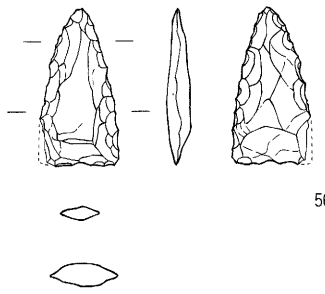


54

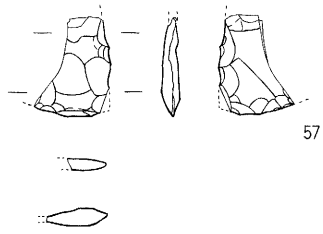


55

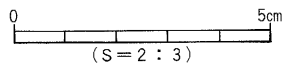




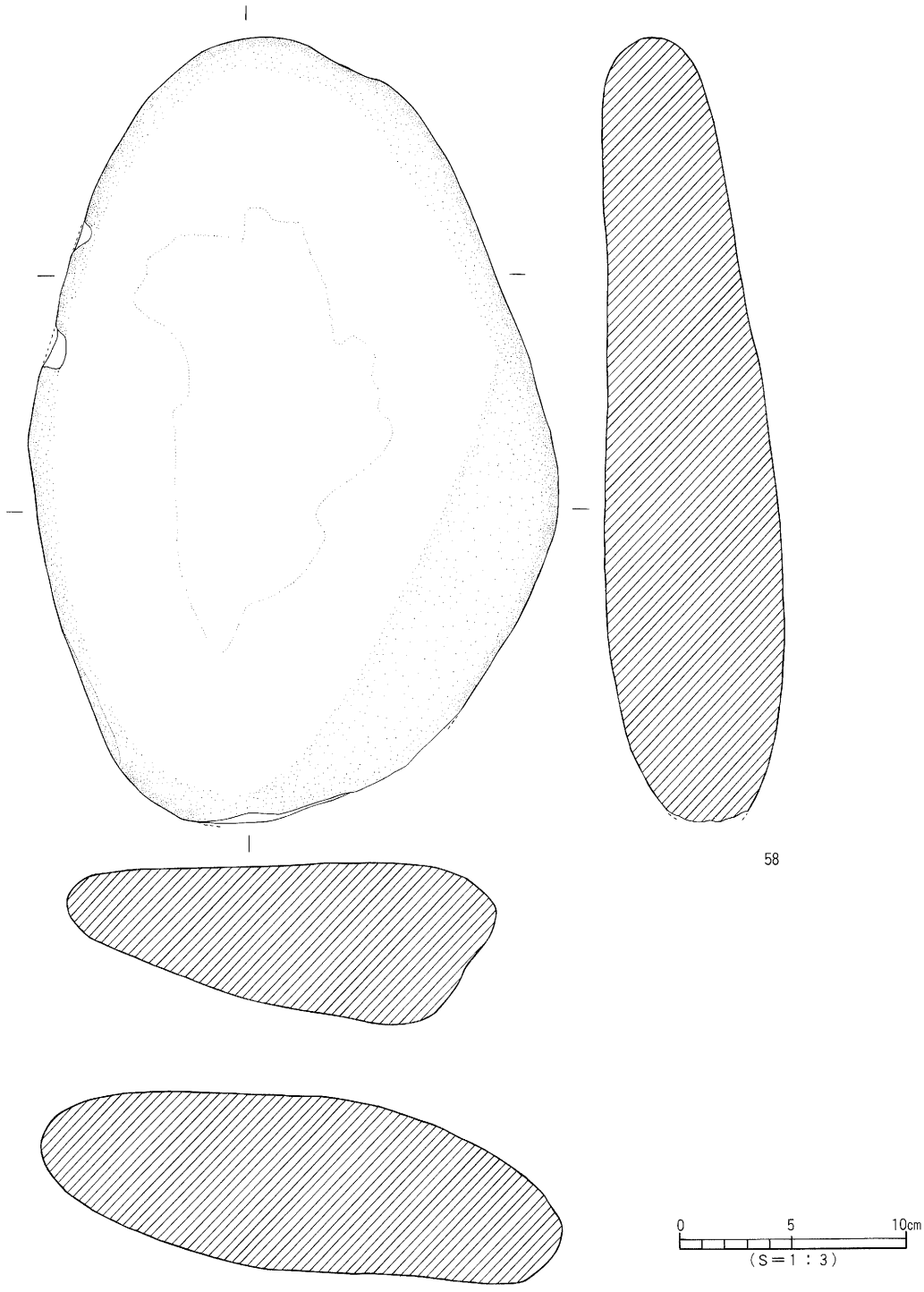
56



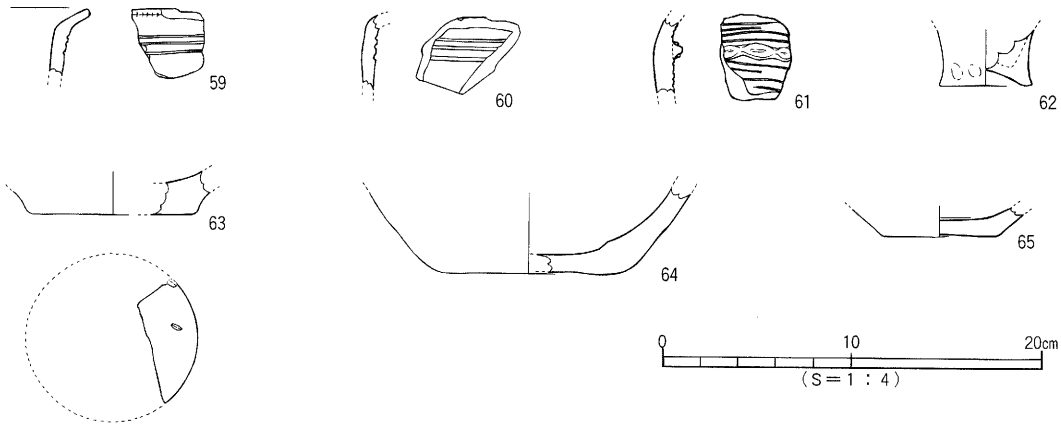
57



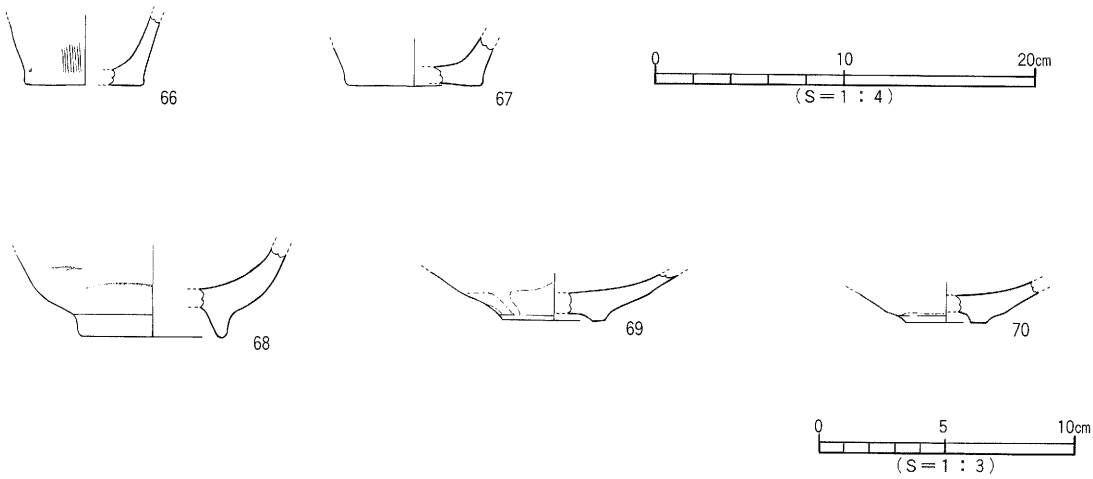
第105図　柱穴出土遺物実測図（1）



第106図　柱穴出土遺物実測図（2）



第107図　第Ⅴ層出土遺物実測図



第108図　出土層位不明遺物実測図

前期末から中期初頭の土坑群が検出された遺跡には岩崎遺跡、久米高畑遺跡24～26次調査地などがある。検出された遺構は土坑群のみで、竪穴式住居址は検出されていない。また岩崎遺跡、久米高畑遺跡24・25次調査では２重に巡る環濠間と内濠のおそらくは内側付近に集中して検出されている。集落内の端縁部に集中しているものと思われ、当調査地においても、環濠は検出されていないものの、竪穴式住居址などは検出されておらず、集落内での土坑の配置は岩崎遺跡や久米高畑遺跡24・25次調査と同様と考えられる。今回の調査で検出された土坑のうち、５基の土坑からは焼土層を確認している。焼土層が確認された土坑は、土坑内が掘り窪められて焼土層が堆積しているもので焼成土坑と考

えられるが、焼土層の入る土坑の検出は今回が初例である。焼土層が入る土坑は、４基は平面形態が長方形を呈するもので、そのうちの１基が楕円形を呈するが、楕円形の土坑も含めて長軸方位はすべてが南北方向を指すものであった。焼土層中からは遺物の出土がないため、焼成の目的は明らかにできなかった。

古市遺跡２次調査地と同一集落内で検出された土坑群の中でも、焼土層をもつ土坑群は本調査地に集中しており、土坑群域内においても何らかの目的をもった配置状況が見られるものであった。

溝１条は埋土の堆積状況から、水利を目的としたものではなく、道路（通路）的な性格のものと考えられる。

３）古墳時代

古墳時代の遺構は土坑４基がある。遺物の出土が少なく明確な時期や性格などの判断には至っていないが、古市遺跡２次調査地で検出された古墳時代の遺構も含めて、同一集落内と考えられ、集落の存続は７世紀代の短期間と考えられる。

４）近世

近世では墓１基と土坑１基を検出した。墓（ＳＫ１）からは副葬品の出土がなく明確な時期決定には至っていない。しかし、墓壙上部施設には礫石で葺かれた盛土が確認されたこと、桶棺が埋置されていたことなどから近世墓の特長は充分に見られた。墓壙の遺存状況が良好であったため、桶棺を復元することができた。近世墓の調査事例は筋違Ｊ遺跡がある。墓壙群の桶棺の復元において径80～110㎝を測るものが確認されていたが、他に類を見ないものであった。しかし、今回の調査により、桶径が80～110㎝を測る大きさのものが存在することが明らかとなった。棺の形状は手洗状を呈し、高さは縦長のものより低くなる。遺骸体は未検出であり埋葬形態は今後の調査にゆだねることとなるが、棺の高さが低いことを考えれば埋葬形態は側臥屈葬と考えられる。この様な棺が出現する理由として、早桶に座葬で埋葬し、棺を、ほぼ頭位を北に向ける様に横転させて埋葬した例が来住廃寺15次調査、南江戸桑田遺跡、福音寺遺跡筋違Ｂ区などで見られ、座葬の埋葬形態を横転させて側臥に埋置する方法を、手洗状桶棺にすでに側臥で埋葬し、そのままの状態で墓壙へ配置する方法に変えたこと、桶棺を縦長で埋置する為の墓壙は深くなるが、桶棺を横転させる墓壙や手洗状棺の墓壙の深さは前者より浅くて済み、墓壙の掘削作業が軽減されることなどが考えられるが、想像の域は超えない。今回は墓の検出は１基だけであった。近世墓が検出される場合は、そのほとんどが集団墓地で墓壙は数基を検出する。１基のみでの埋葬であったことや、手洗状棺の埋置であったことなどは、宗教思想の違いによるものなのかは、今後の発掘調査により究明されるものと思われる。

遺物では古市遺跡２次調査と同様、サヌキトイドの剥片が多数検出された。弥生時代の土坑群からの出土遺物にサヌキトイドの剥片があげられる。おそらくは土坑内へ破棄されたと思われるもので、集落内には石器製作場があったと想定される。また土坑からの出土であることを考えれば、弥生時代前期末から中期初頭のみの限定された遺構の検出であったことなどからも、後世の遺構から出土する剥片においても、当該期に比定されると考えられる。よって、今回の調査で出土した剥片の総重量を確認する目的で一覧表（第56表）にしてみた。調査時と埋土の洗浄作業にて検出した剥片は出土点数による比率も記入している。表作成の結果、埋土の洗浄作業を行った土坑からの出土は微細片と細片の出土量が多く、細部加工による破片を主に廃棄したものと考えられる。五楽Ａ区全体での出土総重量は163.937ｇを量り、同一集落内である古市遺跡２次調査地での出土の剥片も合計すると845.200ｇ

を量ることとなった。

石器の素材として、ＳＫ18から緑色チャート中型片１点、ＳＫ３からは赤色頁岩大型片１点が出土しているが、これらの剥片は出土していない。またＳＫ16からは黒曜石の微細片２点が出土している。サヌキトイド以外の石器素材や剥片の出土をみたが、今回の調査で出土した打製石器は、すべてがサヌキトイド製のものであった。

古市遺跡２次調査地では紡錘車が遺構内外より10点出土しているが、当調査地では出土していない。

紡錘車が出土しない理由の一つとして、上記においても述べたが、何らかの目的をもった土坑の配置状況によるものなのか、今後の調査の課題となった。

今回の調査では縄文・弥生・古墳時代における集落の一部と近世墓１基を確認することができた。縄文時代では晩期、弥生時代では前期末から中期初頭、古墳時代では７世紀と各時代とも短期間の存続であった。縄文時代と弥生時代においては集落の一部であり、居住域は調査地の東方に展開されるもと思われる。古墳時代においては古市遺跡２次調査地で竪穴式住居址や掘立柱建物址を検出しており、集落の居住域を調査したことになるが、古墳時代においても、調査地の東方及び南西部に集落は展開されるものと考えられる。集落の範囲や構造の究明は、今後の周辺地での調査により解明されるであろう。

表56　剥片計量表

出土遺構	微細片	細　片	小　片	中型片	大型片	合計点数／合計重量(g)	備　考
ＳＫ２	159 18.1%	261 29.8%	308 35.2%	139 15.9%	9 1.0%	876 96.902	
ＳＫ３	1	2	1	1		5 0.403	
ＳＫ５					1	1 3.716	
ＳＫ７	2		1			3 0.038	
ＳＫ10				1	1	2 4.002	
ＳＫ12	225 54%	118 28.3%	60 14.4%	13 3.1%	1 0.2%	417 10.685	
ＳＫ14	24	20	12			56 0.640	
ＳＫ15	103 43.1%	87 36.4%	35 14.7%	13 5.4%	1 0.4%	239 7.990	
ＳＫ16	48	28	9	3		88 1.753	
ＳＫ17	106 43.6%	75 30.9%	52 21.4%	10 4.1%		243 6.236	
ＳＫ18	2 13.3%	2 13.3%	4 26.7%	6 40%	1 6.7%	15 17.324	
ＳＸ２				1		1 1.012	
柱穴				1		1 0.251	ＳＰ70
第Ⅴ層				4		4 2.514	
第Ⅱ層				1		1 0.012	
第Ⅰ層				1		1 6.012	
層位不明				2	1	3 4.447	

【文　献】

梅木謙一他　『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター1996
相原浩二他　『和気・堀江の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター1998
梅木謙一他　『小野川流域の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター1998
宮内慎一他　『岩崎遺跡』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター1998
河野史知他　『古市遺跡、下苅遺跡２・３次調査』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター2000
山之内志郎他　『小野地区の遺跡、北梅本悪社谷遺跡２次調査地、北梅本北池遺跡、北梅本太尺寺遺跡』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター2001
高尾和長　『樽味四反地遺跡５次調査』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター2002

遺構・遺跡一覧

（１）　以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（２）　遺物観察表の各記載について。

法量欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、頸→頸部、底→底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）砂・長（１～４）→「１～４㎜大の砂粒・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。　◎→良好、○→良、△→不良

表57　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考	図版
1	B2	円形	逆台形	1.30×1.25×0.56	黄灰色シルト (やや粘性)		近・現代	ＳＫ２を切る	44
2	B2・3	長方形	逆台形	1.60×0.90×0.26	暗茶褐色 微粘性土	弥生土器 石　製　品	弥生	ＳＫ10に切られる 焼土層あり	33
3	B6・7	長方形	皿　状	1.87×1.44×0.18	黒褐色微 粘性土	弥生土器	弥生	焼土層あり	34
4	A2・3	長方形	逆台形	2.00×0.43×0.32	茶褐色シルト	弥生土器 石　製　品	弥生	ＳＫ9・ＳＫ19に 切られる	34
5	A1・2	楕円形	皿　状	1.50×0.76×0.17	黒褐色 粘性土	弥生土器	弥生		38
6	B・C6	楕円形	皿　状	0.82×0.60×0.05	黒褐色微 粘性土		古墳		42
7	C5	ダルマ形	長軸で 2段掘り	0.86×0.58×0.52	黒褐色微 粘性土	弥生土器	弥生		40・41
8	欠番								
9	A2・3	楕円形	逆台形	1.40×0.17×0.24	灰色シルト		近・現代	ＳＫ４を切る	45
10	B2～C3	楕円形	皿　状	2.74×0.6×1.0	暗灰色土	弥生土器	弥生	ＳＫ２を切る	38
11	C7・8	楕円形	2段掘り	0.96×0.70×0.44	黄褐色シルト (やや砂質)		古墳		43
12	C6・7	長方形	逆台形	1.77×1.18×0.28	黄褐色シルト (やや砂質)	弥生土器	弥生	焼土層あり	35
13	D7	楕円形	皿　状	1.34×0.80×0.10	褐色シルト (やや砂質)	須恵器 土師器	古墳	ＳＤ１を切る	43
14	C6	楕円形	レンズ状	3.00×2.10×0.12	茶褐色シルト (やや粘性)	土師器 弥生土器	古墳	ＳＤ１を切る	43
15	C・D4	長方形	逆台形	1.33×1.12×0.26	黄褐色シルト (やや砂質)	弥生土器 石　製　品	弥生	焼土層あり	36・37
16	C3～D4	長方形	逆台形	1.06×0.82×0.22	茶褐色シルト (微砂含)	弥生土器 縄文土器 石製品	弥生		37
17	C2・3	楕円形	皿　状	2.10×1.50×0.38		弥生土器 縄文土器	弥生	焼土層あり	38・39
18	D3	楕円形	皿　状	2.10×1.56×0.26	灰褐色シルト (さらさら)	弥生土器	弥生		40

表58　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考	図版
1	B4～D7	皿　状	17.7×1.20×0.08	褐色シルト	弥生土器	弥生		

表59　性格不明遺構一覧　(1)

性格不明遺構(SX)	地　区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考	図版
1	D5・6	不整形	2段掘り	2.49×1.50×0.27	黒褐色シルト (ぼそぼそ)	弥生土器	弥生		41

性格不明遺構一覧 (2)

性格不明遺構(SX)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時期	備考	図版
2	D4・5	不整形	皿状	1.93×1.74×0.12	黒褐色シルト(ぼそぼそ)	弥生土器 石製品	弥生		42
3	C1	不整形	逆台形	1.17×0.57×0.18	黒褐色シルト	弥生土器	弥生		42

表60 ＳＫ２出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径20.0 器高25.5 底径7.0	折り曲げ口縁。 甑に転用。	ナデ (指頭痕)	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1~4) ○		46
2	甕	口径(24.0) 残高12.3	折り曲げ口縁。 口縁端部下端に刻目。 頸部に３条の沈線。	ヨコナデ ハケ(13本／cm)	ハケ	橙色・黒色 橙色	石・長(0.5~3) ○		46
3	甕	底径6.8 残高11.0	中央付近が若干上げ底。	ハケ(9本／cm)	マメツ ㊎ナデ(指頭痕)	にぶい橙色 にぶい黄橙色	石・長(1~6) ○		
4	甕	底径(4.6) 残高7.1	やや上げ底。	ハケ(6本／cm)	マメツ ㊎(指頭痕)	灰白色 灰白色	石・長(1~3) 金 ○		
5	鉢	口径(20.0) 残高3.6	内・外方へ拡張する口縁。	マメツ	ハケ(12本／cm) →ナデ	にぶい黄橙色 灰白色	石・長(1~3) 金 ○		

表61 ＳＫ２出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
6	鏃	端部欠損	サヌキトイド	1.05	1.40	0.28	0.198		46

表62 ＳＫ３出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
7	甕	底径(6.1) 残高4.5	突出する平底。	マメツ	マメツ	淡黄色 灰白色	石・長(1~4) ○		

表63 ＳＫ４出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
8	甕	残高1.7	貼り付け口縁。 沈線1条以上。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(0.5~1.5) ○		
9	壺	口径(14.3) 残高6.0	短く外反する口縁。 頸部に2条の沈線。	マメツ	マメツ	淡黄色 灰白色	石・長(1~5) ○		46
10	壺	残高6.1	頸部に2条の沈線。	マメツ	ナデ	浅黄橙色 灰白色	石・長(0.5~1) ○		

表64 ＳＫ４出土遺物観察表（石製品）

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
11	敲石	完形	砂岩	8.20	6.50	4.30	317.00		46
12	不明	完形	砂岩	4.70	3.20	1.70	32.997	朱が付着か	

表65　ＳＫ12出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
13	壺	口径(13.0) 残高5.9	短く外反する口縁。 頸部に2条の沈線と沈線間に刺突文。	ヨコナデ	ナ　デ	橙　色 橙　色	石・長(1~3) 金 ○		46
14	壺	口径(16.0) 残高2.8	外反する口縁。	ナ　デ	ミガキ	橙　色 橙　色	石・長(0.5~3) ○		
15	甕	底径(6.0) 残高4.5	やや上げ底の底部。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 灰褐色	石・長(1~4) ○		
16	壺	底径(6.4) 残高6.4	上げ底の底部。	ナ　デ (指頭痕)	マメツ	にぶい黄褐色 淡黄色	石・長(1~3) ○		
17	壺	底径(7.4) 残高6.0	平底。	マメツ	ハケ→ナデ	淡黄色 淡黄色	石・長(1~3) ○		

表66　ＳＫ15出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
18	壺	口径(11.4) 残高3.6	短く外反する口縁。 頸部に沈線2条。	ハケ(12本／cm) →ナデ (指頭痕)	ナ　デ	淡黄色 灰白色	石・長(1~2) ○		46
19	甕	底径6.0 残高5.7	平底。	ナ　デ	ハケ(10本／cm) →ナデ ㊦(指頭痕)	にぶい黄褐色 にぶい黄橙色	石・長(1~2) ○		
20	甕	底径(7.0) 残高4.6	突出する底部。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長(0.5~3) ○		

表67　ＳＫ15出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
21	鏃	未製品？	サヌキトイド	1.79	1.70	0.30	0.63		46

表68　ＳＫ16出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
22	壺	残高2.5	口縁端部に沈線。下端に刻目、 内面に凸帯が巡る。	ナ　デ	ナ　デ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(0.5~2) ○		
23	壺	底径(8.0) 残高3.4	やや突出する平底。 底部外面に籾圧痕。	マメツ	マメツ	にぶい黄褐色 褐灰色	石・長(1~5) 金 ○		47
24	深鉢	残高3.8	端部に押圧文。	㊐ナデ(指頭痕) ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 黒　色	石・長(1) ○		

表69　ＳＫ16出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
25	鏃	欠損品	サヌキトイド	1.70	2.00	0.30	0.68		47

表70　ＳＫ５出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
26	甕	底径(6.0) 残高2.9	平底。	マメツ	(指頭痕) ㊦マメツ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1~3) 金 ○		

表71　ＳＫ17出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
27	甕	口径(16.0) 残高4.9	折り曲げ口縁。 口縁直下に3条の沈線。	マメツ	マメツ	褐色 橙色	石・長(1~2) ○		
28	甕	口径(15.0) 残高5.2	折り曲げ口縁。	マメツ	マメツ	淡黄色 灰白色	石・長(1~3) ○		
29	壺	底径6.0 残高11.2	頸部に3条の沈線。 胴部上位に4条の沈線。 上げ底の底部。	ミガキ	㊎(指頭痕)	淡黄色 淡黄色	微砂粒 金 ○		47
30	浅鉢	残高2.1	波状口縁、端部は鍵状。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	微砂粒 ○		

表72　ＳＫ18出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
31	甕	口径(23.8) 残高7.7	折り曲げ口縁。 多重沈線文と1条の刺突列点文。	ハケ(9本／cm) →ミガキ	ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(0.5~1) ○		47
32	甕	残高11.0	7条1組の沈線文2条。 沈線文間に7条の波状文。 最下段に刺突列点文。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1~5) ○		47
33	甕	残高3.9	折り曲げ口縁。	ハケ (指頭痕)	マメツ	黄褐色 黄褐色	微砂粒 金 ○		
34	甕	残高2.2	外面に断面三角形の凸帯。	マメツ	マメツ	褐色 褐色	微砂粒 ○		
35	甕	底径(6.0) 残高5.8	やや突出する平底。	マメツ	マメツ	明褐色 褐色	石・長(0.5~1.5) ○		
36	甕	底径(7.0) 残高4.0	やや突出する若干上げ底の底部。	マメツ	マメツ	橙色 灰白色	石・長(1~5) ○		

表73　ＳＫ７出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
37	壺	口径(13.6) 残高4.0	短く外反する口縁部。	ヨコナデ	ミガキ	浅黄橙色 浅黄橙色	微砂粒 ○		
38	壺	底径8.0 残高26.1	胴中央部で最大径の器形。 やや上げ底の底部。	ハケ(6本／cm) →ミガキ	ミガキ	灰白色 灰黄色	微砂粒 ○		47
39	甕	底径(5.0) 残高4.0	突出する平底。	マメツ ㊎(指頭痕)	マメツ	褐灰色 褐灰色	石・長(0.5~1) 金 ○		

表74　ＳＸ１出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
40	甕	口径(21.8) 残高2.8	折り曲げ口縁。 頸部に2条以上の沈線。	ヨコナデ (指頭痕)	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) 金 ○		47
41	甕	残高5.6	沈線5条。	ナデ	ナデ (指頭痕)	黒褐色 黒褐色	石・長(0.5~1.5) ○		47
42	甕	底径(8.0) 残高3.5	若干上げ底。	マメツ	マメツ	黄褐色・黒褐色 黄褐色	石・長(1~2) ○		
43	甕	底径(9.0) 残高4.2	突出する平底。	マメツ	マメツ ㊎(指頭痕)	黄褐色 灰白色	微砂粒 ○		

表75　ＳＸ２出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
44	砥　石	完　形	砂　岩	30.90	11.00	17.00	8,000.00	鉄器用？	48

表76　ＳＸ３出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
45	甕	口径(19.0) 残高6.6	折り曲げ口縁、端部に刻目。 多重沈線と沈線下に刺突列点文。	ヨコナデ	ナ　デ	褐　色 褐　色	石･長(0.5~1) ○		48
46	甕	底径(6.4) 残高6.6	突出するやや上げ底の底部。	ナ　デ ㊦（指頭痕）	ナ　デ	赤褐色 赤褐色	石･長(0.5~1.5) ○		

表77　ＳＫ13出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
47	甕	残高3.0	外反する口縁部。 端部は尖り気味に丸くおさめる。	マメツ	マメツ	にぶい赤褐色 にぶい橙色	微砂粒 ○		
48	高坏	残高9.3	中実の柱部。	マメツ	ナ　デ	橙　色 橙　色	微砂粒 ○		48

表78　ＳＫ14出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
49	甕	残高3.4	外反する口縁部。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石･長(1~2.5) ○		48
50	甕	残高3.3	折り曲げ口縁。 口縁直下に8条の沈線。	㊧（指頭痕）	ナ　デ	灰褐色 橙　色	石･長(1~4) ○		48

表79　ＳＫ１出土遺物観察表（金属製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
51	釘	完形？	鉄	4.20	0.65	0.60	1.652		48
52	釘	欠損品	鉄	2.15	0.70	0.80	1.557		48

表80　柱穴出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
53	壺	口径(15.6) 残高2.9	短く外反する口縁。	ナ　デ	ミガキ	橙　色 橙　色	微砂粒 ○		

表81　柱穴出土遺物観察表（石製品）　(1)

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
54	ノ　ミ	ほぼ完形	緑泥片岩	11.30	1.70	0.90	34.50		48
55	凹　石	完　形	砂　岩	8.50	5.50	2.90	185.34		48

表81　柱穴出土遺物観察表（石製品）　(2)

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
56	鏃	脚端欠損	サヌキトイド	3.15	1.60	0.50	2.25	平基式	48
57	鏃	未製品	サヌキトイド	2.00	1.30	0.45	0.95		
58	台　石	完　形	砂　岩	35.20	23.70	7.80	8,950.00		

表82　第Ⅴ層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
59	甕	残高3.6	折り曲げ口縁。口縁端部に刻目。 口縁下に3条の沈線。	ナ　デ	ナ　デ	にぶい褐色 橙　色	石・長(1~2) ○		
60	甕	残高4.1	口縁直下に3条の沈線。	マメツ	マメツ	淡黄色 淡黄色	石・長(1~2) ○		
61	壺	残高4.0	多重沈線、多重沈線間に貼り付け凸帯。 凸帯に押圧後刺突文。	マメツ	ナ　デ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(0.5~5) ○		
62	甕	底径(4.8) 残高3.7	くびれ気味の上げ底の底部。	マメツ (指頭痕)	マメツ	橙　色 橙　色	石・長(0.5~1) ○		
63	壺	底径(8.0) 残高2.3	やや突出する平底。 籾圧痕。	マメツ	マメツ	黒褐色土 にぶい黄橙色	石・長(0.5~3) ○		
64	壺	底径(9.0) 残高4.7	わずかに上げ底。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 灰白色	石・長(0.5~4) ○		
65	壺	底径(6.0) 残高1.5	わずかに上げ底。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長(1~2) ○		

表83　層位不明出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
66	甕	底径(6.0) 残高3.7	やや突出する平底の底部。	ハケ(10本／cm)	マメツ	灰白色 灰白色	微砂粒 ○		
67	甕	底径(7.0) 残高2.6	やや突出する若干上げ底の底部。	マメツ	マメツ	茶褐色 暗茶褐色	石・長(0.5~1.5) ○		
68	碗	底径(5.5) 残高3.5	削り出し高台。 外面は染付け。	施　釉	施　釉	明オリーブ色 明オリーブ色	密 ○		
69	皿	底径(4.0) 残高1.9	削り出し高台。	回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	施　釉	灰白色・褐色 灰白色	密 ○		
70	皿	底径(3.2) 残高1.6	削り出し高台。	施　釉 (底)回転ケズリ	施　釉	オリーブ灰色・紫褐色 オリーブ灰色	密 ○		

〔2〕五楽遺跡B区の調査

（1）調査の経緯（第109図）

1）経緯

試掘調査の結果、文化教育課・埋蔵文化財センターと道路建設第1課は発掘調査について協議を行い、開発工事によって失われる遺構や遺物について、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。今回の調査では中世～近世における集落構造解明を主目的とした。調査区の設定にあたっては、掘削土置き場、畦・取水パイプ・農道の保全等の諸条件から、調査地全域の掘削は行えず第111図に示す調査区の形状・配置となった。平成8年8月19日より、当調査地は諸条件により重機は使えなく、手掘りにて掘削を開始、同年9月3日に遺構遺存状況の写真撮りを行い、順次、遺構の掘り下げ・測量・図面作成・写真撮影を行った。同年10月3日に遺構検出状況の写真撮影後、残り分の測量作業を行った後、調査地の埋め戻しをし、平成8年10月11日に調査を終了した。

2）調査組織

調査地　　松山市平井町甲733
遺跡名　　五楽遺跡B区
調査面積　　73.1m²
調査担当　　山本健一・山之内志郎

（2）層　位（第110図、図版52）

本調査地は、堀越川によって開析された小断丘端部付近の標高79.3mに立地する。調査以前は水田耕作地であった。基本層位は第Ⅰ層明灰褐色微粘性土、第Ⅱ層黄灰色シルト、第Ⅲ層明黄灰色シルト～灰白色シルト、第Ⅳ層茶褐色シルト～灰色粘質土、第Ⅴ層黄白色細砂質土・乳白色細砂質土である。

第Ⅰ層：現耕作土で20～24cmの厚さを測る。

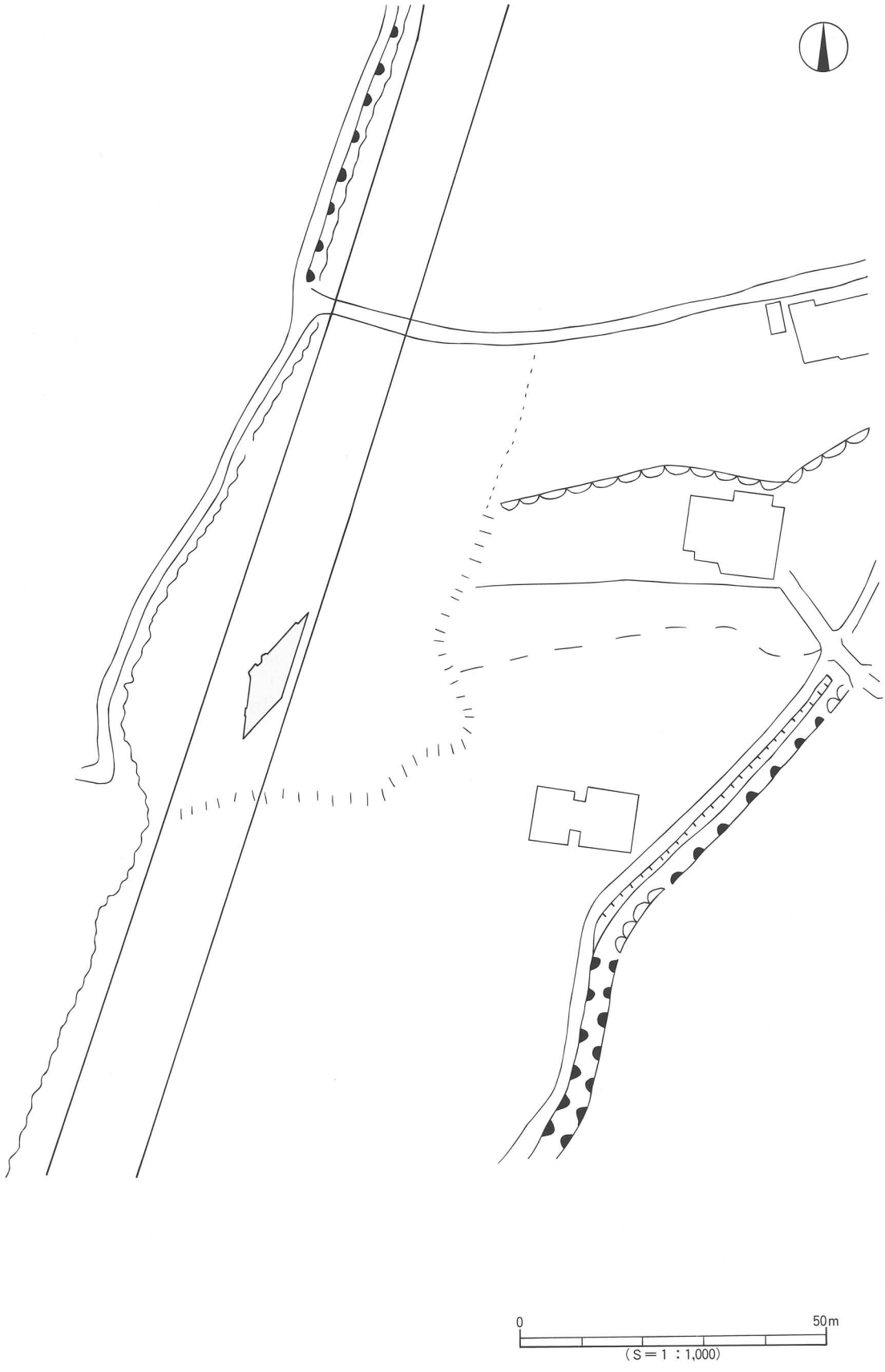
第Ⅱ層：耕作土の床土で8～10cmの厚さを測る。調査地南半部では欠除する。

第Ⅲ層：第Ⅲ層は3層に細分される。Ⅲ－1層明黄灰色シルトで、調査地北半部に堆積し、厚さ3～14cmを測る。Ⅲ－2層灰色シルトで、調査地南半部に堆積し、厚さ10～24cmを測る。Ⅲ－3層灰白色シルトで、調査地南半部に堆積し、厚さ4～17cmを測る。第Ⅲ層は旧耕作土である。

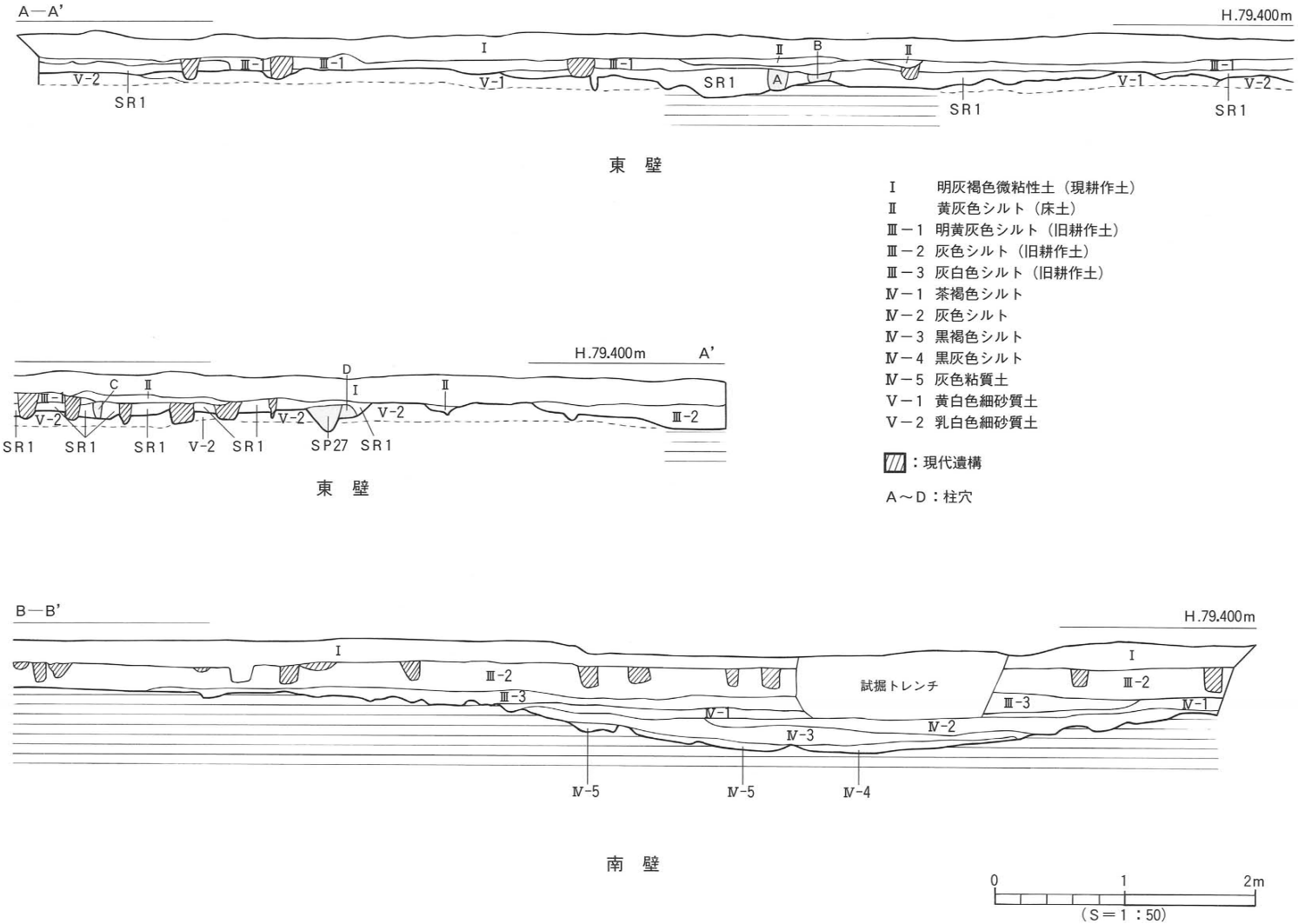
第Ⅳ層：第Ⅳ層は調査地南部にのみ堆積し、5層に細分される。Ⅳ－1層茶褐色シルトで、厚さ7～10cmを測る。Ⅳ－2層灰色シルトで、厚さ4～12cmを測る。Ⅳ～3層黒褐色シルトで厚さ6～14cmを測る。Ⅳ－4層黒灰色シルトで、厚さ2～6cmを測る。Ⅳ－5層灰色粘質土で、厚さ5～8cmを測る。

第Ⅴ層：地山層である。2層分を検出した。Ⅴ－1層黄白色細砂質土、Ⅴ－2層乳白色細砂質土である。

遺構の検出は、主に第Ⅳ層上面で行った。北半部は第Ⅳ層が欠除しているため、第Ⅴ層上面での検出である。なお、調査にあたり調査区内を4m四方のグリットに分けた。グリットは北西から南東へA・B・C、南西から北東へ1・2・3・・・・とし、第111図に示した。



第109図　調査地測量図



東　壁

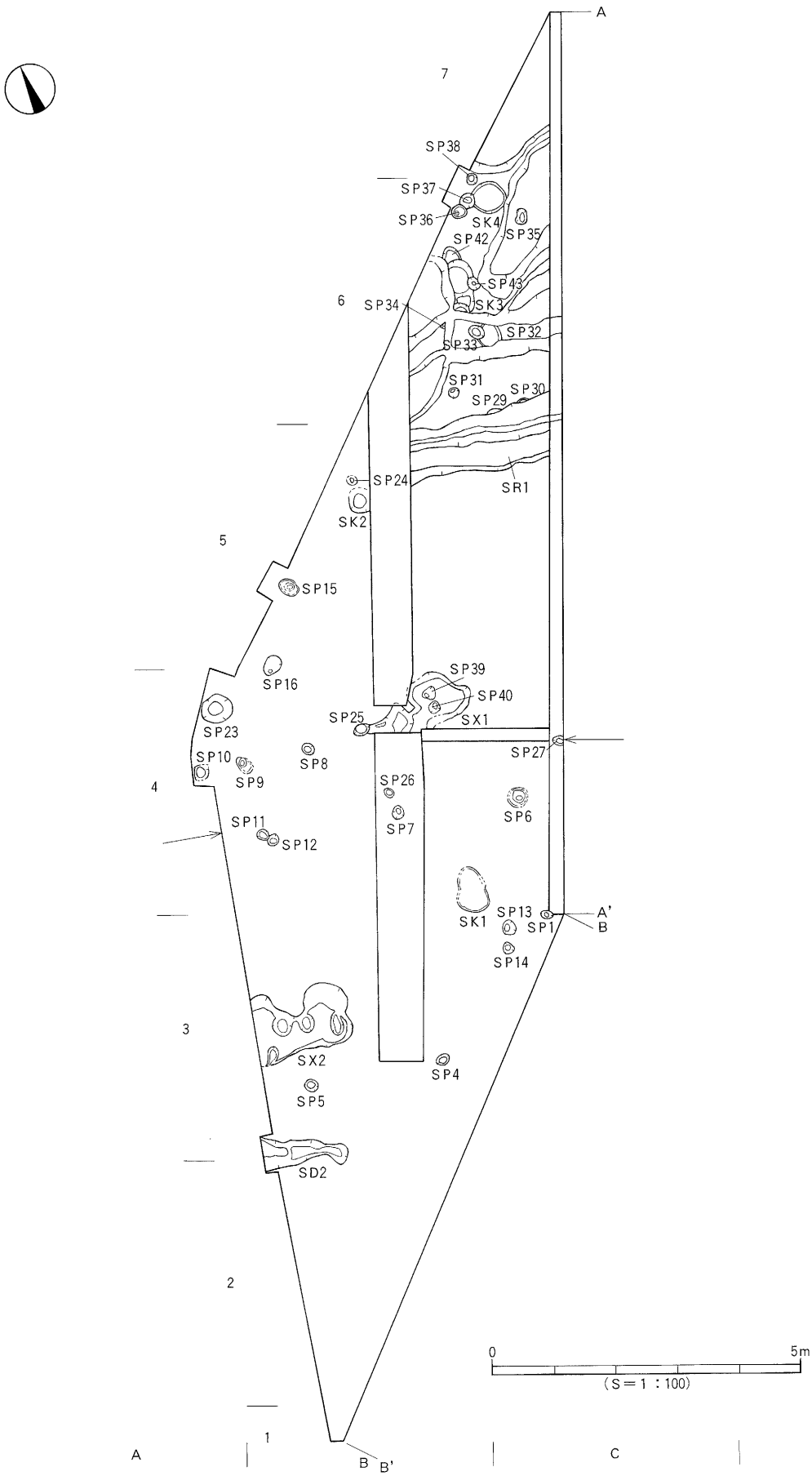
東　壁

南　壁

Ⅰ　　明灰褐色微粘性土（現耕作土）
Ⅱ　　黄灰色シルト（床土）
Ⅲ－1　明黄灰色シルト（旧耕作土）
Ⅲ－2　灰色シルト（旧耕作土）
Ⅲ－3　灰白色シルト（旧耕作土）
Ⅳ－1　茶褐色シルト
Ⅳ－2　灰色シルト
Ⅳ－3　黒褐色シルト
Ⅳ－4　黒灰色シルト
Ⅳ－5　灰色粘質土
Ⅴ－1　黄白色細砂質土
Ⅴ－2　乳白色細砂質土

：現代遺構

A～D：柱穴


A
7
SP38
SP37
SP36
SK4
SP35
SP42
SP43
SK3
6
SP34
SP32
SP33
SP31
SP30
SP29
SP24
SR1
SK2
5
SP15
SP39
SP16
SP40
SP25
SX1
SP23
SP27
SP10
SP8
SP9
4
SP26
SP6
SP7
SP11
SP12
SK1
SP13
A'
SP1
B
SP14
3
SX2
SP4
SP5
SD2
2
0
5m
(S＝1：100)
1
A
B
B'
C

第111図　遺構配置図

本調査については『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』に概要を報告しているが、整理の結果、遺構認定及び名称が若干異なっており、取り扱いには注意していただきたい。

（３）遺構と遺物

検出遺構はすべてが中世末から近世で、土坑４基、自然流路１条、溝１条、性格不明遺構２基、柱穴35基である。

①土坑（ＳＫ）

ＳＫ１（第112図、図版52）

調査地中央南寄りのＢ４区に位置する。長軸方向は南北方位を指すが北辺側で東へ偏る。平面形態は楕円形を、断面形態は逆台形状を呈する。規模は長軸0.75m、短軸0.50m、深さ12cmを測る。埋土は灰褐色シルトの単一層である。土坑内より土師器（かわらけ）の小片が少量出土したが、小片のため図化し得なかった。

ＳＫ２（第112図、図版52）

調査地北半部のＡ５区に位置する。平面形態は楕円形を、断面形態はＵ字状を呈する。規模は径40～43cm、深さ40cmを測る。埋土は明灰茶褐色土に黄白色砂質土がブロック状に混入する。土坑内より土師器（かわらけ）、土師質土器、陶器の破片が少量出土した。

出土遺物（第113図、図版56）

土師器（かわらけ）（１）１は皿の底部片である。内・外面とも磨滅していて調整等は不明。

ＳＫ３（第112図、図版53）

調査地北部のＢ６区に位置し、柱穴に切られる。平面形態は楕円形を、断面形態は長軸方向で二段の逆台形状を呈する。規模は長軸0.93m、短軸0.45m、深さ65cmを測る。埋土は灰褐色砂質土の単一層である。土坑内より磁器片、瓦質土器が少量出土した。

出土遺物（第113図、図版56）

磁器（２）２は碗の口縁部片で、外面に２条の線文様が施される。内・外面に薄緑色の釉がかかる。

瓦質土器（３）３は鉢形土器の口縁部片で、上方に面をもち、内方に拡張される。内面は横方向の丁寧なハケ目調整が施される。外面は磨滅している。胎土は精良である。

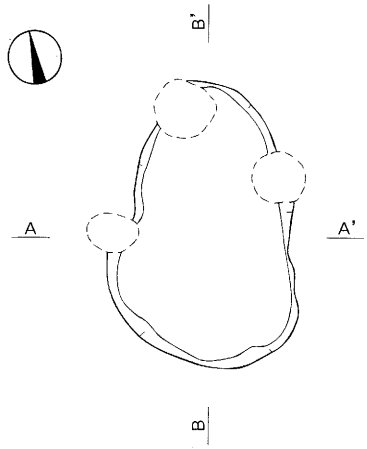
ＳＫ４（第112図）

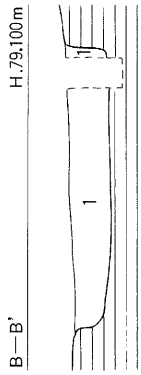
調査区北端部のＢ・Ｃ６区に位置し、柱穴に切られる。平面形態は楕円形で、断面形態は皿状を呈する。規模は径0.52～0.58m、深さ12cmを測る。埋土は黄灰色砂質土の単一層である。土坑内より５～10cm大の礫石が２点出土したが、他の遺物の出土はない。

②溝（ＳＤ）

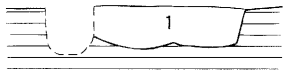
ＳＤ１（第114図）

調査地南部Ａ・Ｂ２・３区に位置する。規模は検出長1.45m、上場幅0.15～0.47m、深さ22cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、溝基底面は西から東方向へ浅くなる。埋土は黄灰色細砂質土（黒色土の小ブロック混）である。溝西部の基底面には５～15cm大の礫石が入られていた。溝内からは土師器１点が礫石の中より出土した。



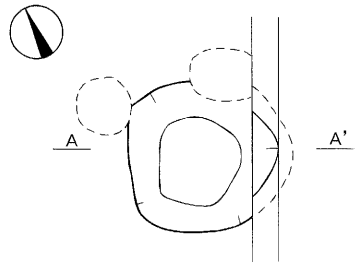


A—A' H.79.100m

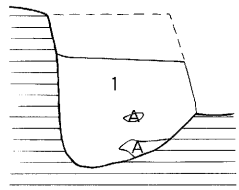


1 灰褐色シルト（チョコチップの褐色を含む）

SK1

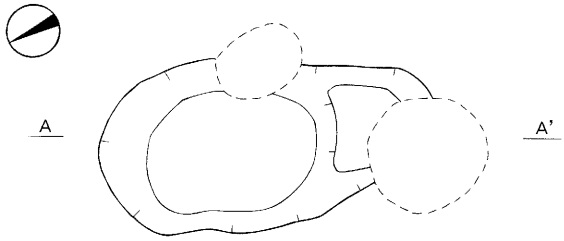


A—A' H.79.100m

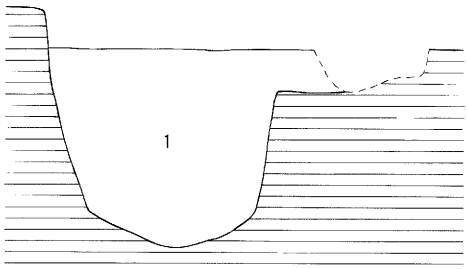


1 明灰茶褐色土
A 黄白色砂質土

SK2

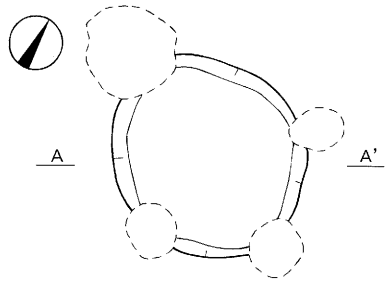


A—A' H.79.100m

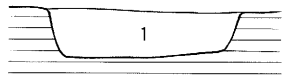


1 灰褐色砂質土

SK3

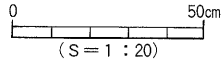


A—A' H.79.100m



SK4

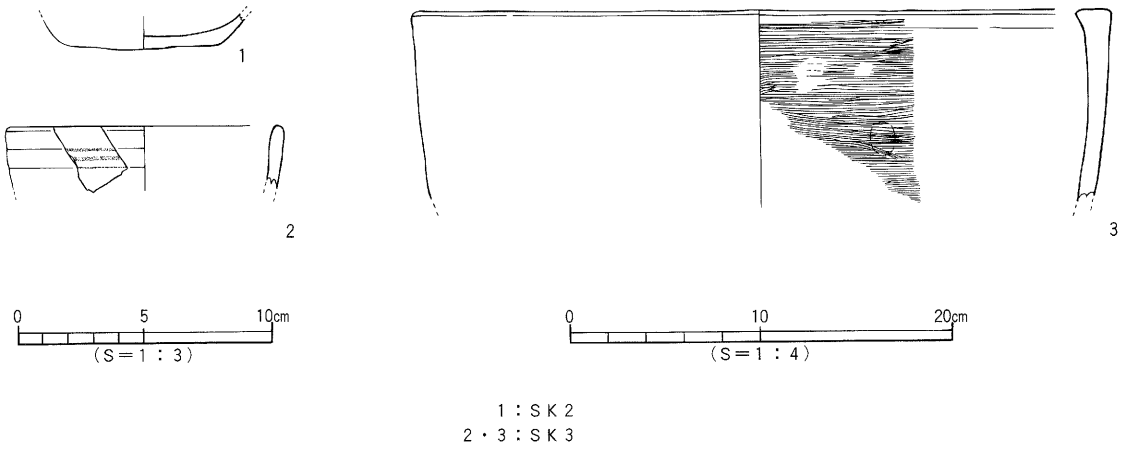
1 黄灰色砂質土（チョコチップの褐色を含む）



第112図　SK1～4測量図

出土遺物（第114図）

土師器（かわらけ）４は皿の底部片で、内外面とも磨滅を受けているが、内面には回転ナデ調整による渦巻き状の凹凸が見られる。



第113図　ＳＫ２・３出土遺物実測図

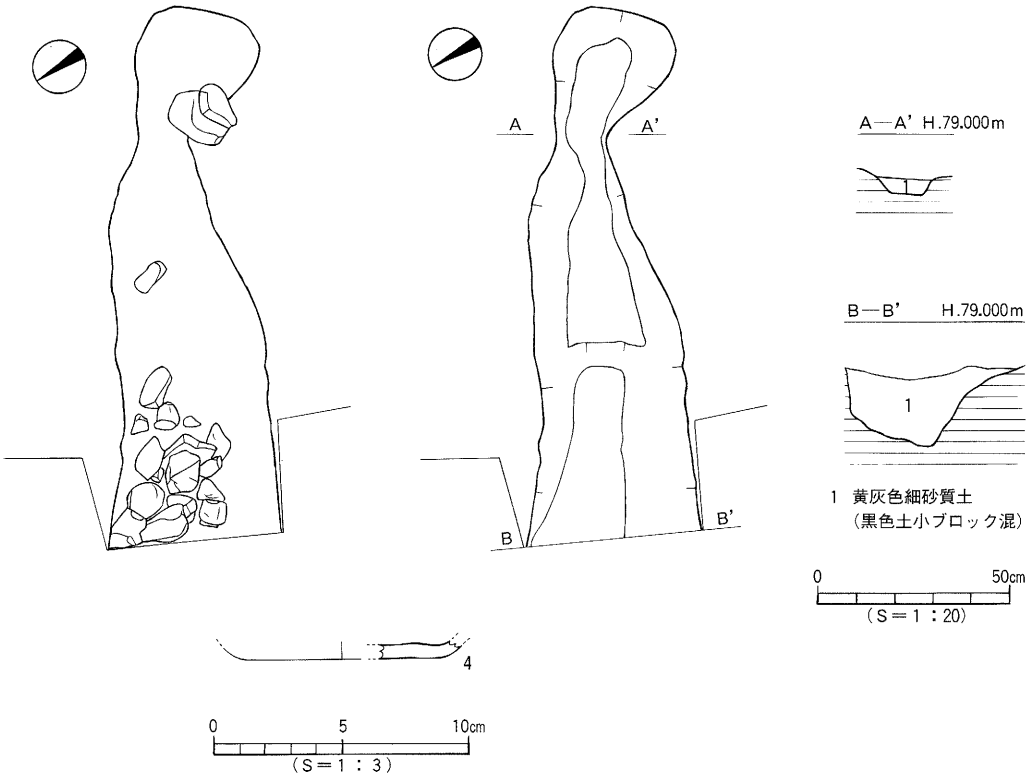
③性格不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ１（第115図、図版54）

調査地中央のＢ４区に位置する。ＳＰ25に切られ、ＳＰ39・40を切る。平面形態は不整形で、基底部は段状になっている。規模は東西長1.55m、南北長0.72m、深さ７～13cmを測る。埋土は黄褐色砂質土の単一層である。土坑内より土師器片が少量出土した。小片のため図化し得なかった。

ＳＸ２（第116図、図版54）

調査地南部のＢ３区に位置し、西部は調査外へ続く。平面形態は不整形で、基底部は凹凸状となる。規模は検出長1.55m、幅0.52～1.12m、深さ2～13cmを測る。埋土は茶褐色細砂質土（黄色・炭化物混）の単一層である。土坑内より礫石3点（５～15cm大）、炭化材１点（長さ12cm、幅２～３cm、厚さ0.5cm）、焼土塊２点（３～４cm大）が出土した。炭化材と焼土塊は土坑西側より出土した。



第114図　ＳＤ１測量図・出土遺物実測図

④柱穴

柱穴は、調査地全体に散在した状況で35基を検出した。各柱穴の平面形態は円～楕円形で、規模は径15～48cm、深さ６～58cmを測る。埋土は灰褐色シルト（９基)、灰白色砂質土（３基)、茶褐色シルト（５基)、明灰褐色シルト（６基)、暗灰褐色シルト（３基)、黄灰色褐色砂質土（９基）である。柱穴内より土師器（ＳＰ４・６・８・10・14・22・24・25・27)、土師質土器（ＳＰ８・24・30・32)、炭化物（ＳＰ17・27)、焼土（ＳＰ33）が出土した。ＳＰ20からは根詰めの礫石が検出された。

出土遺物（第117図）

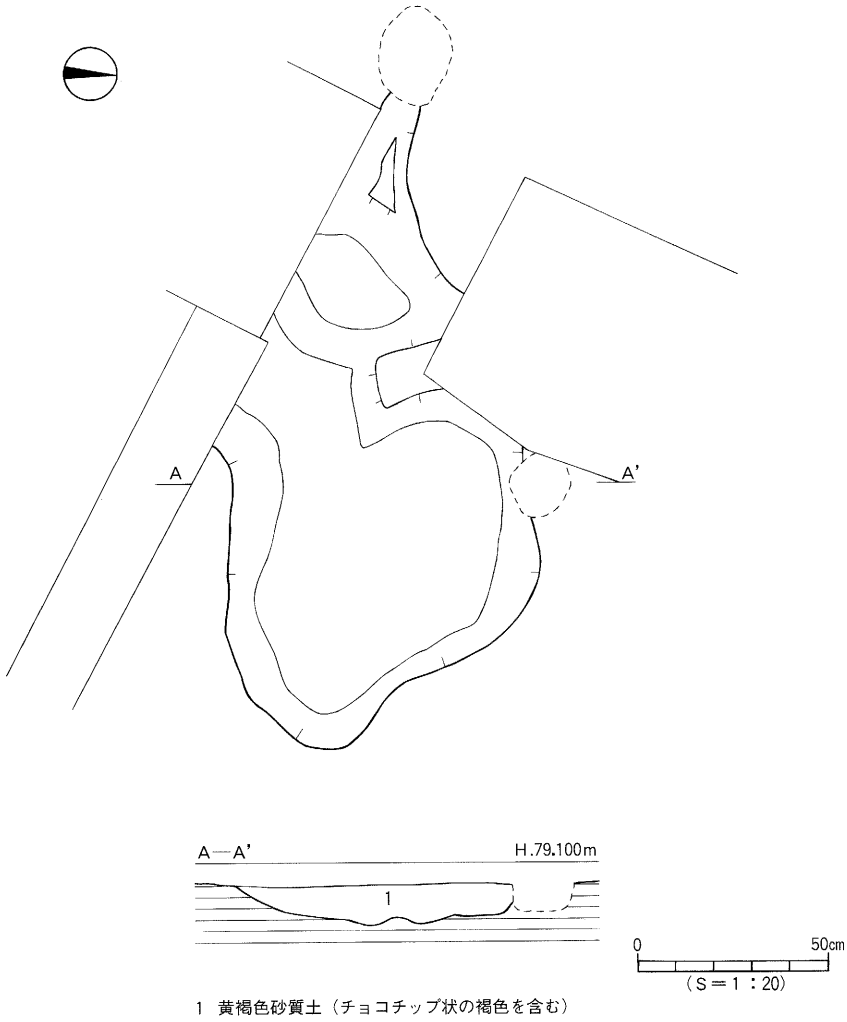
土師器（かわらけ）（５）５は坏の口縁部片である。（ＳＰ10出土）

土師質土器（６）６は鍋・釜の脚部片である。（ＳＰ32出土）

⑤自然流路（ＳＲ）

ＳＲ１（第118図、図版55）

ＳＲ１は遺構検出作業時に、覆土とＳＲ１の埋土が類似しており、埋土上位層を掘り下げたため測量図はＳＲ１の深い部分の作図となっている。調査区壁面の観察から、ＳＲ１の範囲は測量図より広く、Ｂ・Ｃ４区（第111図の西・東壁の矢印部分）から北部全面に位置する。規模は南北検出長12.00ｍ、東西検出長6.10ｍ、深さ６～22cmを測る。埋土は灰色シルトの単一層である。最深部はＢ・Ｃ６区に見られる。流路内より陶磁器、土師質土器、石製品が出土した。



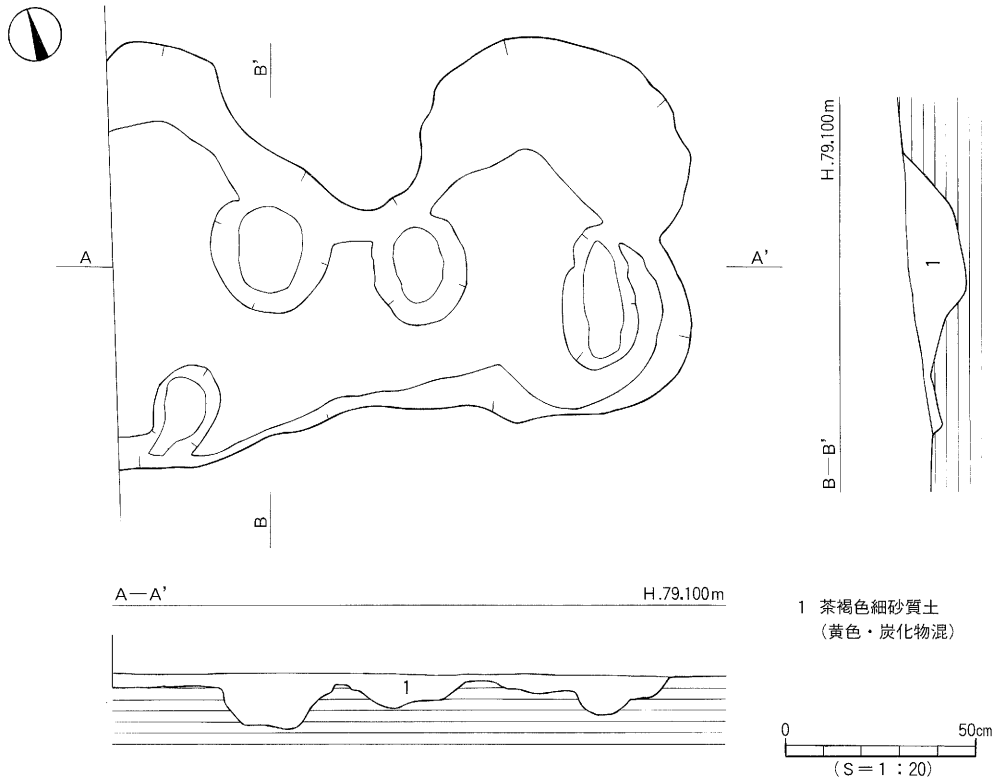
第115図　ＳＸ１測量図

出土遺物（第118・119図，図版56）

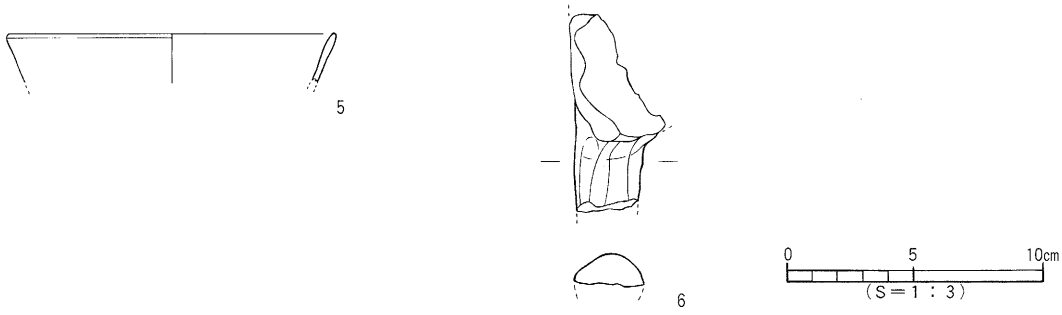
陶磁器（７・８・11・12）７は磁器皿の口縁部片。やや外反する口縁部で、内外面とも明緑灰色の釉がかかる。碗とも考えられる。８は磁器碗の底部片で、削り出し輪高台である。輪高台内面は無釉、他は灰白色の釉がかかり、外面は回転ケズリ調整の稜が見られる。11は甕の口縁部片で、やや外傾する口縁部は長めの玉縁状におさめる。備前焼。12は亀山焼き系の甕の頸部片で、胴部外面は格子タタキ、頸部はハケ目調整、内面はハケ目調整が施される。焼成はあまい。

土師質土器（９・10）９・10は釜である。９は口縁端部に断面三角形の鍔が付く。実測図より内傾する可能性がある。10は胴部に鍔をもつものと思われる。外面の鍔より下には煤が付着している。

石製品（13）13は砂岩製の砥石である。Ａ面：使用前は研磨されて平坦面をなし、焼けた痕があった。その後、断面半円形の直線の溝状に使用痕が残る砥石として使用されている。溝状使用痕には溝と同一方行に数状の筋が入っている。Ａ面の溝状使用痕は２条である。Ｂ面は焼け痕が残る自然面のもので、Ａ面と同様な溝状使用痕が１条見られる。



第116図　ＳＸ２測量図



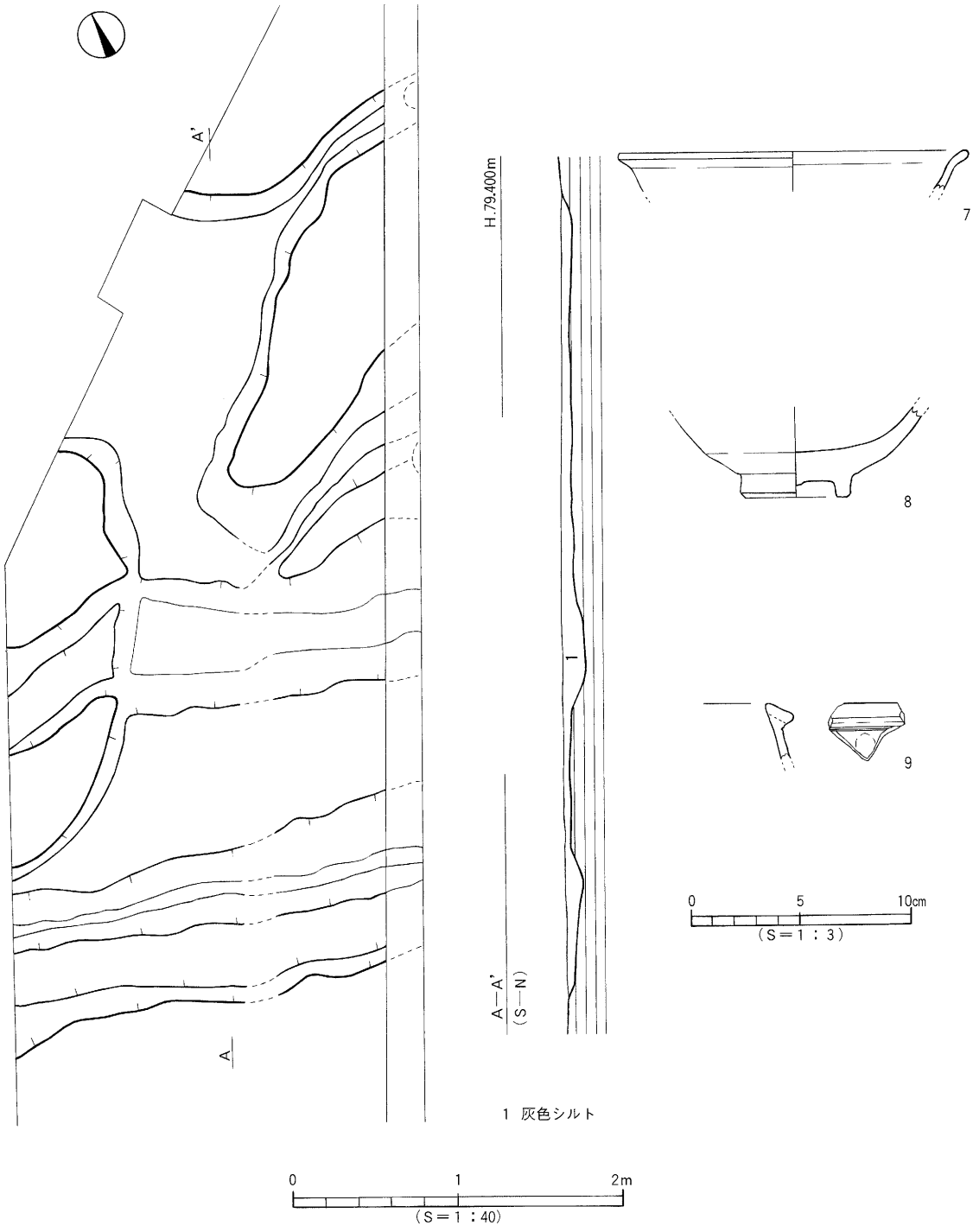
第117図　柱穴出土遺物実測図

⑥その他の遺物

❶第Ⅰ層出土遺物（第120図）

陶器（14）14は備前焼の擂鉢の小片である。

土師質土器（15）15は鍋・釜の脚端部片である。

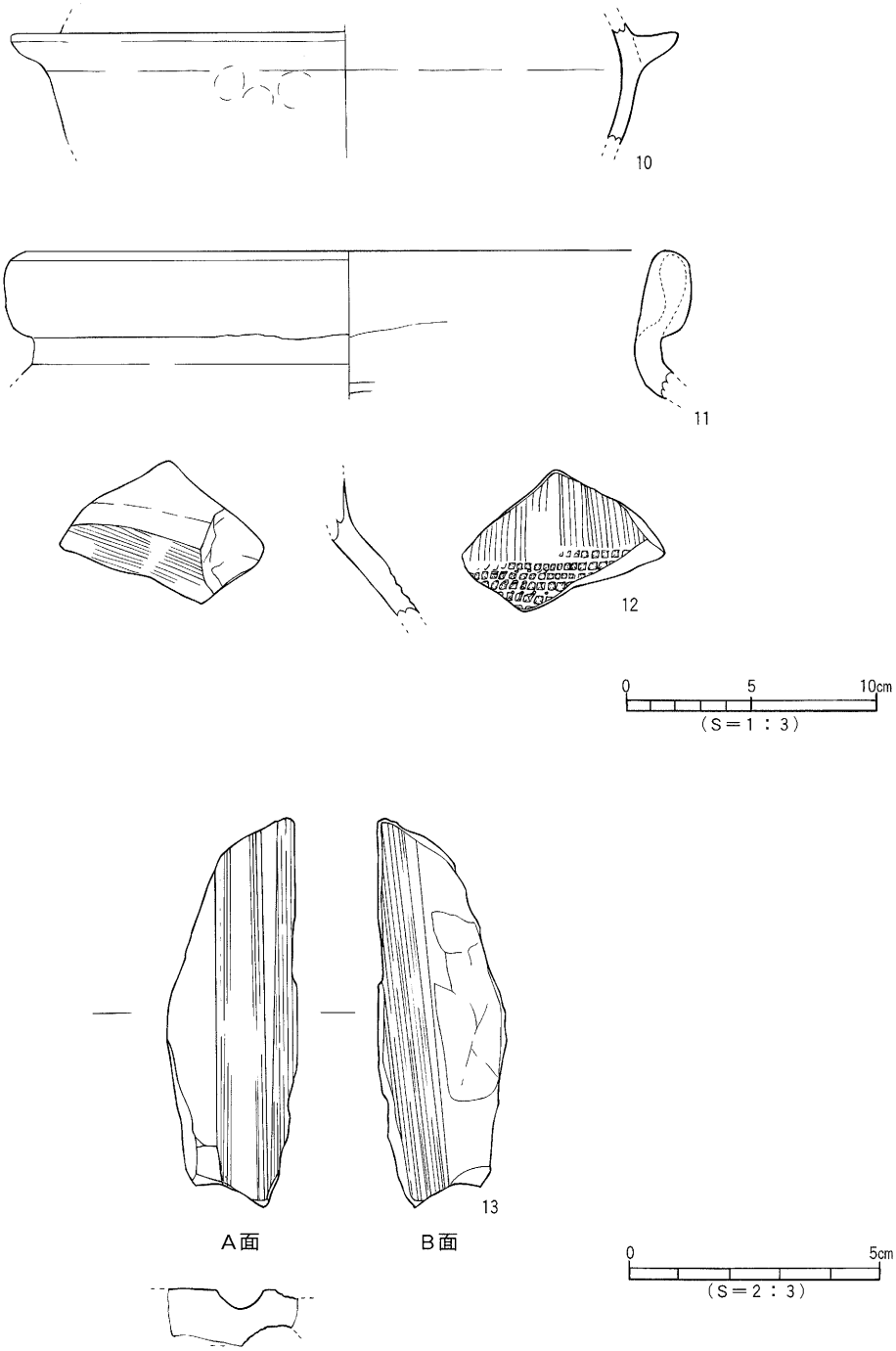


第118図　ＳＲ１測量図・出土遺物実測図（1）

❷第Ⅱ層出土遺物（第121図、図版56）

土師器（かわらけ）（16～19）16～19は皿である。16は内湾気味に立ち上る口縁部片。17～19は底部片である。

磁器（20）20は皿の口縁部片で、外反する口縁は端部をやや玉縁状におさめる。磁胎は白灰色を呈



第119図　ＳＲ１出土遺物実測図（2）

する。内外面とも明緑灰色の釉がかかるが、釉がかかってない部分や気泡痕の小さい窪みが見られ施釉は雑である。

須恵器系陶器（21）21は東播系こね鉢の口縁部片で、口縁外面直下を三角形状に肥厚させている。

土師質土器（22）22は鍋の口縁部片で、口縁端部より2㎝下外面に断面三角形状の鍔がつく。鍔下外面には煤が付いている。

陶器（23）23は甕の底部片で、備前焼である。

須恵器（24・25）24は坏蓋の口縁部片。25は器台で、坏脚部の接合部分に透しが施されている。

❸第Ⅲ層出土遺物（第122図、図版56）

土師器（かわらけ）（27～32）27～31は坏。27～30は口縁部片である。外傾する口縁は端部を丸くおさめている。31は底部片。32は皿の底部片である。

瓦質陶器（33）33は鍋の口縁部片で、上方に面をもつ端部は内外にやや拡張させている。外面には煤が付着している。

土師質土器（34）34は釜の胴部片で、断面三角形の鍔が外下方気味に付く。鍔下外面には煤が付着している。

金属製品（35）35は銅銭である。表裏とも錆と磨滅が著しく、銭名の判読は不可能である。

❹第Ⅳ層出土遺物（第123図、図版56）

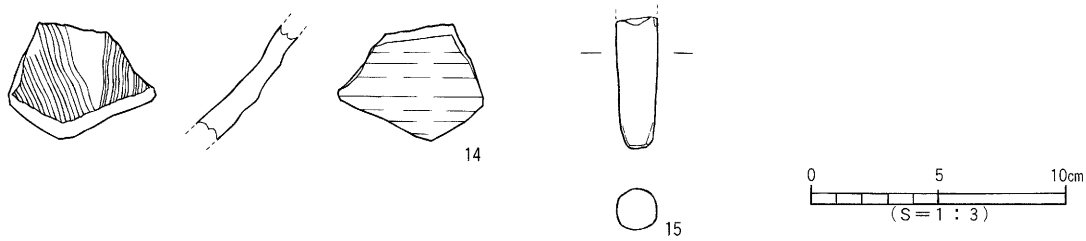
石製品（36）36は黒色チャート製の鏃の未製品と考えているが、錐とも考えられる。

剥片（37）37はサヌキトイドの中型片で重量は1.246ｇを量る。表面は風化を受けて白っぽくなっている。

（4）小　結

今回の調査では、中世末から近世初頭の遺構と遺物を、また出土数は少なくないが弥生土器、須恵器、石器などの遺物を検出した。

調査地は、堀越川によって開析された小断丘端部の耕作地内に立地し、開墾時の掘削の影響を強く受けていた。そのため、検出された柱穴群からの掘立柱建物の復元や土坑、溝などの性格は明らかにできなかった。しかし、遺構内や覆土から出土した土師質土器の鍋や釜の外面に煤が付着していて使



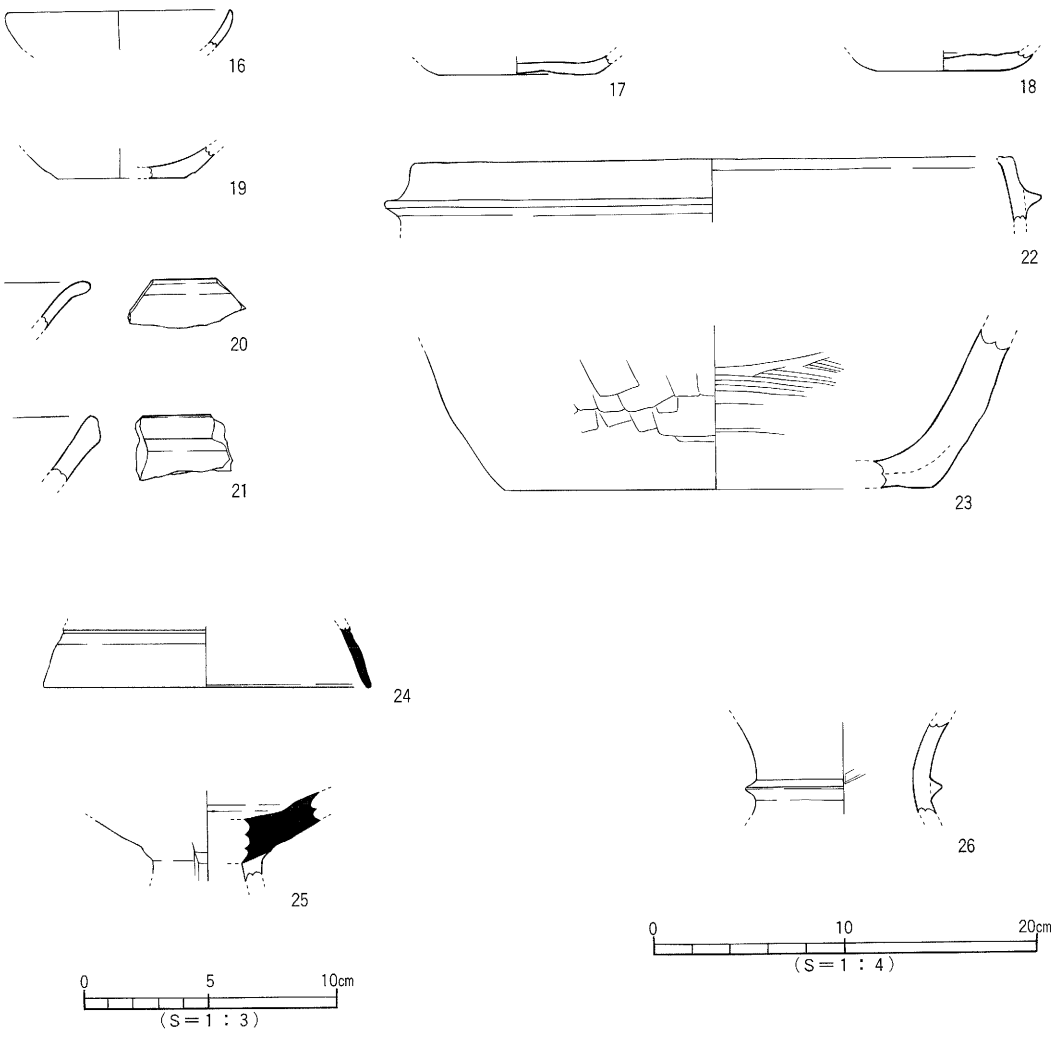
第120図　　第Ⅰ層出土遺物実測図

用されていたことや、磁器や陶器などの器種構成からも生活が窺え、立地的にも堀越川の氾濫の影響を受けない断丘上であることなどから、居住地であったことは確かである。

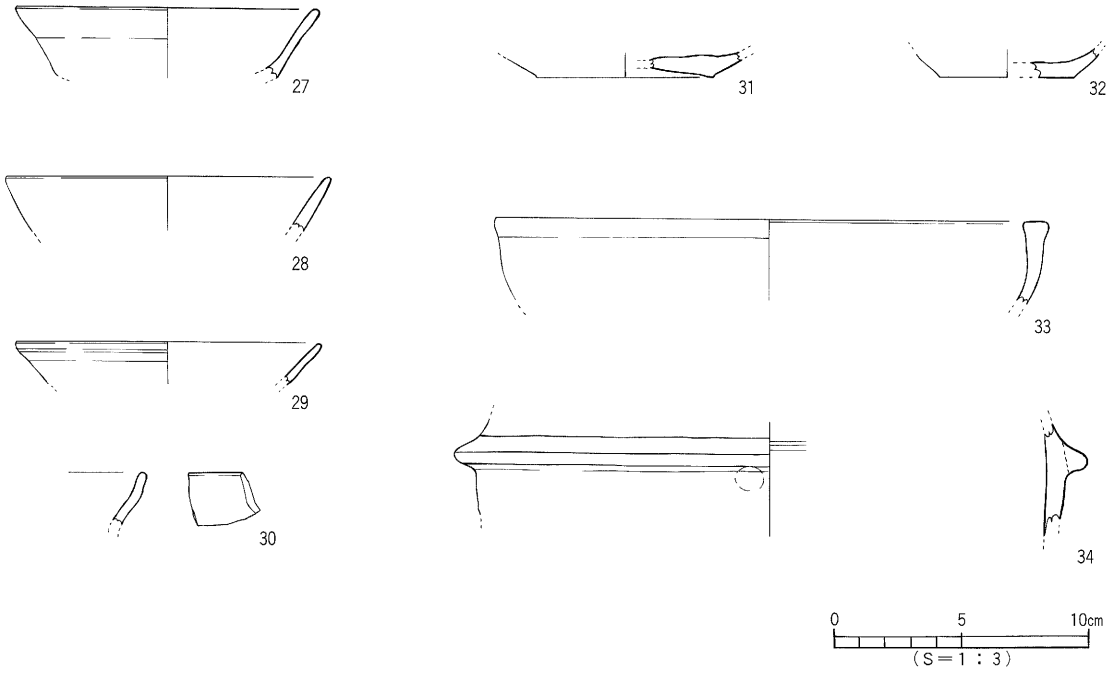
流路ＳＲ１は、今回検出された遺構中では切り合い関係より時期が新しい遺構となるが、他の遺構と時期差はない。居住地が廃絶した後、埋土の状況から短期間機能していたと考えられる。その後は現在に至るまで耕作地として利用されている。

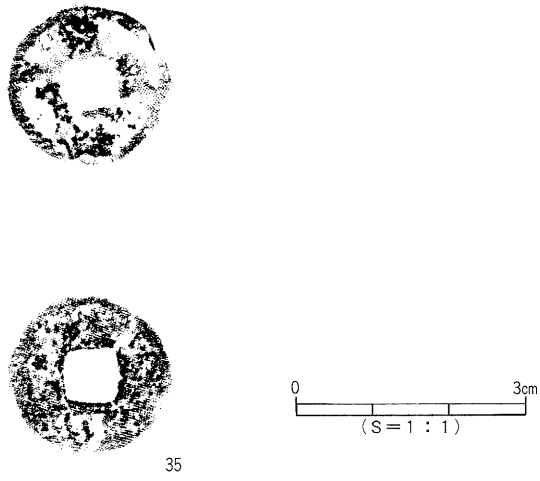
第Ⅱ層（耕作土床土）からは弥生土器、須恵器が出土した。遺物は少量であるが弥生時代の遺構が、調査地南部の窪地に堆積した第Ⅳ層出土の石製品や剥片も含めて、また須恵器が出土していることなどから調査地周辺には、特に削平をあまり受けていないと思われる平井谷西部の尾根上と、調査対象地へと落ち込む南東斜面上には遺構の存在が考えられる。

調査地は諸条件により極少面積であったが、中世末から近世初頭の集落の一部を確認することができた事や、古墳時代や弥生時代またはそれ以前の遺構の存在が明らかとなった。当地域内での調査は、平井谷北部の屋根上に位置する平井谷１号墳の調査を除いては皆無であり、小断丘上での調査は初例



第121図　第Ⅱ層出土遺物実測図

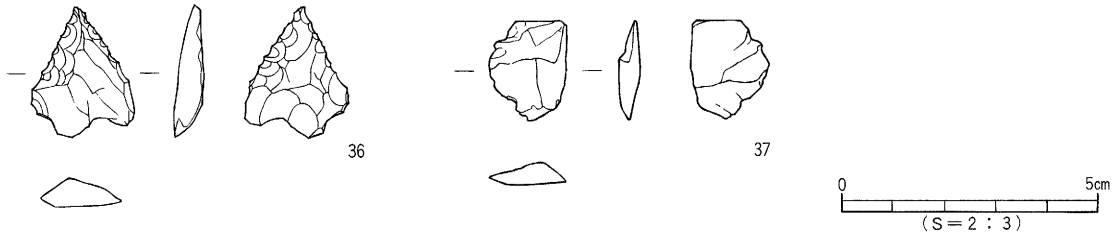




第122図　第Ⅲ層出土遺物実測図

であったが調査の目的以上の成果を得られた。

今後は当調査地内に近接する地域での調査において、今回検出された遺跡の広がりと性格の究明が期待される。また、調査地より東方における上苅屋遺跡３次調査に於いては、中世の集落の一部が検出されており、中世から近世初頭における時代の変遷の究明も課題となる。



第123図　第Ⅳ層出土遺物実測図

【文　献】

梅木謙一他　『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター1996
相原浩二他　『和気・堀江の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター1998
梅木謙一他　『小野川流域の遺跡Ⅱ』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター1998
宮内慎一他　『岩崎遺跡』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター1998
河野史知他　『古市遺跡、下苅遺跡２・３次調査』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター2000
山之内志郎他　『小野地区の遺跡、北梅本悪社谷遺跡2次調査地、北梅本北池遺跡、北梅本太尺寺遺跡』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター2001
高尾和長　『樽味四反地遺跡５次調査』松山市教育委員会・（財）松山市埋蔵文化財センター2002

遺構・遺跡一覧

（１）　以下の表は、本調査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（２）　遺物観察表の各記載について。

法量欄　（　）：復元推定値

形態・施文欄　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、頸→頸部、底→底部

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。

（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）砂・長（１～４）→「１～４㎜大の砂粒・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。　◎→良好、○→良、△→不良

表84　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考	図版
1	B4	楕円形	逆台形	0.75×0.5×0.12	灰褐色シルト	土師器	中世～近世		52
2	A5	楕円形	U字状	0.43×0.40×0.40	明灰茶褐色土	土師器 土師質土器 陶　器	中世～近世		52
3	B6	楕円形	逆台形	0.93×0.45×0.65	灰褐色砂質土	磁器片 瓦質土器	中世～近世	SP41、SP43が切る SP42を切る	53
4	B・C6	楕円形	皿　状	0.58×0.52×0.12	黄灰色砂質土	礫　石	中世～近世	SP37に切られる	53

表85　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考	図版
1	A2～B3	逆台形	1.45×0.47×0.22	黄灰色細砂質土 (黒色ブロック混)	土師器	古墳時代 以降	石組みあり (旧SD2)	

表86　性格不明遺構一覧

性格不明遺構(SX)	地　区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考	図版
1	B4	不整形	皿　状	1.55×0.72×0.13	黄褐色砂質土	土師器		SP25に切られ SP39・40を切る	54
2	B3	不整形	皿　状	1.55×1.12×0.13	茶褐色細砂質土 (黄色・炭化物混)	炭化材			54

表87　自然流路一覧

流路(SR)	地　区	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考	図版
1	B・C4	12.00×6.10×0.22	灰白色砂質土	陶器、土師質土器 石製品	中世～近世		55

表88　SK2出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面) (内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
1	皿	底径6.0 残高1.4	底部片。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 灰白色	微砂粒 ○	かわらけ	56

表89　ＳＫ３出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
2	碗	口径(11.0) 残高2.5	２条の線文様。	施　釉	施釉		微砂粒 ○	磁器	56
3	鉢	口径(37.0) 残高10.3	上方に面をもつ。 内方に拡張。	ナ　デ	ハケ(8本／cm)	にぶい橙色 にぶい橙色	石･長(0.5~3) ○	瓦質	56

表90　ＳＤ１出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
4	坏	底径(7.8) 残高0.7	底部片。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石･長(1~2) 金 ○		

表91　柱穴出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
5	坏	口径(13.0) 残高2.0	口縁部片。	マメツ	ナ　デ	灰白色 灰白色	微砂粒 ○	かわらけ	
6	土釜	残高7.9	脚部片。	ナ　デ	―――	にぶい褐色 にぶい褐色	石･長(1~2.5) ○	土師質	

表92　ＳＲ１出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
7	碗	口径(16.0) 残高1.8	やや外反する口縁。	施　釉	施　釉	オリーブ色 オリーブ色	密 ○	磁器	56
8	碗	底径(5.0) 残高4.2	削り出し高台。	回転ケズリ →施　釉	施　釉	灰白色 灰白色	微砂粒 ○	磁器	56
9	釜	残高2.6	口縁端部外面に断面三角形の鍔が付く。	ヨコナデ	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石･長(0.5~1) ○		
10	釜	残高4.9	断面三角形の鍔が上外方に付く。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 灰白色	石･長(0.5~1.5) ○	煤付着	56
11	甕	口径(26.0) 残高6.0	口縁の断面形は長めの玉縁状。	ナ　デ	ヨコナデ	暗褐色 褐灰色	石･長(1~4) ○	備前焼	56
12	甕	残高6.5	頸部片。	ハケ(6本／cm) タタキ(格子目)	ハケ(6本／cm)	灰白色 にぶい橙色	微砂粒 △	亀山系	56

表93　ＳＲ１出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備　考	図版
13	砥　石	破　片	砂　岩	7.90	2.60	1.15	23.70	鋳形の破片を玉砥石に転用か？	56

表94　第Ⅰ層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
14	擂鉢	残高4.6	内面に櫛かき条線の擂目有り。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石･長(0.5~1) ○		
15	土釜	残高5.2	脚部。	ナ　デ	―――	橙　色	石･長(0.5~1.5) ○		

表95　第Ⅱ層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
16	皿	口径(9.0) 残高1.5	内湾気味に立ち上る口縁。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 灰白色	微砂粒 ○	かわらけ	
17	皿	底径(6.0) 残高0.8	底部外面にスノコ痕。	マメツ	マメツ	明褐灰色 にぶい橙色	微砂粒 金 ○	かわらけ	
18	皿	底径(5.0) 残高0.7	底部片。	ナデ ㊎回転糸切り	ヘラナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ○	かわらけ	
19	皿	底径(5.0) 残高1.3	底部片。	ナデ ㊎回転糸切り	ナデ	黄橙色 灰白色	微砂粒 金 ○	かわらけ	
20	皿	残高1.8	外反する口縁部。 口縁端部はやや玉縁状。	施釉	施釉	明緑灰色 明緑灰色	密 ○	磁器	56
21	鉢	残高2.5	口縁端部は外面直下で三角形に肥厚、端部外面は黒色の自然釉が付く。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色・黒色 灰白色	微砂粒 ○	東播系	
22	鍋	口径(23.6) 残高2.6	外面に断面三角形の鍔。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1) 金 ○	煤付着	
23	甕	底径(16.8) 残高6.3	底部片。	ヘラ工具によるナデ	ヨコナデ ハケ(6本／cm)	灰色 褐灰色	石・長(0.5~1) ○	備前焼	
24	蓋	口径(13.0) 残高2.4	口縁部と天井部の境は凹線状。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	微砂粒 ○		
25	器台	残高3.6	脚と坏の接合部片。 接合部に透しが看取。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	微砂粒 ○		
26	壺	残高5.0	断面三角形の貼り付け凸帯。	ヨコナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(0.5~2) ○		56

表96　第Ⅲ層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
27	坏	口径(12.0) 残高2.8	わずかに外反する口縁部。	ヨコナデ	マメツ	淡黄色 淡黄色	長・石(1) ○	かわらけ	
28	坏	口径(12.8) 残高2.2	外傾する口縁部。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ○	かわらけ	
29	坏	口径(12.0) 残高1.7	外傾する口縁部。	ナデ	マメツ	浅黄橙色 灰白色	微砂粒 金 ○	かわらけ	
30	坏	残高2.1	外傾する口縁はナデによりやや内傾する。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ○	かわらけ	
31	坏	底径(7.0) 残高1.0	底部片。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 灰白色	微砂粒 ○	かわらけ	
32	皿	底径(5.4) 残高1.2	底部片。	マメツ ㊎回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ○	かわらけ	
33	鉢	口径(21.6) 残高3.2	内湾する口縁。 端部は外方へ拡張。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	石・長(0.5~1) ○	瓦質	
34	釜	残高4.5	断面三角形の鍔。	ヨコナデ	ナデ	にぶい褐色・黒色 にぶい褐色	石・長(1~2) ○	煤付着	56

表97　第Ⅲ層出土遺物観察表（銭貨）

番号	銭名	初銭年	銭径(mm)	孔径(mm)	外縁厚(mm)	内側厚(mm)	重量(g)	備考	図版
35	不明		21.0	7.0	0.7		1.3	マメツ	56

表98　第Ⅳ層出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
36	鏃	未製品	黒色頁岩	2.65	2.05	0.55	2.56	錐の可能性も	56
37	フレーク	剥　片	サヌキトイド	2.00	1.50	0.40	1.25		

第4章

五　楽　遺　跡

－3次調査－

第４章　五楽遺跡３次調査地

１．調査に至る経緯

1996（平成８）年１月30日に松山市道路部道路建設第１課(以下、道路建設課)より松山市平井町乙192－１外における松山市道「小野３号線」道路改良工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課(以下、文化教育課)に提出された。申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『No98 かいなご古墳群』に含まれる。

申請地の周辺には、南側に五楽遺跡１・２次調査地、古市遺跡２次調査地があり、弥生時代前期の土坑や古墳時代後期の竪穴式住居址と古代の掘立柱建物址など、弥生時代から古代の集落関連遺構が確認されている。さらに、北側の丘陵部には、６世紀後半に構築されたと推定される平井谷１号墳、東側には駄馬姥ケ谷窯跡をはじめ７・８世紀代の須恵器窯跡が分布している。

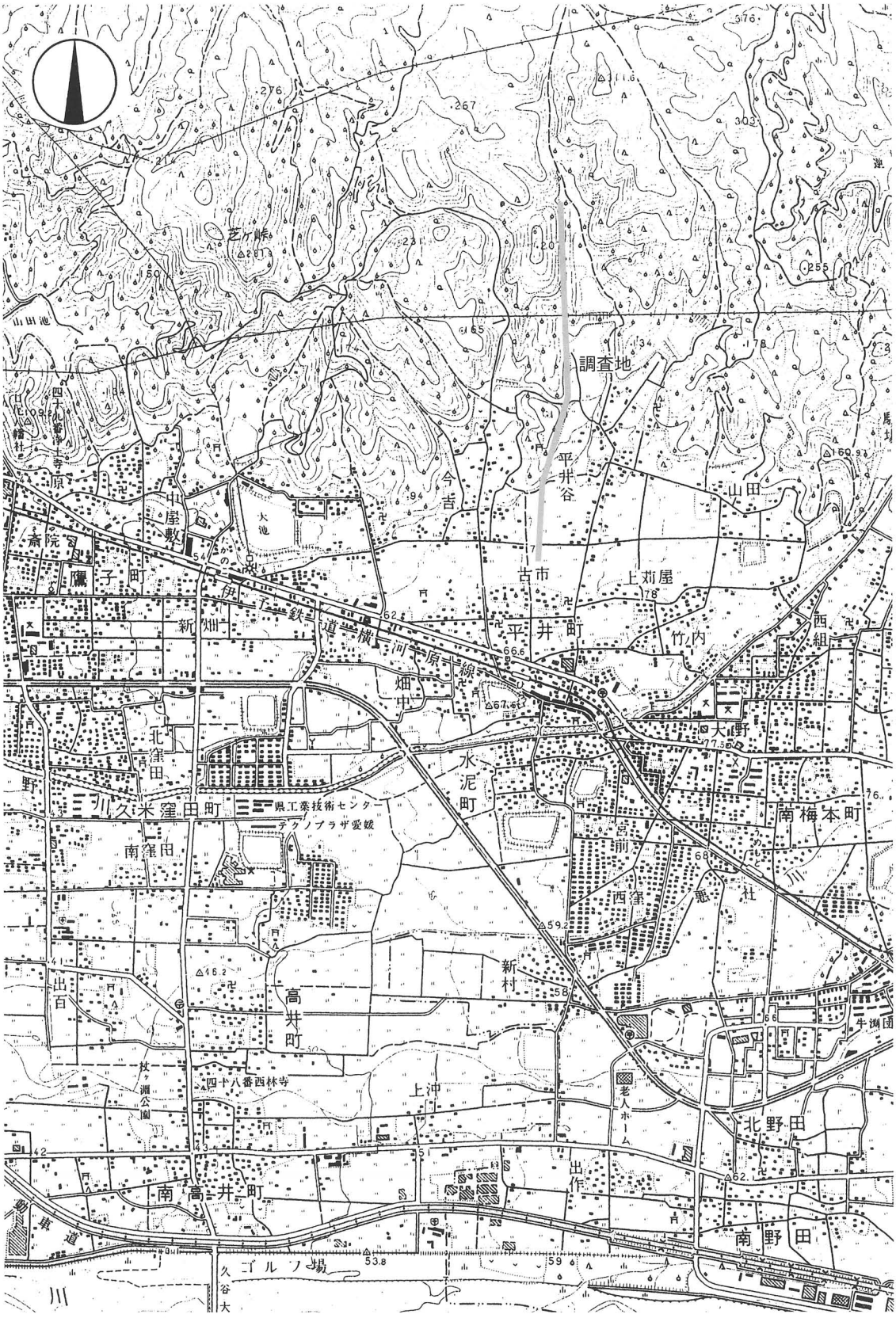
これらのことから、当該地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲や性格を確認する必要があるため、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）は、1999（平成11）年９月27日から申請地南側の低位部の試掘調査を実施した。

２．試掘調査

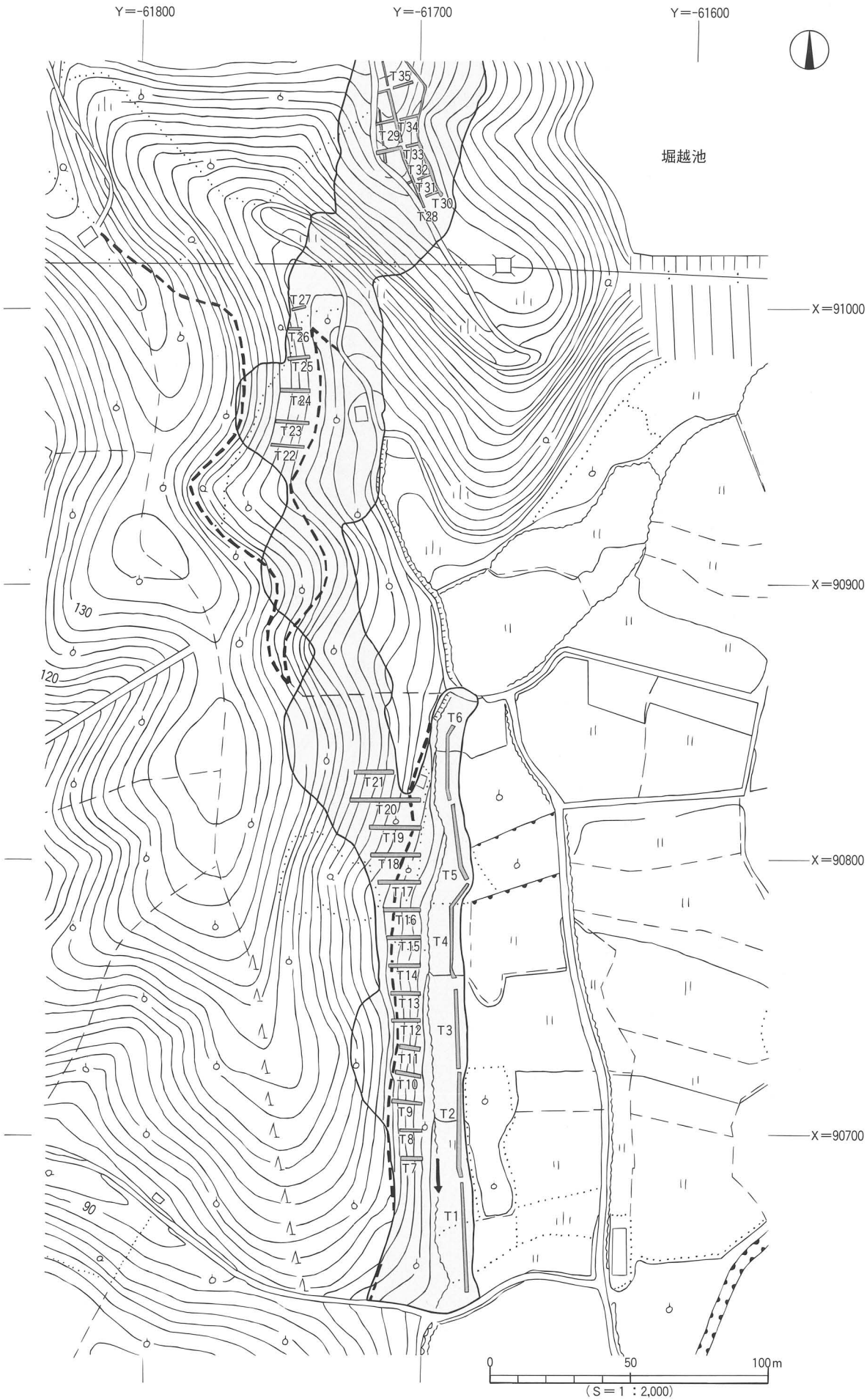
（１）調査の概要（第124～135図）

調査対象地は、堀越川の開析作用によって開けた谷の平地部と南方にのびる丘陵の尾根部と斜面部である。調査以前は、平地部が蓮根畑、丘陵部が果樹園と雑木林である。平成11年度は対象地南部の試掘調査を実施した。９月27日から10月６日の間、平地部に６本（Ｔ１～Ｔ６）、10月12日から10月14日の間、丘陵部の斜面に５本（Ｔ７～Ｔ11）のトレンチを設定し、土層観察と遺構・遺物の確認を行った。その結果、Ｔ１からＴ６で自然流路を検出した。Ｔ７からＴ11では遺構、遺物は確認されなかった。２月29日から３月９日の間、丘陵部の斜面に10本（Ｔ12～Ｔ21）のトレンチを設定し、土層観察と遺構・遺物の確認を行った。その結果、Ｔ14、Ｔ16、Ｔ19からは弥生時代中期から後期の遺物を検出した。これらの結果より、平地部に調査区を設定し、「１区」と呼称して、本格調査を実施した。

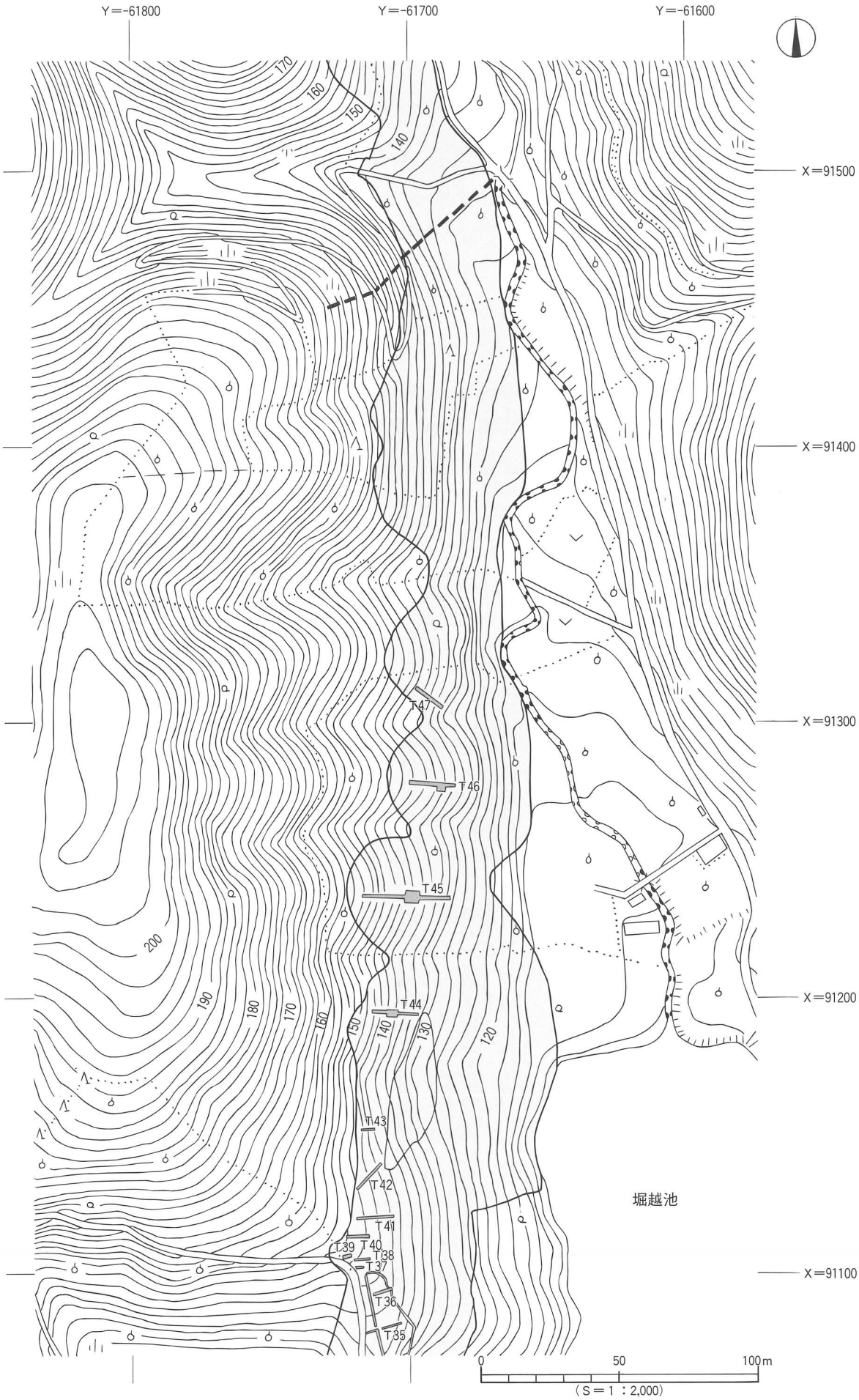
平成12年度は対象地北部の試掘調査を実施した。尾根上の南側には平井谷１号墳が所在することから古墳の有無を主目的とし、現在の地形を考慮してトレンチを設定した。７月３日から７月19日の間、６本（Ｔ22～Ｔ27）のトレンチを設定し、７月25日から８月10日の間、尾根上に13本（Ｔ28～Ｔ40）と８月７日から９月８日の間、斜面部に７本（Ｔ41～Ｔ47）のトレンチを設定し、土層観察と遺構、遺物の確認を行った。その結果、尾根上のやや東側斜面Ｔ35から石室の石材と盛土を検出した。また、尾根の中心からも石材や墓坑と思われる掘り込みを確認したことから、尾根上には古墳が存在していることが考えられたため、調査区を設定し、「２区」と呼称して本格調査を開始した。このほか、Ｔ44、Ｔ45、Ｔ46から石室に使用したと思われる石材が確認された。11月27日から12月１日の間、申請地北部の尾根上、やや東側斜面に10本（Ｔ48～Ｔ57）のトレンチを設定し、土層観察と遺構・遺物の確認を行った。その結果、尾根上のＴ55から焼土と思われる土層を検出したことから調査区を設定し、「３区」と呼称して本格調査を開始した。



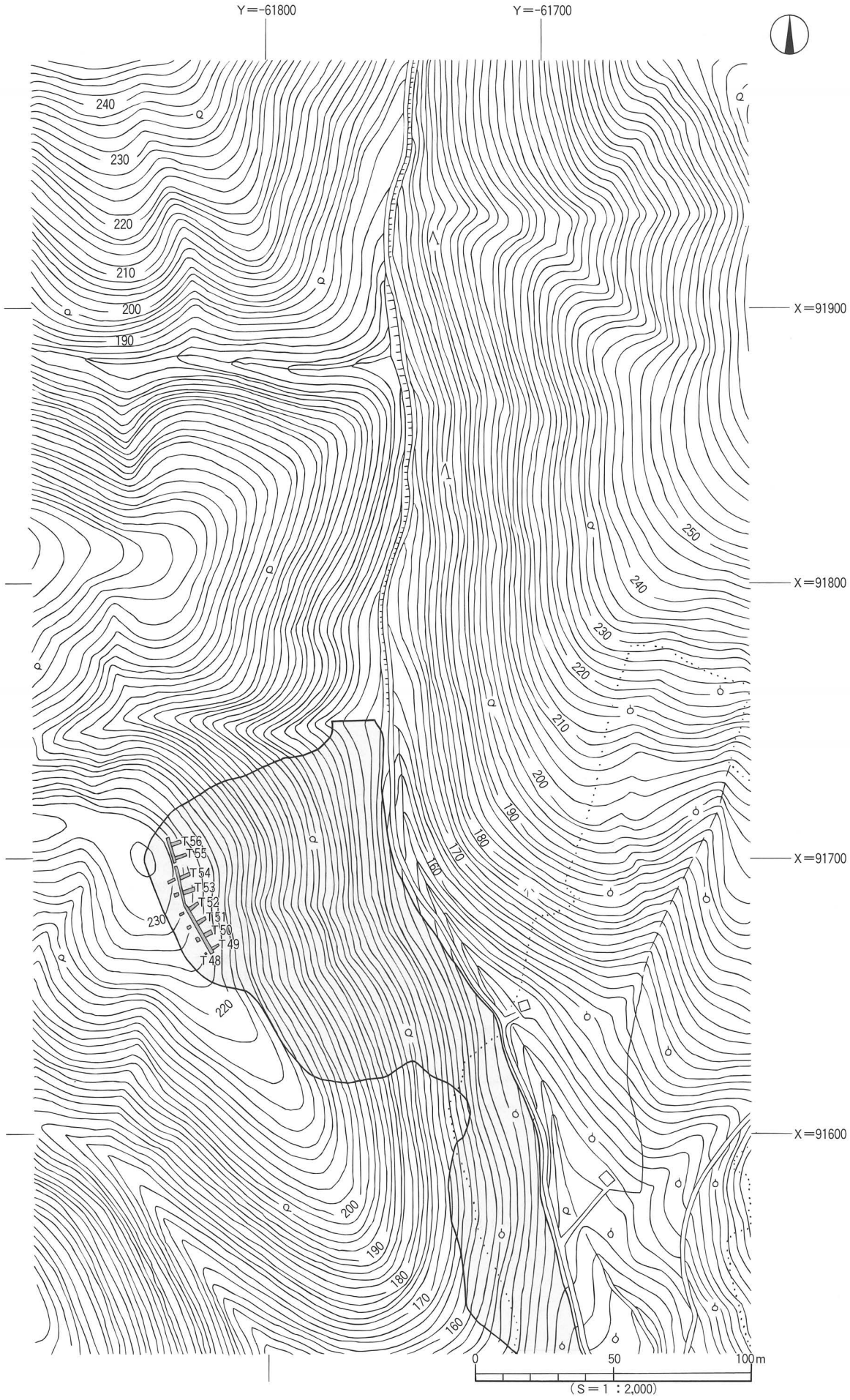
第124図　調査地位置図（S＝１：25,000）



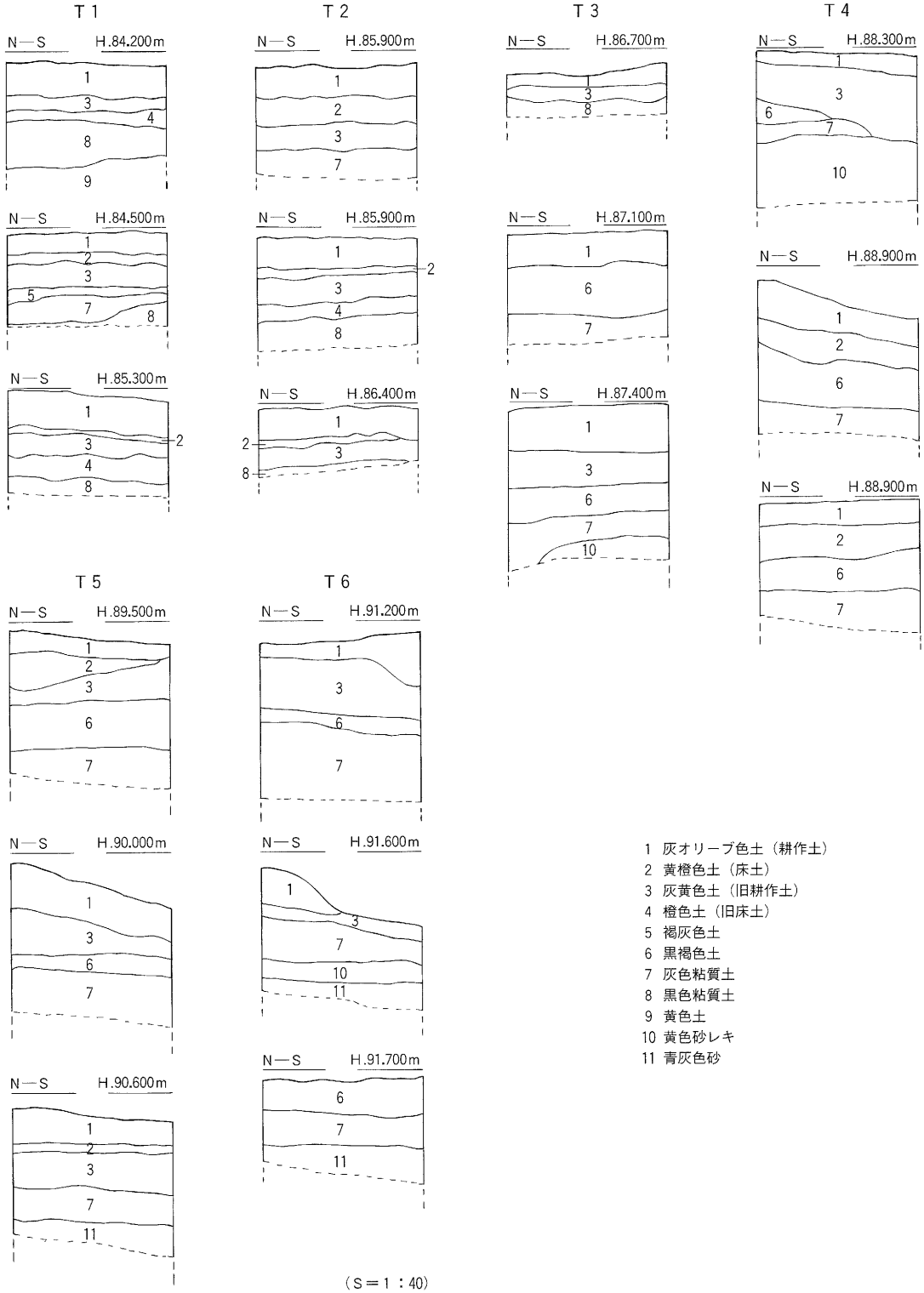
第125図　調査地測量図・試掘トレンチ測量図（1）



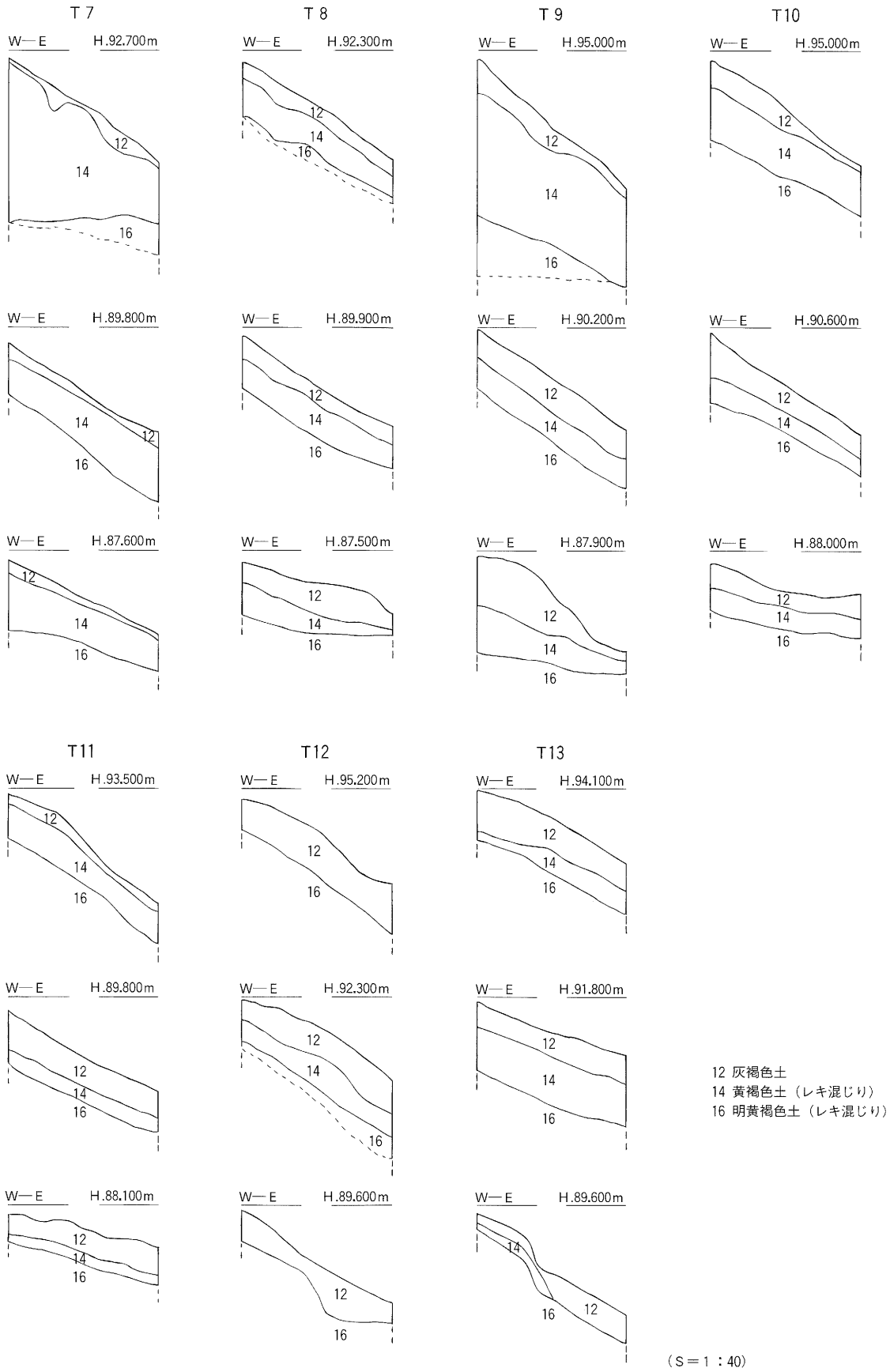
第126図　調査地測量図・試掘トレンチ測量図（2）



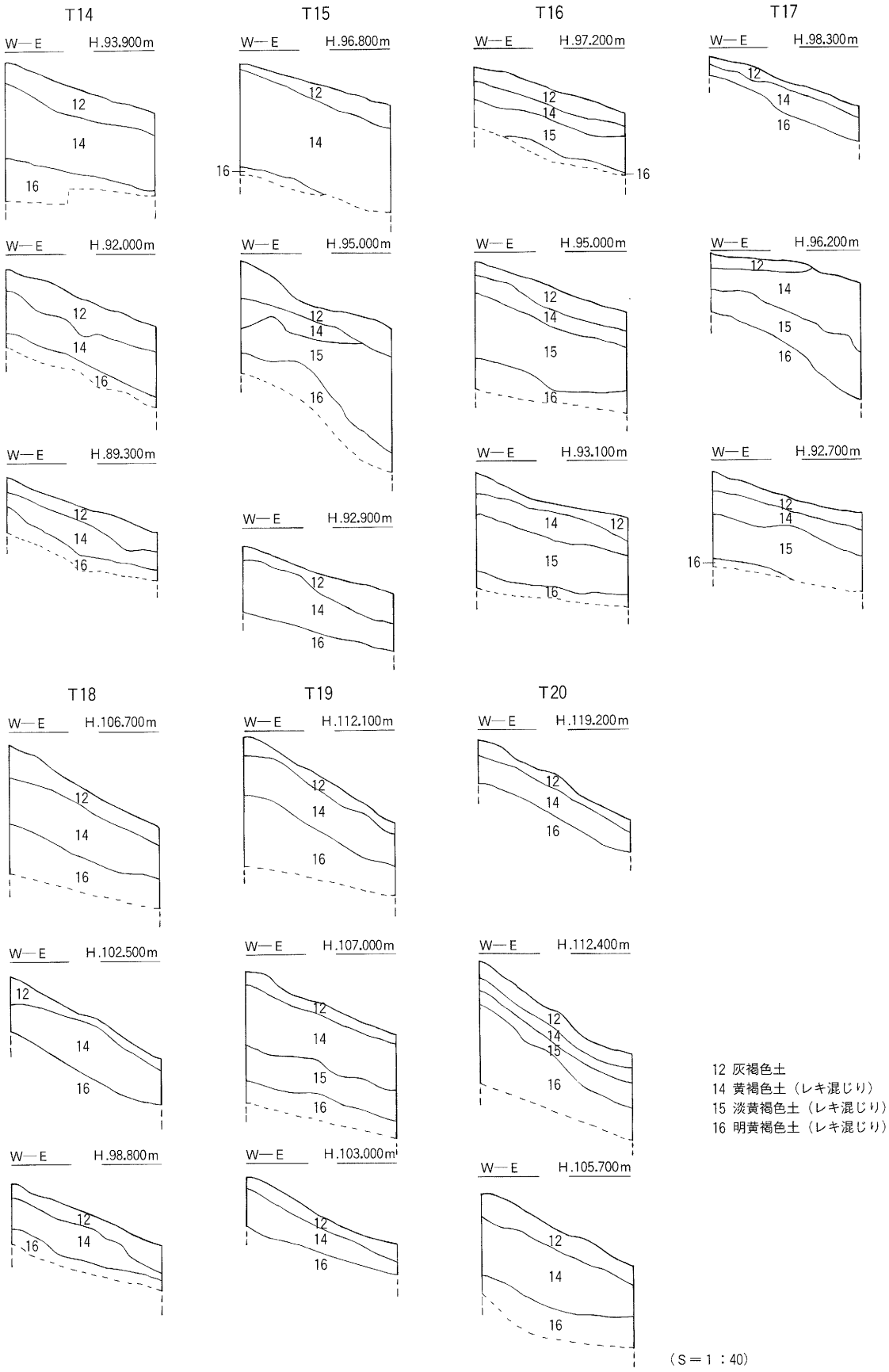
第127図　調査地測量図・試掘トレンチ測量図（3）



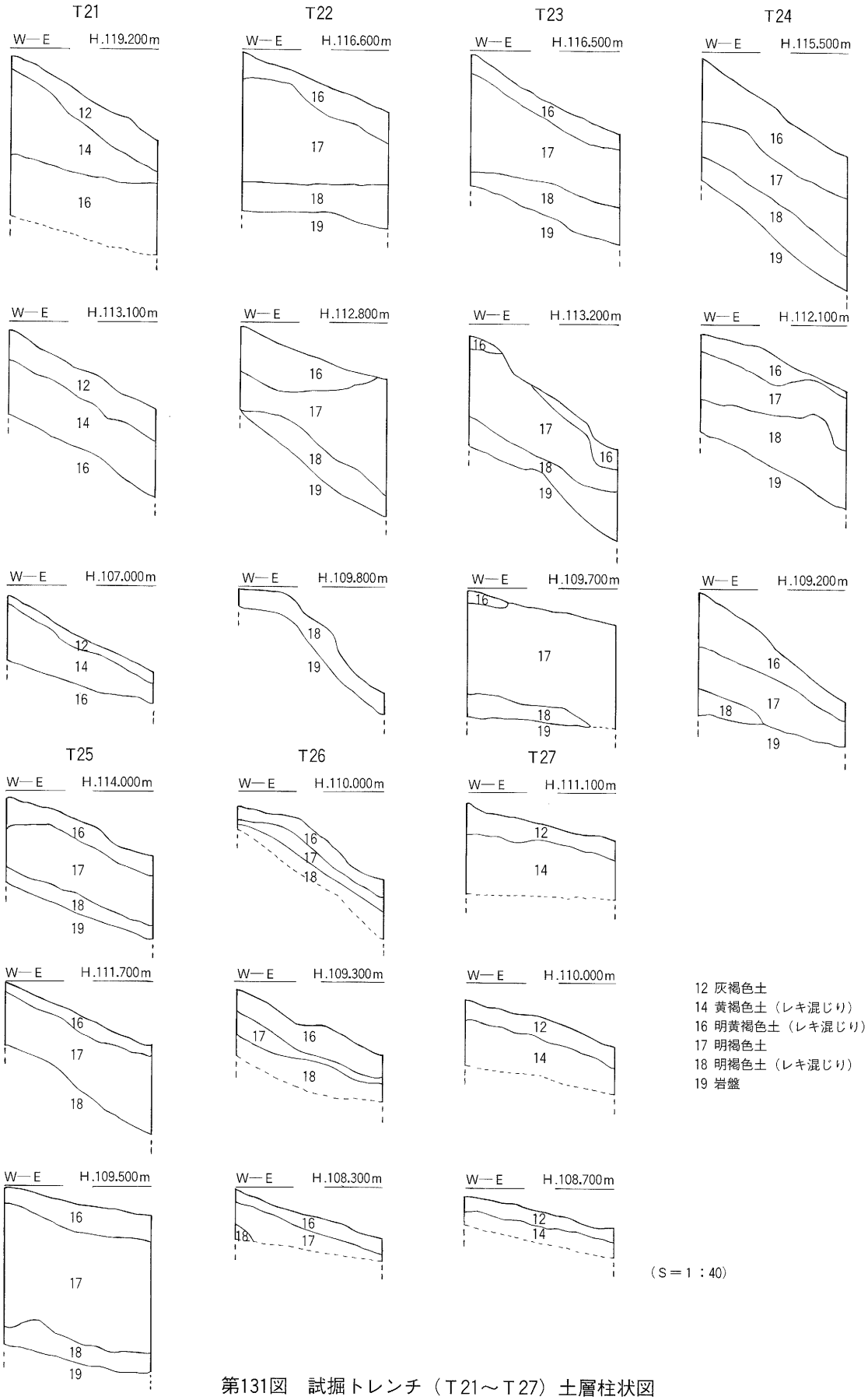
第128図　試掘トレンチ（Ｔ１～Ｔ６）土層柱状図



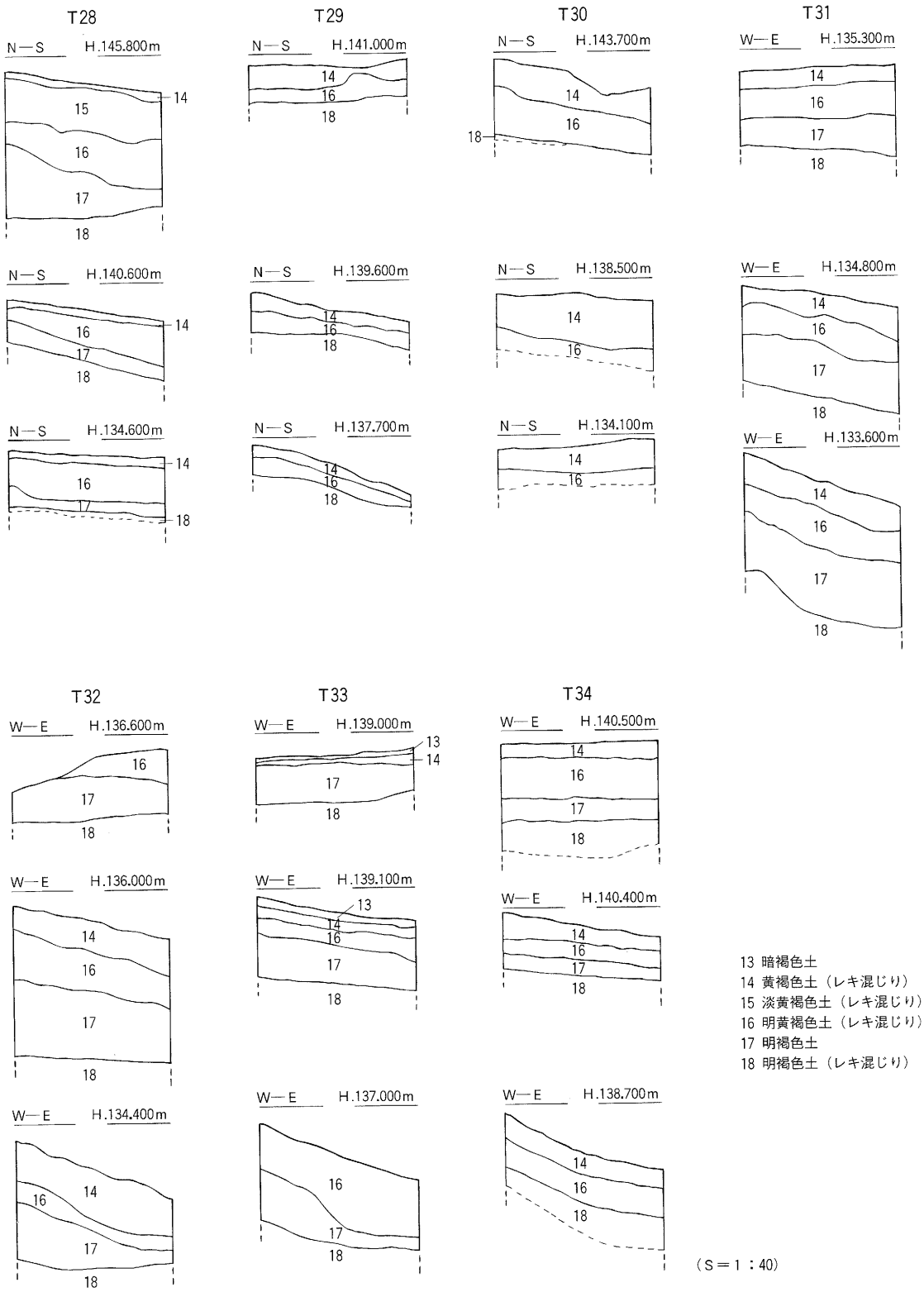
第129図　試掘トレンチ（T 7～T13）土層柱状図



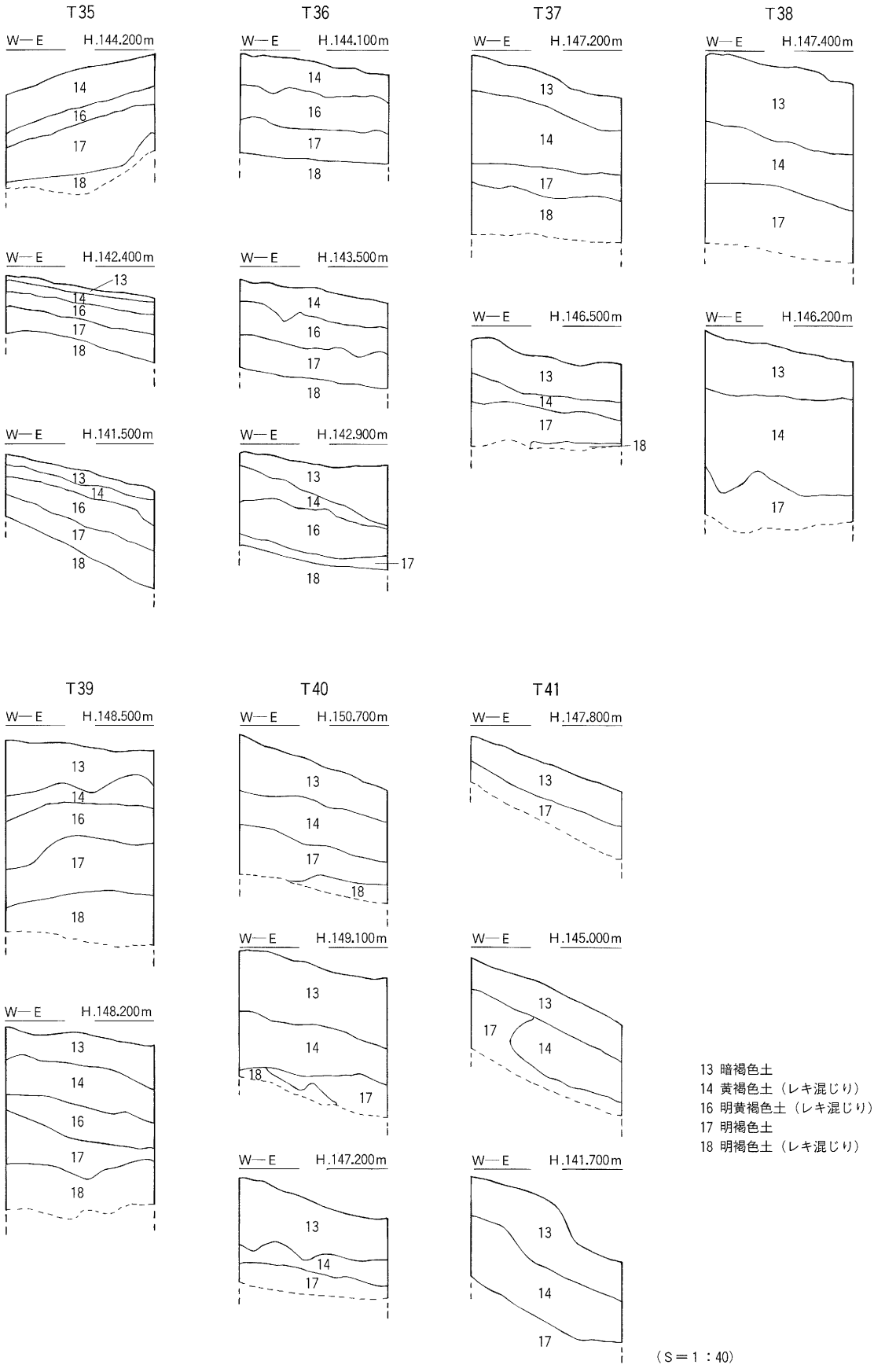
第130図　試掘トレンチ（T14～T20）土層柱状図



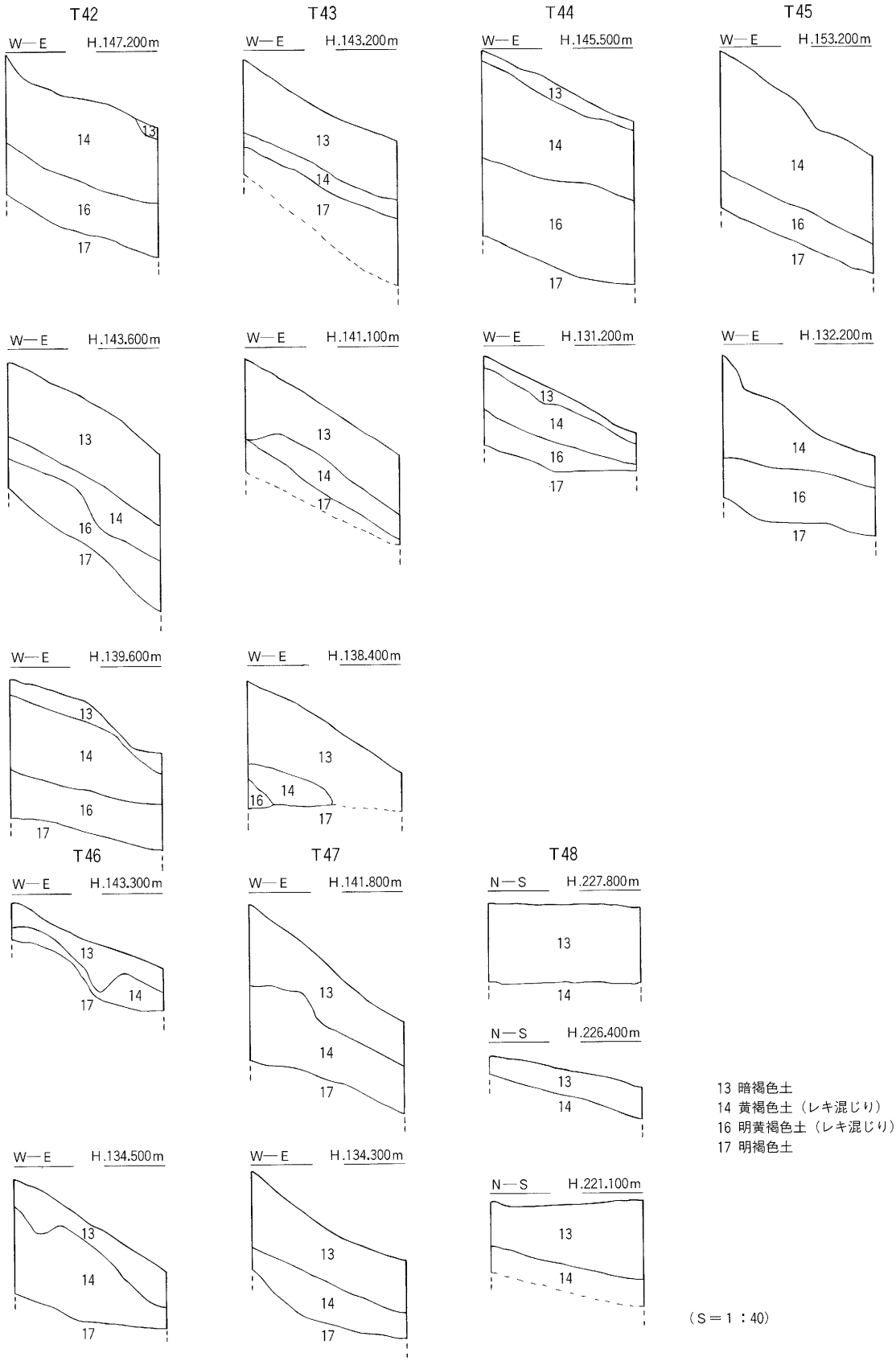
第131図　試掘トレンチ（T21～T27）土層柱状図



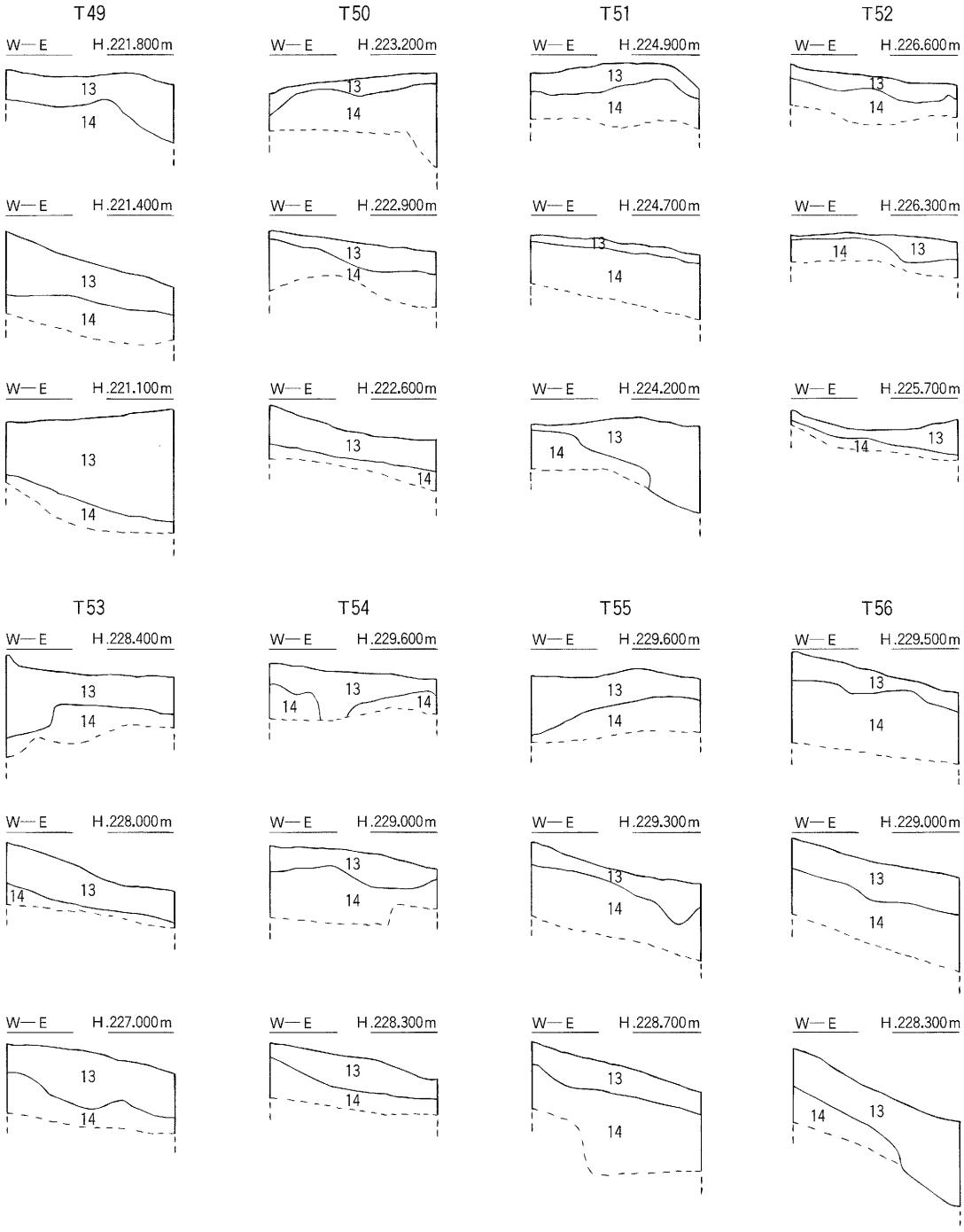
第132図　試掘トレンチ（T28～T34）土層柱状図



第133図　試掘トレンチ（T35～T41）土層柱状図



第134図　試掘トレンチ（T42～T48）土層柱状図



13 暗褐色土
14 黄褐色土（レキ混じり）

（S＝1：40）

第135図　試掘トレンチ（T49～T56）土層柱状図

（２）出土遺物（第136図）

試掘調査で設定したトレンチ内から、弥生土器や石器が出土した。ここでは申請地南側に設定した４本のトレンチ（Ｔ４・Ｔ14・Ｔ16・Ｔ19）から出土した遺物の実測図を掲載した。各トレンチ出土品は以下のとおりである。Ｔ４出土品は、１・４・７・９・13・15・16・18、Ｔ14出土品は、２・３・６・12・14・17、Ｔ16出土品は５・８・11、Ｔ19出土品は10である。

弥生土器（１～13）

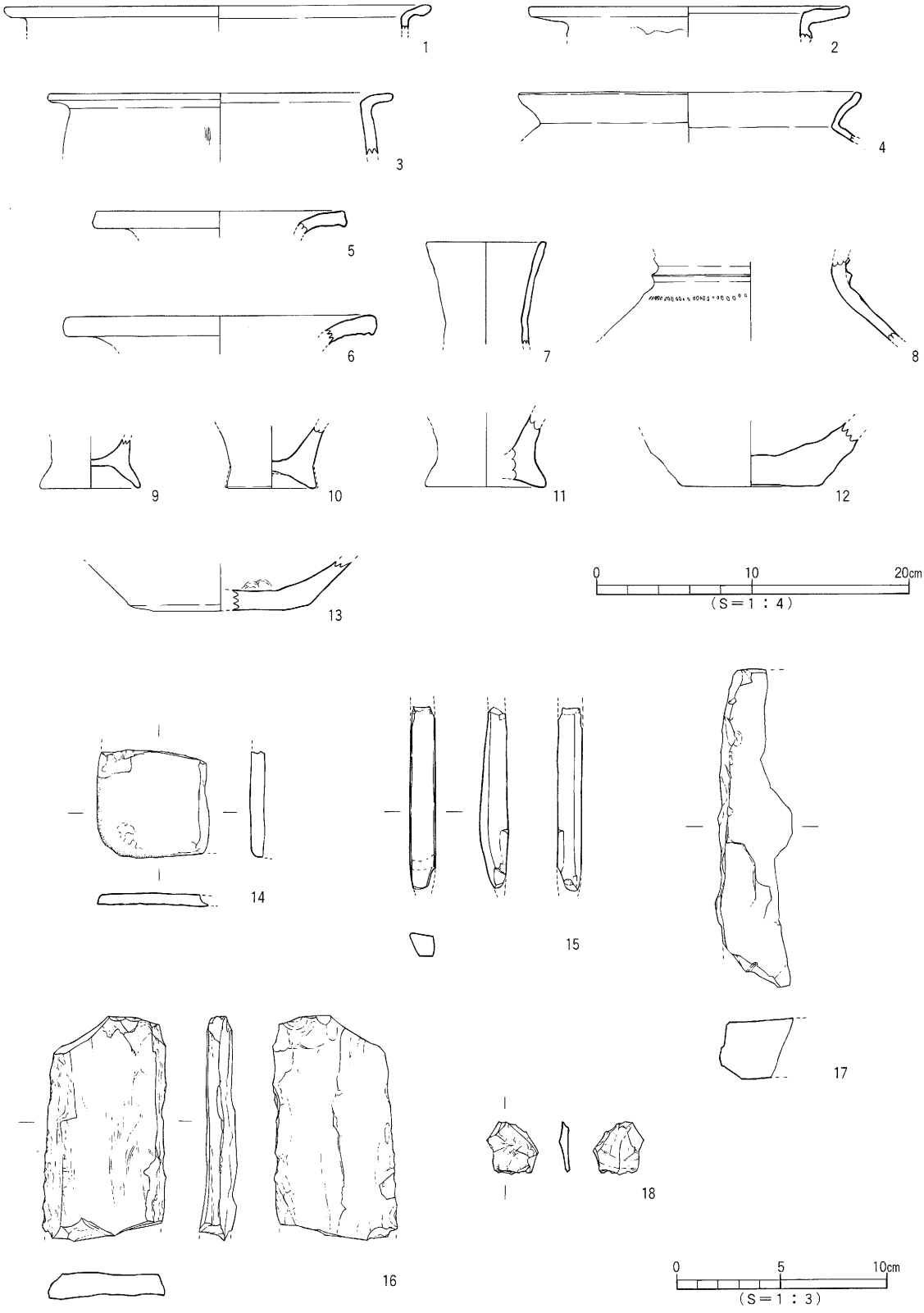
１～４は甕形土器である。１～３は口縁部が逆Ｌ字状に折曲られるもので、２の口縁下には断面三角形状の凸帯を貼付ける。弥生中期中葉。４は口縁部が外反し、口縁中位に稜をもつ。弥生後期。５～８は壺形土器である。５・６は口縁部が外反し、口縁端部は上下方に肥厚する。弥生中期中葉。７は長頸壺で、口縁端部は丸く仕上げる。弥生後期後半。８は肩部片で、頸部に凸帯２条、肩部に２条の刺突文を施す。弥生中期中葉。９～11は甕形土器の底部、12・13は壺形土器の底部である。甕形土器は、くびれ部をもつ上げ底、壺形土器は平底となる。弥生中期～後期。

石器（14～18）

14は結晶片岩製の扁平片刃石斧である。断面形態は長方形状を呈するものと考えられ、縞は不明瞭である。15は緑色片岩製のノミ形石斧である。偏両刃で、刃部、基部共に欠損している。断面形態は台形状を呈する。16は緑色片岩製の伐採斧である。刃部は欠損しているが、断面形態は楕円形を呈するものと考えられる。17は砂岩製の砥石である。上下２面の研磨面をもつ。18は赤色頁岩製のスクレイパーである。厚みのある横長剥片を素材とし、直線的な刃部を作出する。

表99　調査一覧

調査年度	種別	所在地	面積(㎡)	調査期間	備考
平成11年	試掘	松山市平井町乙192－1　外	6,146.44	平成11年８月17日～平成12年３月31日	
	本格	松山市平井町乙192－1　外	1,325.45	平成11年10月12日～平成12年３月31日	１区
平成12年	試掘	松山市平井町乙194－1　外	20,865.05	平成12年４月10日～平成13年３月31日	
	本格	松山市平井町乙194－1　外	573.56	平成12年10月26日～平成13年３月31日	２区
		松山市平井町乙202	96.99	平成12年12月４日～平成13年１月９日	３区



T 8：1・4・7・9・13・15・16・18
T14：2・3・6・12・14・17
T16：5・8・11
T19：10

第136図　試掘トレンチ出土遺物実測図

３．本格調査

〔1〕1区の調査（第137・138図）

（１）調査の経緯

１区は、調査地南方に広がる平地部である。調査以前は、水田と蓮根畑である。標高は、84～91mを測る。調査は排土置場の都合から、調査区を南半部と北半部に分け、南半部から着手した。1999（平成11）年８月17日に調査事務所に発掘用具を搬入し、８月27日に作業員により調査の草刈りを行う。10月12日から試掘調査の結果をもとに調査区を設定し、重機にて掘削を行なう。10月20日から遺構検出作業を行い、溝と自然流路を検出する。11月８日に高所作業車を用いて、遺構検出状況の写真撮影を行なう。11月11日から12月15日の間、遺構の掘り下げと測量をする。12月13日に土坑の測量をする。12月17日に南半部の完掘状況写真を撮る。12月21日に年末年始の休日にそなえ現場の安全対策をする。2000（平成12）年１月14日から北半部の掘削を行なうが、雨と湧水などから１ケ月を費す。１月28日から遺構検出作業を行い、南半部からつながる自然流路を検出する。２月８日から遺構の掘り下げと測量をする。３月13日から遺構･遺物の測量をする。３月21日にセスナ機で調査地と周辺の航空写真と、ラジコンヘリコプターで遺構完掘状況の写真を撮る。３月23日から、調査区の埋め戻しをする。発掘用具や調査事務所の整理を行い、３月31日で１区の調査を終了する。

（２）層　位（第139～141図）

１区の基本層位は、第Ⅰ層表土及び耕作土、第Ⅱ層旧耕作土、第Ⅲ層褐灰色土、第Ⅳ層黒褐色土、第Ⅴ層黒色粘質土、第Ⅵ層黄色土、第Ⅶ層灰白色土（砂混じり）、第Ⅷ層青灰色土（砂混じり）、第Ⅸ層青灰色砂礫層である。

第Ⅰ層：　第Ⅰ層は3層に分層し、第Ⅰ①層は近現代の造成にかかる客土で地表下20～180cmまで開発がおこなわれている。第Ⅰ②層は水田耕作に伴う耕土で、厚さ10～70cmを測る。第Ⅰ③層は水田耕作に伴う床土で、厚さ５～10cmである。

第Ⅱ層：　第Ⅱ層は２層に分層し、第Ⅱ①層は旧水田耕作に伴う耕土で、厚さ10～50cmを測る。第Ⅱ②層は旧水田耕作に伴う床土で、厚さ10～40cmを測る。

第Ⅲ層：　第Ⅲ層は調査地中央部を除く地域にみられ、厚さ5～30cmを測る。本層中からは、土師器片が出土している。

第Ⅳ層：　第Ⅳ層は調査地中央部にみられ、厚さ20～40cmを測る。本層中からは土師器片が出土している。

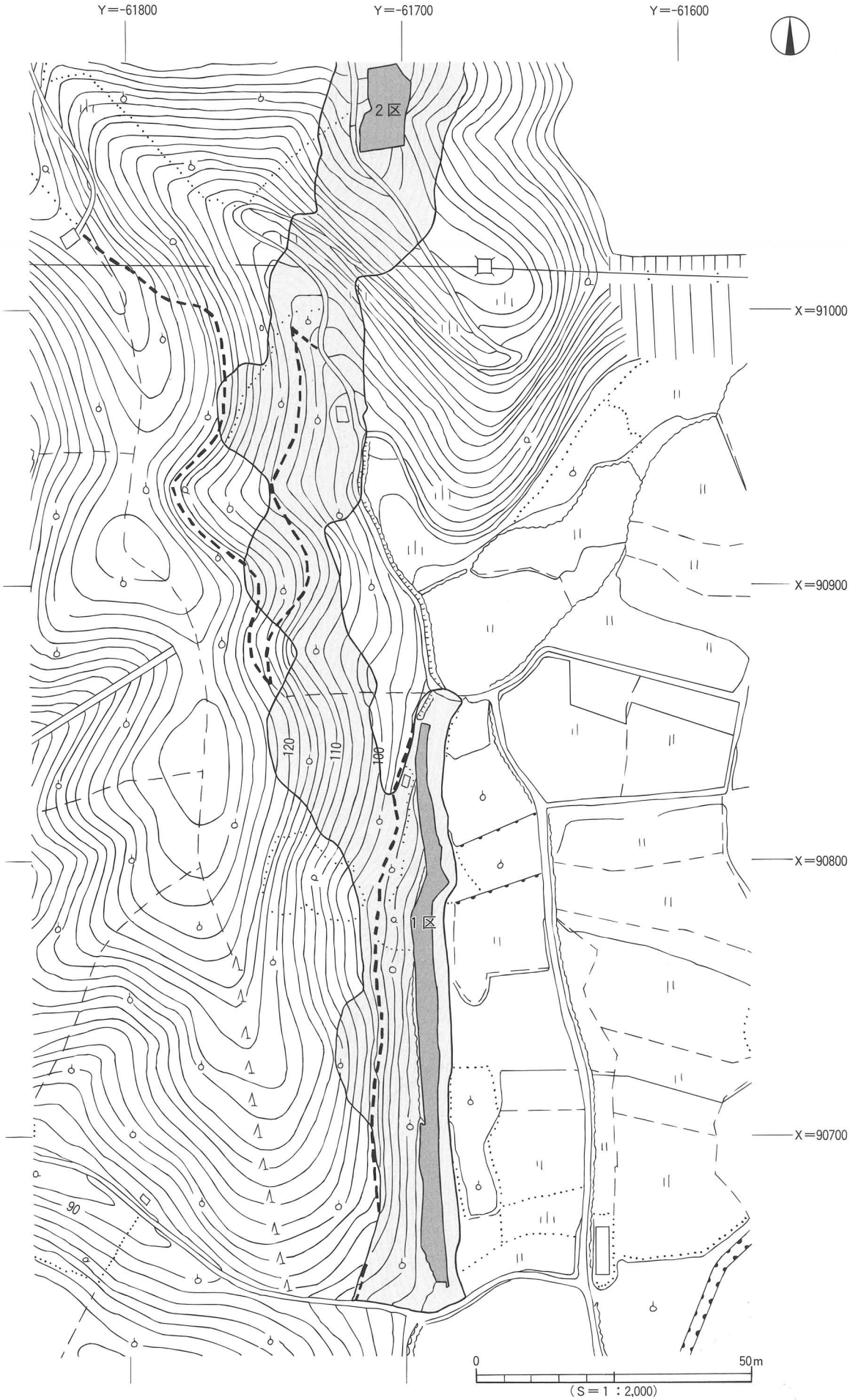
第Ⅴ層：　第Ⅴ層は粘性の強い土壌で、調査区南半部にみられ、厚さ10～30cmを測る。本層中からは、古墳時代から古代の須恵器や土師器、灰釉陶器が出土している。

第Ⅵ層：　第Ⅵ層は、調査区中央部を除く地域にみられ、厚さ10～30cmを測る。本層上面にて遺構を検出した。本層中からの遺物の出土はない。

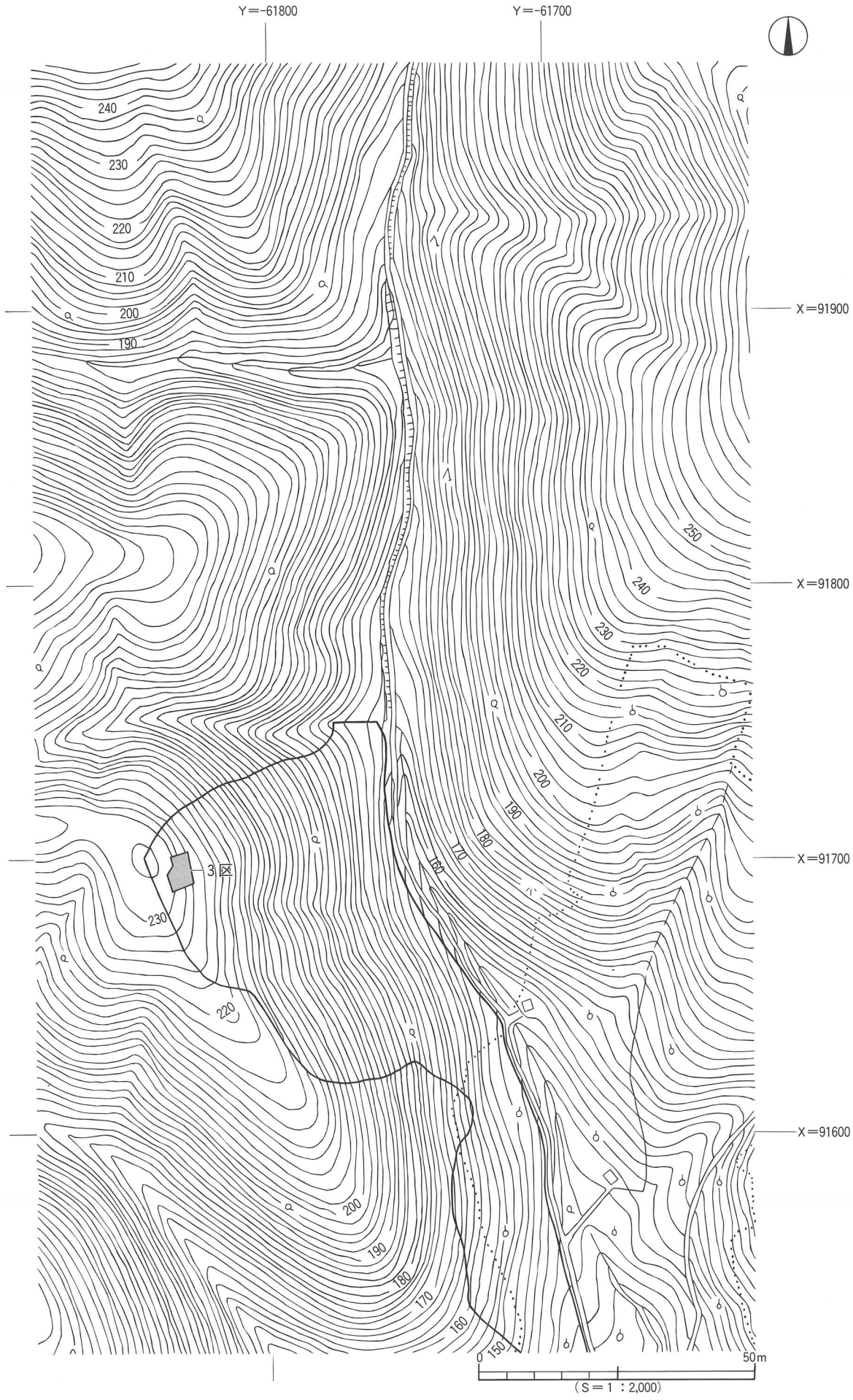
第Ⅶ層：　第Ⅶ層は調査区南半部にみられ、土壌中に灰色の粗砂が混入している。厚さ20cm以上の堆積を測る。本層上面にて遺構を検出した。本層中からの遺物の出土はない。

第Ⅷ層：　第Ⅷ層は調査区中央部にみられ、土壌中に灰色の微砂が混入している。厚さ30cm以上の堆積を測る。本層中からは弥生土器や石器が出土している。

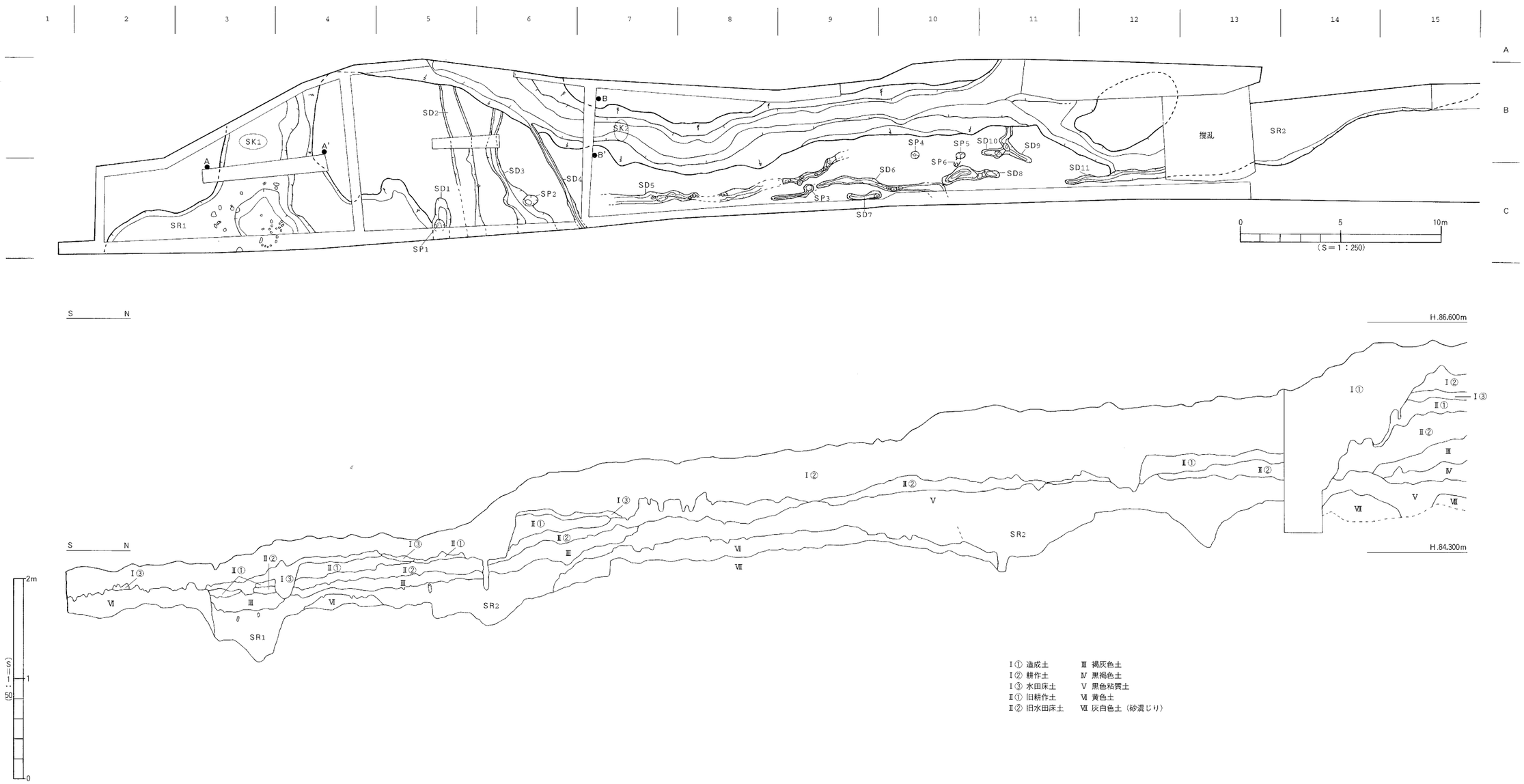
第Ⅸ層：　第Ⅸ層は調査区北部にみられる砂礫層で、径20～30cm大の円礫と粗砂で構成される。本層中からの遺物の出土はない。



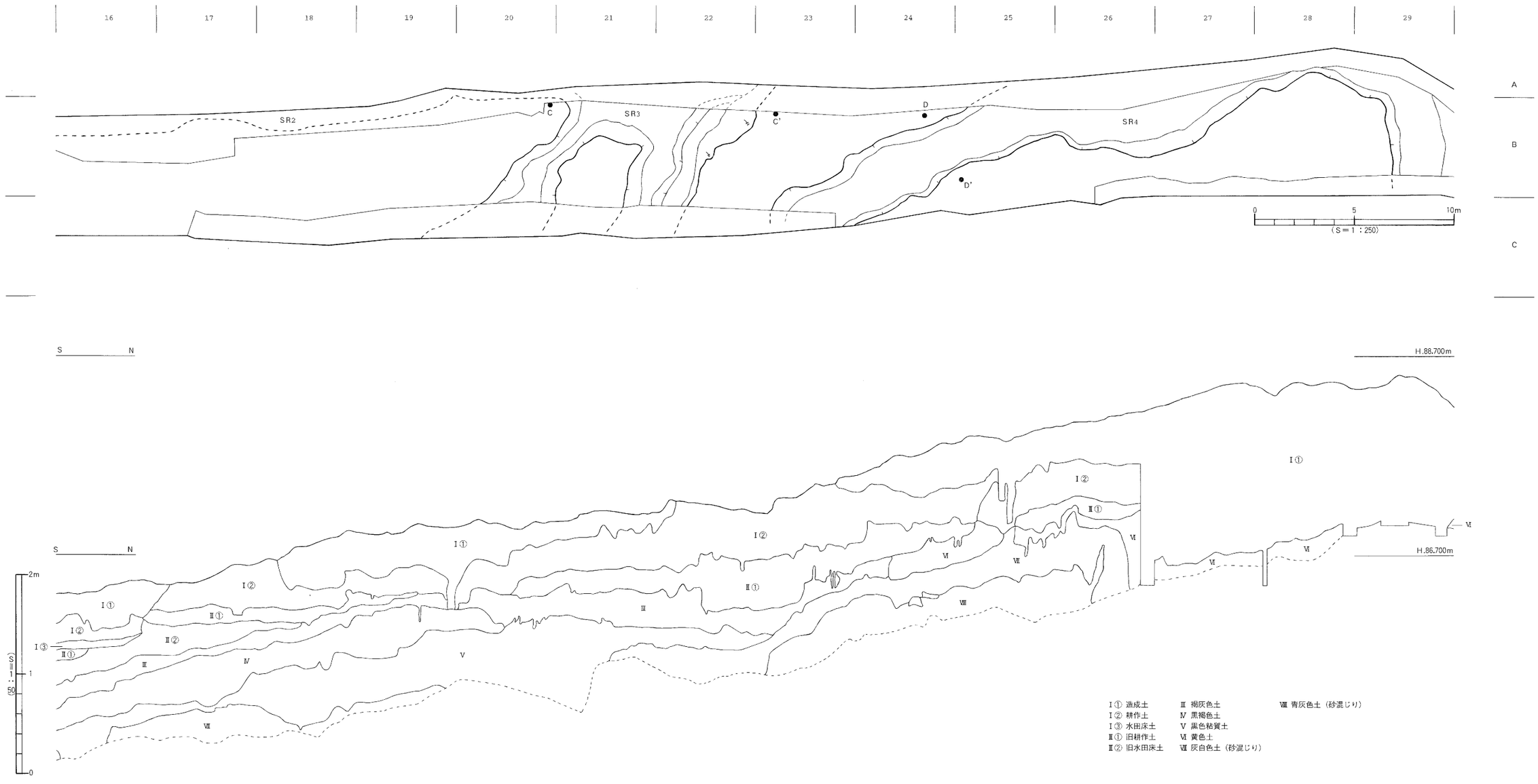
第137図　本格調査地（1・2区）測量図



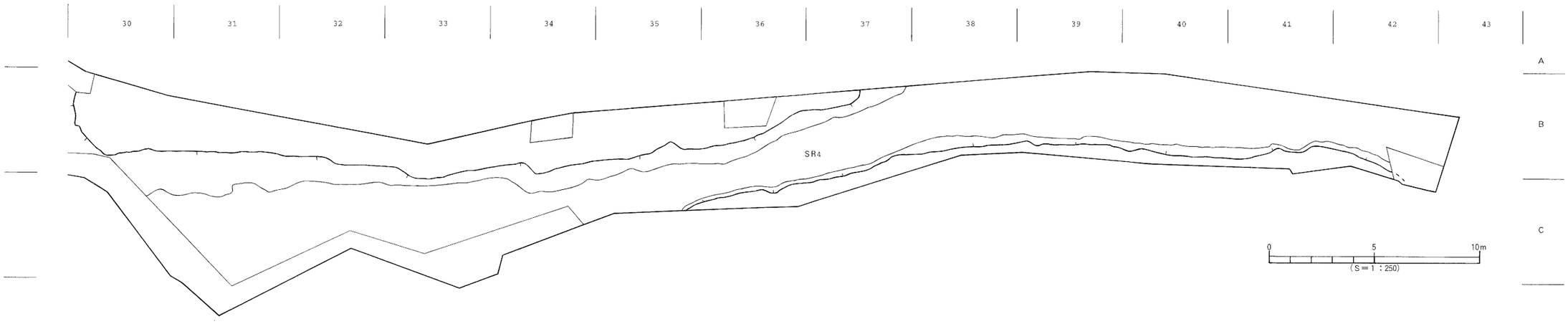
第138図　本格調査地（3区）測量図



第139図　1区遺構配置図・土層図（1）



第140図　1区遺構配置図・土層図（2）



第141図　1区遺構配置図・土層図（3）

出土遺物や検出遺構より、第Ⅲ・Ⅳ層は中世以降、第Ⅴ層は古代以降、第Ⅵ～Ⅷ層は弥生時代以降に堆積した土壌と考えられる。

遺構は、自然流路４条、溝11条、土坑２基、ピット６基を検出した。これらの遺構は第Ⅵ層及び第Ⅵ上面での検出である。各遺構の詳細は一覧表に記す（表100～102）。なお、調査にあたり調査区内を５ｍ四方のグリットに分けた。グリット名は、西から東へＡ・Ｂ・Ｃ、南から北へ１・２・・・・・43とした。

（３）遺構と遺物

１）自然流路

ＳＲ１（第139図）

調査区南側、A4～C2区で検出した東西方向に流れる流路である。第Ⅵ層上面での検出であり、第Ⅴ層が覆う。ＳＲ１は分岐し、北側に流れる流路は溝ＳＤ１及びＳＰ１に切られている。規模は検出長8.40㎝、幅2.00～4.50ｍ、深さは最深部で約70㎝を測る。流路壁体は北側が緩やかに立ち上がるが、南側は鋭角に立ち上がる。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は第Ⅴ層と同様の黒色粘質土単層である。底面付近にはわずかに砂が堆積するが、底面はほぼ平坦である。流路内からは径10～20㎝の河原石が出土した。

時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、後述するＳＲ２と埋土が酷似することから、概ね古代の流路とする。

ＳＲ２（第139・140図）

調査区南側、Ａ４～A20区で検出した南北方向に流れる流路である。第Ⅵ層上面での検出であり第Ⅴ層が覆う。流路南側は溝ＳＤ２、ＳＤ３、ＳＤ９を切り、ＳＤ４、ＳD11に切られる。流路北端はＳＲ３と重複すると考えられるが、前後関係は不明である。規模は検出長52.50ｍ、検出幅3.00～3.50ｍ、深さは最深部で約50㎝を測る。断面形態はすり鉢状を呈し、壁体は流路上位が緩やかに立ち上がり、下位は鋭角に立ち上がる。埋土は第･層と同様の黒色粘質土であるが、底面付近にわずかに砂が堆積する。底面は北から南へ向けて傾斜をなし、比高差１ｍを測る。流路内からは、須恵器甕の口縁部や土師器片が出土した。

出土遺物（第143図）

須恵器（19～23）

19～21は須恵器の甕である。19は口縁端部が長方形状に肥厚し、端部内面に稜を持つ。肩部外面に平行叩き、内面に円孤叩きを施す。20は口縁部は直立し、口縁端部は内傾する面をもつ。頸部中位に2条の沈線を施す。21は口縁端部が外方に肥厚し、頸部に２条の沈線を施す。８世紀。

土師器（22・23）

22・23は土師器の坏である。体部は内湾し、22の口縁端部は尖り気味に仕上げる。底部の切り離しは、22は不明であるが、23は回転ヘラ切り技法による。なお、23は成形時の粘土巻き上げ痕を顕著に残す。

時期：出土した遺物の特徴から、ＳＲ１は古代、８世紀代に埋没した流路とする。

ＳＲ３（第140図）

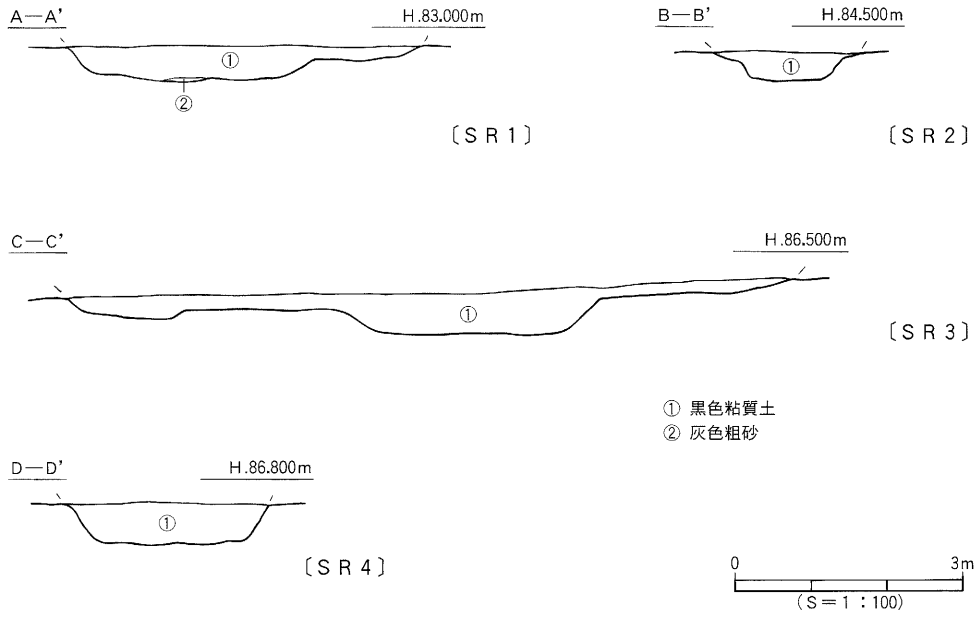
調査区中央部、Ａ20～Ｂ22区で検出した東西方向の流路である。第Ⅶ層上面での検出であり、第Ⅴ層が覆う。ＳＲ３は分岐しており、規模は検出長5.20m、最大検出幅7.70m、深さは70cm以上を測る。分岐部分は、幅1.5～3.0m、深さ30cmを測る。断面形態はＵ字状を呈し、埋土は第Ⅴ層と同様の黒色粘質土である。北側壁体は緩やかに立ち上がる。底面は東から西へ傾斜をなし、比高差20cmを測る。流路内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、明確な時期特定は困難であるが、埋土がＳＲ２と酷似することから、概ね古代の流路とする。

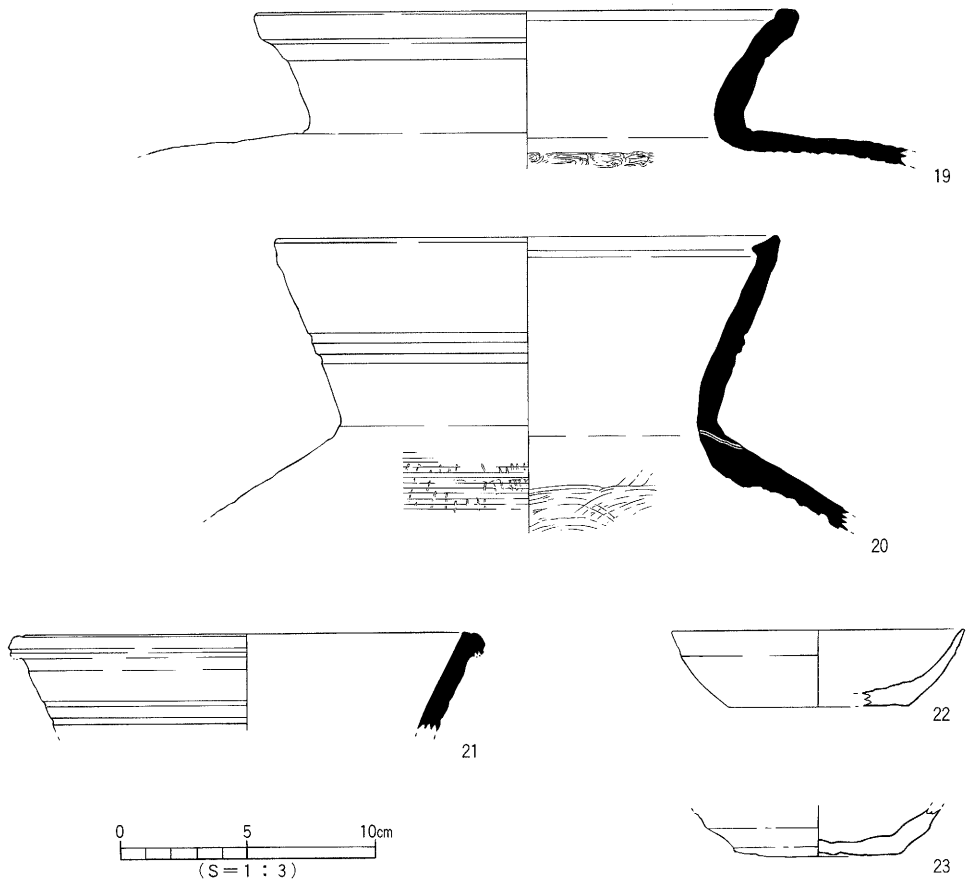
ＳＲ４（第140・141図）

調査区北側、Ｃ23～Ｂ43区で検出した南北方向に流れる流路である。第Ⅵ層及び第Ⅶ層上面での検出であり、第Ⅴ層が覆う。ＳＲ４は大きく蛇行しており、規模は検出長100.00m、検出幅3.00～8.00m、深さは最深部で60cmを測る。断面形態は緩やかなＵ字状を呈し、埋土は第Ⅴ層と同様の黒色粘質土である。底面付近にはわずかに砂が堆積する。流路底面は凹凸があり、北側から南側に向けて傾斜をなし、比高差４ｍを測る。流路内からは径10～25cm大の河原石が数点出土した。

時期：時期を特定しうる遺物がなく、時期特定は困難であるが、埋土がＳＲ２と酷似することから、概ね古代の流路とする。



第142図　ＳＲ断面図



第143図　ＳＲ２出土遺物実測図

２）溝

ＳＤ１（第144図）

調査区南側、Ｃ５区で検出した東西方向の溝である。第Ⅵ層上面の検出であり、ＳＲ１を切りＳＰ１に切られる。規模は検出長3.00m、幅1.00m、深さ10cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒褐色土単層である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるがＳＲ１より後出することから、古代以降の溝とする。

ＳＤ２（第144図）

調査区南側、Ａ５～Ｃ５区で検出した東西方向の溝である。第Ⅵ層上面での検出であり、溝西側はＳＲ２に切られている。規模は検出長7.20m、幅0.68m～0.92m、深さ６cmを測る。断面形態は浅いレンズ状を呈し、埋土は黒色土単層である。溝底はほぼ平坦である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるがＳＲ２より前出することから、古代以前の溝とする。

ＳＤ３（第144図）

調査区南側、Ａ６～Ｃ６区で検出した東西方向の溝である。溝西側はＳＲ２、東側はＳＰ２に切られている。規模は検出長6.80m、幅0.38～1.00m、深さ17cmを測る。溝は湾曲しており東側は幅広と

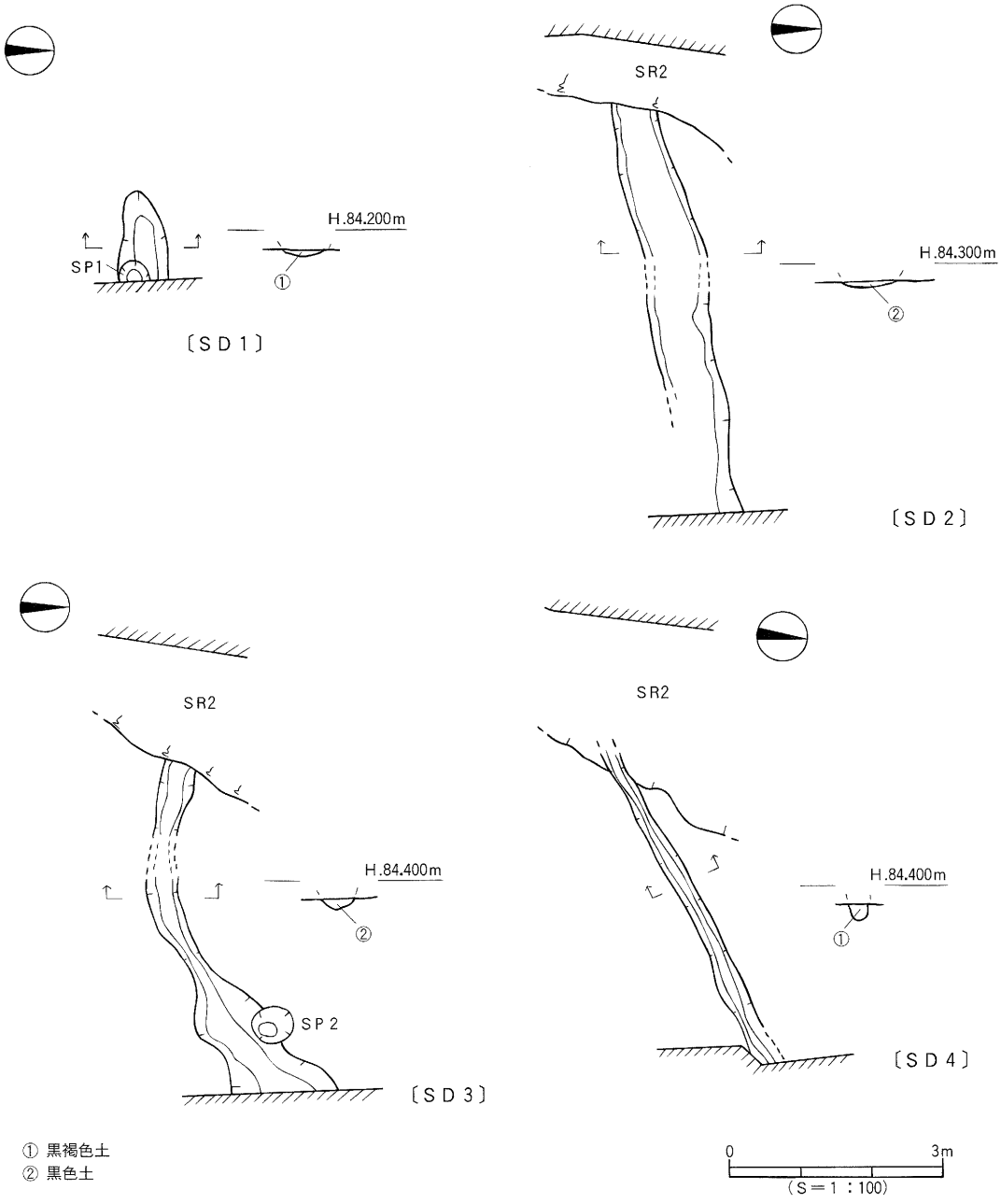
なる。断面形態は浅いレンズ状を呈し、埋土はＳＤ２と同様の黒色土単層である。溝底は東側から西側へわずかに傾斜をなし、比高差５㎝を測る。溝内からの遺物の出土はない。

時期：ＳＲ２より前出することと、埋土がＳＤ２と酷似することなどから、古代以前の溝とする。

ＳＤ４（第144図）

調査区南側、Ａ６～Ｃ６区で検出した東西方向の溝である。第Ⅵ層上面の検出であり、ＳＲ２を切っている。規模は検出長6.20m、幅0.18～0.36m、深さは18㎝～22㎝を測る。直線的な溝で底面は東側から西側へ傾斜をなし、比高差７㎝を測る。断面形態は浅いＵ字状を呈し、埋土は第Ⅳ層と類似した黒褐色土単層である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：ＳＲ２より後出することや埋土から、ＳＤ４は古代以降の溝とする。



第144図　ＳＤ１～４測量図

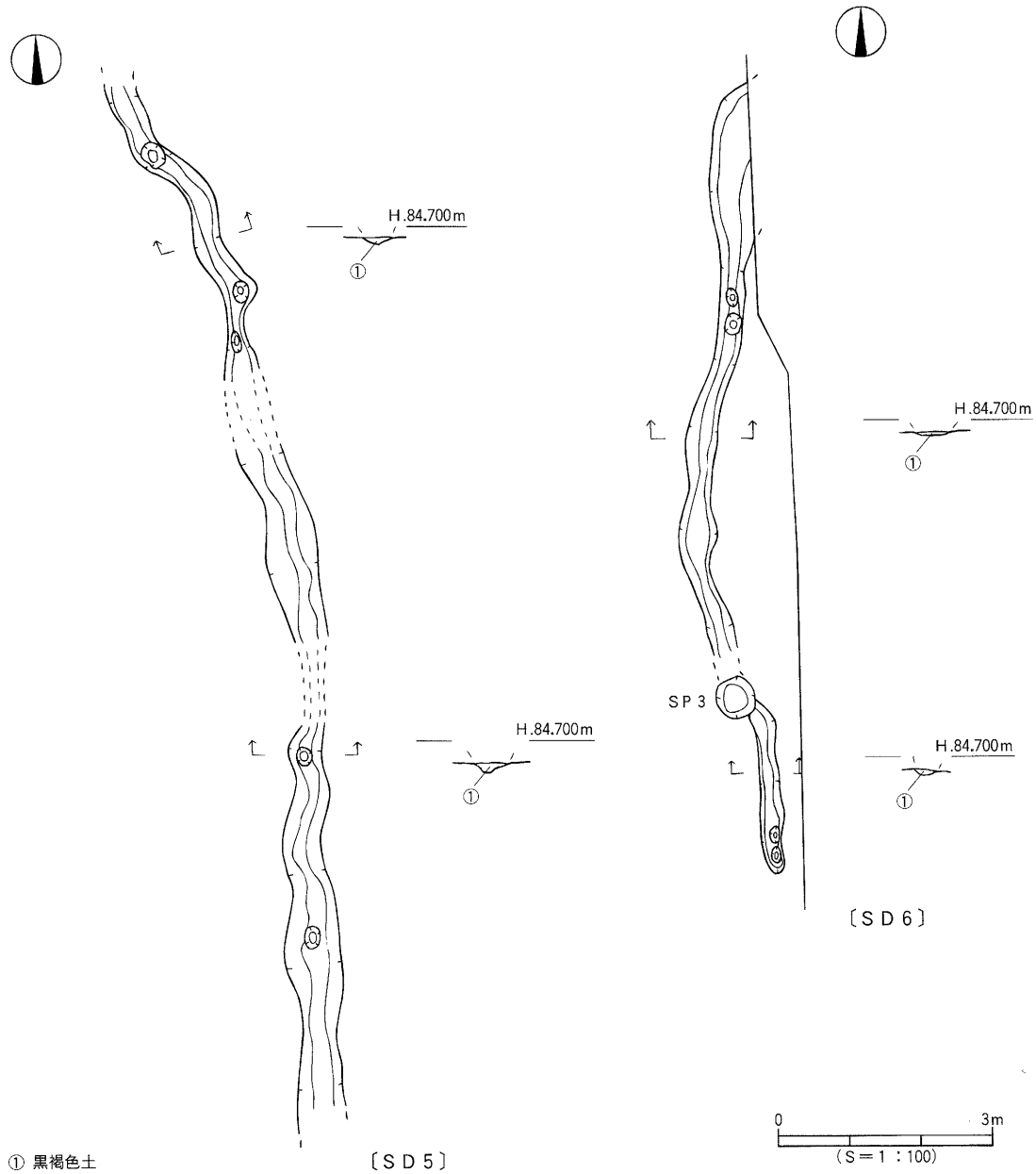
ＳＤ５（第145図）

調査区南側、Ｃ７～Ｃ９区で検出した南北方向の溝である。第Ⅵ層上面での検出であり、溝両端は消失している。規模は検出長12.00m、幅0.20～0.52m、深さ８㎝を測る。断面形態は浅いレンズ状を呈し、埋土は第Ⅳ層と類似した黒褐色土単層である。溝底は凹凸が著しく、径５㎝程度の小ピットが数基ある。小ピットの埋土は溝埋土と同様である。溝内からの出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がＳＤ４と酷似することから、概ね古代以降の溝とする。

ＳＤ６（第145図）

調査区南側、Ｃ８～10区で検出した南北方向の溝である。第Ⅵ層上面の検出であり、溝北端は調査区外に続く。溝南側はＳＰ３に切られている。規模は検出長8.60m、幅0.18m～0.40m、深さは６㎝



第145図　ＳＤ５・６測量図

を測る。断面形態は浅いレンズ状を呈し、埋土は第Ⅳ層と類似した黒褐色土単層である。溝底は凹凸が著しく、径５㎝大の小ピットが数基ある。小ピットの埋土は溝埋土と同様である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土がＳＤ４やＳＤ５と酷似することから、概ね古代以降の溝とする。

ＳＤ７（第146図）

調査区南側、Ｃ９で検出した南北方向の短い溝である。第Ⅵ層上面での検出であり、規模は検出長1.70ｍ、幅0.16～0.34ｍ、深さ８㎝を測る。断面形態は浅いレンズ状を呈し、埋土は第Ⅳ層と酷似した黒褐色土単層である。溝底はほぼ平坦であり、溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、ＳＤ６と同様、埋土がＳＤ４やＳＤ５と酷似することから、古代以降の溝とする。

ＳＤ８（第146図）

調査区南側、Ｃ10・11区で検出した南北方向の溝である。第Ⅵ層上面での検出であり、規模は検出長2.90ｍ、幅0.30～0.50ｍ、深さ８～12㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は第Ⅳ層と類似した黒褐色土単層である。溝底には凹凸がみられ、径７㎝大の小ピットがある。小ピットの埋土は溝埋土と同様である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がＳＤ４やＳＤ５などと酷似することから、古代以降の溝とする。

ＳＤ９（第146図）

調査区南側、Ｂ・Ｃ11区で検出した東西方向の溝である。溝西側はＳＲ２に切られ、溝中央部はＳＤ10と重複するが、前後関係は不明である。規模は検出長2.40ｍ、幅0.22～0.40ｍ、深さ10㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒色土単層である。溝底には凹凸がみられ、径8㎝大の小ピットが数基ある。小ピットの埋土は溝埋土と同様である。溝内からの遺物の出土はない。

時期：切り合いと、埋土がＳＤ２やＳＤ３などと酷似することから、概ね古代以前の溝とする。

ＳＤ10（第146図）

調査区南側、Ｃ11区で検出した短い溝であり、溝北側はＳＤ９と重複する。規模は検出長1.10ｍ、幅0.25～0.40ｍ、深さ10㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は黒色土単層である。溝底には凹凸がみられる。溝内からの遺物の出土はない。

時期：埋土がＳＤ２やＳＤ３などと酷似することから、概ね古代以前の溝とする。

ＳＤ11（第146図）

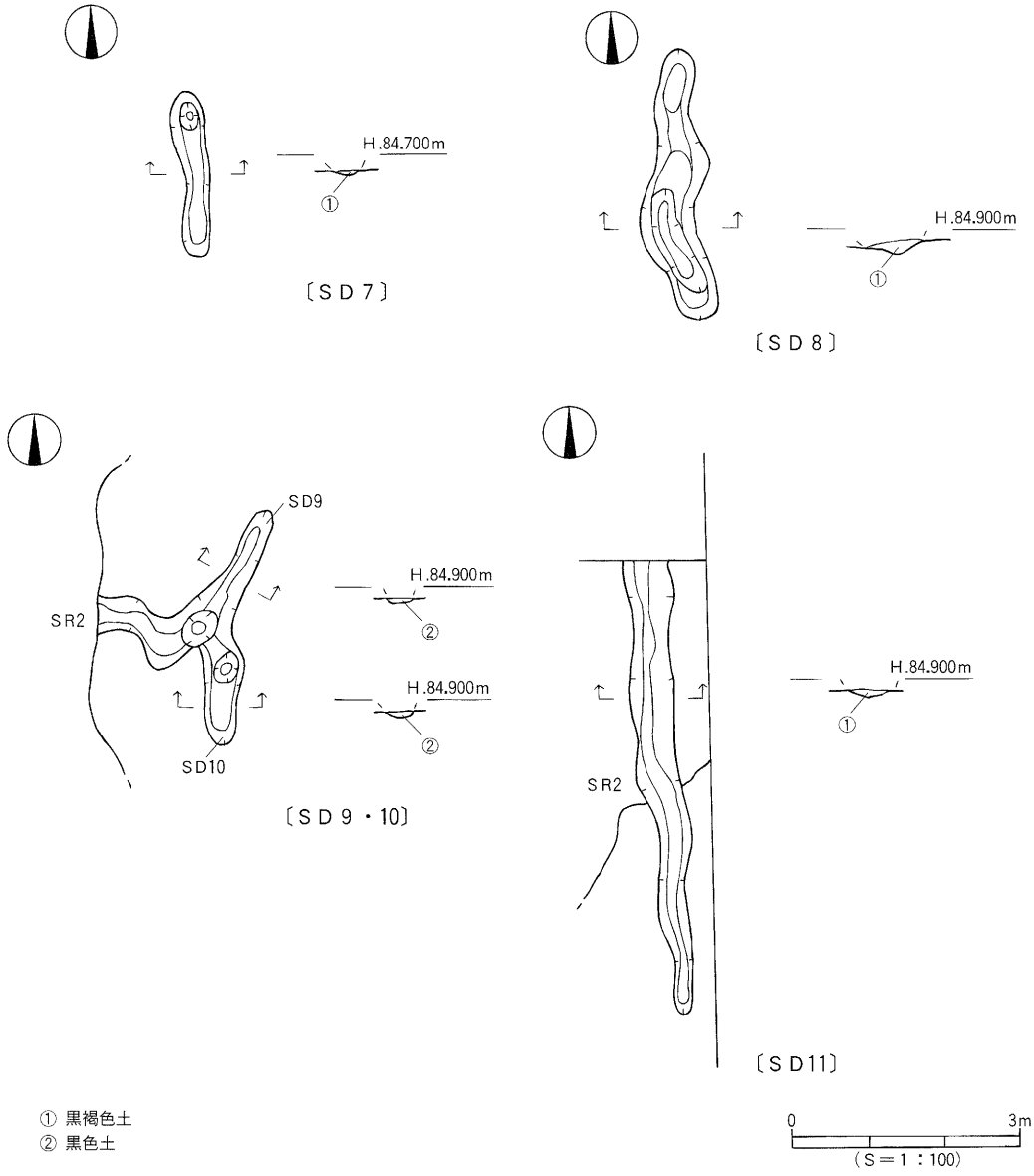
調査区南側、Ｃ11・12区で検出した南北方向の溝である。第Ⅵ層上面での検出であり、溝北側はＳＲ2を切っている。規模は検出長4.90ｍ、幅0.18～0.50ｍ、深さ10㎝を測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は第Ⅳ層と類似した黒褐色土単層である。溝底はわずかに北側から南側に向けて傾斜をなし、比高差５㎝を測る。溝内からの遺物の出土なない。

時期：埋土がＳＤ６やＳＤ７と酷似することから、古代以降の溝とする。

３）土坑

ＳＫ１（第147図）

調査区南側、Ｂ３区のＳＲ１底面付近で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径3.50ｍ、短径1.54ｍ、深さ20㎝を測る。断面形態は緩やかな逆台形状を呈し、埋土は黒色粘質土単層である。土坑内からは、径10～40㎝大の円礫が土坑底面から中位にかけて折り重なって出土した。土坑底面は



第146図　ＳＤ７～11測量図

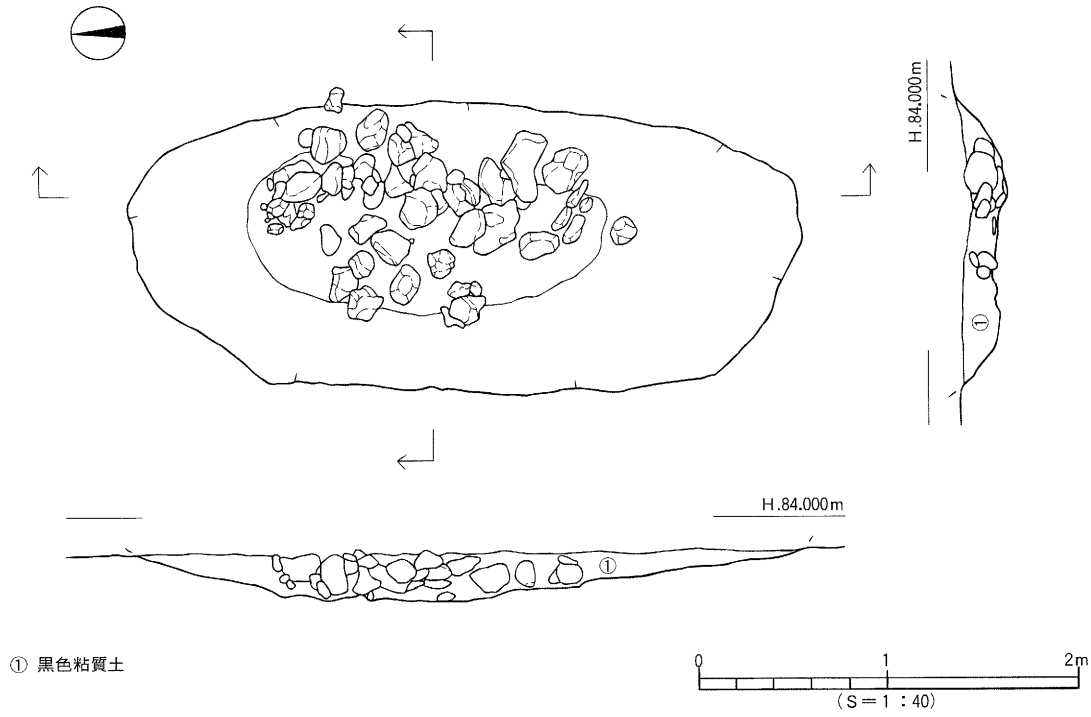
やや起伏があり、中央部付近の底面は部分的に盛りあがっている。土坑内からの土器の出土はない。

時期：時期を特定しうる遺物の出土がなく、時期特定は困難であるが、ＳＲ１底面で検出したことと、ＳＲ１と同様の土で埋没していることから、概ね古代の遺構とする。

ＳＫ２（第148図）

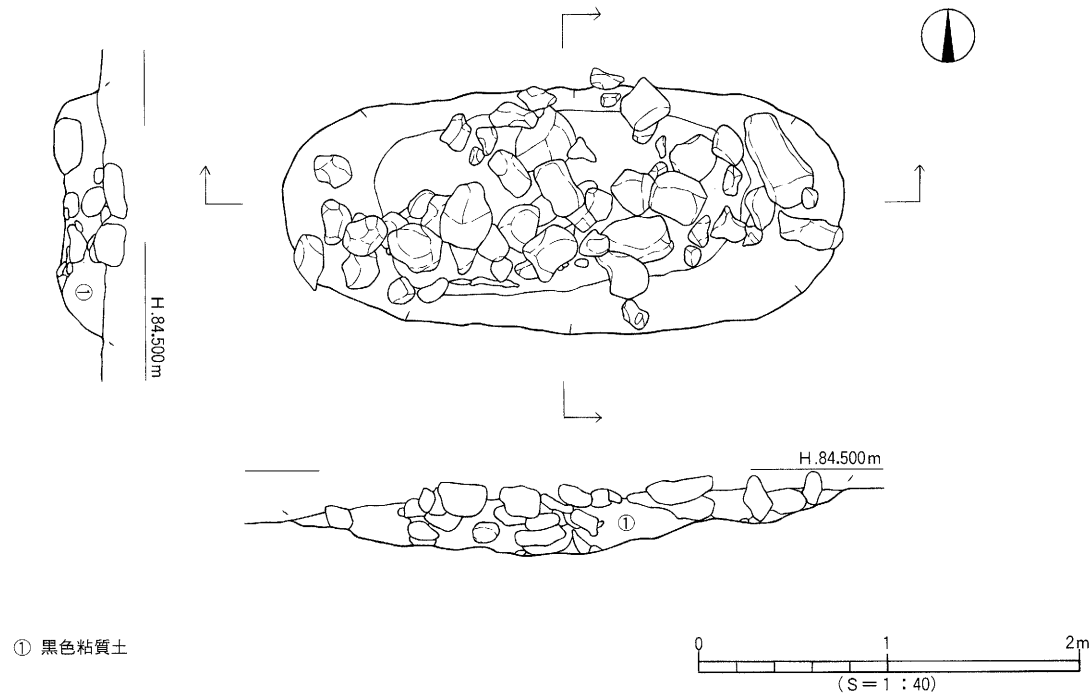
調査区南側、Ｂ７区のＳＲ２底面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2.94m、短径1.30m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、南北壁体は急角度で立ち上がる。埋土はＳＲ２同様の黒色粘質土単層である。土坑内からは、径10～50cm大の円・角礫が底面から上位にかけて折り重なって出土した。土坑底面は起伏に富んでいる。土坑内からの土器の出土はない。

時期：時期を特定しうる遺物がなく時期特定は困難であるが、ＳＫ１と同様、古代の遺構とする。



① 黒色粘質土

第147図　ＳＫ１測量図



① 黒色粘質土

第148図　ＳＫ２測量図

４）その他の遺構と遺物

１区ではピット６期と遺物包含層を検出した。また、出土地点が不明な遺物が数点ある。

①ピット

１区ではピット６基を確認した。ＳＰ１は調査区南側Ｃ５区で検出した。ＳＤ１及びＳＲ１を切っており、規模は検出径40cm、深さ20cmを測る。ピット埋土は褐灰色土単層である。ＳＰ２はＣ６区で検出しており、ＳＤ3を切っている。規模は径60cm、深さ20cmを測る。ピット埋土は褐灰色土単層である。ＳＰ３はＣ９区で検出した。ＳＤ６を切っており、規模は径40cm、深さ30cmを測る。ピット埋土は褐灰色土単層である。ＳＰ４はＢ10区で検出しており、規模は径25cm、深さ15cmを測る。ピット埋土は黒色土単層である。ＳＰ５、ＳＰ６はＣ10区で検出した。ＳＰ５は径40cm、深さ20cm、ＳＰ６は径36cm、深さ25cmを測る。ピット埋土は両者共に黒色土単層である。

②包含層出土遺物

第Ⅴ層出土遺物（第149図）

須恵器（24～28）

24は坏身である。たちあがりは短く内傾し、受部は上方に捻り出されている。７世紀。25は高坏の坏部片である。外面に脚部接合痕とスカシ痕が残る。７世紀。26、27は短頸壺である。26は肩部の張りが強く、底部は平底風となる。７世紀。28は脚付壺の脚部である。脚端部は凹み、内方に肥厚する。７世紀。

灰釉陶器（29）

29は灰釉陶器の皿である。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。胎土は灰白色を呈し、焼成は硬質である。内外面共にヨコナデ調整を施す。９世紀後半。

第Ⅷ層出土遺物（第150図）

30・31は、逆Ｌ字状を呈する折曲口縁の甕形土器である。胴部外面に丁寧なヘラミガキ調整を施す。弥生中期中葉。32～34は壺形土器である。32は口縁部が短く外反し、端部は丸く仕上げる。弥生後期。33は口縁端部は垂下し、口縁部内面に注口状の凸帯を貼付ける。弥生前期末～中期初頭。34は頸部片で、断面三角形状の凸帯を貼付ける。弥生中期中葉。35は甕形土器の胴部片。外面にハケメ調整後、タタキ調整を施す。弥生後期末。36～42は甕形土器、43・44は壺形土器の底部である。37・44は平底、36・43はわずかに上げ底、38～42は上げ底となる。弥生中期中葉～後期。

③地点不明出土遺物（第151図）

弥生土器（45～47）

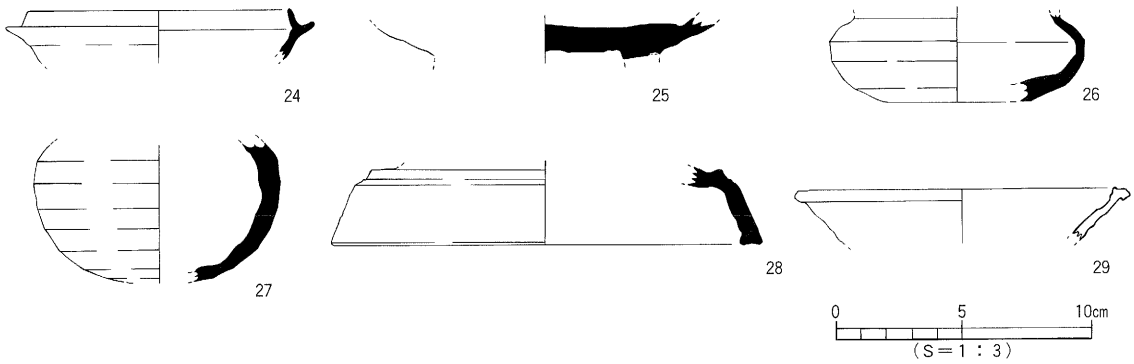
45は壺形土器の頸部片である。頸部と肩部の境界付近に、削り出しによる凸帯を１条施す。弥生中期中葉。46は甕形土器、47は壺形土器の底部である。弥生後期。

土師器（48）

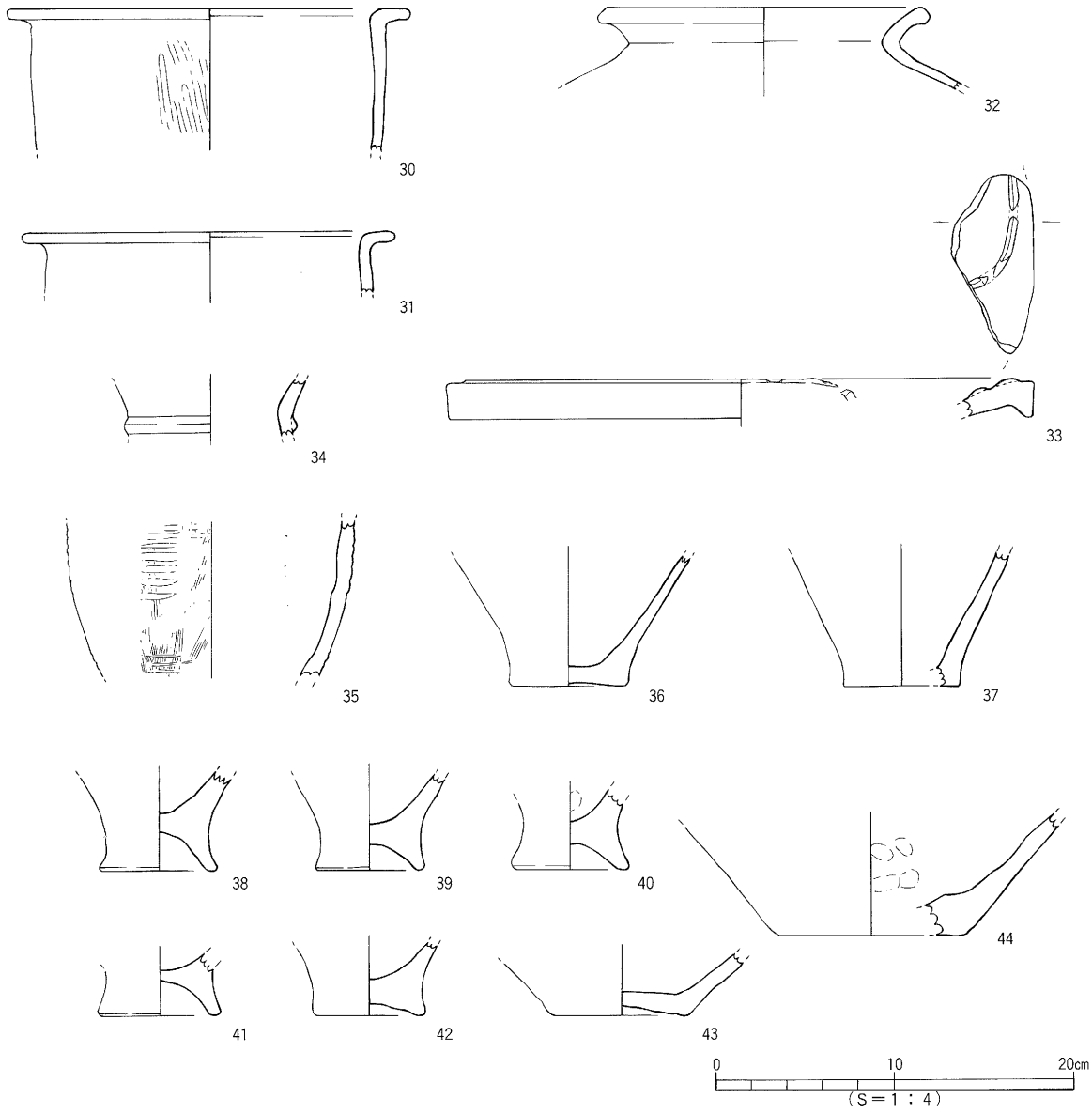
48は坏である。体部は内湾気味に立ち上がり、成形時の粘土紐巻き上げ痕を顕著に残す。底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。９～10世紀。

石　器（49～54）

49はほぼ完形の扁平片刃石斧である。平面形態は刃部側がやや幅広の長方形となる。断面形態は楕円形状を呈し、縞は不明瞭である。全面に丁寧な研磨を施す。層界岩製。50は緑色片岩製の扁平片刃石斧である。刃部の一部と基部を欠損する。断面形態は長方形を呈するものと考えられ、縞は明瞭で

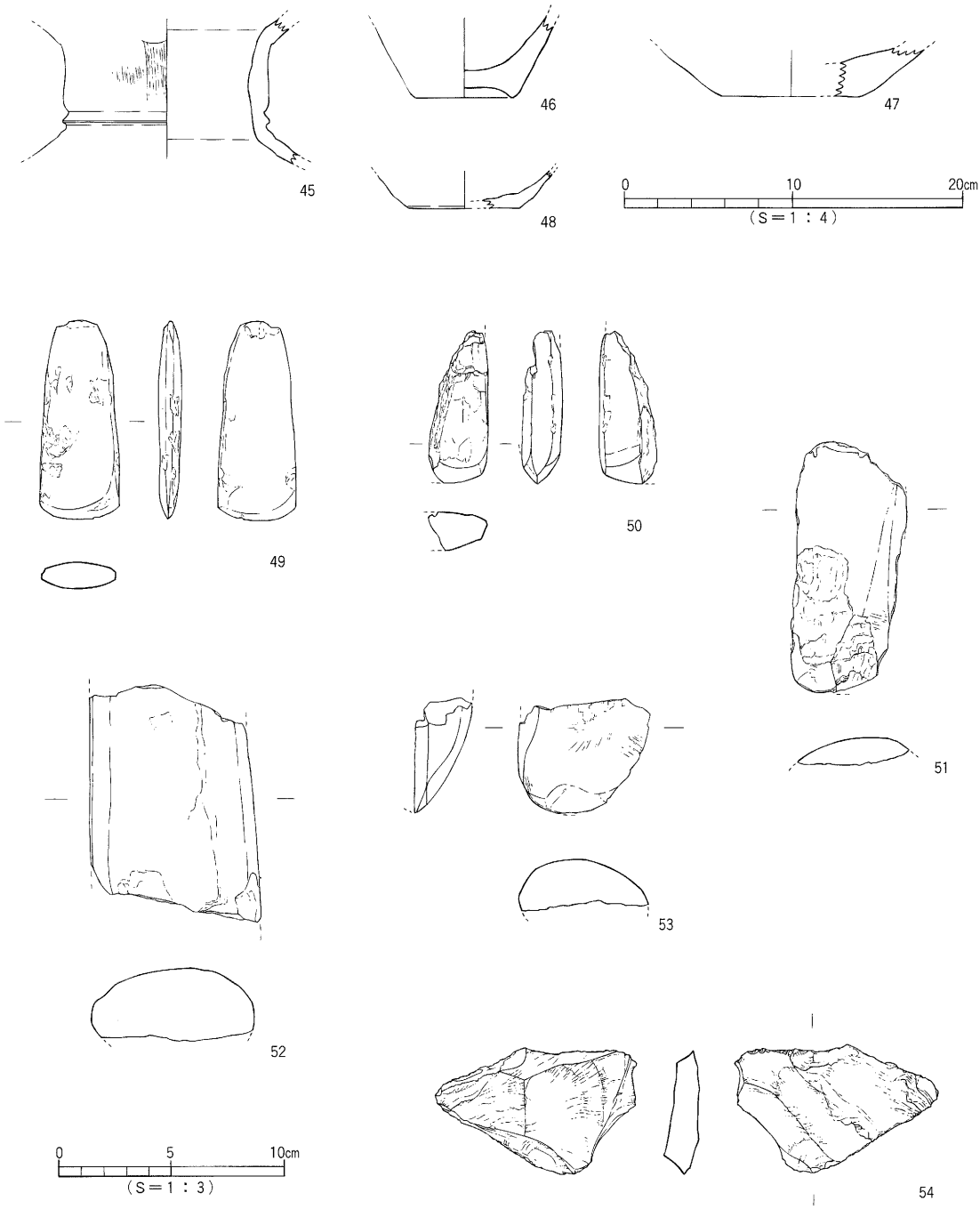


第149図　第Ⅳ層出土遺物実測図



第150図　第Ⅷ層出土遺物実測図

ある。51～53は緑色片岩製の伐採斧である。すべて破損品で断面形態は楕円形を呈する。51は敲打痕を残す。52・53は全面に研磨を施す。54は安山岩製のスクレイパーである。厚みのある剥岩を素材とし、刃部を両面調整により作出する。使用により刃部に細かい刃こぼれ状の使用痕が認められる。



第151図　地点不明出土遺物実測図

〔２〕２区の調査

（１）調査の経緯（第152～154図）

２区は、調査地中央部にのびる丘陵尾根部と東側斜面部である。調査以前は、尾根部が雑木林で斜面部は果樹園である。標高は、135～145mを測る。2000（平成12）年４月26日から業者により尾根上の山林の伐採を開始し、５月８日から作業員を増員して草刈りと伐採した木の整理を行う。５月17日に調査区へ通じる山道の整備と草刈りを行い、５月23日から５月25日の間、調査区の下草刈りを行う。５月30日から６月30日の間、調査区南部から表土の除去を行う。10月26日から試掘調査の結果をもとに、調査区を設定し調査を開始する。10月27日から石室の東側にトレンチを掘削し、盛土の確認を行うと同時に石室周辺の表土剥ぎを行う。2001（平成13）年１月10日から石室の主軸に沿って十字トレンチを設定し、石室内部の状況を確認した。その結果、天井石は失われ石室内部には流入土とともに石室の石材が落ち込んでいることが判明した。１月11日から１月19日の間、石室内部の流入土を取り除きながら落ち込んだ石材の取り上げを行う。なお、石室内部の床面付近の土を篩いにかけて遺物の確認に努めた。１月23日に床面にて敷石と須恵器短頸壺の蓋が出土し、羨道部を検出した。１月31日に遺物出土状況と調査区全景の写真撮影後、床面の測量を行う。１月17日に石室から放射線状にトレンチを設定し、盛土と周溝の確認を行った。２月６日から２月20日の間、ベルトを設定し、上層から掘り下げを行い、周溝の検出を行う。２月21日、周溝を検出し、検出状況の写真撮影を行う。２月22日から周溝の掘り下げと、石室床面にトレンチを設定し、岩盤までの土層を確認した。２月26日に周溝の完掘状況の写真撮影を行う。３月２日から３月５日の間、石室の周辺を掘り下げて墓壙の検出を行う。３月７日から墓壙の掘り下げを行い、裏込め土の土層線引きを行う。調査事務所で石室内部の土ふるいを行い、耳環１点が出土した。３月23日から５月11日の間、石室の展開図や土層図などの測量作業と写真撮影を行う。５月15日から石室内や周辺の精査を行い、５月18日に完掘状況の写真撮影を行う。５月21日に調査事務所内の整理と発掘用具の点検や洗浄を行う。５月22日から５月24日の間、埋蔵文化財センターに発掘用具、測量図面、出土遺物を運搬する。５月28日にリース備品を撤去、５月29日に調査事務所を撤去し、５月31日に調査を終了する。

（２）遺構と遺物

２区の調査では、古墳１基と土坑１基を検出した。古墳は字名より平井谷２号墳とした。

１）平井谷２号墳（第155～157図、図版62～64）

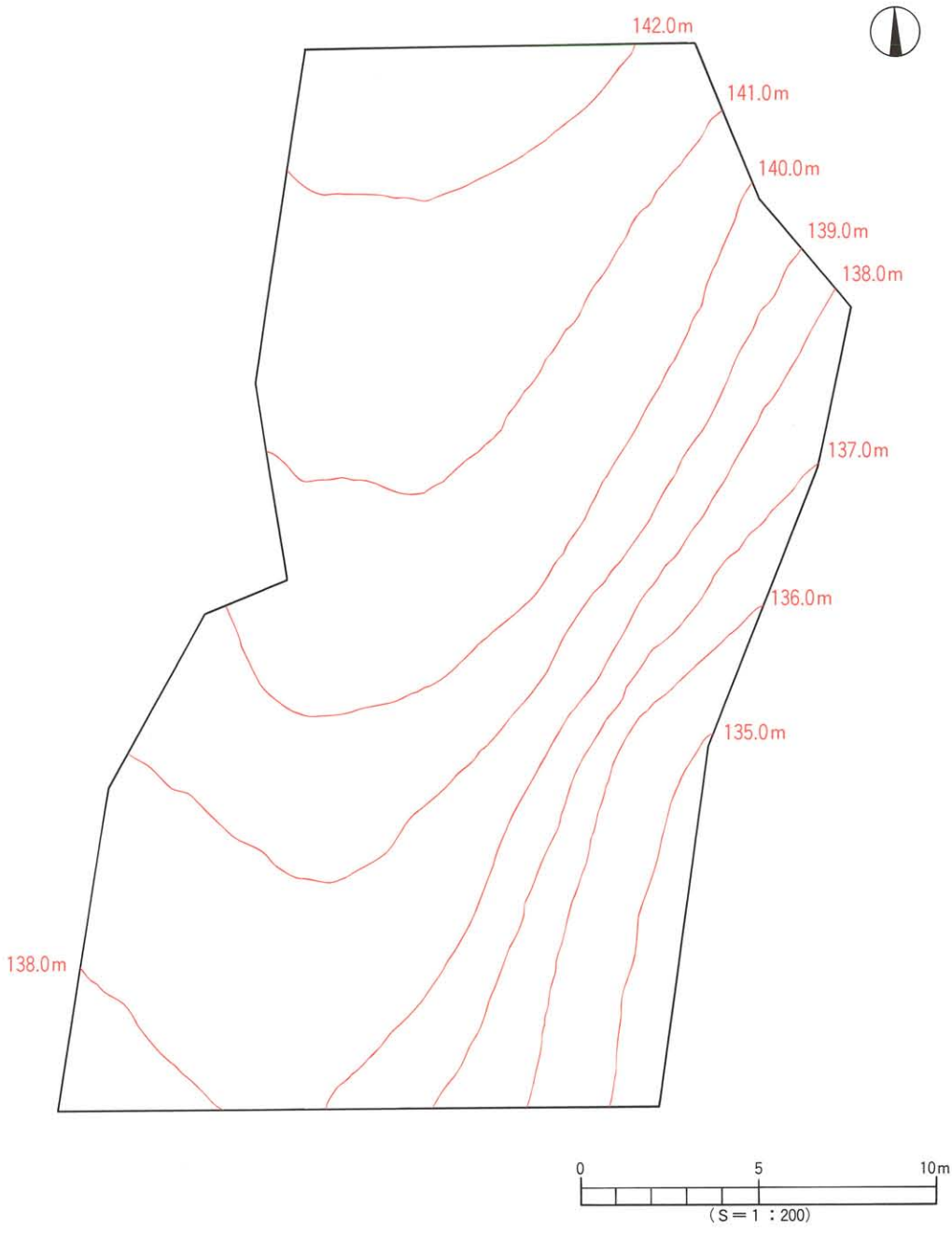
①墳丘

調査区東側の丘陵斜面部で検出した。墳形は周溝及び盛土の残存状況より方形を呈するものと考えられ、規模は検出最大長16mを測る。墳丘からは石室と周溝を検出した。

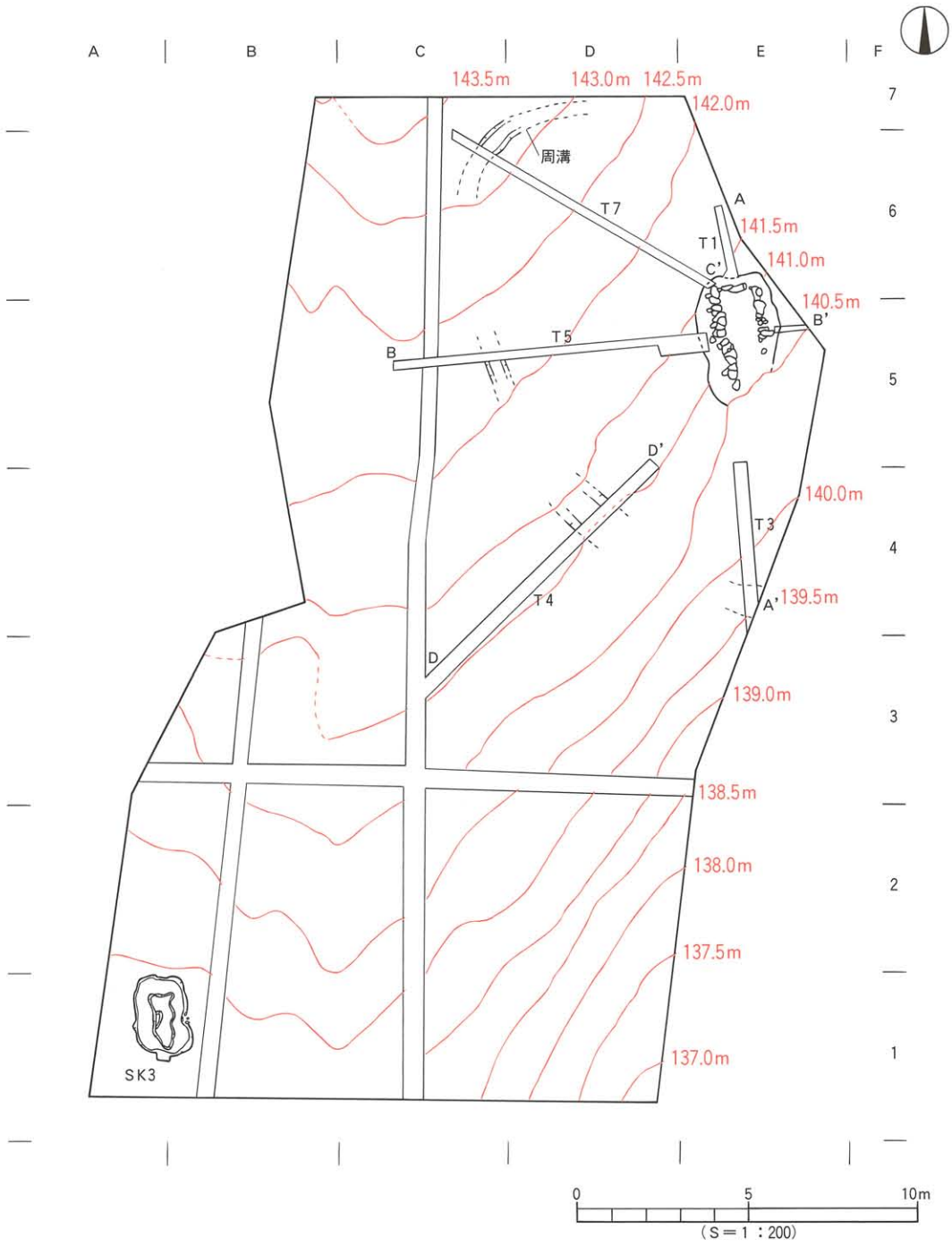
墳丘構築は地山をＬ字状にカットし平坦面を作り、その後、墓壙を掘り石室を作りながら裏込めの土（明黄褐色土、黄褐色土）を入れる。さらに、石室に向け灰黄褐色土、褐灰色土を用いて盛土をおこなっている。なお、墳丘の盛土は石室西半部で残存している。

②周溝

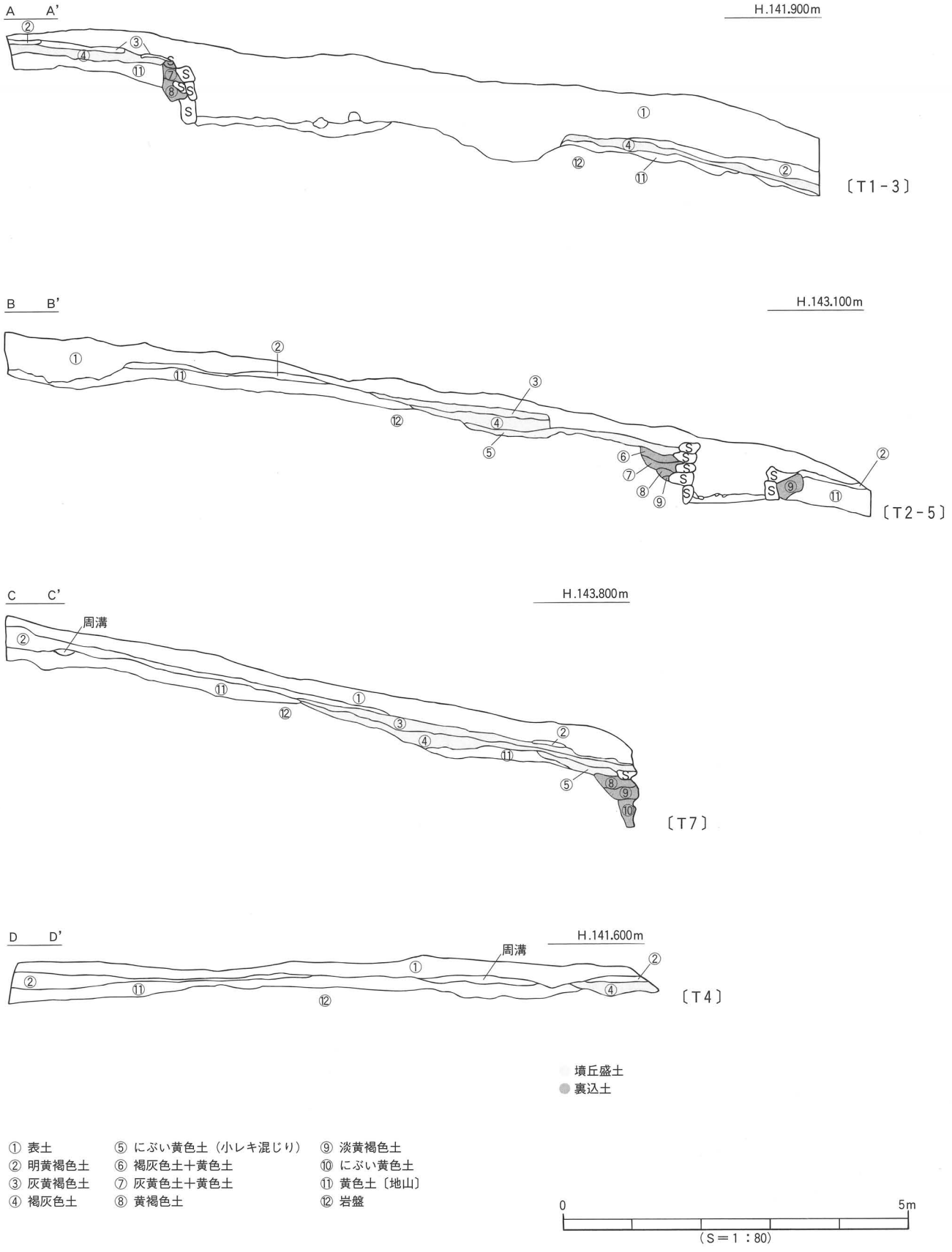
周溝は墳丘北西部と西部及びトレンチの土層観察にて検出した。検出最大長16.0m、幅0.6～1.4m、深さ12～16cmを測る。断面形態は浅いレンズ状を呈し、周溝埋土は灰色土に黄色土が混入するものである。周溝上面は第Ⅱ層が覆っており、構築時期は不明である。周溝内からの遺物の出土はない。



第152図　2区調査前地形測量図



第153図　２区遺構配置図・調査後地形測量図

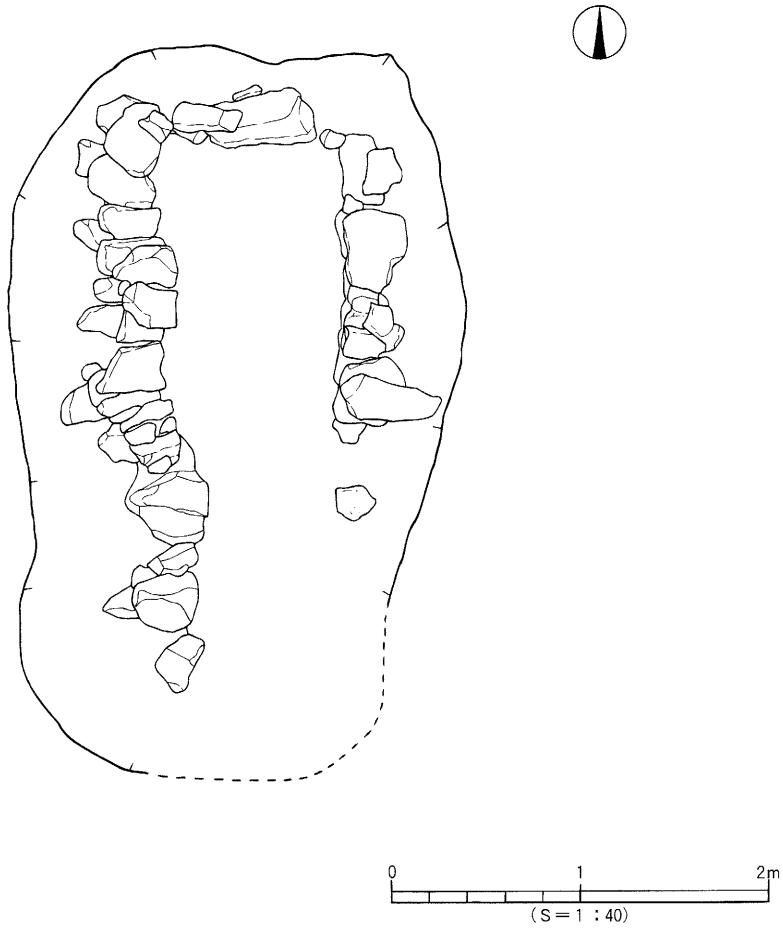


第154図　平井谷２号墳　土層図

③主体部

主体部は、主軸をＮ－15°－Ｗにとり、南側の谷部に向かって開口する有袖式の横穴式石室である。石室内は天井部を失っており、側壁の崩落や流入土によって埋没しているが、床面や遺物は良好な状態で検出した。石室の規模は長さ3.0m、幅2.0mを測る。石室は右側壁が３段、左側壁が４～７段、奥壁が３～４段残存している。奥壁は大振りの石を積み上げているが、左側壁の奥壁側は、腰石に大振の石が、玄門側には小振の石を使用し、２段目より上は小振りの石を積み上げている。石室を構成する石材は、すべて花崗岩の割石が使用されている。石室床面は貼り床が施され、貼り床上面には径３～10cm大の円礫が敷き詰められている。

羨道は右側壁側と羨門側は削平されているが、左側壁と框石を検出した。羨道の規模は、検出長0.9mを測る。羨道構築は、玄室と同様、地山を削り、床面に框石を設置した後、貼り床が施され、壁体は玄門側で４段の残存である。腰石は10～30cmの石を横置きに使用している。玄室とは異なり、羨門側には小振りの石を腰石に使用しており、２段目からは比較的小型の石を積み上げている。框石下部は貼り床内に埋まっている。



第155図　平井谷２号墳　石室平面図

遺物は須恵器２点と耳環１点が出土した。須恵器は玄室中央部と奥壁側の敷石上面にて出土したものであるが、耳環は石室内の流入土のふるいにより発見したものである。

石室出土遺物（第158図）

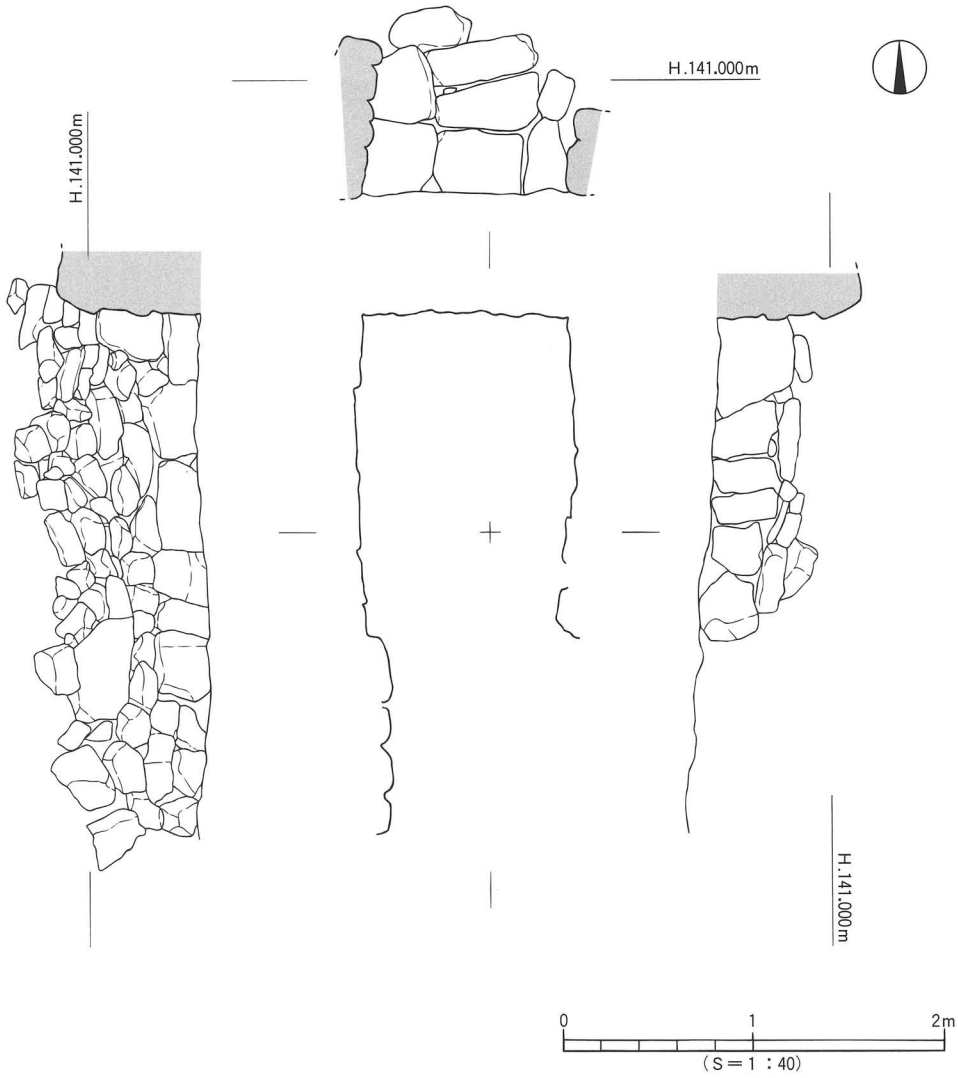
須恵器（55・56）

55は完形の須恵器坏蓋である。天井部と口縁部と分ける稜は不明瞭であり、口縁端部は丸く仕上げる。天井部外面に、粘土板から切り離す際の回転ヘラキリ痕を顕著に残す。56はほぼ完形の短頸壺の蓋である。天井部と口縁部との境界はわずかに稜をもち、口縁端部は短く外反する。天井部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。

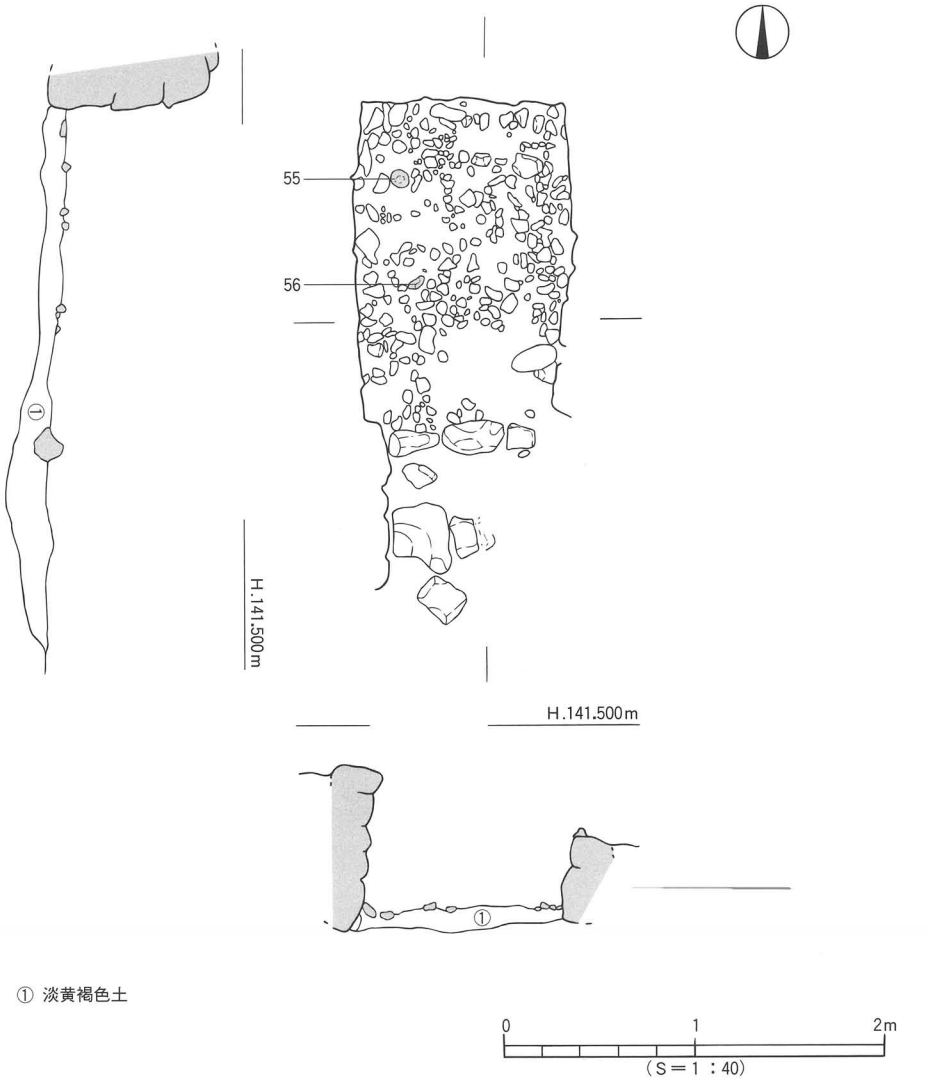
金属製品（57）

57は金色を呈する中実の耳環である。部分的に表面層が欠損している。縦径2.0㎝、横径2.2㎝、芯径0.4㎝、重量6.96ｇを測る。金銅製。

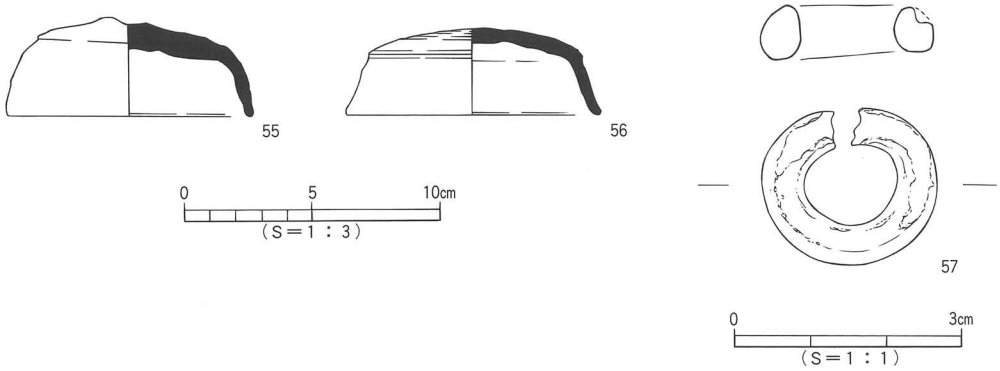
時期：出土遺物の特徴より、本古墳の造営時期は６世紀後半～７世紀前半とする。



第156図　平井谷２号墳　石室展開図



第157図　平井谷２号墳　石室測量図



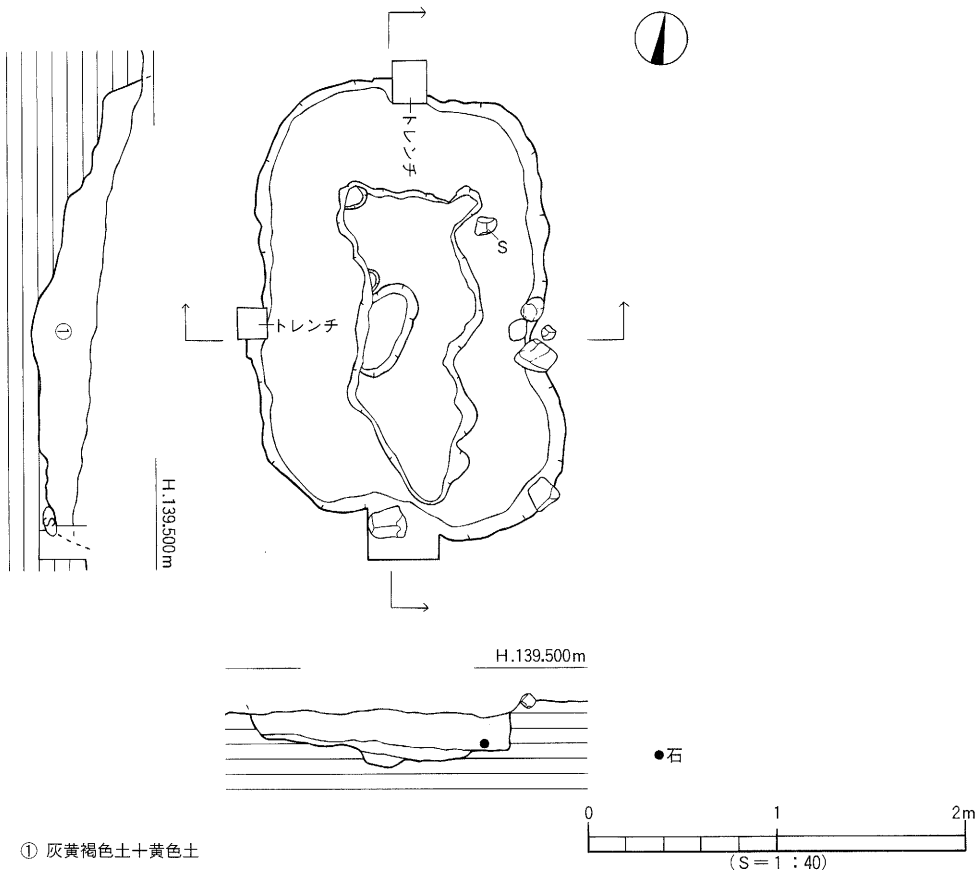
第158図　平井谷２号墳　石室出土遺物実測図

2）土坑

ＳＫ３（第159図）

調査区西部、Ａ１～Ｂ２区で検出した。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径2.34m、短径1.50m、深さは検出面下35cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、東側壁体は垂直気味に立ち上がる。土坑埋土は灰黄褐色土に黄色土が斑点状に混入する。土坑底面にて長さ1.70m、幅0.67～0.75m、深さ５cm程度の掘り込みを検出した。さらに土坑中央部には径20～50cm大の楕円形状のピットを検出した。掘り込みとピット埋土は土坑埋土と同様である。遺物は、土坑底面に径10cmと径20cm大の角礫を１点ずつ、さらに土坑上位からは径20cm大の角礫が出土した。また、土坑埋土中より須恵器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

時期：明確な時期特定は困難であるが出土した須恵器の特徴より、ＳＫ３は概ね古墳時代以降の遺構とする。

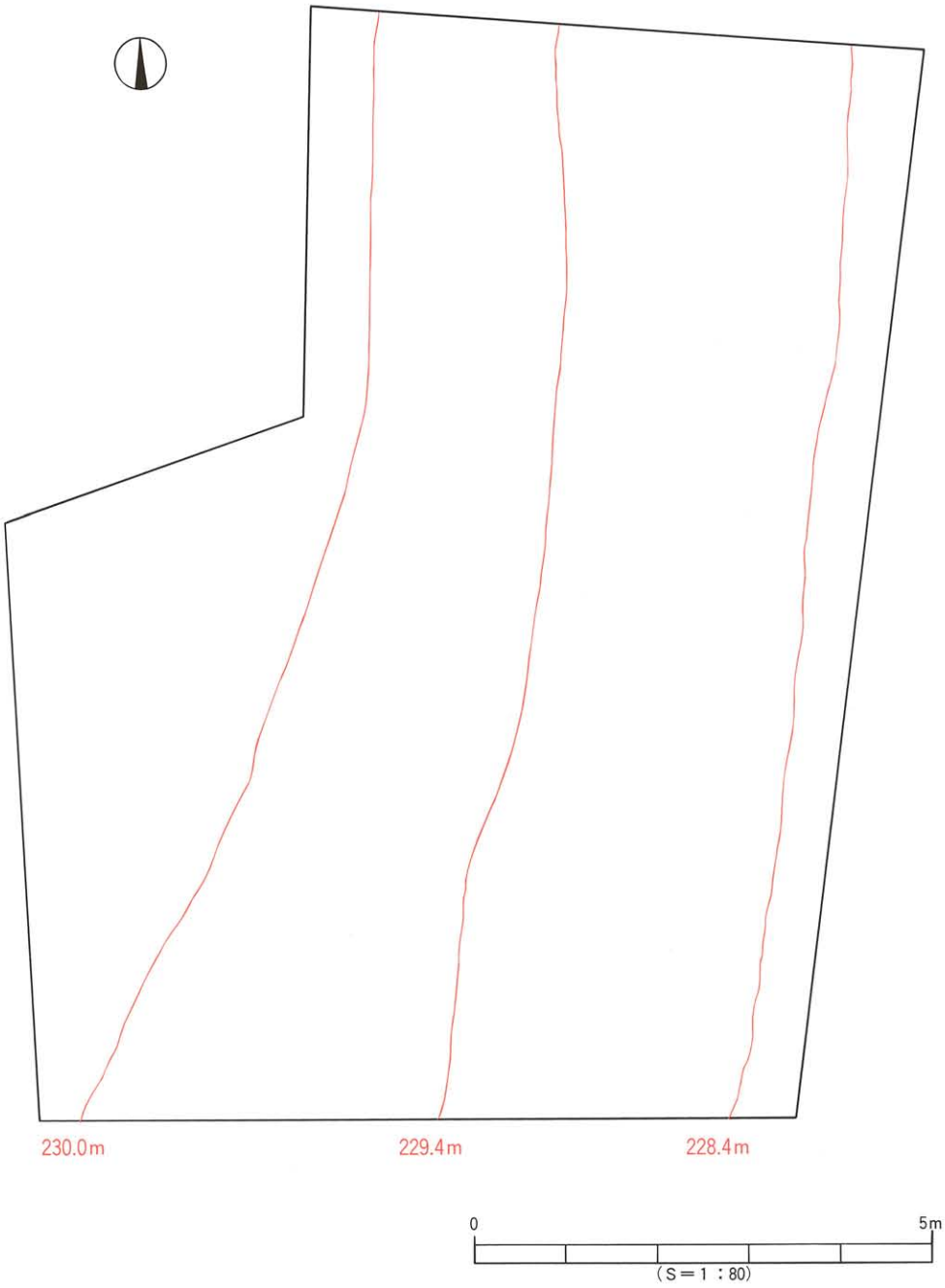


第159図　ＳＫ３測量図

〔３〕３区の調査

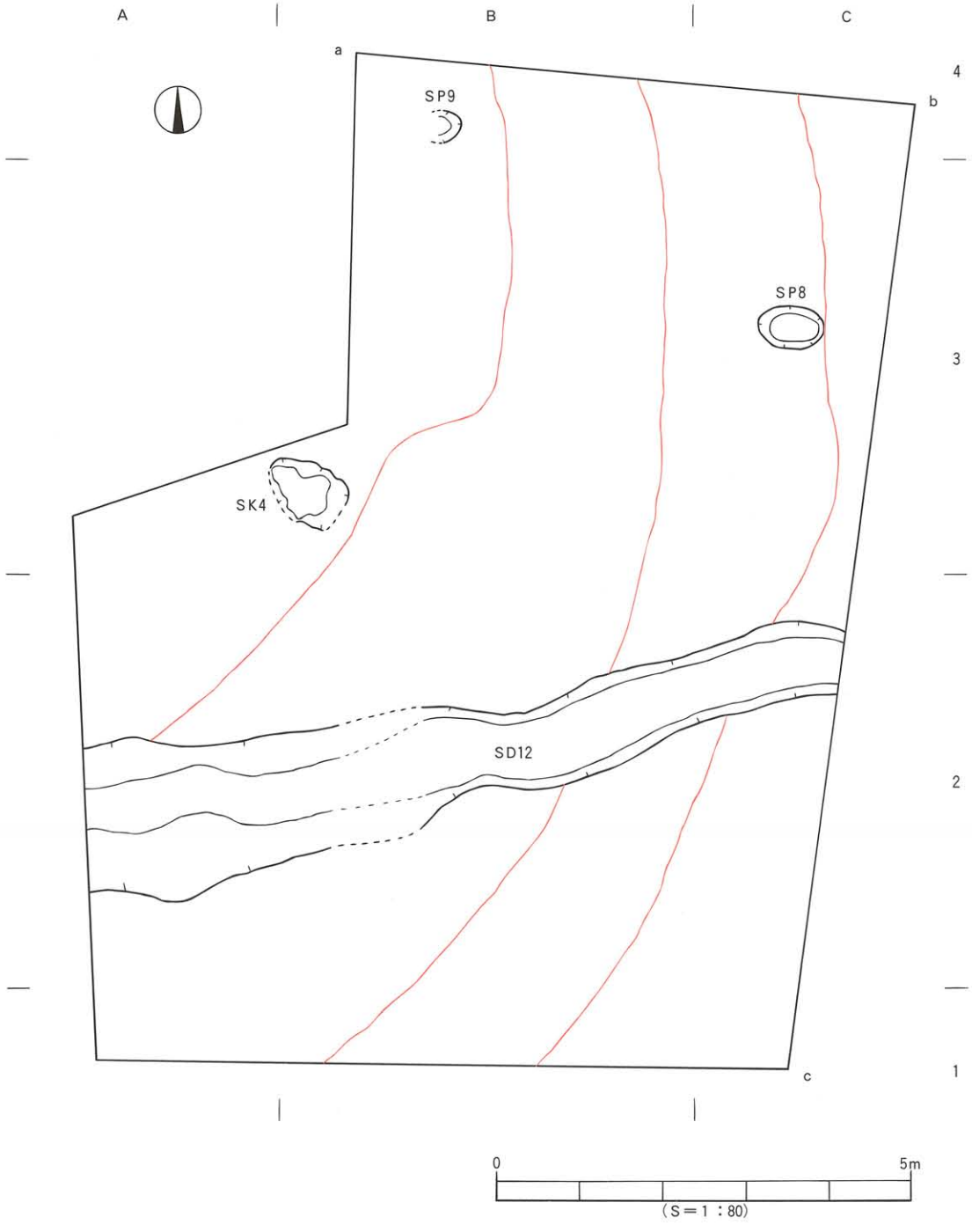
（１）調査の経緯（第160・161図）

３区は、調査地北側に突き出た丘陵部尾根部と東側斜面部の標高221～229mに立地する。調査前の状況は山林である。10月25日から調査区の境界を確認しながら道作りと草刈りを行う。2001（平成12）年11月７日から山林の伐採と草刈りを行う。11月15日、テントを設営し、調査で使用する発掘用具を運搬する。12月４日から試掘調査の結果をもとに調査区を設定し、人力にて掘削する。12月11日から



第160図　３区調査前地形測量図

遺構検出を行う。12月15日から各遺構の図面測量と写真撮影を行う。12月21日に完掘状況の写真撮影を行う。12月25日からテントと発掘用具を事務所に運搬する。2002（平成13）年１月５日から調査区の土層図や測量した図面の補足を行い、１月９日に３区の調査を終了する。



第161図　３区遺構配置図・調査後地形測量図

（２）層位（第162図）

３区の基本層位は第Ⅰ層表土、第Ⅱ層表土、第Ⅱ層黄色土、第Ⅲ層岩盤である。第Ⅰ層は層厚30～60cmを測る。第Ⅱ層は調査区北側にのみ堆積しており、層厚30cmを測る。

遺構は第Ⅱ層及び第Ⅲ層上面での検出であり、溝１条、土坑１基、ピット２基を確認した。なお、調査にあたり、調査区内を５m四方のグリットに分けた。グリット名は西から東へA・B・C、南から北へ1・2・3・4とした。

（３）遺構と遺物

１）溝

ＳＤ12（第161図）

調査区南側、Ａ２～Ｃ２区で検出した東西方向の溝である。第Ⅲ層上面での検出であり、規模は検出長9.36m、幅0.80～2.00m、深さは最深部で検出面下30cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は灰色土に黄色土が混入する。溝底はわずかに東から西へ向けて傾斜をなし、比高差６cmを測る。溝内からは、径20cm大の円礫が数点出土した。

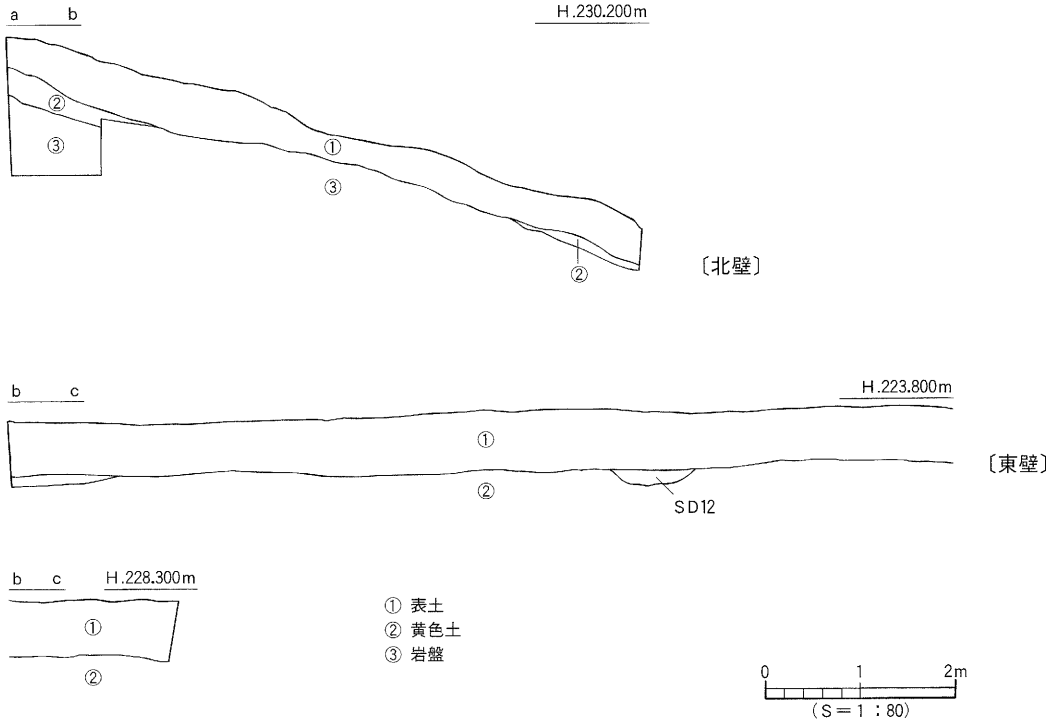
時期：時期特定に有効な遺物の出土がなく、溝の時期は不明である。

２）土坑

ＳＫ４（第163図）

調査区中央部西寄り、Ｂ３区で検出した。第Ⅱ層上面での検出である。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.06m、短径0.68m、深さは検出面下30cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は茶褐色土単層である。土坑底面は中央部にやや高まりがある。遺物は、埋土上位から20×50cmの範囲に厚さ５～10cmの焼土が出土した。また、埋土中にて土師器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

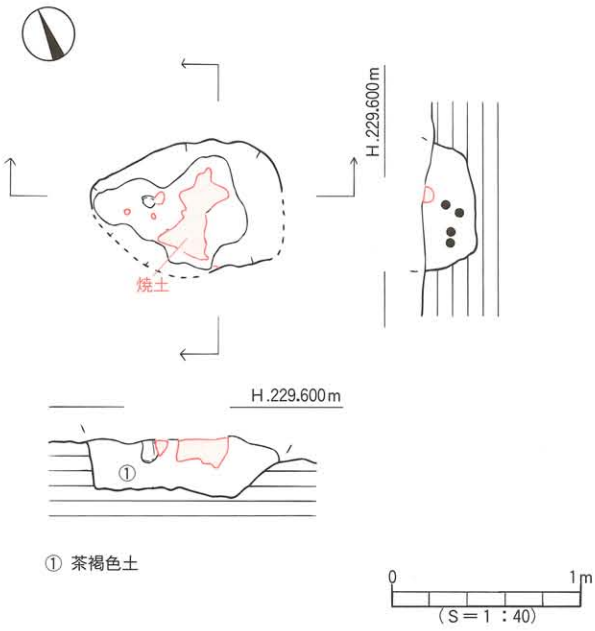
時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、土師器の特徴より、古墳時代以降の遺構とする。



第162図　３区土層図

3）ピット

3区の調査では、ピット2基を確認した。両者ともに、第Ⅱ層黄色土上面での検出である。ＳＰ８は調査区北東部、Ｃ３区で検出した。平面形態は楕円形を呈し規模は長径0.80m、短径0.50m、深さ20cmを測る。断面形態は逆台形を呈し、埋土は茶褐色土単層である。ピット内からの遺物の出土はない。ＳＰ９は調査区北側Ｂ４区で検出した。ピット西半部は消失している。平面形態は楕円形を呈するものと考えられ、規模は検出径30cm深さ10cmを測る。断面形態は浅い逆台形状を呈し、埋土はＳＰ８と同様、茶褐色土単層である。ピット内からの遺物の出土はない。



第163図　ＳＫ４測量図

4．小　結

本調査では、自然流路や溝のほか、古墳1基を確認することができた。調査地南側の低位部では、主に古代に時期比定される自然流路や溝を検出した。流路は丘陵部から低部位に向けて流れるものや、直交したり蛇行する流路が多く、出土遺物から概ね8世紀代に埋没したものと考えられる。流路内にて2箇所に集石がみられたが、その性格は不明である。また、溝は東西、南北方向のものがあり、一部は流路埋没以降に堀削されたものがある。溝底面には小ピットや凹凸がみられることから、水稲耕作に伴う鋤跡の可能性がある。

一方、丘陵部では古墳1基を検出した。尾根線上よりやや下がった緩斜面上に構築されており、形状は方墳と推測される。主体部は有袖式の横穴式石室で、南側の谷部にむけて開口している。同丘陵上には、本墳の南側100mの地点に平井谷1号墳が確認されている。1号墳は出土遺物より6世紀後半から7世紀前半に時期比定されており、本墳の時期とほぼ合致する。なお、試掘調査の際に、本墳の北側に展開する丘陵斜面部のトレンチ内から石室に使用されたと考えられる石材を確認しており、同丘陵上には該期の古墳が点在しているものと推測される。

このほか、調査地南側の低位丘陵斜面部からは、試掘調査の際に弥生時代中期に時期比定される土器片が数点出土している。明確な遺構は未検出であるが、調査地外の丘陵尾根部付近には、弥生時代中期集落が存在している可能性も高い。

表100　自然流路一覧

流路(SR)	地　区	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	1区 A4～C2	逆台形状	8.40×2.0～4.5×0.40～0.70	黒色粘質土 ＋灰色粗砂	石	古代以降	SD1、SP1に切られる
2	1区 A4～A20	すり鉢状	52.50×3.0～3.5×0.30～0.50	黒色粘質土	須恵・土師	8世紀	SD2、SD3、SD9を切り SD4、SD11に切られる
3	1区 A20～B22	U字状	5.20×7.70×0.70＋α	黒色粘質土		古代以降	
4	1区 C23～B43	U字状	100.00×3.0～8.0×0.60	黒色粘質土	石	8世紀以降	

表101　溝一覧

溝(SD)	地　区	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	1区 C5	レンズ状	3.00×1.00×0.10	黒褐色土		古代以降	SR1を切り、SP1に切られる
2	1区 A5～C5	レンズ状	7.20×0.68～0.92×0.06	黒色土		古代以前	SR1に切られる
3	1区 A6～C6	レンズ状	6.80×0.38～1.00×0.17	黒色土		古代以前	SR2、SP2に切られる
4	1区 A6～C6	U字状	6.20×0.18～0.36×0.18～0.22	黒褐色土		古代以降	SR2を切る
5	1区 C7～C9	レンズ状	12.00×0.20～0.52×0.08	黒褐色土		古代以降	
6	1区 C8～10	レンズ状	8.60×0.18～0.40×0.06	黒褐色土		古代以降	SP3に切られる
7	1区 C9	レンズ状	1.70×0.16～0.34×0.08	黒褐色土		古代以降	
8	1区 C10・11	レンズ状	2.90×0.30～0.50×0.08～0.12	黒褐色土		古代以降	
9	1区 B・C11	レンズ状	2.40×0.22～0.40×0.10	黒色土		古代以前	SR2に切られ、SD10と重複
10	1区 C11	レンズ状	1.10×0.25～0.40×0.10	黒色土		古代以前	SD9と重複
11	1区 C11・12	レンズ状	4.90×0.18～0.50×0.10	黒褐色土		古代以降	SR2を切る
12	3区 A2～C2	レンズ状	9.36×0.80～2.00×0.30	灰色土＋黄色土		不　明	

表102　土坑一覧

土坑(SK)	地　区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	B3	楕円形	逆台形状	3.50×1.54×0.20	黒色粘質土	礫	古　代	1　区
2	B7	楕円形	逆台形状	2.94×1.30×0.20	黒色粘質土	礫	古　代	1　区
3	A1～B2	楕円形	逆台形状	2.34×1.50×0.35	灰黄褐色土 ＋黄色土	須恵器・石	古墳時代以降	2　区
4	B3	楕円形	逆台形状	1.06×0.68×0.30	茶褐色土	土師器・焼土	古墳時代以降	3　区

遺物一覧

（1）以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。
遺物観察表は宮内が作成した。

（2）遺物観察表の名掲載について。

法　量　欄　　（　）：復元推定値

形態・施文欄　　土器の各部位名称を略記。

例）口→口縁部、胴→胴部、肩→肩部、体→体部
底→底部、天→天井部

胎土・焼成欄　　胎土欄では混和剤を略記した。

例）砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1～4）→「1～4㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄に略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表103　試掘トレンチ出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	甕	口径(26.8) 残高1.6	逆L字状口縁。口縁端部は丸くおさめる。	マメツ	マメツ	乳褐色 乳黄褐色	石・長(1~3) ◎	T 4	
2	甕	口径(20.4) 残高2.0	逆L字状口縁。口縁端部はわずかに上方に肥厚する。口縁部内面に明瞭な稜をもつ。凸帯剥離。	マメツ	マメツ	乳白色 乳灰白色	石・長(1~3) ◎	T14	
3	甕	口径(21.7) 残高3.9	逆L字状口縁。口縁部は折り曲げ、口縁端部は「コ」字状に丸く仕上げる。	ハ　ケ	ミガキ	乳白黄色 乳白黄色	石・長(1~4) 金 ◎	T14	
4	甕	口径(21.4) 残高3.3	くの字状口縁。口縁中位に不明瞭な稜をもつ。口頸部内面に稜をもつ。	マメツ	マメツ	乳橙色 乳橙色	石・長(1~4) 金 ◎	T 4	
5	壺	口径(15.5) 残高1.5	外反口縁。口縁端部は上下方に肥厚する。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳黄色 乳黄白色	石・長(1~4) ◎	T16	
6	壺	口径(19.6) 残高1.9	外反口縁。口縁端部は下方に肥厚する。	マメツ	マメツ	乳橙色 乳黄色	石・長(1~4) ◎	T14	
7	壺	口径(7.6) 残高6.7	長頸壺の口頸部。口縁端部は平坦面をもつ。	マメツ	マメツ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~2) 金 ◎	T 4	
8	壺	残高5.0	頸部に貼付凸帯1条と刺突列点文が巡る。	ミガキ	マメツ	乳黄色 灰褐色	石・長(1~2) 金 ◎	T16	
9	甕	底径6.2 残高3.1	上げ底。	マメツ	ナ　デ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~5) ◎	T 4	
10	甕	底径(5.6) 残高4.1	上げ底。底部は一部剥離。	マメツ	マメツ	乳　色 乳褐色	石・長(1~3) 金 ◎	T19	
11	甕	底径(7.4) 残高3.4	くびれの上げ底。	ナ　デ	マメツ	褐　色 褐　色	石・長(1~4) ◎	T16 黒斑	
12	壺	底径(8.6) 残高4.1	やや上げ底の底部。	マメツ	ナ　デ	乳褐色 乳橙褐色	石・長(1~3) 金 ◎	T14	
13	壺	底径(11.6) 残高3.1	平底の底部。内面に指頭痕あり。	マメツ	ナ　デ	乳褐色 黒褐色	石・長(1~7) ◎	T 4	

表104　試掘トレンチ出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
14	扁平片刃石斧		結晶片岩	(5.10)	(5.40)	0.60	32.68	T14	
15	柱状片刃石斧	ほぼ完存	緑色片岩	(8.70)	1.15	1.30	20.45	T 4	66
16	代採斧	1／2	緑色片岩	(10.45)	(5.80)	(1.40)	151.00	T 4	66
17	砥　石	1／2	砂岩	(14.60)	(3.50)	2.90	160.25	T14	66
18	スクレイパー	ほぼ完存	赤色頁岩	2.40	2.20	0.50	3.18	T 4	

表105　ＳＲ２出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
19	甕	口径(21.0) 残高6.2	外反する口縁部。口縁端部はやや肥厚し、端部内面に稜をもつ。	㊐回転ナデ ㊒平行叩き	㊐回転ナデ ㊒円弧叩き	灰　色 暗灰色	密(石1) ◎	1区 中層	66
20	甕	口径(19.8) 残高10.9	直立気味に立ち上がる口頸部。口縁端部は内傾し面をもつ。頸部に沈線2条あり。	㊐回転ナデ ㊒平行叩き→カキメ	㊐回転ナデ ㊒円弧叩き	暗褐色 暗灰褐色	密 ◎	1区 P1 自然釉	66
21	甕	口径(17.2) 残高3.8	直立する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。頸部に沈線2条あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	1区 上層P3	
22	坏	口径(11.6) 底径(7.2) 残高3.0	体部は内湾し、口縁端部は尖り気味に仕上げる。底部の切離方法は不明。	㊐ヨコナデ ㊎　マメツ	マメツ	乳白色 乳白色	密 ◎	1区 中層	
23	坏	底径6.6 残高3.0	平底。体部は成形時の粘土紐巻上痕が顕著に残る。底部の切離しは回転ヘラ切り技法による。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐色 淡褐色	密 ◎	2区 中層P13	

表106　１区第Ⅴ層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
24	坏身	たちあがり径(11.0) 受部径(12.1) 残高1.9	たちあがりは短く内傾し、端部は尖る。受部は短く上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
25	高坏	残高1.6	高坏の坏部。外面に脚部との粘土接合痕と透かしが残る。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
26	壺	底径(5.8) 残高3.4	短頸壺の胴底部。肩部の張りは強く、稜をもつ。	㊍回転ナデ ㊎回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 灰　色	密 ◎		66
27	壺	残高5.4	扁球形の体部。	㊍回転ナデ ㊎回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰　色 灰　色	密 ◎		
28	壺	底径(16.8) 残高3.0	脚付壺の脚部。脚端部は内方に肥厚し、脚端面は凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰　色 灰　色	密 ◎		
29	皿	口径(11.0) 残高2.1	灰釉陶器。口縁端部は折曲げにより肥厚する。口縁部内面はナデにより凹む。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		66

表107　1区第Ⅷ層出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
30	甕	口径(22.1) 残高7.0	逆L字状口縁。折曲による成形。	㊀ヨコナデ ㊁ ミガキ	㊀ヨコナデ ㊁ マメツ	乳白色 乳橙白色	微砂粒 金 ◎		
31	甕	口径(20.0) 残高3.4	逆L字状口縁。折曲による成形。小片。	㊀ヨコナデ ㊁ ミガキ	ヨコナデ	乳白色 乳橙白色	石・長(1~3) ◎		
32	壺	口径(17.7) 残高4.6	短く外反する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	マメツ	乳白色 乳灰色	石・長(1~4) ◎		
33	壺	口径(32.4) 残高2.2	口縁部は下方へ垂下し、口縁部内面に凸帯を貼り付ける。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳灰色	石・長(1~4) ◎		67
34	壺	残高3.0	頸部に丸みのある断面三角形状の凸帯を貼り付ける。	ナ　デ	ナ　デ	乳灰色 乳灰色	石・長(1~2) ◎		
35	甕	残高8.7	胴部片。外面にタタキ調整が顕著に残る。	ハケ→タタキ	ナ　デ	乳灰色 乳白色	石・長(1~2) ◎		67
36	甕	底径6.3 残高7.3	やや上げ底の底部。底部外面に煤が付着。	ミガキ	マメツ	乳灰色 乳灰色	石・長(1~4) ◎		
37	甕	底径(6.4) 残高7.3	平底の底部。小片。	マメツ	マメツ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) ◎	黒斑	
38	甕	底径(6.3) 残高5.6	くびれをもつ上げ底の底部。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳白色	石・長(1~3) ◎		
39	甕	底径5.8 残高5.4	上げ底の底部。	ヨコナデ	ナ　デ	乳橙色 乳橙色	石・長(1~4) ◎		
40	甕	底径6.2 残高4.6	くびれをもつ上げ底の底部。	ヨコナデ	ナ　デ	乳橙色 乳橙色	石・長(1~3) ◎		
41	甕	底径6.4 残高3.5	上げ底の底部。	ヨコナデ	ナ　デ	乳褐色 乳灰褐色	石・長(1~4) ◎		
42	甕	底径6.0 残高4.1	上げ底の底部。	ナ　デ	ナ　デ	乳白色 乳白色	石・長(1~4) ◎		
43	壺	底径7.5 残高3.5	上げ底の底部。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~4) ◎	黒斑	
44	壺	底径(10.3) 残高6.9	平底の底部。小片。	マメツ	ナ　デ	乳灰色 暗灰色	石・長(1~5) ◎		

表108　1区地点不明出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
45	壺	残高8.8	頸部は直立し、削り出しによる凸帯が1条巡る。	ハケ(5本／cm) →ヨコナデ	ミガキ	黒褐色 乳白色	石・長(1~3) ◎		
46	甕	底径(5.6) 残高4.8	上げ底の底部。	マメツ	マメツ	乳橙色 乳黄白色	石・長(1~3) 金 ◎		
47	壺	底径(8.0) 残高2.9	厚みのある平底の底部。小片。	マメツ	マメツ	黒褐色 黒褐色	石・長(1~3) ◎		
48	坏	底径(6.4) 残高2.2	土師器坏の底部。底部の切離しは回転ヘラ切リ技法による。	ヨコナデ	マメツ	乳白色 乳白色	石・長(1) ◎		

表109　１区地点不明出土遺物観察表（石製品）

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
49	扁平片刃石斧	ほぼ完存	層界岩	8.90	3.45	1.30	56.54		67
50	扁平片刃石斧	2／3	緑色片岩	(6.80)	(2.60)	(1.70)	40.85		67
51	伐採斧	約1／3	緑色片岩	(11.10)	(4.90)	(1.20)	101.65		67
52	伐採斧	約1／2	緑色片岩	(10.50)	7.50	(3.20)	425.00		67
53	伐採斧	刃部1／2	緑色片岩	(4.80)	(5.70)	(2.30)	81.18		67
54	スクレイパー	完　存	安山岩	8.80	5.40	1.60	67.93		67

表110　平井谷２号墳出土遺物観察表（土製品）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外面	内面				
55	坏蓋	口径9.6 器高3.9	丸みのある天井部。天井部からなだらかに下がり、口縁端部は丸く仕上げる。天井部外面に回転ヘラ切り痕が残る。完形。	回転ナデ	㋐　ナ　デ ㋑ 回転ナデ	青灰色 灰　色	密 ◎		67
56	蓋	口径10.0 器高3.5	短頸壺の蓋。扁平な天井部。天井部と口縁部の境界は稜をなし、口縁端部は丸く仕上げる。	㋐回転ヘラケズリ ㋑回転ナデ	回転ナデ	赤褐色 赤褐色	密 ◎		67

表111　平井谷２号墳出土遺物観察表（金属製品）

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
57	耳　環	完　形	銅	2.20	2.00	0.70	6.96		

第５章　自然科学分析

―平井谷２号墳出土耳環の分析―

（財）元興寺文化財研究所

１．分析内容

平井谷２号墳から出土した耳環について、ケイ光Ｘ分析（ＸＲＦ）による表面からの非破壊分析と電子顕微鏡、金属顕微鏡による写真撮影及び微視的観察を行った。

２．使用機器及び測定条件

①エネルギー分散型ケイ光Ｘ線分析装置（以下、ＸＲＦと略す）

〔セイコーインスツルメンツ（株）製ＳＥＡ5230〕

・試料の微少領域にＸ線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光Ｘ線を検出することにより元素を同定する。

②走査型電子顕微鏡（以下、ＳＥＭと略す）

〔(株）日立製作所　Ｓ－3500Ｎ〕

③エネルギー分散型Ｘ線分析装置（以下、ＥＤＸと略す）

〔(株）堀場製作所　ＥＸ－200〕

④実体顕微鏡　〔オリンパス光学工業（株）ＳＺＨ－ＩＬＬＤ〕

⑤マイクロスコープ　〔(株）キーエンス　ＶＨ700Ｓ〕

３．分析結果及び考察

ＸＲＦ及びＥＤＸによる分析箇所を、第166図に示した。また、ＸＲＦスペクトルは、第164・165図のとおりである。

ＸＲＦによる分析の結果、耳環表面の金色部分①から検出した元素は、金（Ａｕ）、銀（Ａｇ）、銅（Ｃｕ）であった（第164図）。また、銅芯部分②からは主として銅を検出した（第165図）。この他に金、鉛（Ｐｂ）、銀、アンチモン（Ｓｂ）を検出したが、金については表面層からの影響を受けている可能性がある。鉛、アンチモンについては銅に含まれるものと判断できる。また、銀については、微量であるが銅に含まれることもあるため表面層、銅芯の両方に可能性を考慮する必要がある。

次に、マイクロスコープによる観察について述べる。耳環内側面に蛇行しているが一条の線が認められた（第167図）。これは、表面層を構成する金板を重ね合わせた際に生じたものであり、板貼技法で製作される耳環によくみられる痕跡である。

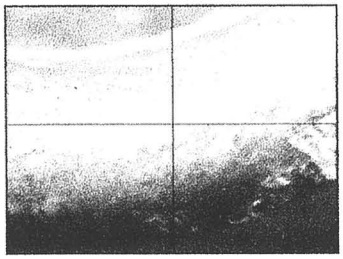
次に、ＳＥＭ及びＥＤＸによる観察結果を述べる。表面金色部分を40倍と1000倍で撮影したところ、微細な擦り傷と穴がみられた。しかし、金アマルガムによる鍍金でみられるような粒子及び研磨痕はみられなかった（第168図）。第169図は、ＥＤＸによる各元素の分布状態を表しているが、特記すべき知見は得られなかった。

以上の結果により、平井谷２号墳出土の耳環は銅製の芯に金の薄板をまいて製作された（銅芯金板貼）と推定できる。

［測定条件］

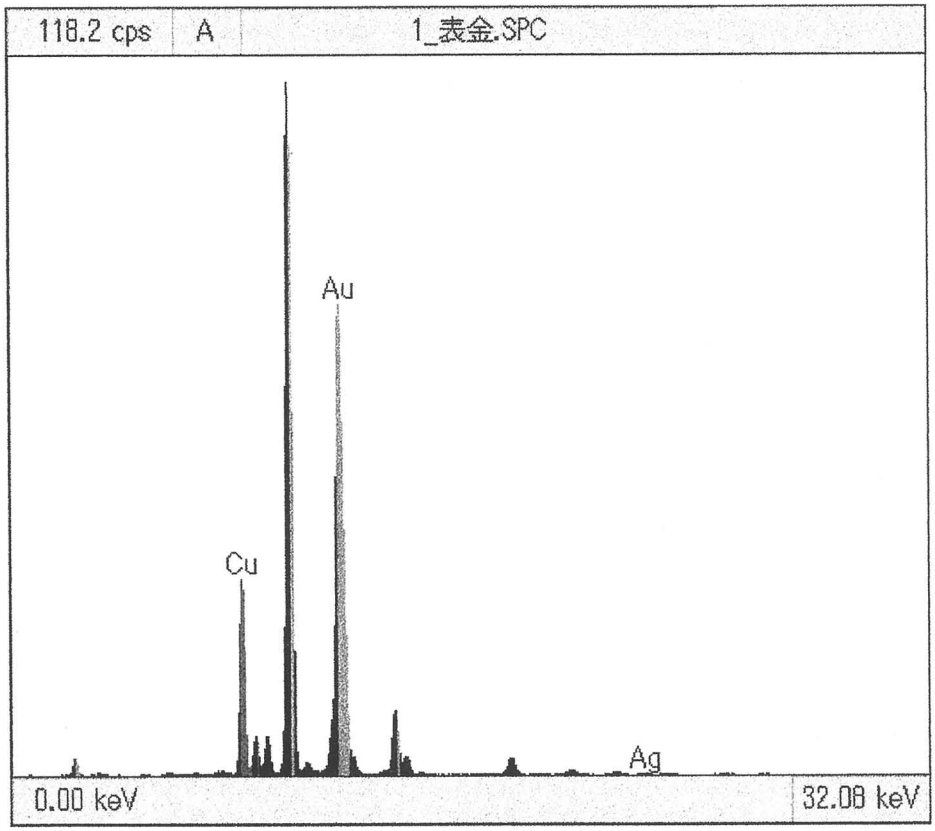
測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	180
有効時間（秒）	130
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8 mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	16
コメント	2001-0700（財）松山市 五楽遺跡３次調査平井谷２号墳 No. 1 耳環　表面金色

［試料像］



視野: [X,Y] 6.25, 4.67 (mm)

［スペクトル］

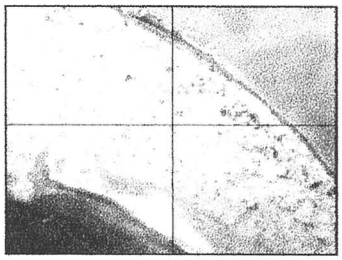


第164図　表面金色部分のＸＲＦスペクトル

［測定条件］

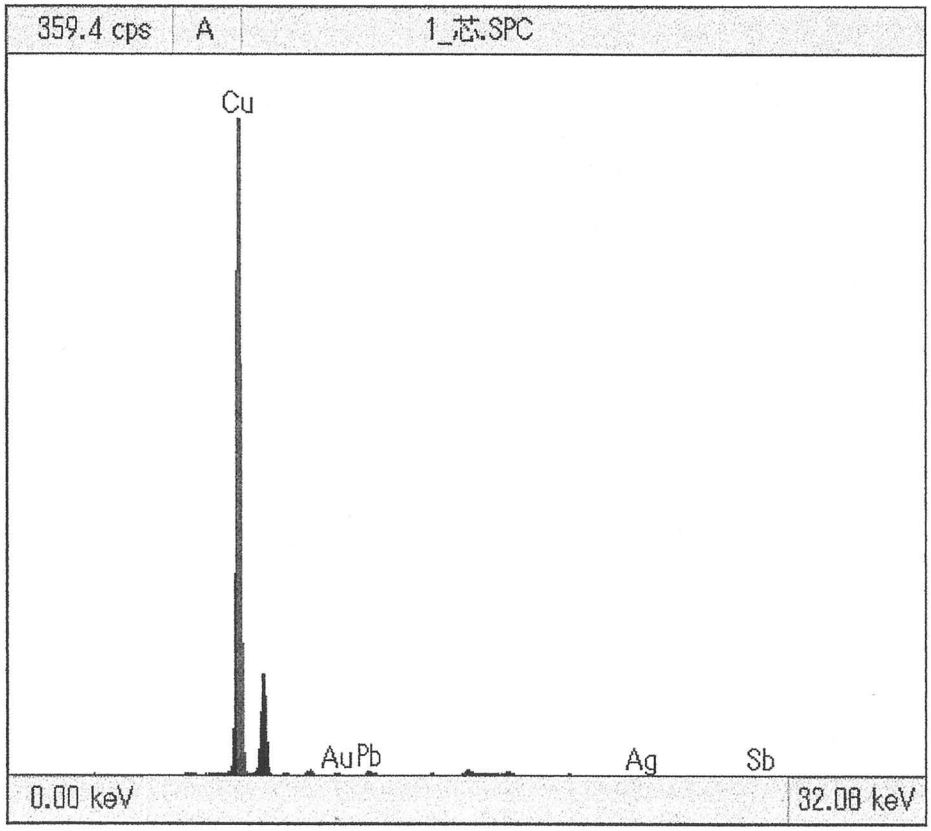
測定装置	SEA5230
測定時間（秒）	180
有効時間（秒）	124
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8 mm
励起電圧（kV）	45
管電流（μA）	12
コメント	2001-0700（財）松山市 五楽遺跡３次調査平井谷２号墳 No. 1　耳環　芯部

［試料像］

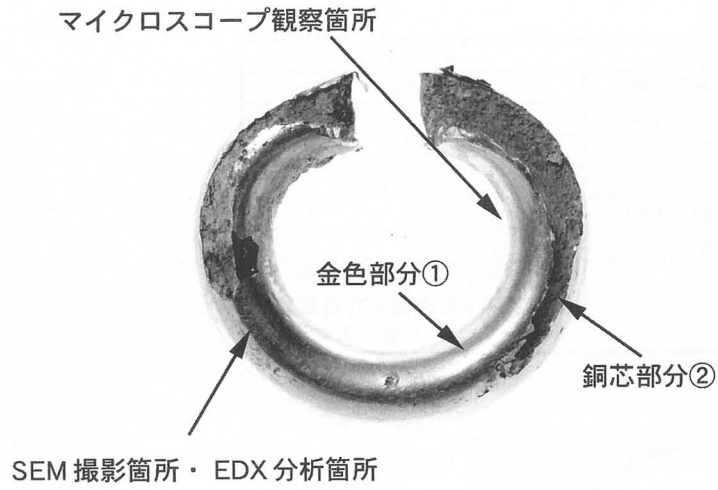


視野: [X,Y] 6.25, 4.67 (mm)

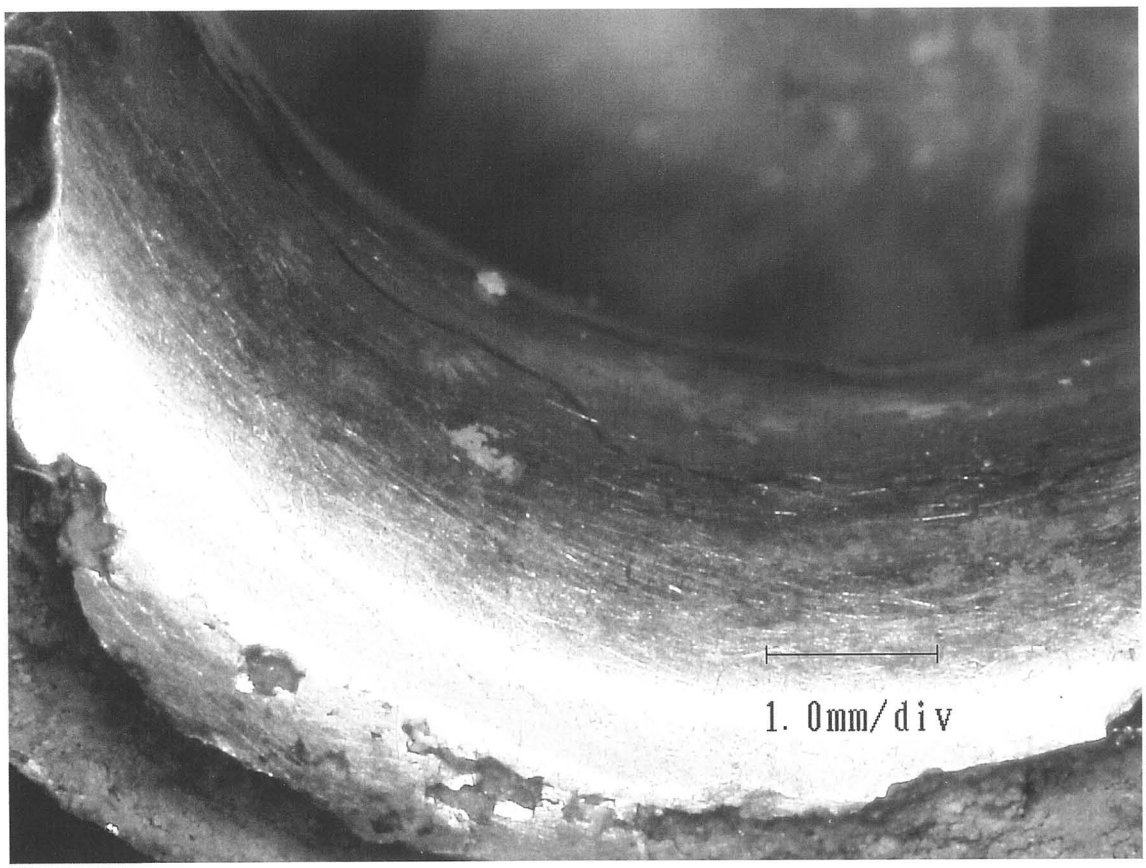
［スペクトル］



第165図　銅芯部分のＸＲＦスペクトル

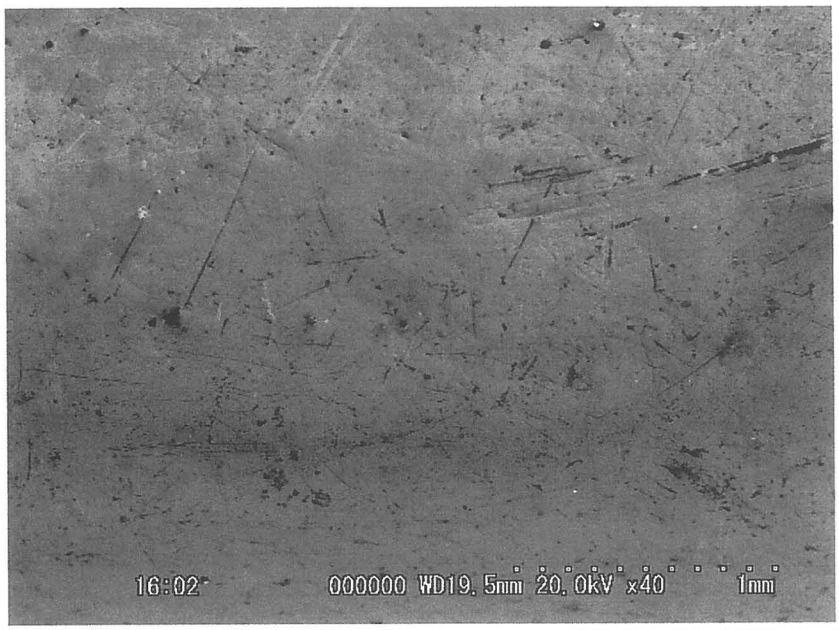


第166図　分析箇所



第167図　マイクロスコープ鑑察画像

松山1－1.bmp

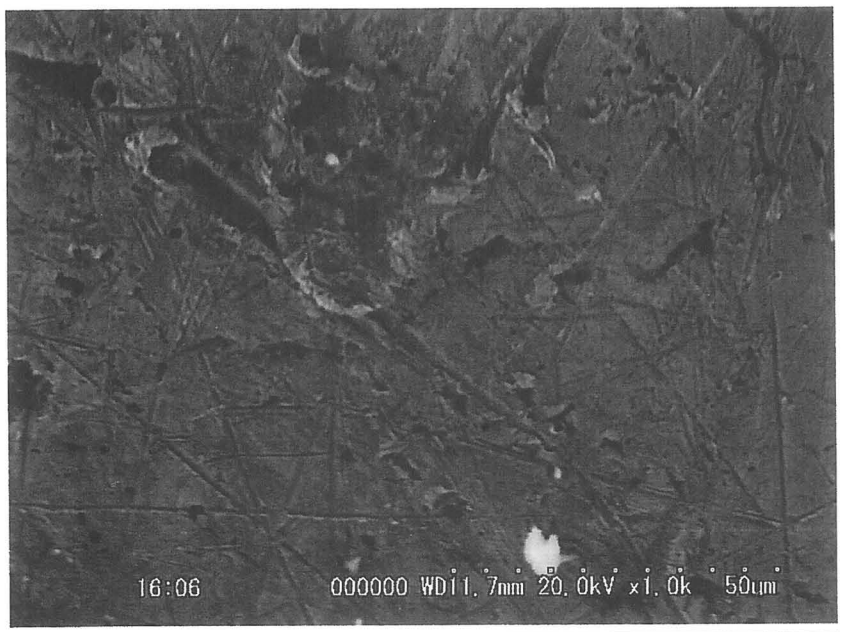


日付 2001/10/07
時刻 16:02:48
加速電圧 20.0kV
W.D. 19.5mm
倍率 x40
真空度 High
入力信号 SE
ﾃﾞｰﾀｻｲｽﾞ 640x480

40倍

1mm

松山1－2.bmp



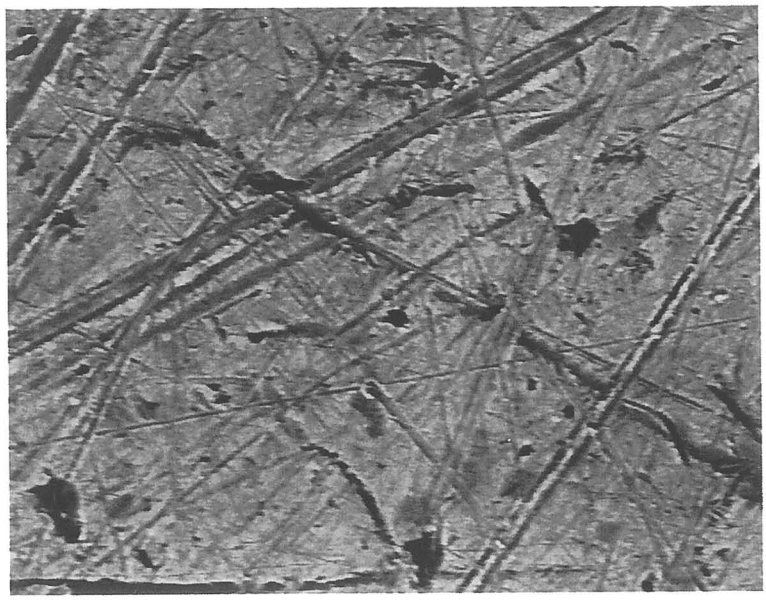
日付 2001/10/07
時刻 16:06:05
加速電圧 20.0kV
W.D. 11.7mm
倍率 x1.0k
真空度 High
入力信号 SE
ﾃﾞｰﾀｻｲｽﾞ 640x480

1000倍

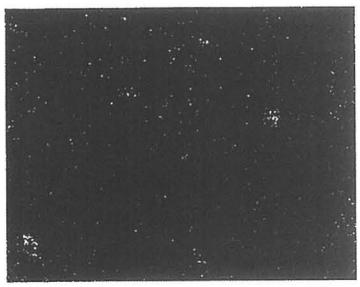
50um

第168図　表面金色部分のＳＥＭ写真

平井谷２号墳出土耳環の表面

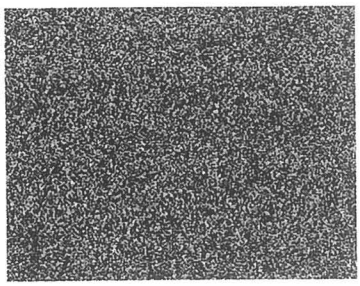


SEM 画像



酸素 Ka1

銅 Ka1



金 La1

銀 La1

第169図　ＥＤＸによる各元素の分布状態

第６章　調査の成果と課題

本書では、松山市小野３号線道路改良工事に伴う３遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告をおこなった。総全長１㎞に及ぶ調査ではあるが、調査区幅10m前後という稀少範囲の調査であるため、集落や古墳の全体を検出したわけではない。よって、今回の調査では、それらの一部をかいまみたことになるが、平井地区における縄文時代から中近世までの集落の実態を解明する貴重な手がかりを得ることになった。ここでは、時代ごとに注目される資料を取り上げることにする。

縄文時代

古市遺跡２次調査地では、縄文時代晩期の土坑１基を確認した。径1.6m前後を測る楕円形状の土坑で、断面形態は逆台形状を呈する。また、五楽遺跡Ａ区からは、混入品ではあるが、該期の遺物が数点出土している。調査地南方の下苅屋遺跡２次調査地からも同時期の遺物が出土しており、これらは、平井地区において縄文時代晩期に集落が展開していたことを物語る資料である。

弥生時代

今回の調査で注目されるものは、弥生時代前期から中期初頭に時期比定される土坑群である。古市遺跡２次調査地では14基、五楽遺跡では11基に及ぶ土坑を検出した。このうち、古市遺跡検出の土坑ＳＫ11は、断面形態が袋状を呈することから貯蔵穴の可能性が高いものである。また、ＳＫ１は蹄鉄状のテラスを付設し、土坑内からは剣形石製品が出土するなど墓的様相の強いものである。松山平野における弥生前期末から中期初頭の遺構は、平野北部の岩崎遺跡や、来住台地上の久米高畑遺跡23・25・26次調査地などで数多くの土坑が検出されている。これらの遺跡では竪穴式住居址が検出されておらず、土坑のみを伴った環濠集落ではないかと考えられている。今回の調査結果から、平井地区においても同様の集落形態がみられたことになる。

このほか、古市遺跡の土坑ＳＫ10からは大量のサヌキトイド剥片が出土した。本遺跡からは、他の土坑からもサヌキトイド剥片が数多く出土している。これらの剥片は、法量３㎜以下の微細片から３㎝以上の大型片まで様々であるが、その大半は３～５㎜大の剥片が占めている。おそらく、調査地もしくは調査地外で素材の粗割りがおこなわれ、細部加工の段階で出た剥片を土坑内に廃棄したものと推測される。よって、調査地や近隣地域で石器製作がおこなわれていたものと考えられる。

ところで、古市遺跡からは紡錘車が10点出土した。内訳は土器からの転用品９点、石製品１点である。転用品の出現は、これまでの調査・研究の結果、弥生時代前期末から中期初頭の報告例が多数あり、今回の調査結果は、それらを補充する資料となった。一方、石製品は弥生時代中期中葉からの出現と考えられていたが、今回の出土で前期末から中期初頭にさかのぼる可能性が高くなったことも注目される事象である。

古墳時代～古代

今回の調査では、主に６世紀後半から８世紀までの遺構や遺物を確認した。古市遺跡２次調査地では、６世紀後半から７世紀初頭の竪穴式住居址１棟と掘立柱建物址５棟を検出した。このうち、掘立柱建物址は、時期が下がるにつれて建物方位が真北より東へ偏り、床面積が大きくなる傾向にあるという、方位と床面積による時期変遷があることがわかった。竪穴式住居址は１棟のみの検出であったが、調査地南方にある下苅屋遺跡3次調査地において５棟の住居址が確認されている。さらに、同遺

跡からは7世紀中葉に時期比定される住居址が１棟検出されている。また、五楽遺跡に隣接する五楽遺跡2次調査地では、７世紀中葉から後葉に時期比定される掘立柱建物址が15棟検出されている。２×２間規模の建物址で、倉庫的性格の強いものである。いずれにせよ、平井地区において、６世紀後半から７世紀にかけて集落が継続して営まれていたことが判明した。集落の性格は、松山市道平井・水泥線関連遺跡調査の報告書でも記述されているとおり、松山東古窯址群からの須恵器の集積地ではないかとの指摘がある。今回検出の掘立柱建物群は、それらに関連する遺構の可能性が強く、これら建物址の性格を解明し、平井地区における６～７世紀代の集落様相や変遷を追及する必要性がある。

一方、丘陵上では平井谷２号墳を確認した。有袖式の横穴式石室を主体部にもつ、推定16mの方墳である。出土遺物より、６世紀後半から７世紀初頭の造営と考えられる。同丘陵上には、以前に平井谷１号墳の調査が実施されており、２号墳とほぼ同時期の造営とされている。さらに、同丘陵北部の斜面部からは、試掘調査の際に石室と使用されたと思われる石材が数点みつかっており、丘陵尾根部には古墳が存在する可能性が高いと考えられる。

中・近世

五楽遺跡では、中・近世の遺構や遺物を確認した。中世では、土坑や流路のほか、包含層中より該期の遺物が出土した。調査地南方の古市遺跡１次調査地や下苅屋遺跡3次調査地では数条の溝が、さらに五楽遺跡2次調査地からは墓の可能性がある土坑１基を検出しており、少なくとも、平井地区において中世集落が展開していたことが確実視されることになった。近世では、五楽遺跡Ａ区検出の土壙墓ＳＫ１が注目される。下苅屋遺跡３次調査地でも２基の墓（江戸時代前期）が確認されているが、ＳＫ１は墓壙上部に礫石を敷き、盛土と桶棺が埋葬されていたことなどから近世墓と判断したものである。埋葬形態は側臥屈葬と考えられるが、従来、近世墓の検出は集団墓が一般的であり、稀少範囲での調査ではあるが、１基のみの埋葬や手洗状棺の埋置であったことなどは、今後の近世墓を考えるうえで、興味深い資料となる。

結　び

今回の調査では、縄文時代晩期から中・近世にいたる遺構や遺物を確認することができた。とりわけ、弥生時代前期から中期初頭の土坑群の検出や、古墳時代後期から古代の建物址の検出など、平井地区における集落様相や変遷を解明する多くの資料を得ることができた。今後、周辺地域での調査結果をふまえ、松山平野内における平井集落の性格や他の地域との関係を追求していかねばならないであろう。

【参考文献】

山本　健一　1998　「松山平野出土の紡錘車」『和気・堀江の遺跡』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

1998　「筋違Ｊ遺跡」『福音寺地区の遺跡Ⅱ』（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

長佐古真也　1996　「発掘事例による多摩丘陵の墓制」『江戸の墓と葬制』江戸遺跡研究会

写真図版

写真図版例言

1．遺構の撮影は各調査担当者がおこない、古市遺跡2次調査及び五楽遺跡では高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	アサヒペンタックス67	レンズ	ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューＦＭ２		ズームニッコール　28～85㎜他
フィルム	プラスＸパン・ネオパンＳＳ		

2．遺物の撮影は、大西がおこなった。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45Ｇ
ストロボ	コメット／ＣＡ－32・ＣＢ2400（バンク使用）
スタンド他	トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	プラスＸパン

3．白黒写真の現像・焼付けは、大西がおこなった。

使用機材：

引伸機	ラッキー450ＭＤ	レンズ	エルニッコール　135㎜
	ラッキー90ＭＳ		エルニッコール　50㎜
印画紙	イルフォードマルチグレーIVRC		
フィルム現像剤	コダックＤ－76・ＨＣ110		

【参考】　『埋文写真研究』Ｖol.1～10

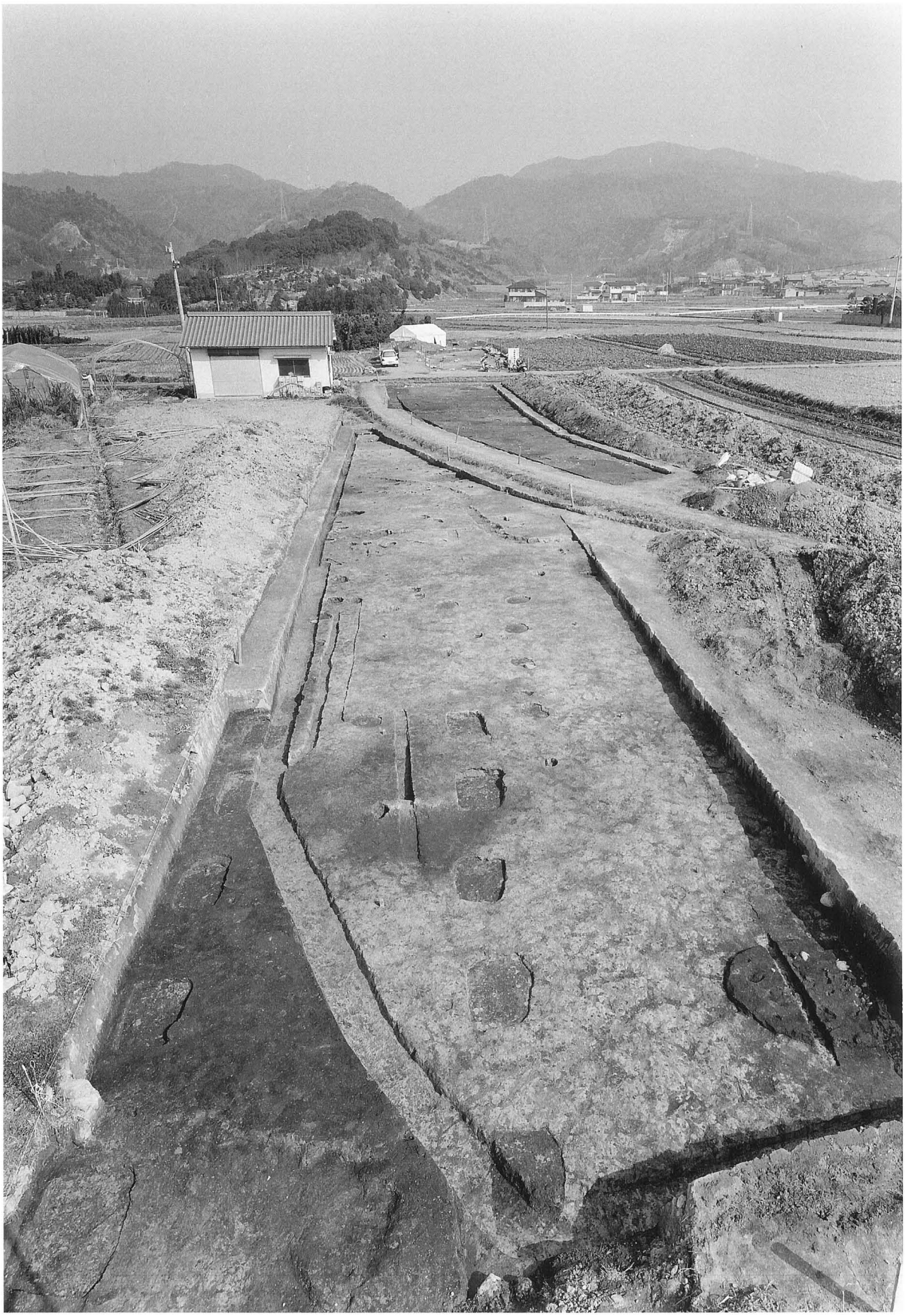
〔大西　朋子〕

1．調査前全景（北より）

2．作業風景（南より）

図版二

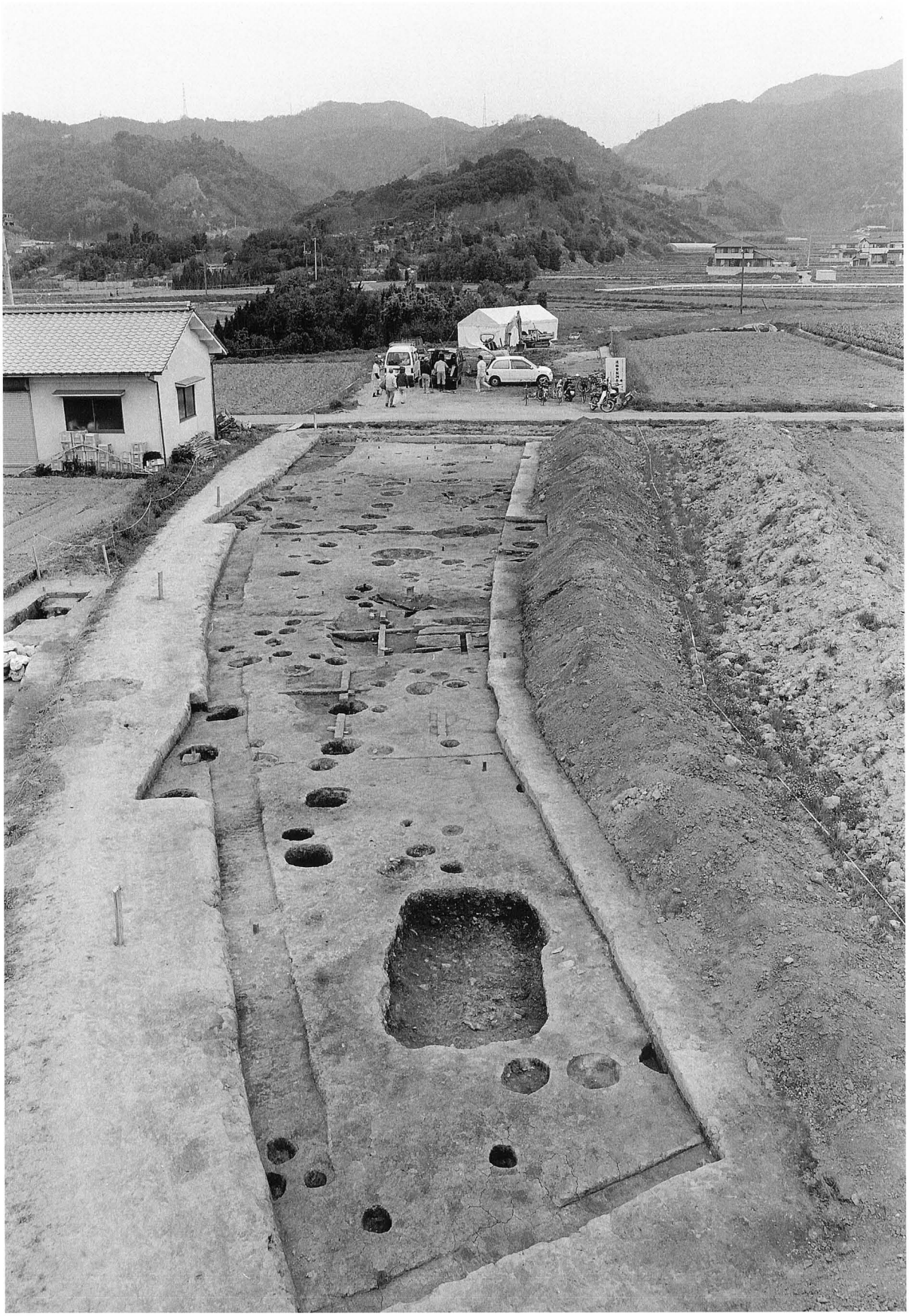
1．南半部遺構遺存状況（南西より）



1．南半部遺構検出状況（南より）

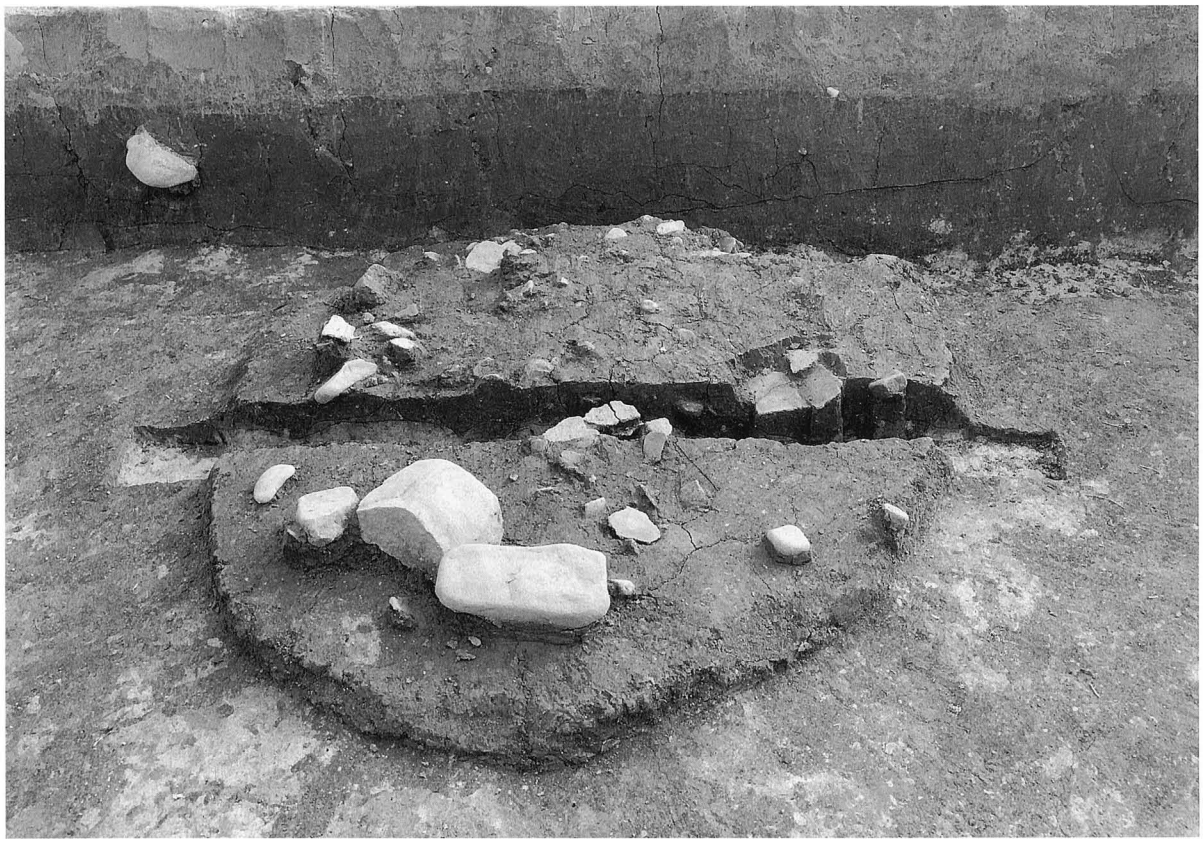
図版四

1．北半部遺構遺存状況（北より）



1．北半部遺構検出状況（南より）

図版六



1．ＳＫ13遺存状況（西より）

2．ＳＫ13遺物出土状況（西より）

1．ＳＫ4遺存状況（南より）

2．ＳＫ4検出状況（北より）

図版八

1．ＳＫ4土層（南より）

2．ＳＫ4遺物出土状況①
（東より）

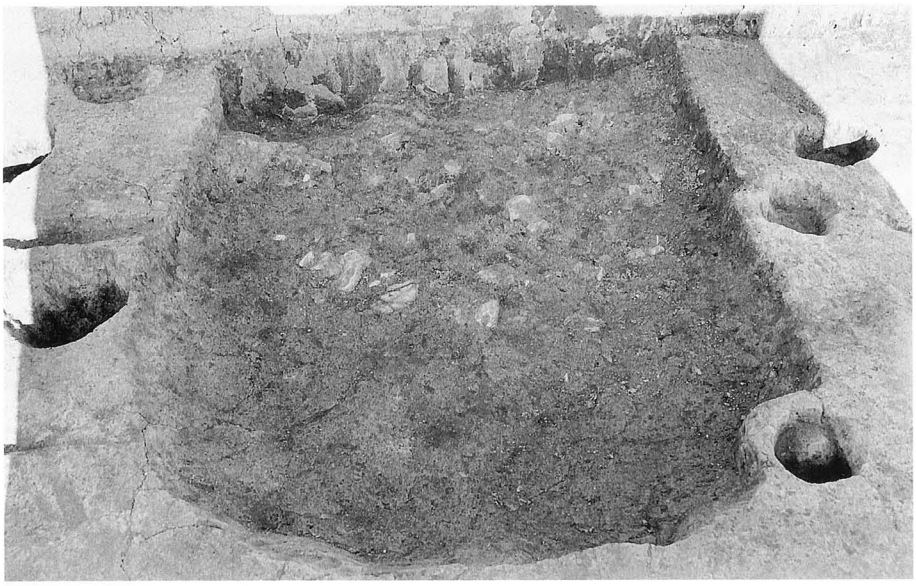
3．ＳＫ4遺物出土状況②
（北東より）

1．ＳＫ5遺存状況（北東より）

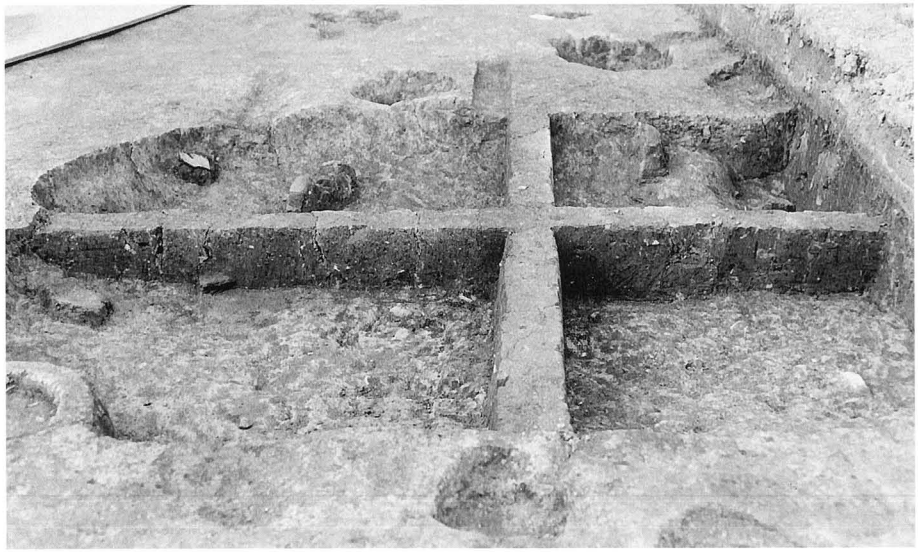
2．ＳＫ5検出状況（南より）

図版一〇

1. ＳＫ2検出状況
（南西より）



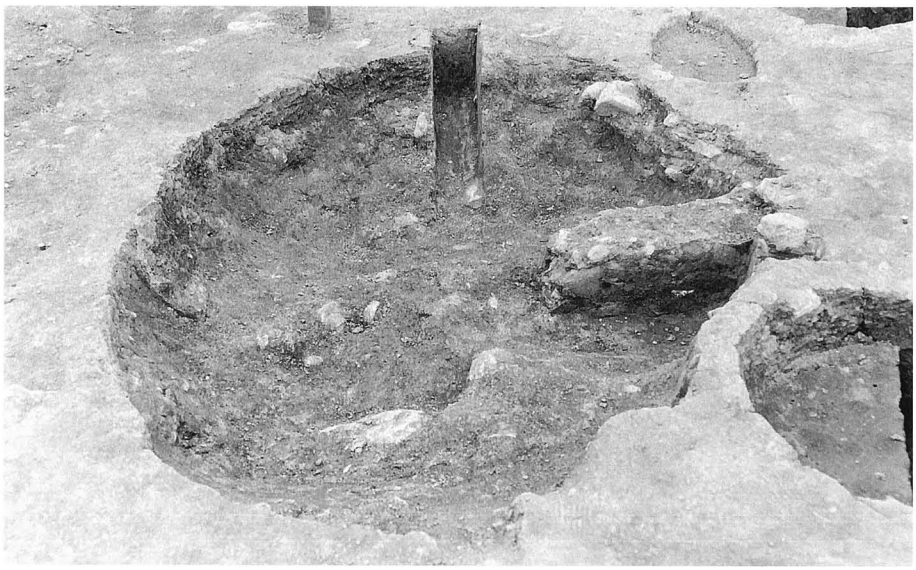
2. ＳＫ14検出状況
（西より）



3. ＳＫ14土層（南より）

1. ＳＫ12検出状況
（南より）

2. ＳＫ3検出状況
（西より）



3. ＳＫ6検出状況
（西より）

図版一二

1. ＳＫ7検出状況
（南西より）

2. ＳＫ8検出状況
（北東より）

3. ＳＫ11検出状況
（北東より）

1. ＳＫ1遺物出土状況
（北より）

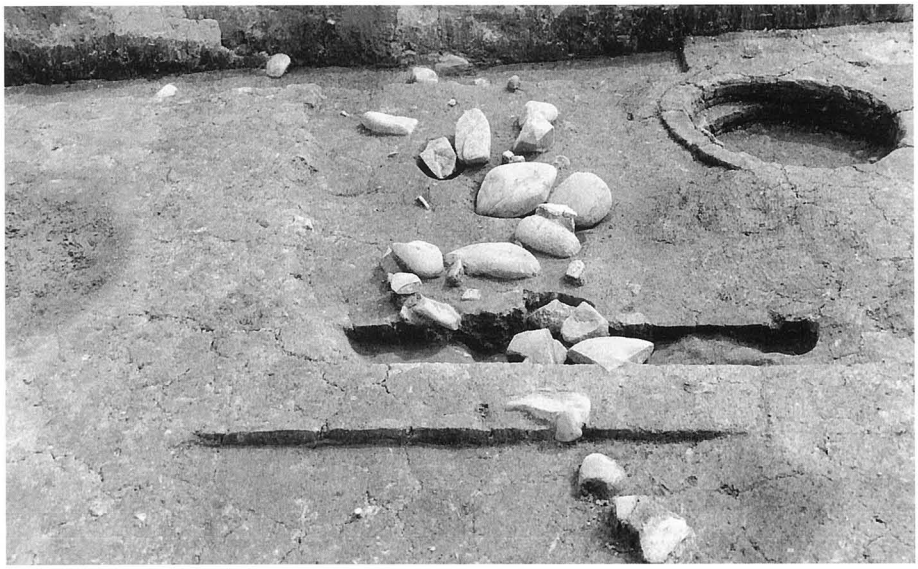
2. ＳＫ1検出状況
（東より）

3. ＳＫ1遺物出土状況
（西より）

図版一四

1．ＳＫ10検出状況
（東より）

2．ＳＤ1検出状況
（西より）



3．ＳＤ1遺物出土状況
（西より）

1．ＳＢ1遺存状況（北東より）

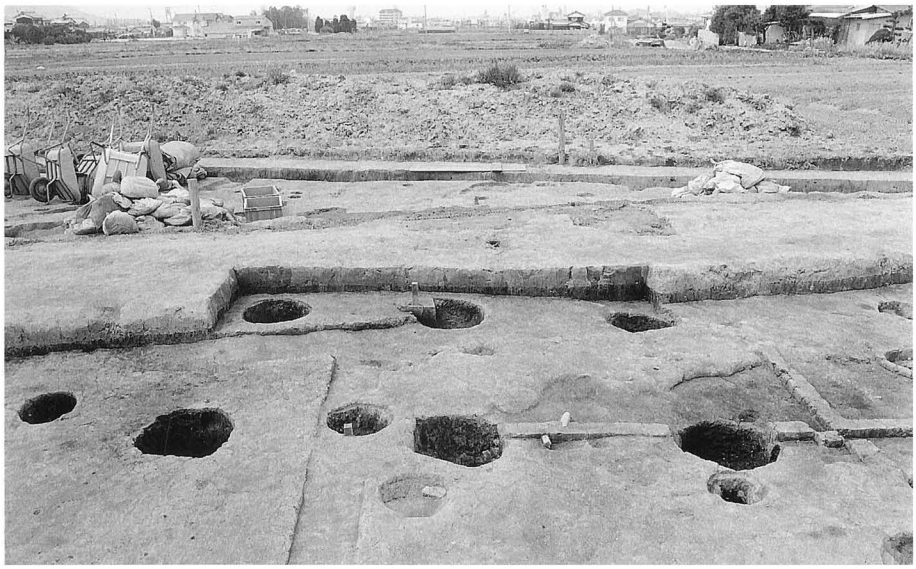
2．ＳＢ1検出状況（北東より）

図版一六

1．掘立1検出状況
（北より）

2．掘立2検出状況
（北より）

3．掘立3検出状況
（北東より）

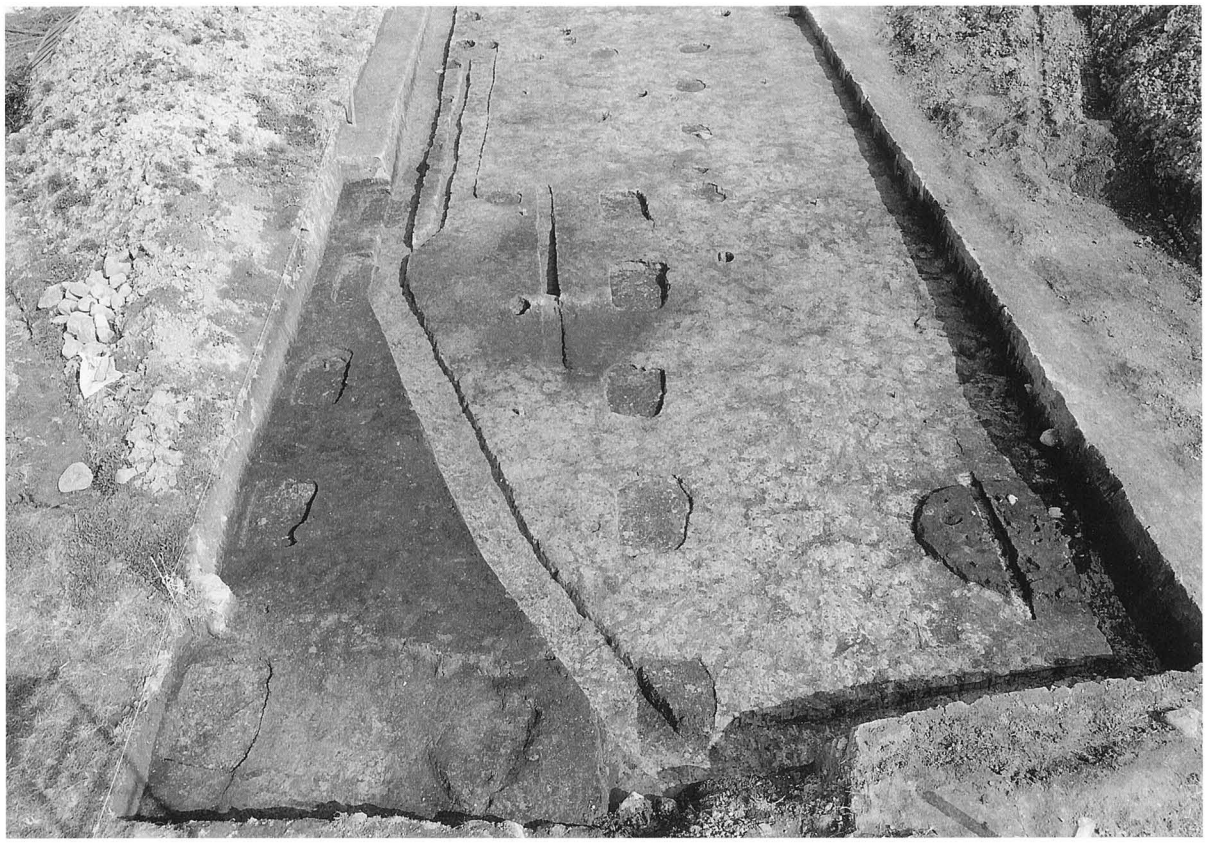


1．掘立4検出状況
（東より）

2．掘立5検出状況
（北東より）

3．ＳＤ4・5遺存状況
（北東より）

図版一八

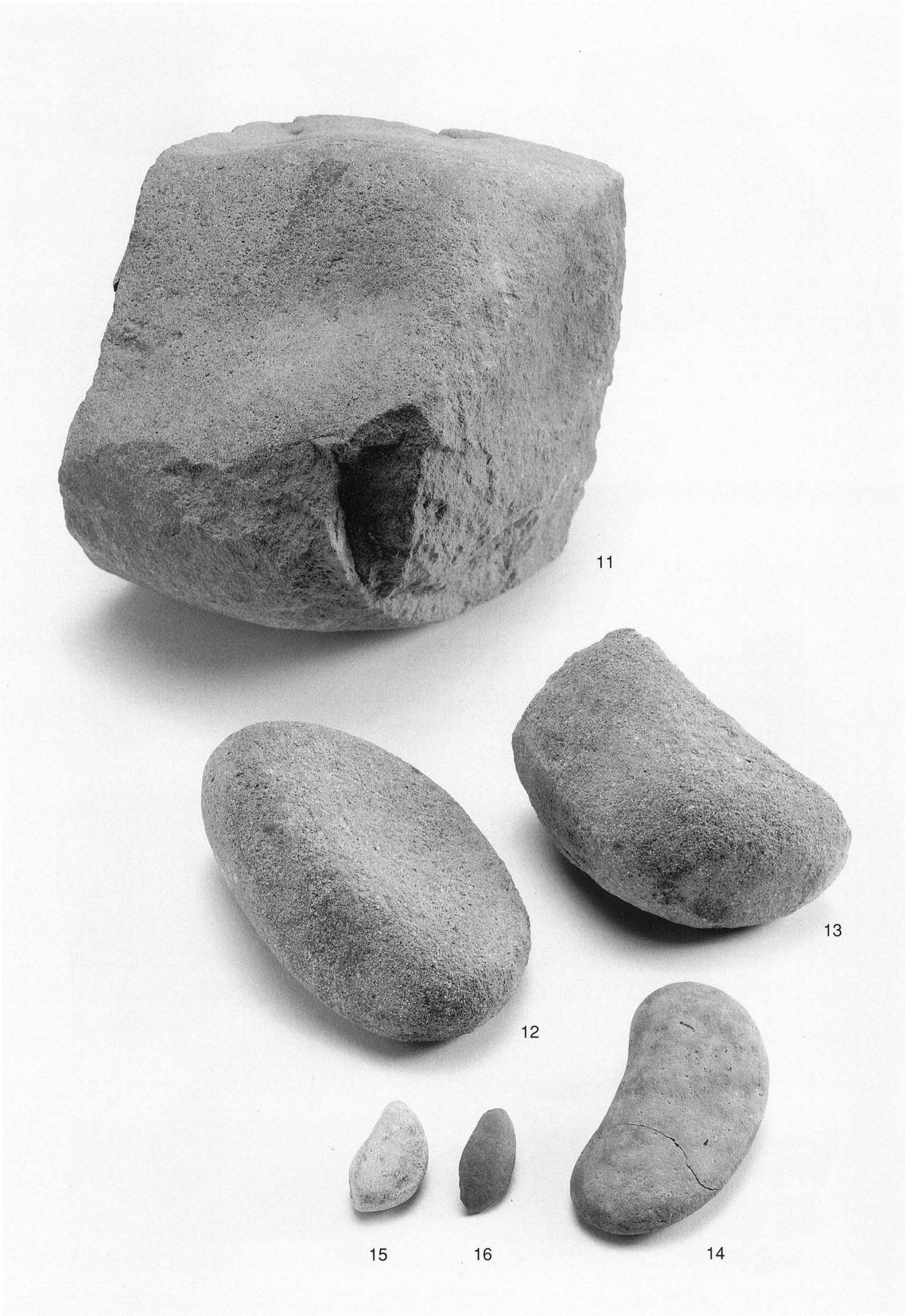


1．掘立6遺存状況（南より）

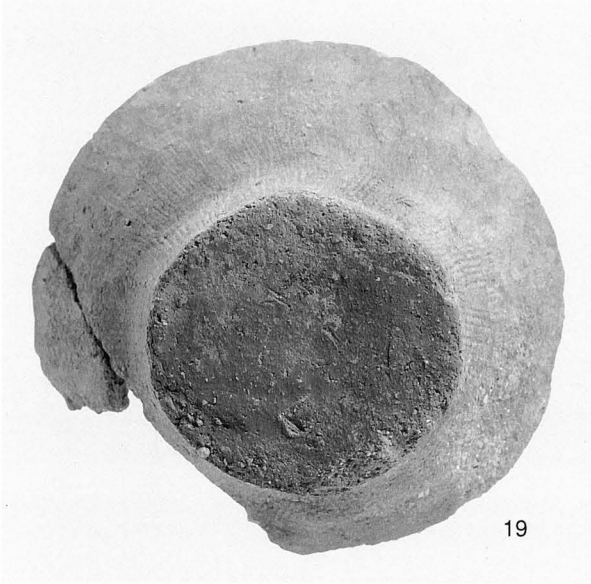
2．掘立6柱穴遺存状況（東より）

1．ＳＫ13出土遺物（土製品）

図版二〇

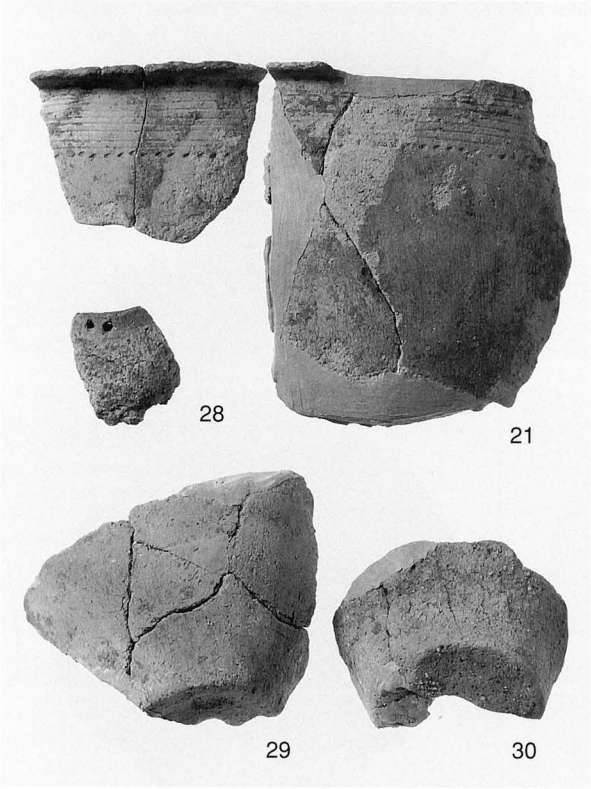


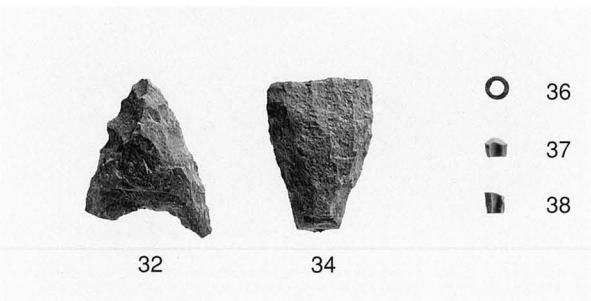
1．ＳＫ13出土遺物（石製品）



1．ＳＫ4出土遺物（土製品）

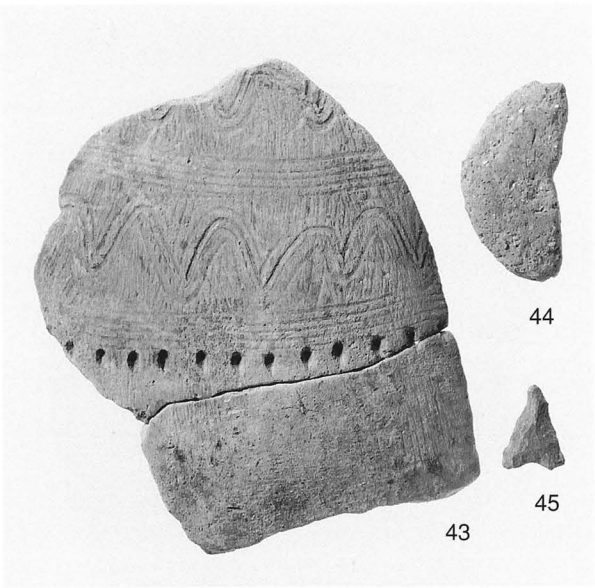
2．ＳＫ4出土遺物（石製品）

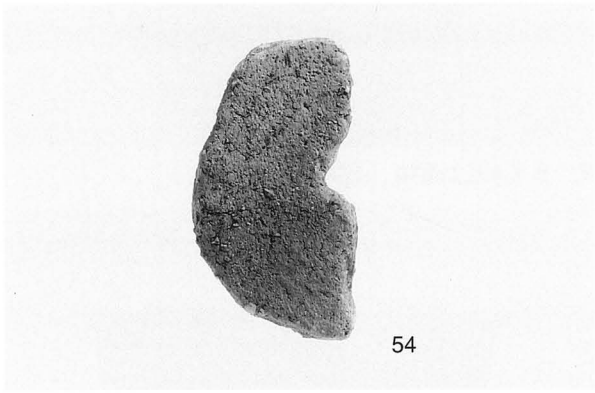


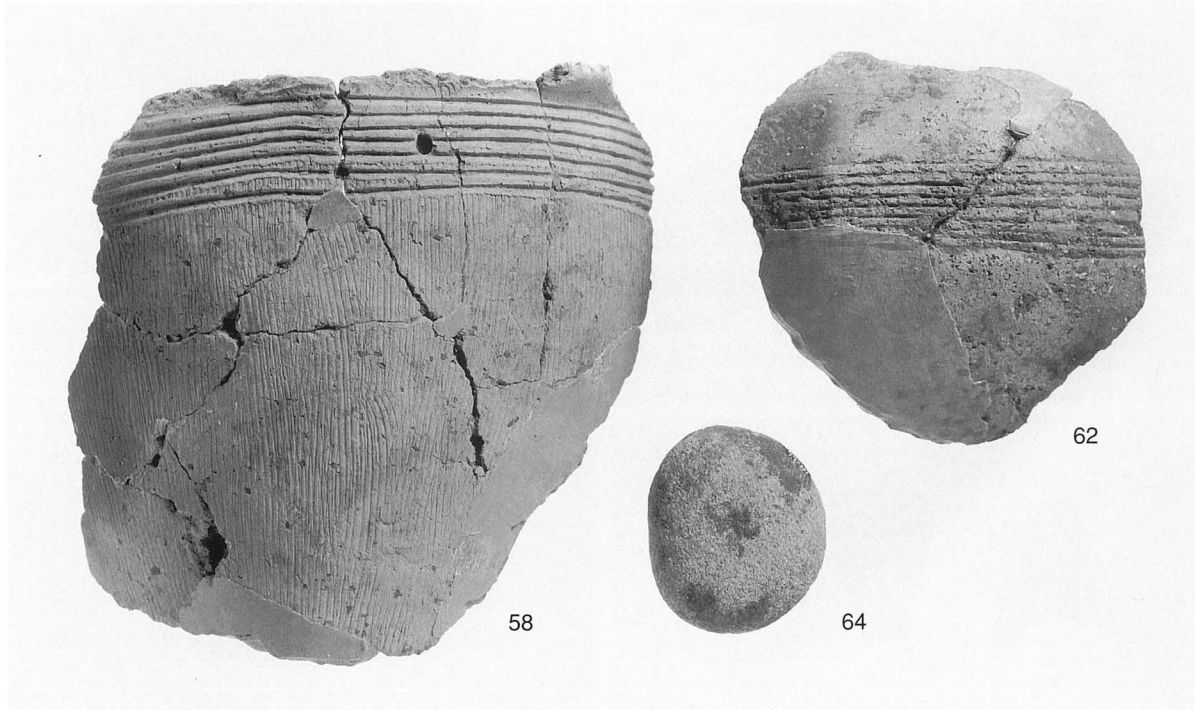


3．ＳＫ5出土遺物

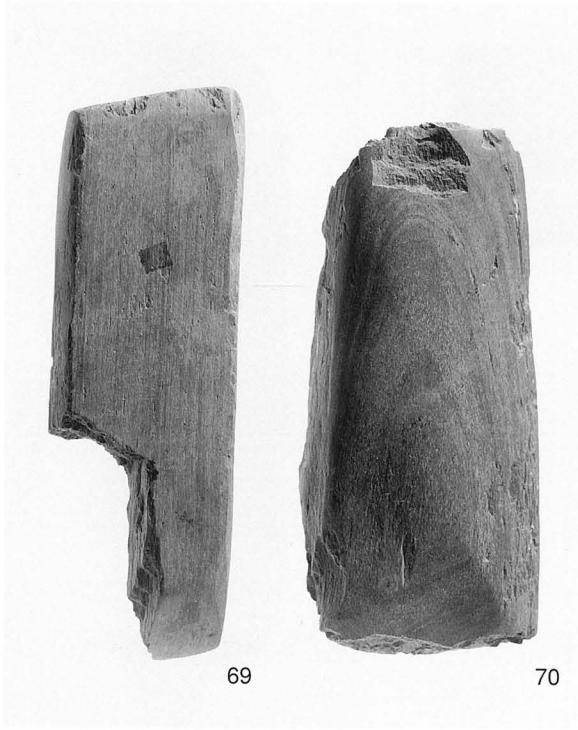
図版二二







1．ＳＫ14出土遺物（43～45）ＳＫ3出土遺物（46）ＳＫ6出土遺物（47）ＳＫ8出土遺物（54）
ＳＫ9出土遺物（58～62・64）



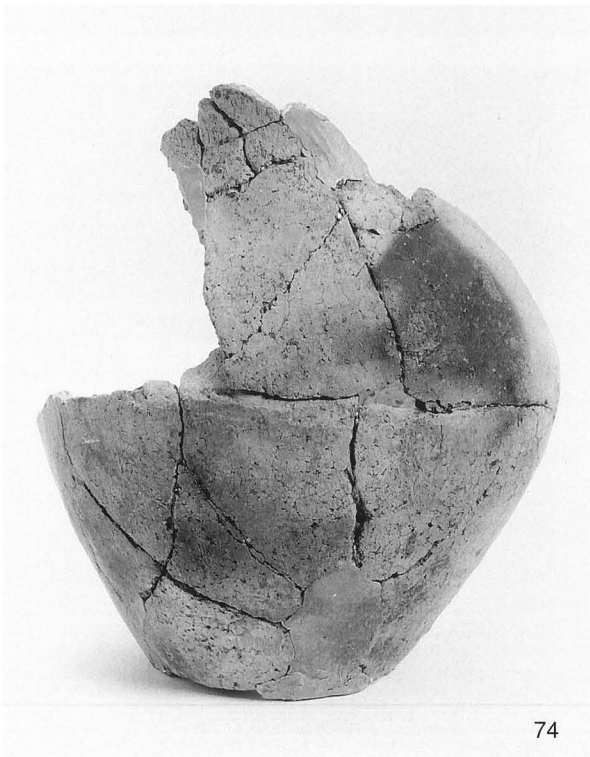
69　70

1．ＳＫ11出土遺物

77

73

75

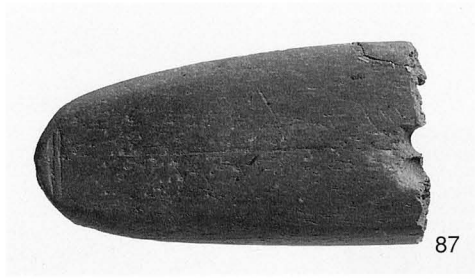


74

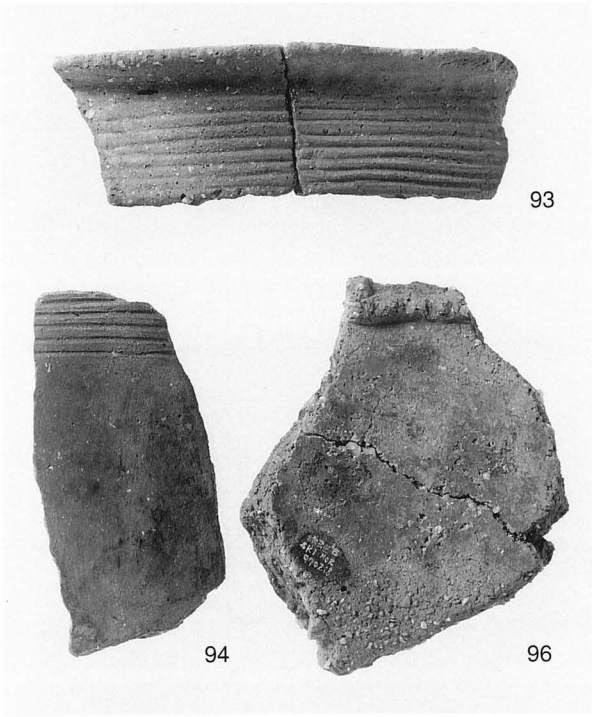
2．ＳＫ1出土遺物

図版二四

78

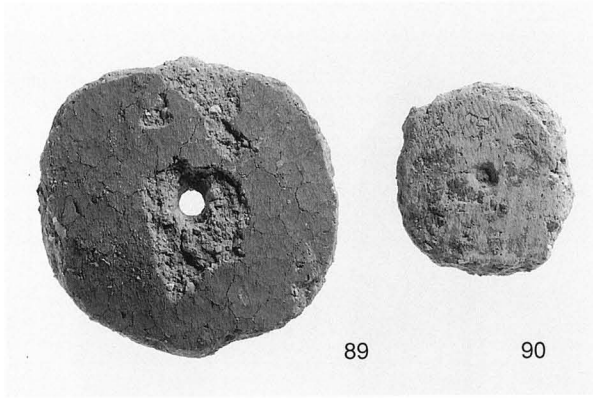

87

92


93

94

96


89

90

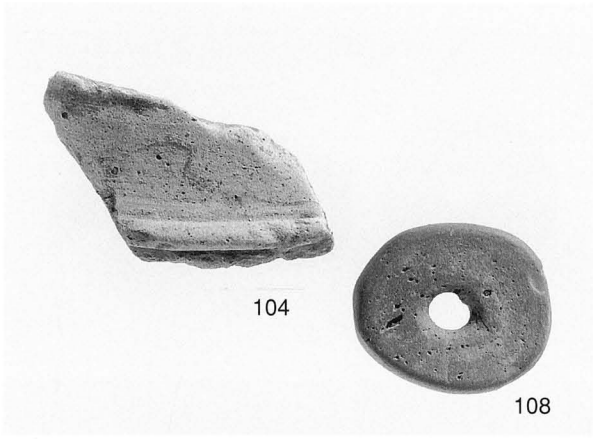
98

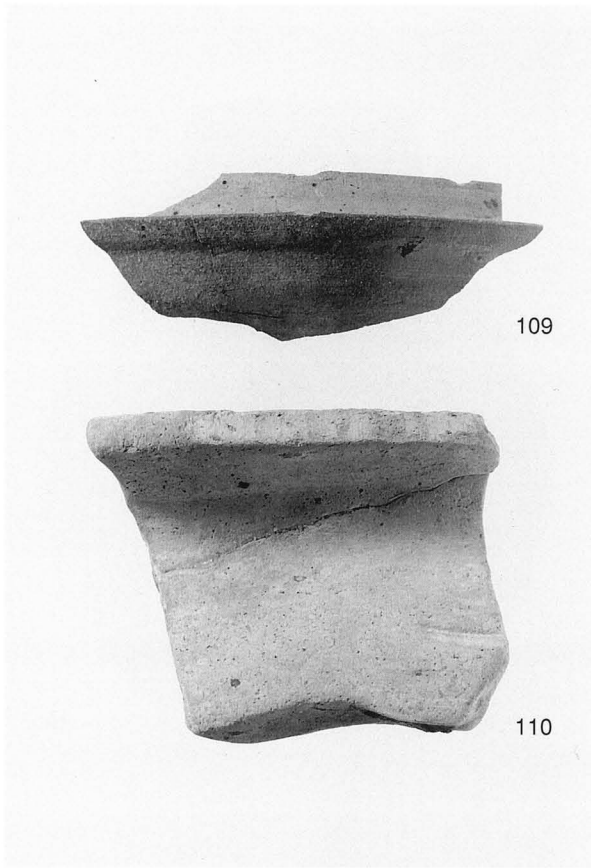
99

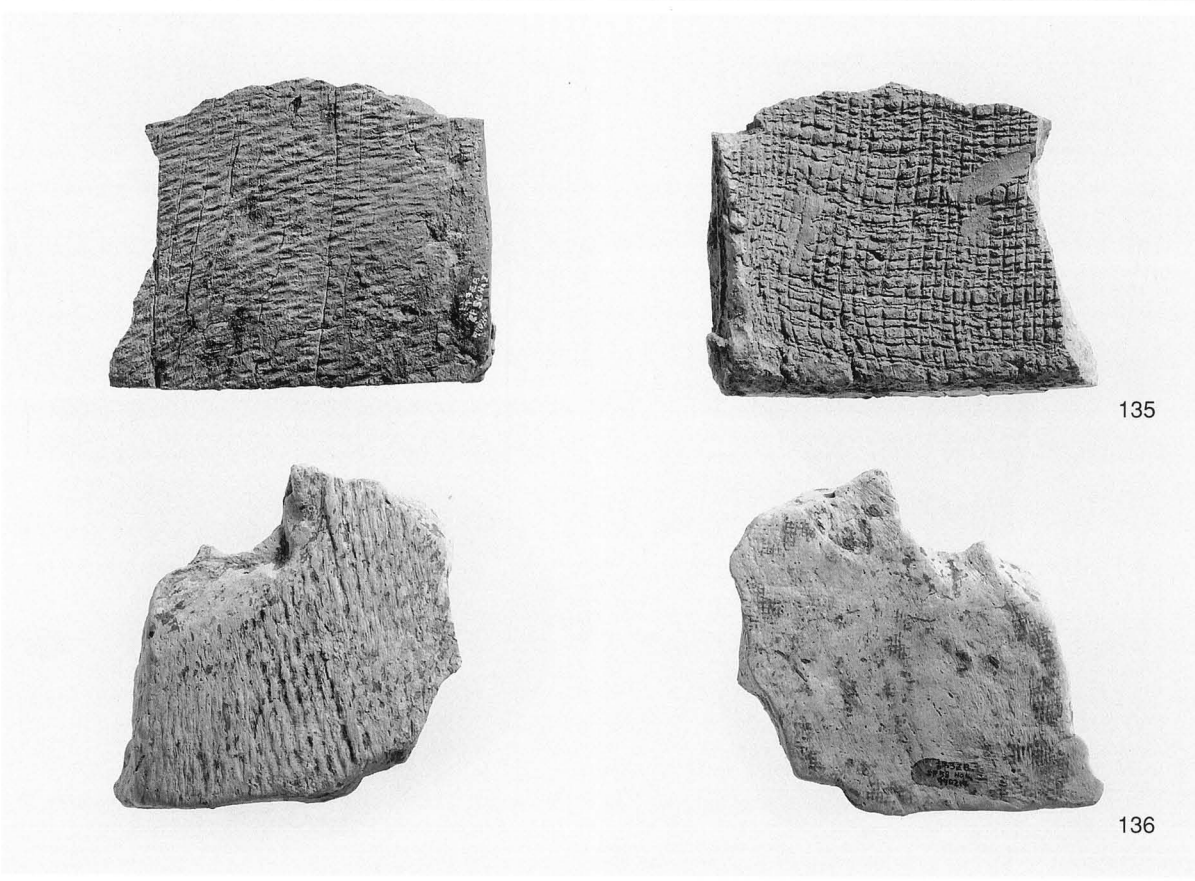
103

100

1．ＳＫ10出土遺物（78）ＳＤ1出土遺物（87）ＳＸ1出土遺物（89・90・92）ＳＸ2出土遺物（93・94・96）
ＳＢ1出土遺物（98～100・103）

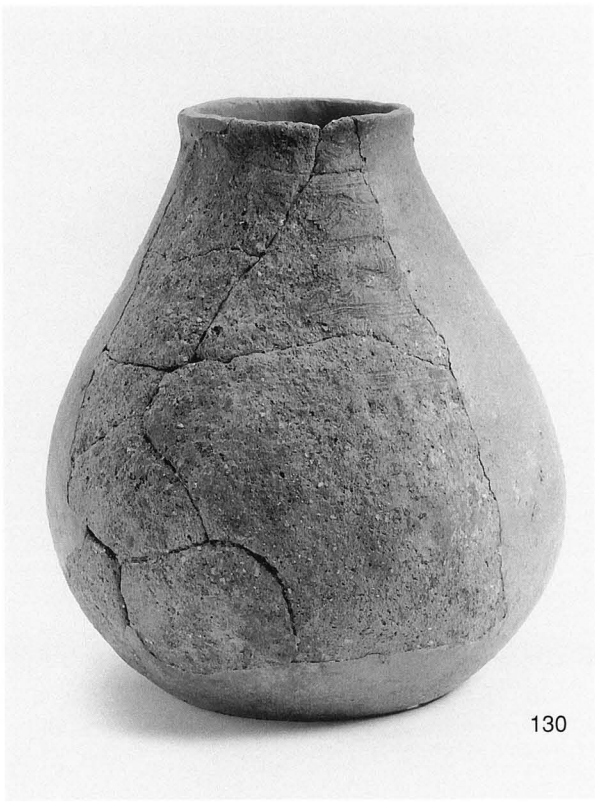


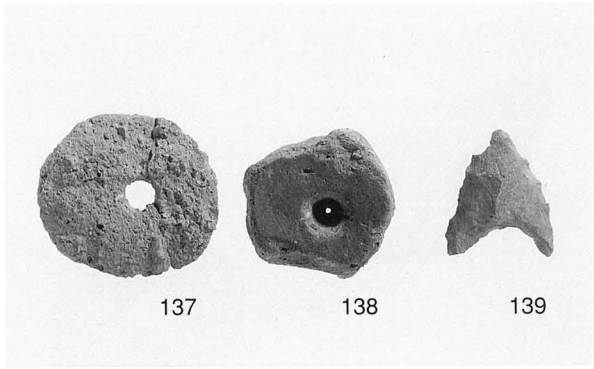


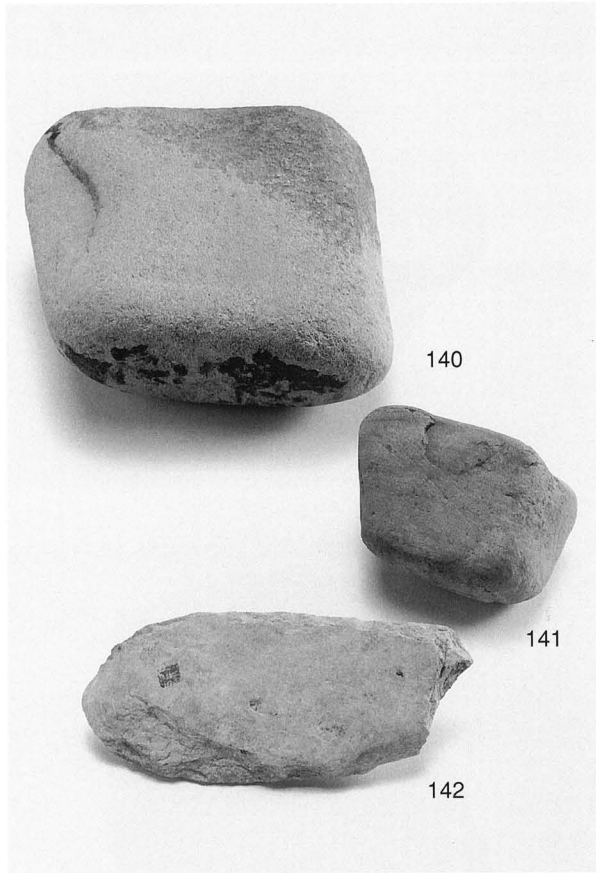


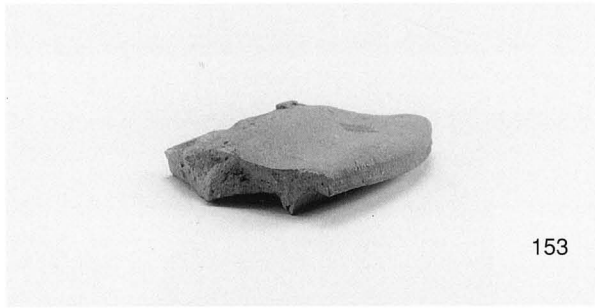
1．掘立1出土遺物（104・108）掘立3出土遺物（109・110）掘立6出土遺物（127）
ＳＰ58出土遺物（135・136）

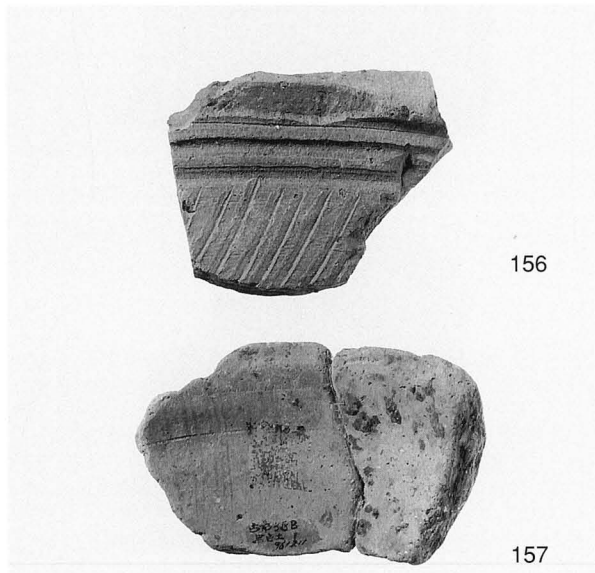
図版二六

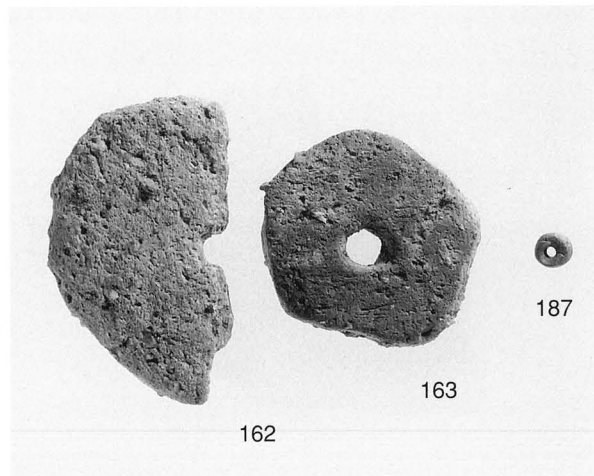

130


137 138 139


140 141 142


153


156 157


162 163 187

1．柱穴出土遺物（130・137～139・140～142）第Ⅳ層出土遺物（153・156・157）出土層位不明遺物（163・164・187）

1．調査前全景①（南より）

2．調査前全景②（北より）

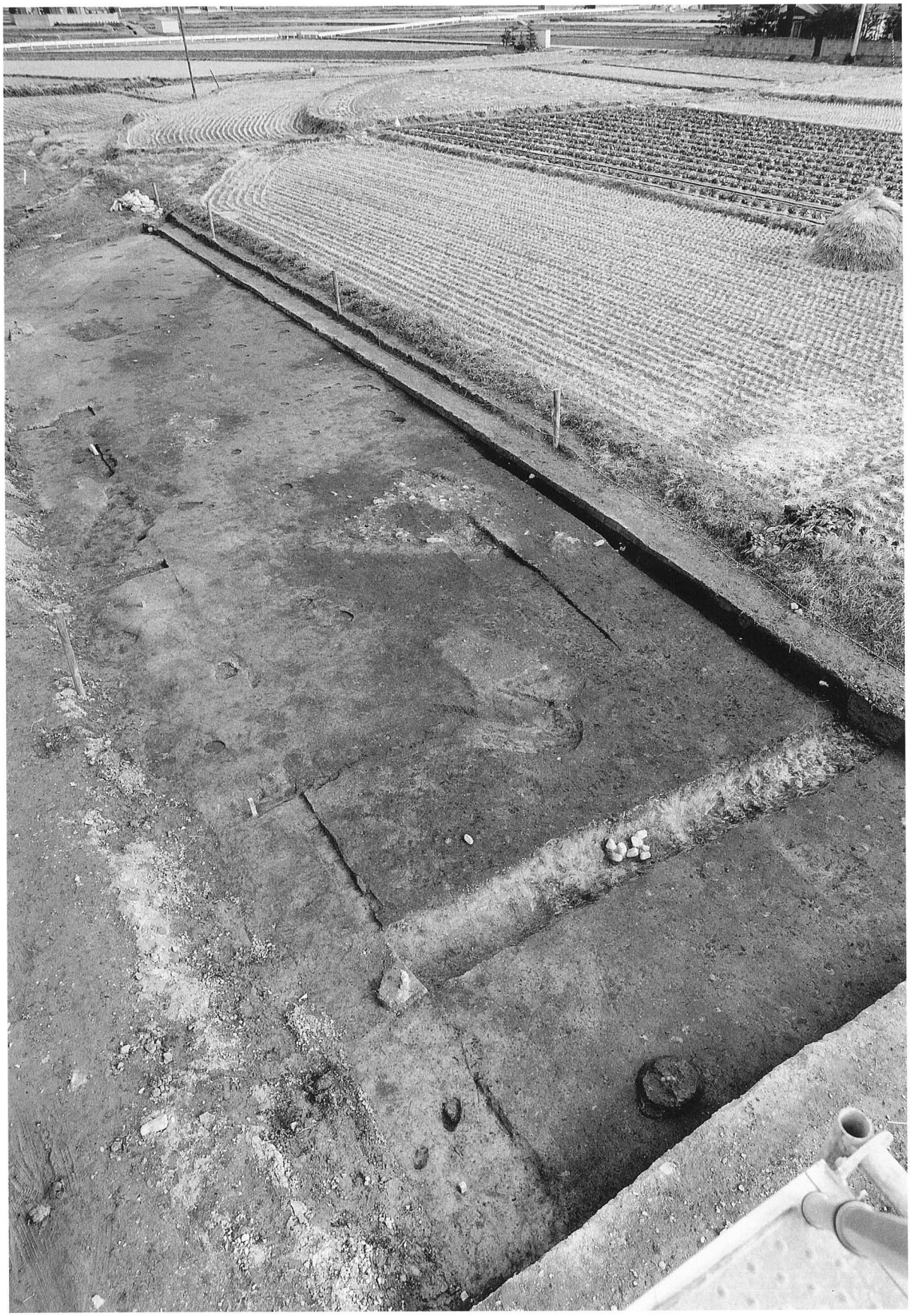
図版二八

1．東半北部遺構遺存状況（南より）

2．東半南部遺構遺存状況（南より）

1．東半部検出状況（南より）

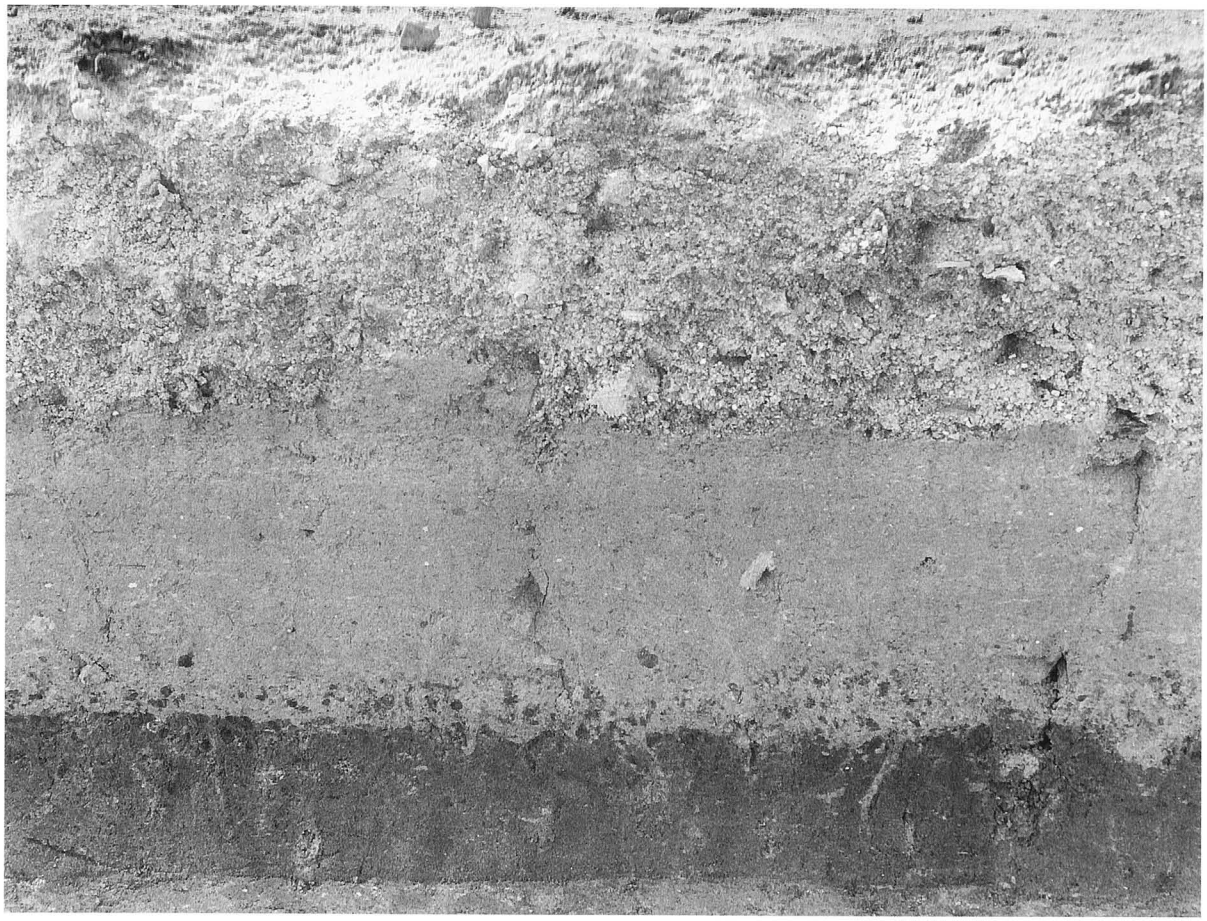
図版三〇



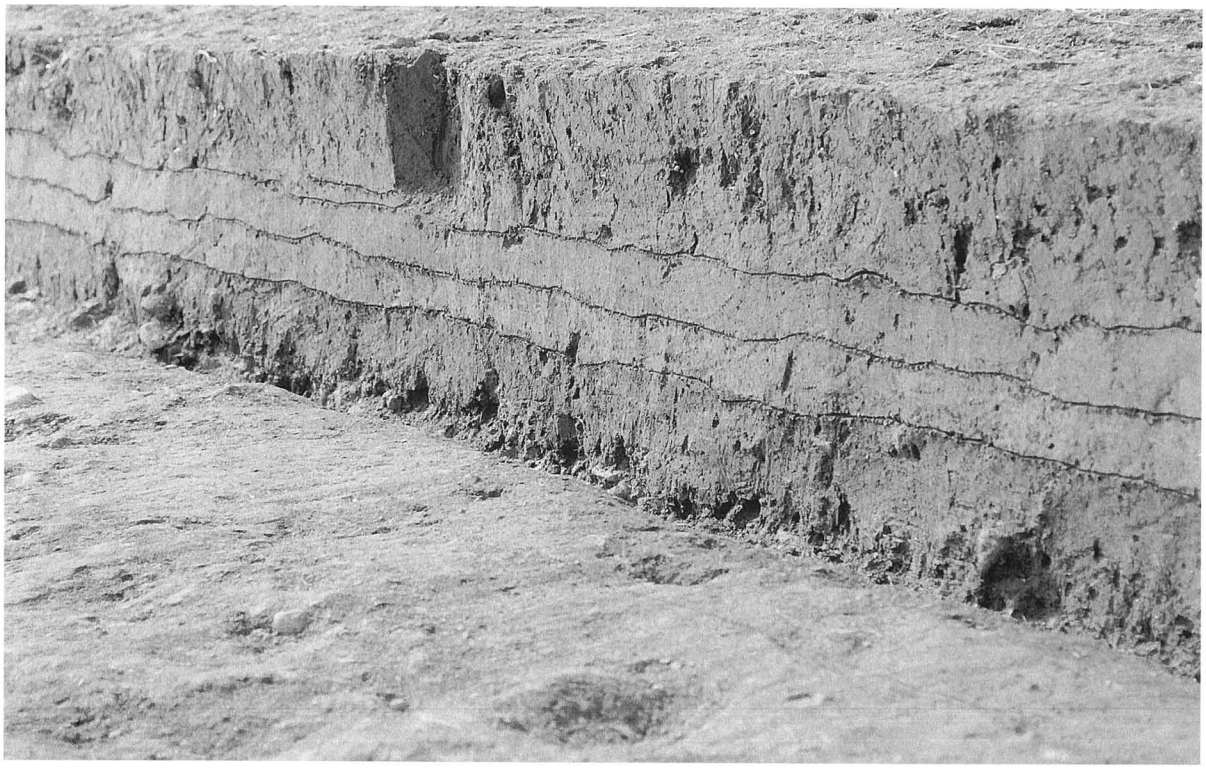
1．西半部遺構遺存状況（南西より）

1．東半部遺構検出状況（南西より）

図版三二



1. 南壁土層（北より）



2. 西壁土層（北東より）